転生者はリリカルなかませ犬

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生者はリリカルなかませ犬

【Ｎコード】
Ｎ６６２８Ｓ

【作者名】
白いサンタクロース

【あらすじ】
転生の際に得た能力はかませ犬キャラだった
さらによくある二次小説とは違い現実は難しい
それでも負けるものか！

完全な自己満足ですが、読んでいただければ幸いです。

この小説は転生もの、独自設定や解釈、一部原作キャラ優遇がある文才皆無な駄文です。

さらに能力もマイナーなものが多いです。

それでもよければどうぞ。

プロローグ（前書き）

一つにまとめました

プロローグ

高校卒業式の帰り道、僕は交通事故にあい死んだ。
そして僕は転生者になる権利を得た。何だここは？
真っ白な空間に僕は立っていた。
さっきまで僕は何をしていたっけ？
高校の卒業式が終わり、帰り道の途中でたしか…
「君は交通事故にあって死んだんだよ。」
！？
目の前に奇妙な光りの玉があった。
「やあ、はじめまして。私は君達が神と呼ぶ存在だ。」
え？神？ちょっとまてよ、この展開って…
二次創作によくあるアニメの世界に転生ってやつか？
「ねえ、もしかして僕ってあなたのミスで…」
「ちがうよ。君の死は私のミスでなく正式な寿命だ。」
ガッテム。
ｏｒｚ
「あ、でも転生はさせてあげるよ。勿論能力もあげるし！」

何いいい！マジ？

「うん、実は君のような適性のある人間達を転生させる事が私達の間で流行っていてね、私もやる事にしたんだ。」

神様って暇なんだな…

「えっとじゃあ…」

「転生先と能力は選べないよ。こちらにもルールがあるんだから。」

ちくしょう（泣）

「じゃあ転生のルールを説明するね。」

「一人の神が転生させられるのは三人まで。ちゃんと適性があって寿命で死んだ人のみだ。ちなみに私は君で三人目だから、私の最後の転生者だ。」

寿命か…まさか享年１８とは…。

「まず転生先と能力は転生者の記憶にあるやつだけだ。転生後の容姿は能力によって左右されるよ。」

…両津が当たったら最悪だな。

「私があげる能力以外に転生先の世界での能力もあるよ。勿論ハイスペックだし。」

「つまり魔法がある世界ならば高い魔力をもってるってこと？」

「その通り。でもあげる能力やその能力の調整で上下するけど。君が決められるのは転生するかどうか、転生後の性別、能力の調整のみだ。」

それだけでも十分かな。

「最後に聞くけど、転生するかい？勿論断ってもかまわないよ。あくまで私の我が儘だかね。」

考えなくても決まってる！

「転生する！」

「そうか！転生するか！じゃあ世界と能力を決めるか！」

テンション高いなぁ。まあ自分の娯楽に付き合ってくれるってんだから嬉しいだろうな。

「で、どうやって決めるんです？」

「サイコロさ。まず転生先からきめるよ。」

そういって僕の目の前に赤、黄、青の三個のサイコロがあらわれた。全部のサイコロは1～9の数字が書かれてる。

「さぁ投げて、赤が百の位、黄色が十、青が一の位だ。出た目で転生先が決まるよ。」

よし、頼む当たれえ！

…赤０、黄色１、青０。
１０か、どこだ？

「１０番は…へぇ、またリリカルなのはか。こんな事もあるんだね。」

やった！リリカルなのは！ってあれ？また？

「もしかして先に転生した人がいるんですか？」

「そうだよ。二人目の転生者がリリカルなのはだったんだ。転生先は星の数ほどあるのに。」

ふーん。たしかに可能性は低いな。

「一人目はどこに？」

「学園黙示録の世界。」

あっぶねぇ！死亡フラグの世界じゃないか！よかった…

「じゃ、ちょっと転生先での基本能力について説明するね。まず初期はリンカーコアがＳＳ－だ。」

「すごいですね…」

すでにチートだな。

「デバイスもあげるよ。多少君の意見は聞くけど基本的にはあげる能力で殆ど決まるけど。」

「仮面ライダーが当たれば、ベルトがデバイスみたいに？」

「そうだよ。じゃあいよいよ能力を決めようか！」

「能力は沢山あるからね、サイコロをもう一つ、千の位を追加するよ。」

緑のサイコロだ。

いよいよだな。僕の容姿もこれで決まるし。

「あ、一つ言い忘れてたよ。」

まだあるんかい。

「実は与えた能力によってキャラの特性が追加されるんだ。これはメリットかデメリットかは能力によって違うけど。」

何それ？

僕がよく理解できてないのを悟ったのか神様は説明を続けた。

「ようするに個性とゆう呪いみたいなものさ。織斑一夏が当たれば天然ジゴロに朴念仁、ヴァッシュ・ザ・スタンピードなら絶対に人を殺せなくなる、てな感じにね。勿論調整の時にいじれるけど。」

キャラクター性が追加されるって事か。

「わかりました。じゃあそろそろ決めますか。」

そう言って僕はまたサイコロを投げた。

緑1、赤0、黄色0、青3。
さぁこい！

「ふむ。強いが微妙なやつが当たったな。」

強いけど微妙？
キャラが悪いのかな？

「宇宙の騎士テッカマンブレードのテッカマンランスだ。」

……は？

「かませ犬かい！最悪だ！ブレードじゃないんかい！」

デザインはけっこう好きだけどなぁ…

「でもブレードだったら特性として肉親と殺し合うことになるよ。」

う…たしかにそれはいやだ。

「それに設定上はかなりハイスペックじないか。テッカマン自体かなり強いし、実はエビルやブレードと同等かそれ以上だとも言われてるしね。」

たしかに。

参謀型だから階級も高いだろうし性能は良いかも。

生身でも人外の身体能力だし、紅目のロングヘアーってのも憧れる。

「でもかませ犬として新技、新キャラ、新兵器、パワーアップ直後が敵だと絶対負けるけど。消した場合かなりランク下がるし。」

致命的じゃないか！

「でも劣化なら！」

「それならまだ影響は少ないな。じゃあ調整にはいるか。」

とゆう事で調整は終わった。
リリカルなのはのテッカマンの基本設定として魔力変換素質・フェルミオンを持ち、テッカマン本来の設定として生物兵器の身体、変身などは基本的に魔法は関係ないことがわかった。
デバイスはサポート特化のにしてもらった。生物兵器の身体だし。
変更点としてクリスタルの召喚能力、クラッシュイントルード、ブラスター化、その反動の軽減を追加し、装甲もチートすぎるため戦車の砲撃位なら無傷までにランクダウンし、かませ犬については本気が出せなくなるに劣化させた。
ブラスター化については訓練や成長によって身につけられ、姿や追加能力は神様に任せる事にした。
ブラスターボルテッカや大気圏突破可能なほどのパワーは最低でもあるらしいが…不安だ。

ちなみにリンカーコアはＡＡＡ＋まで下がったけど。

「今思うとけっこうチートかも…そういえば他の人はどんな感じなんですか？」

けっこう気になるね。
敵対するかもしれないし。

「詳しい事は教えられないな。ただ私が送った転生者のリンカーコアはＳＳ＋だよ。」

すごいな。

「君の身体について教えとくけど、生物兵器とはいえ寿命は人並みだし子供だって普通にできるから安心して。ただしスカ博士とかに狙われやすいけど。」

寿命とかは気になってたんだよな。

取り敢えず一安心だ。

「狙われるって事は覚悟ができてますから。…じゃあいってきます。」

「うん、私の遊びに付き合ってくれてありがとう。原作ブレイクも大丈夫だから、第二の人生楽しんでおいで！」

「がんばります！」

よし！能力がかませ犬だけどやれるだけやるか！

「ちなみに生まれる場所とか環境はランダムで、原作介入できるかどうかは運と行動次第だから♪いってらっしゃい！」

何いぃぃ！？

「え？何それ聞いてな」

テンプレ通り穴に落ちて僕の意識は消えた。

大丈夫かな…

設定（無印～A'　sまで）（前書き）

一つにまとめ少し修正しました

ご意見ありがとうございます

設定（無印～A' sまで）

名前
諸星　利文（もろぼしとしふみ）

容姿
紅い瞳に紫のロングヘアーを一つにまとめてる
顔はまあまあ良い
身長は平均より少し上
体格は普通

年齢
第１話の時点で四歳
なのは、フェイト、はやてと同い年

魔力光
真紅

ＣＶ：少年時代は朴ロ美さん、成人後は小杉十郎さん（本来のＣＶ）

ステータス
身体能力：人外レベル
魔力：ＡＡＡ＋
知力：浪人せず普通の大学に合格する位
運：御都合主義

与えられた能力
テッカマンランスの能力（強化版）

詳細
生体兵器の身体
元々は普通の人間だったが改造されている

魔力変換素質・フェルミオン
魔力を反物質・フェルミオンに変換することができる
フェルミオンは非殺傷設定にする事ができない

テッカマンとしての能力
テッククリスタルを持ち、「テックセッター」と叫ぶことでテッカマンに変身することができる（ただし他の人がやっても変身できない）
生身でも人外な身体能力（片手で金属の壁が凹むほどの力で人間を投げ飛ばしたりと、魔法による強化なしでも桁違いの身体能力）をもち
変身する事で
単体で宇宙空間でも活動ができる
音速以上の飛行能力とスピード
戦車砲の直撃を受けても無傷な位の装甲
反物質フェルミオンを利用した兵器を装備
近接兵装、テックランサーを持つ
手首からテックワイヤーという長いワイヤーを射出する事ができるといった能力を得る

ランス固有の能力
重力を無視して壁や天井に張り付き移動することができる（ネウロがやってるようなやつ）
肩からレーザーを放つ事ができる
テックランサーは長刀型
後頭部にトサカがあり、感情が高ぶる等で逆立つ

キャラクター特性
かませ犬
敵に新しい仲間、新技、新装備などがあると本気が出せるなくなる
他にもかませ犬的な行動を無意識のうちにとりたくなる

調整で得た能力
ブラスター化
いわゆるパワーアップ能力
今はまだ使えない

クラッシュイントルード使用可能
技で説明します

テッククリスタル召喚
変身アイテムのテッククリスタルを手元に自在に呼び出す事ができる

技
テッククランサー
長刀による攻撃

テッククレーザー
肩から連射、弾速に優れるのレーザーを放つ
魔力、フェルミオンどちらでも撃てる
誘導性能は無し

クラッシュイントルード

装甲をコンパクトにしエネルギーを纏い高速で体当たりを繰り出す

テックワイヤー
手首からワイヤーを射出し、敵の拘束やランサー回収等を行う

ボルテッカ
首から砲撃を放つ
非常に威力が高く現時点で最強の攻撃
魔力を使わない場合はフェルミオンと膨大なエネルギーを消費する

デバイス
名前：シータ（Θ）
待機状態：ベージュ色の髑髏型のアクセサリー
魔力制御、索敵等サポートに特化したデバイス。
起動するとＭＳ等の腰についてるスカート状のような形態になる。
ボックスマガジン型のカートリッジシステムを搭載している。
ＣＶ：中田譲治
ＡＩのイメージはギロロ。
利文をランスと呼ぶ。けっこう熱血漢。

バリアジャケット
赤いコートと黒いスーツ

詳しい容姿やバリアジャケットかませ犬の理由などは
宇宙の騎士テッカマンブレード３９話を見てください

この物語の主人公です
原作キャラへの評価や行動原理は私と同じです
つまり自己満足の固まりです
ごめんなさい

基本的に敵キャラについても肯定的です
グレアムの行動もしかたがないと思ってますし、ゲイズさんも好きです

こういったスタンスですが、これからも読んでいただけるとうれしいです

名前
佐々木　一兎（ささきいっと）

容姿
黒髪黒瞳
顔立ちも平凡
中肉中背

年齢
利文と同じ

魔力光
青紫

ＣＶ：鈴村健一さん

ステータス
身体能力：普通
魔力：Ｓ＋
知力：大学生（中の上）
運：普通

与えられた能力
佐々木一兎の能力

詳細
パラベラム能力者となり、心の銃Ｐ．Ｖ．Ｆの使用ができる。
右手に銃を装備し、左手で弾丸を生み出す。
右腕は肩から装甲に被われ、左手は手首からロボットの手のように変化する。

Ｐ．Ｖ．Ｆ
イド・アームズとエゴ・アームズの二種類があり内観還元力場を発生させる。左手で生み出した弾丸以外にも魔力砲撃等も行う事が可能。

イド・アームズ
防御型でトラウマ・シェルという精神力のシールドを展開できる。
勿論魔力でも展開可能。主に拳銃型。

エゴ・アームズ
攻撃力の高いマシンガンやライフル等で、スペシャル・ショット（Ｓ・Ｓ）とゆう特殊攻撃をもつのも存在する。

内観還元力場
パラベラムの周囲に展開し、身体能力を超人レベルまで強化する。
さらに物理的なダメージを遮断する（ただし衝撃は伝わるし魔力を防ぐ事ができない）。Ｐ．Ｖ．Ｆによって出力に差がある。

弾丸
精神のみを傷つける精神弾（つまりこの弾で殺されると廃人になる）

、人間以外の全て（衣服まで）を破壊できる対構造物徹甲弾、魔力製で非殺傷設定が可能な魔力弾がある。全ての弾丸は防御魔力で防いだり、逆に防御魔法を破壊する事もできる。ちなみに実弾と同性能の速度、威力をもち、ほぼ非殺傷設定のできる質量兵器といっても良い。

スペシャル・ショット（Ｓ・Ｓ）
Ｐ．Ｖ．Ｆによっては所有してないものもある特殊攻撃能力のこと。消耗が激しいが非常に強力。殆どが精神に関する能力だが、精神力の変わりに魔力を使用することで、能力の内容を物理的なものや魔法関係に変えることができる。

佐々木一兎固有の能力
６８口径デンジャラス・ラビット
ボウガン型のライフル。６８口径でＳ・Ｓを持つが実はイド・アームズなのでトラウマ・シェルを展開できる。
Ｓ・Ｓはクロスボウの形に変形し光の矢を放ち、命中した相手の記憶に介入する（記憶の削除や改竄）。ただし相手改竄された事を覚えている。魔力を使用する場合はリンカーコアへの介入に変化する。

１２０口径アンフォーギヴン・バリスタ
一兎のエゴ・アームズだがまだ使用できない。

キャラクター特性
不幸体質
調整で削除。

調整
特性の削除。
射撃センス強化。

イド・アームズとエゴ・アームズの同時展開（同時展開している間はオートリロード能力も追加され、トラウマ・シェルも展開できる）。

空戦能力低下（飛行は可能）。

デバイス

名前：マーチ

待機状態：黒いカード型

シータと同じくサポート特化型。

起動すると黒いバイザー（劇場版ナデシコのアキトがつけてたようなやつ）と背中のスラスターになる。カートリッジはまだ無し。

ＣＶ：大谷育江さん

ＡＩイメージは元気っ娘。

かなり人間くさい性格をしている。

バリアジャケット

黒いコート（トライガンのヴァッシュの服装を黒くしたようなやつ）

容姿やデンジャラス・ラビットのデザインは、疾走する思春期のパラベラム一巻の表紙を見てください。

二人目の転生者です。

一応メインキャラなので、それなりに出番がある予定です。

ＣＶイメージはただの趣味です。アニメどころかドラマＣＤすらないので。

疾走する思春期のパラベラム、興味が出たら是非とも読んでみてください。

名前
戒＝キスク＝木崎（かい＝きすく＝きざき）

容姿
金髪に青緑の瞳
顔は非常に良い
平均身長に華奢な体格

年齢
利文達と同じ

魔力光
澄んだ青

ＣＶ：草尾毅さん

ステータス
身体能力：高い（常識レベル）
魔力：ＳＳ＋
知力：一般社会人レベル
運：良い

与えられた能力
カイ＝キスクの能力

詳細
魔力変換素質・雷の所有

法力・雷の所有
調整で削除。

法力
ギルティギアの世界に存在する魔法。
火、雷、水、風、気があり、リリなのの世界の魔法と違うため非殺傷設定にできないがＡＭＦの影響を受けない。

カイの技を魔法として使用可能
ただしリミッターがかかっているため全て使えるわけではない。
成長、訓練で解除される。

キャラクター特性
生真面目
非常に真面目で良心的になるが、融通がきかなくなりさらに規則や秩序を乱すものに過剰な嫌悪感を抱きやすくなる。
調整で削除。

調整
特性削除
法力削除
性別を男性に変更（前世は女性）
運上昇

デバイス
名前：封雷剣
待機状態：剣の形をしたアクセサリー
白い剣型のアームドデバイス。
戒の母が現役時代に使用していたものなので戦闘経験は豊富。
実はリミッターがかかっている。

ＣＶ：秋元羊介さん
ＡＩのイメージは執事。
転生者用のデバイスだが、戒の母も使用していたため戦闘経験が豊富。

騎士甲冑
白と青の服装にＨＯＰＥと彫られたバックルのベルトをしている。
（まんまＧＧＸＸのカイ）

詳しい容姿やバリアジャケットはまんまカイ＝キスクです。
三人目の転生者です。彼もメインキャラなので戒視点も書きます。
ハーレム狙いですが最低系ではありません。
本当は百合ハーレム狙いの女性として登場させようかと思いましたが、性別の自由とゆう設定を活かしたいがために元女性とゆう事になりました。

第1話　ラッキーなのか？（前書き）

色々と御都合主義です

第1話　ラッキーなのか？

やあ僕の名前は諸星利文（もろぼしとしふみ）四歳の転生者だ。

…いくらランスの本名がモロトフだからって無理矢理だな。

今僕は図書館へと向かってる。車椅子を押しながら。

そう、はやてだ。僕は今八神家に居候している。

ちなみにはやての両親もまだ健在だ。

じゃあ僕が何故八神家にいるのかを説明しよう。

はじめ僕はこの地球によく似た平行世界の地球に誕生した。近未来チックだったね、昭和っぽい。しかも魔法がオーガニックエナジーとゆう名前で存在していた。

当時はテッククリスタルも無いし騙されたと思ったね。僕は忘れていた、テッカマンはラダムが人間を【改造】して作った兵器だという事を。

三歳の頃僕の家が襲撃され、両親と兄は殺され僕は誘拐された。

どうやらここではテッカマンはラダムという企業が適性のある人間を改造して造ったものらしい。

そんな訳で僕は改造され、見事最年少のテッカマンになった。

幽閉されどうにかして脱出しようと考えてたある日、一人の研究員が僕を助けてくれたんだ。

流石に子供を改造するのはショックだったらしく、僕は彼に連れられ転送魔法で逃げだした。

本当に怖かったね。弾がかすった時はすっごく痛かったし、助けてくれた人はかなり重傷だし。

そうして転送した先が八神家だったんだ。
かなりパニックになったね。目の前にいきなり血まみれの人が現れたら驚くよね。

彼ははやての両親に僕を任せると、僕に謝りながら緑の光りに包まれ消えた。テッカマンになったせいか、光りの正体が理解できた。
フェルミオン。彼は自爆したのだ。

こうして僕は八神家にお世話になる事になった。

二人は僕が生物兵器と知りつつも受け入れて戸籍まで用意してくれた
何てお礼を言えば良いかわからない。本当に良い人たちだ。

助けたい。

原作という未来を知ってるからこそ。

絶対に。

はやての両親は共働きなため、普段ははやてと遊びながら家事の手伝いをしている。
そして夜は転送魔法で管理外世界などで魔法生物や外国で野生動物と戦ったり特訓をしている。

「無理だ！こんなバケモノ、ボルテッカ以外で倒せるものか！」

『ボルテッカに頼るな！てかその前にテックセットしろ！いくらなんでもバリアジャケットじゃ耐えられんぞ！』

え～ただ今Ａ'ｓに登場した巨大ミミズ？みたいなやつに追われてます。

それと先ほどの声は僕のデバイス、シータだ。ラピュタのヒロインじゃないよ！
こいつはテッカマン専用の戦闘支援デバイスで僕が転生者だと知っているらしい。
多分神様が作ったんだろうなぁ。

ちなみにバリアジャケットのデザインは赤いコートだ。（ブレード３９話でモロトフが着ていたやつ）

おっと、話しが脱線しちゃったかな。

今まで生身でクマとかと戦ってたんだけど人外な身体能力で何とかなったんだ。
だから魔法生物も余裕だろ！
…そう思っていたんだ。
だって能力持ちだよ！
ＡＡＡ＋だし！
二次創作でもクロノフルボッコとかできてるのに…
皆本当に強いんだな。

教訓、現実は甘くない。

『何ボサっとしてるランス！逃げずに戦え！』

いかん、意識が飛んでた！

「たしかに。逃げてばかりじゃ特訓にならないしね！こい、テック

クリスタル！」

追加したクリスタル召喚能力で赤いテッククリスタルを呼び出した。

「テックセッター！」

クリスタルが輝き赤い光りが僕の身体を包み、ベージュ色の装甲が形成されていく。

僕が変身するランスは少しだけ違う部分がある。

腰の部分にＭＳのようなスカートが追加されている。

シータだ。シータはテックセッターの掛け声でもセットアップできるのだ。

「テッカマンランス！」

さて、勝負だ！

第1話　ラッキーなのか？（後書き）

シータはギリシャ文字のΘです

第2話　与えられた槍（前書き）

戦闘描写って難しいな

会話は「」、デバイスは『』、念話は【】で表します

第2話　与えられた槍

さて、実を言うとテックセットしてまともに戦うのは初めてなんだよ。
今まで基本的にバリアジャケットで魔法訓練してたし。ボルテッカの試し撃ち位しかやってないんだ。

勿論本家のフェルミオンでのボルテッカだ。流石反物質砲、必殺技に相応しかったな。
…人に向けて撃てるような代物じゃないけど…

『とりあえず今日も非殺傷設定でやるからランサーは禁止だ。魔法の設定も問題ない、がんばれよ。』

「オッケー！行くぞぉ！」

シャァァァァ！！

ミミズが口を開け襲いかかってくる。
背中のバーニアを起動させ空へ飛び上がり回避した。飛行魔法とは違い背中から熱と振動を感じる。

「まずはこいつだ！クラッシュイントルード！」

肩の装甲を畳み全身を赤い魔力で包み高速の体当たりを連続で繰り出す。

だがいくら人外とはいえ所詮四歳児。さらに質量に差がありすぎるせいかたいしたダメージにはならないようだ。

シャア！

ミミズは身体をくねらせ逆に僕を弾き返す。

「やっぱ力じゃ勝てないか。なら、テックレーザー！」

体制を立て直しながら肩から無数の針のような魔力弾を発射する。

ドドドドド！

ゴァ？！

次々とレーザーが着弾していく。やはり魔力弾はそれなりに通用するようだ。

ミミズは砂の中に潜りだした。

『気をつけろ、どからくるかわからん。』

「厄介だな…」

僕は集中して感覚を研ぎ澄まし、襲撃にそなえる。

どこだ？どこからくる？

……

シャアアアアアア！

『「後ろか（だ）！！」』

間一髪で避けレーザーを放つがまたすぐに潜ってしまった。
どうやらヒットアンドアウェイで攻めるようだ。

「まずいな…避けるので精一杯だ。」

『弱音を吐くな、闇の書事件が始まればこんなのと毎晩戦うんだぞ。』

たしかに。でもヴォルケンリッターはこんなのと一晩中戦ってたんだ。実際にやってみると本当に考えが甘かったと思う。
チート主人公なんてのは夢物語なんだ。
力を手に入れても所詮中身は一般人。

本当に現実は甘くないな…

でも

「こんなとこで負けてられないんだ。テッカマセランスなんて言われてたまるか！行くぞ、シータ！」

『そうだ！乗り越えられない壁なんか存在しない！こんな障害なんかぶっ飛ばせ！』

ガアアアアアアアア！！！

今度は真下から襲いかかってくる。
丸呑みになんかされるかっての！

僕は避けながら手首からテックワイヤーを射出しミミズの頭に巻き付ける。

「捕まえた！」

だがミミズは僕を振りほどこうと暴れだす。振り回され砂中にも引きずり込まれる。まるで暴れ馬だ。

「シータ、魔力を身体強化とバーニアに廻すんだ。なんとかして引きずり出す。」

『無茶苦茶だな…まあ良い、やってやれ！』

身体中に魔力が通い力がわいてくる。
よし！

「うおおぉぉぉ！！」

地上へ向かい全力で引っ張る。両腕に契れるような激痛が走るが引くのをやめない。

ゴアアアアア！

そして数十メートルはある巨体をついに引き上げる。砂の中にいたせいか日光が眩しい。

よし！決着をつけるぞ！

「どりゃあああああ！」

ジャイアントスイングのように振り回しワイヤーを解いておもいっきり投げ飛ばす。

とどめだ！

キィィィン

首に赤いく丸い三つのレンズのようなものが表れ魔力が収束していく。

「ボルテッカァァァァァァ！！！」

真紅色の砲撃がミミズの巨体を包み、大爆発とともに光が空を紅く染める。

光が消えるとそこには巨大なミミズが横たわっていた。

勝った。

非殺傷設定だから死んではいないだろうけど。

やばい、腕は肉離れしてるのだろうか目茶苦茶痛いし、魔力もかなり消費した。

「シータ、今何時？」

『深夜２時２０分。今日の評価は、まぁ５０点だな。』

「えぇ？低！」

『結局ボルテッカ使ったじゃないか。でも、まぁよくがんばったな。俺のマスターなんだ、もっと強くなれよ。期待してるぜ。』

本当に偉そうだこいつは。でも悪くはない。

今日は疲れたな。

紅い魔法陣を展開し転送魔法の準備をする。

「じゃあそろそろ帰るか相棒。」

明日もがんばるか。

第2話　与えられた槍（後書き）

初戦闘でした

未熟（泣）

第3話　主人公能力だなんてうらやましい（前書き）

二人目の転生者です

主人公以上マイナーだな

第3話　主人公能力だなんてうらやましい

～利文ＳＩＤ～

現在五歳。
なのはの父、高町士郎さんが重傷を負った年だ。
寂しい思いをしているなのはを慰めてフラグを立てるのがテンプレだけど、僕は無視する事にした。

詳しい日時も知らないし八神家の事もある。
へたになのはに関わってＡ's に影響が出るかもしれないしね。

僕みたいに運よく原作に関われる転生者がどうにかするかもしれないし。
ハーレム狙いの最低系がいたら攻撃してくるかもしれない。そうなると厄介な事になるしね。

……はやてにちょっかいだしたらボルテッカで消滅させてやるか。
宇宙空間に転送ってのもなかなか良いかも。
勝てるかな？

今日ははやての検診の日だ。初めて会ったときからはやては車椅子生活だった。
たしか前の闇の書事件が無印、A's の11年前だからな。やっぱりもう転生していたか。

僕ははやての両親は猫姉妹に殺されたんだと考えてる。
多分グレアムの指示じゃなく独断だと思う。

グレアムははやてが一人だからあのような行動をおこしたらしいし。
流石に家族がいたら管理局員として行動していただろう。

まあアニメで二人の描写や情報がなかったので、あくまで僕の予想だから事実はわからないけど。

「じゃあ利文君、お留守番おねがいね。お使いのメモとお金はテーブルの上にあるから、鍵を閉める忘れないようにね。あとお釣りでおやつ買っていいから。」

「トシ君、私チョコボールがええな。」

上目遣いとは卑怯な!

「いつものキャラメルでしょ?」

「うん!」

あぁ、はやての笑顔が眩しい。
今なら理解できる、可愛いは正義だと！

「いってらっしゃーい。」

さて、僕もお使いに行くか。
…ほほう今晩はシチューか。

さて、もう少しでスーパーに着くな。
たしかチラシでシチューのルーが安売りしてたね。

［『！？ランス、封時結界だ！』］

「なんだ、っと」
［なんだって？場所は？］

危ない危ない、スーパーの近くだから周りには人が沢山いるからね。
へたすると怪しい人だと思われちゃうな。

［『海鳴臨海公園だ。』］

げぇ、あのイベントスポットか。

［もしかして転生者？］

［『だろうな。中の様子までは解らないが本編開始前だからほぼ確実に転生者だな。』］

もしかして転生者同士が戦ってるのかな？なのはの事で。もしくは僕と同じで特訓かな。

［買い物は後回しだ。侵入できそう？］

［『任せろ。とにかく急ぐぞ。』］

はぁ、後者だと良いんだけどな。

こうして僕はテッククリスタルを呼び出し公園へ向かって駆け出した。

こうして僕達は公園へ向かって駆け出した。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～？？？ＳＩＤ～

俺の目の前１０メートル位に２０個の空き缶が並んでいる。

左手でマガジンを生み出し右手のボウガンのような巨大なライフルに差し込む。チャージングレバーを引き初弾を装填、セレクターレバーを【Ｓｅｍｉ】に合わせ空き缶を狙い引き金を引く。

ドン！ドン！ドン！

銃声が鳴り次々と空き缶を破壊していく。

『一兎、今日も調子よさそうだね。』

「ん？まあな。」

俺の名前は佐々木一兎（ささきいっと）そしてさっきの声はポケットに入ってる待機状態のカード型のデバイス、マーチ。

そう、俺は転生者だ。

前世で大学の友達と山に行ったら崖から落ちて大怪我。手術は成功したがＧＶＨＤとかいう病気になり俺は死んだ。かなり苦しかったな。

死んだら神を名乗る光の玉がいて転生させてやるとか言いだしやがった。

友達が書いてた二次小説とかにある事を体験するとは驚いたね。
ただ神の間での流行りものってのは腹立たしいが。

そんな訳で俺は転生する事にし、【リリカルなのは】の世界で、【疾走する思春期のパラベラム】の主人公【佐々木一兎】の能力を得て生まれた。

しかも運よく海鳴市で生まれる事ができた。
神が言うにはどこで生まれるかはランダムだそうだ。
地球以外の管理外世界に生まれるかもしれないし、地球でも日本じゃなけりゃ介入は厳しい。ミッドチルダでもアースラメンバーに関わらなきゃ無印からはきつい。

家から翠屋は近くないし、まだはやてを見かけてはない。
とりあえず今は原作開始後の事を考えながらデンジャラス・ラビットでの射撃訓練をしている。

ついでにマーチは拾った。家は管理局とは関わりのない一般家庭だからな。俺と転生について知ってるのは驚いたが。

『！一兎、結界内に誰かが侵入したよ！魔力は…ＡＡＡ＋、多分転生者だ。』

気付かれた？ＡＡＡ＋ってことは余程強力な能力か改造したかだな。
どっちにしろ敵だったらやばい。

『来た！』

急いでマガジンを入れ替えデンジャラス・ラビットを構える。

「待った！こっちは戦う気はないからそれ下ろして！」

紫の髪と紅い瞳をした少年がいた。長い髪は後ろでまとめてるらしく、背も俺より少し高い。

「て、デンジャラス・ラビット？佐々木一兎か？」

P．V．Fを知ってるってことは、案の定転生者か。

能力によって容姿が決まるが…こいつは何だ？

「お前、転生者だな？一体何の用だ？」

「たまたま封時結世界を感知してね、様子を見にきたんだ。もしかしたら転生者がやりあってる可能性もあったしね。」

『だが、見た所普通の射撃訓練といったとこか。』

成る程、自分好みに原作を進めるため他の転生者を排除しようとするやつもいるだろうな。

『だけどあんたらが敵じゃないって決まったわけじゃないんだからね！早く出ていけ！』

何喧嘩腰になってんだマーチは？刺激するのはまずいだろ。

だがまだ信用できないのはたしかだ。

「少し黙れマーチ。…おい、お前の能力を教えろ。お前の容姿に見覚えがないしな。…そうすれば少しは信用できるだろ？」

『う、うん。』

「たしかに不公平だね。百聞は一見にしかずっていうし、変身して良いかな？」

変身？仮面ライダーの怪人の類いか？
一応警戒はしておくか。

「かまわんぞ。」

そう言うと少年はポケットから手の平より大きな、大人の手の平サイズの赤い宝石のようなものを取り出した。
デバイスにしてはでかいな。

「テックセッター！」

？どっかで聞いたような言葉だな。

すると手に持つ宝石のような形の紅い光が身体を被い、光が消えるとベージュ色の怪人が表れた。
たしかこいつは…

「テッカマンランス！」

思い出した！たしかスパロボでも出た敵のテッカマンだ、かませ犬扱いされてる。

「かませ犬か。」

「それは言わないで！」

何か泣きそうだな…

「すまん…ＡＡＡ＋ってのも特性をいじったからか？」

「命に関わる問題だしね。強化もしたし。そっちも不幸体質とかあるの？」

能力元の佐々木一兎はかなりの不幸体質なのだ。
調整で消したが、そのせいでリンカーコアはＳ＋だ。

「Ｓ＋になったよ。元々魔力弾だって撃てたし。アンフォーギヴン・バリスタも初めからは使えない。」

いずれは使えるらしいが。

「自己紹介がまだだったな。俺は佐々木一兎、一兎でいいぞ。あとデバイスのマーチだ。」

『よろしくね。』

「あ、僕は諸星利文。デバイスはシータだ。」

『シータだ。』

たしかランスの人間の名前ってモロトフだったような…

「モロトフでいいか？」

「かまわないよ。かませ犬じゃなければ好きに呼んでも。」

ははは

「最初に聞くが、お前は原作介入するのか？俺は無印から介入する。どちらにつくかはまだ決まってないがな。」

デンジャラス・ラビットのスペシャルショットならプレシアの心を取り戻せるかもしれないしな。

「僕はA'sから嫌でも介入するはめになるね。」

まさか。

「もうはやてと関わってるのか？」

「居候してるんだ。」

はぁ？何そのテンプレ。御都合主義にもほどがあるだろ。

とりあえずお互いの状況を話しあった。改造人間…生物兵器の身体ってのはビビったがな。
ひとまずデバイスを介して時々連絡をとることにした。悪いやつじゃなさそうだし。
A-sでは敵対するけどな。
それ以外では同盟ということにした。仲良くやれるといいが…

～SID　OUT～

～利文SID～

一兎とは同盟ということになった。
友達って見てもいいのかな？

とりあえず他の転生者から襲われたり緊急事態の時は協力することかな。
やっぱ転生者仲間もほしいなぁ。

「これからもよろしく、一兎。」

「おう。転生者同士、だし。よろしくなモロトフ。」

すると右手を差し出してきた。

握手か。

僕は握手に応えた。自然と笑みがこぼれる。

さて、一兎も帰ったことだし買い物に戻るか。

あれ…メモがない…

無くした?!

『馬鹿者!目をくいしばれ、修正してやる!』

無理言うな!

第3話　主人公能力だなんてうらやましい（後書き）

疾走する思春期のパラベラム
面白いのでよかったら読んでみてください

第４話　仮面の下の涙をぬぐえ（前書き）

今回何だか失敗した気がする

一番の駄文かも

第４話　仮面の下の涙をぬぐえ

一兎と出会ってから数ヶ月がたち６歳になった。
他の転生者はまだ見つかっていない。やっぱり僕達だけなのだろうか？
そしてグレアムの件もある。そろそろおじさん達も危ないだろうからね。
でもどうしよう、対策が思い付かない。僕が側にいるときはどうにかなるだろうけど…
仕事中とかだったら助けに行けないぞ。

「角もらい。」

「え？ちょまって！」

「まったなしだよ。」

現在はやてとオセロをしながら留守番中だ。
おじさんとおばさんは昨日から仕事で出掛けてる。夕方には帰ってくるらしいけど。

「も～トシ君強すぎやん。少しは手加減してぇな。」

「わはははは、勝負の世界は厳しいのだ！」

６歳児に負けてたまるか！負けたらまじで傷つくよ。

大人気ないし、次は手加減しようかな…

それにしても二人とも遅いな、もう５時なのに。

トゥルルルルン、トゥルルルルン

電話か、はい八神です…警察？…え。

「はやて！すぐにテレビ付けて！」

「へ？なんで？」

「いいから早く！」

はやてはリモコンを取り電源を入れる。

テレビではニュースで飛行機の墜落事故が報道されている。

事故の現場が近いのか飛行機の残骸のような物も見える。

『…現在生存者は確認されておりません。繰り返します、本日３時２０分頃、○×山中にて飛行機の墜落事故が発生、救助活動が行われいますが現在生存者は確認されておりません。』

「トシ君、これって…」

まさか、嘘だろ？
映像が現場からスタジオに変わる。

『つい先程警察から身元が一部確認された死亡者が公開されました。
読み上げます、小川桜さん、八神光彦さん、八神由紀江さん、吉田
……』

！！！！！

「え…お父さん…お母さん？」

そんな…

はやての両親が亡くなった…
何が助けるだ、何もできないしやってもいないじゃないか！

「『多分ただの事故だろう。いくらなんでもたった二人殺すのにこ
んな事をするとは思えん。』」

……

［『ランス、お前のせいじゃない。くよくよしてもしかたがないだろ？』］

［うん…］

結局僕は何もできなかった、その事実は変わらない。

本当、馬鹿みたい。

［『いい加減にしろよ軟弱者！二人が死んで一番悲しいのは娘のはやてだろ！悲しいのは貴様だけではない！』］

！

そうだ、こんなとこでうじうじしてらろない！

一番辛いのははやてなんだ！

僕ははやての部屋へ向かった。

トントン

「はやて、入っていいかな？」

「うん…ええよ。」

暗い声。

ベットの上にはやてがいる。泣いていたのだろう、目が真っ赤だ。

「……」

「……」

何て言えばいいんだろう。何も言葉が思い付かない。
空気が重い。

「トシ君…」

沈黙を破ったのははやてだ。

「何?」

「トシ君はいなくならへんよね?」

今にも泣きそうだ。

「私を一人ぼっちにせぇへんよね?」

はやて…
彼女を一人ぼっちにはしたくない。でも僕は普通の人間じゃない。
能力を得た転生者?違う、ただの化け物だ。

「はやて、話しがあるんだ。」

はやてに僕の身体の事を話した。
改造された事、おじさん達に助けられた事も。

「何ゆうとるん？こんな時に冗談はやめてぇな。」

まぁ、当然の反応だな。
僕はテッククリスタルを取り出した。

「これが証拠だよ。…テックセッター。」

テッカマンに変身した。
驚いたのだろう、はやては目を見開き呆然としている。

「はやて、僕は君を一人ぼっちにしたくない。君の傍にいたいと思ってる。」

握った手に力が入る。

「でも僕は人間じゃない、化け物なんだ。僕は君の傍にいていいのか？」

はやては僕の手をそっと握る。

「私はトシ君が何者でもかまわへん、傍にいてほしいんや。トシ君の事…大好きやもん…」

な？えぇ！？
やばい！顔が熱くなってきた！

前世では女性に縁がなかったからか、すっごく恥ずかしい。

うわ、はやても赤いし！

「そ、それに、私は格好ええと思うで。ヒーローみたいやし！」

…ヒーローか…

「…はやて、ちよっと出掛けよ？」

「え？でももう夜も遅いし…」

「大丈夫だよ。少し話すだけだから。」

そう言ってはやてを抱き上げる。すごく軽いな。

「え？え？」

窓から飛び出しそのまま町の上空へと飛んでいく。

「と、飛んだー?!」

「うわぁ…」

僕達の目の前には明るい町並みが広がる。
まるで星空だ。

「はやて、僕は君の傍にいる。たとえ世界が君の敵になっても僕は君を守る。」

我ながらキザな台詞だ。
でも本心だ。

「!、ありがと♪」

本当に可愛いな、ちくしょう!

「はじめまして。私は君のお父さんの友人で、ギル・グレアムという。」

そして翌日にはギル・グレアムがあらわれた。

第４話　仮面の下の涙をぬぐえ（後書き）

基本的に転生者視点で書きます

関西弁難しい

第5話　敵＝悪とは限らない（前書き）

誤字修正しました

第5話　敵＝悪とは限らない

現在9時30分。

僕は目の前に立つ男性を知っている。

「はじめまして、私はギル・グレアムという。すまないがはやて君はいないかな？」

ギル・グレアム、もう見つかっていたか。昨夜の事だけじゃなく今までの僕の行動も知られているかもしれないな。

「えっと、どうぞ。はやて！お客さんだよ！」

「コーヒーです、どうぞ。」

インスタントだけど。

「あぁ、ありがとう。さて、改めて自己紹介しよう。」

コーヒーを一口飲むと話し出した。

「はじめまして。私は君のお父さんの友人で、ギル・グレアムという。」

「お父さんの…あ、私娘のはやていいます。で、彼が…」

「居候の諸星利文です。」

「ああ君が利文君か、よろしく。」

ぱっと見は優しそうで紳士的な人、かな。実際根は良い人なんだろうし、管理局員として真面目に働いているようだし。
だからか、こんな行動に走ったのも。

「二人の事は私も残念に思ってる。今日君達を尋ねてきたのは今後の事について話しがあってきたのだ。」

そら来た。

「私が君達の面倒を見ようと思うんだが、二人の葬儀や遺産管理、生活をね。どうかな？勿論強制はしない、なにしろ急な話しだしね。」

「遺産目当て、と思われますよ。」

普通はね。

「そう思うのも無理はない。悔しいが、信じてくれとしか言えない

な。二人で決めるといい。」

たしかに狙いははやてと闇の書だし。そういった意味では信じられるな。

「はやてに任せるよ。今この家の家主ははやてだからね。」

「えっと…頼れる親戚もおらへんし、よろしくお願いします。」

「では私は失礼するよ、仕事があるのでね。何かあったら連絡してくれ。」

「「はい。」」

とりあえず僕達はこの家に住み続ける事になり、葬儀の手配もグレアムに任せる事になった。

まあ原作でもこんな感じだったんだろう。

さて、僕は今非常に不安だ。

僕の能力、少なくともテッカマンの姿は彼らに知られているだろう。

特訓もあまりできないだろうし、何より猫姉妹に何されるかわからない。

二次創作だと障害として襲われたり、はやてを絶望させるために殺

されかけたりするからな。

あの猫姉妹かなり強キャラだ。後者なら周りに一兎もいるだろうし、ヴォルケンリッターの皆に鍛えてもらえば希望はある。
ただし前者は現段階では絶望的だ。
勝つどころか抵抗する事すら難しいかもしれない。だってクロノの師匠だよ！アニメでも半ば無双状態だったし！
僕チートじゃないし！
宇宙に逃げれば死ぬ事はないが解決にはならない…
あれ？
死亡フラグ立った？

葬儀は僕達と近所の人、石田先生が来ただけの小さなものだった。

はやてはずっと泣きそなのを我慢していた。

本当は一番泣きたいのに…

くそ！死んでたまるか！
はやてを絶対に守るんだ！

第６話　義務教育が１８年になりました（前書き）

またもや転生者です

第6話　義務教育が18年になりました

～利文ＳＩＤ～

さて、おじさん達が亡くなってから僕の生活かガラリと変わりましたね。
まずはやての介護。前世と違い体力はあるので苦労はないけど…お風呂はきつかったな、精神的に。
別にそういゆ趣味はないからね！
僕はノーマルだ！

フッ、いくら入浴とはいえ介護では何の問題も…

「ちゃんと責任とってもらうで♪」

何ィ！？

さて、明日は小学校の入学式だ。
ええ勿論私立聖祥大学付属小学校ですよ。
グレアムに聞いたんだけどこの学校、僕達みたいな孤児の学費を免除してくれるらしい。

私立ってこんなに太っ腹なのか？

はやては原作どうり学校生活は無理なので休学になった。
やっぱはやてに悪いな、一人学校に行くのって。

うん、学校終わったらすぐ帰ろう。できるだけはやてと一緒にいてあげなければ。

そういえば一兎も同じ学校だ。ま、当然だけどね。
やっぱりなのは達と同じクラスになるのだろうか…できればなりたくないんだよな。

いや、大丈夫だ！何とかなるさ！

［『早く寝ろ。明日は忙しいんだろ？』］

［そうだね、おやすみ。］

さて、どうなることやら…

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

今日は私立聖祥大学付属小学校の入学式だ。
無印で俺は一応フェイトに付くつもりだ。だからなのはと同じクラスになるのは少々危険だ。
もしなってしまったら目立たないようにしなければ。成績のせいでアリサに絡まれでもしたら、そっから魔王へ直行だしな。
俺以上にモロトフの方がやばいが。

たしかクラスの一覧は校庭に張り出されるんだったな。
ん？モロトフだ。クラス表を見てるみたいだな。

［おい、モロトフ。］

［一兎？…あ、いたいた。］

俺に気付き手を振ってる。
俺は近くに行き念話を続ける。

［どうだ？やっぱりテンプレ通りクラスは同じか？］

［その件についてと他の転生者についての情報があるよ。］

！他の転生者がいたのか。

［運が良いのか必死になって来たのか…どんなやつだ？］

［ギルティギアのカイだ。名前は戒＝キスク＝木崎だ。なのはと仲良さそうだったね。一応魔力隠蔽はしてるけど気付く可能性も十分あるから気おつけて。］

［まともなやつだと良いんだがな。クラスは？］

これで確実にフェイトに付く必要があるな。でも他にまだ転生者がいるかもしれないし…万が一の場合は援軍に来てもらうか。

［残念ながら一兎はなのはや戒と同じクラス。僕は隣のクラスだ。］

まじかよ！

［同じクラスになるのは3年生からだと良かったんだが…］

［僕もまだ油断できないよ。お互い頑張ろ！］

やれやれだぜ。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

僕の名前は戒＝キスク＝木崎。転生者だ。
神の娯楽で転生したんだけど何とリリなのの世界に転生する事になった！しかも能力はギルティギアのカイ！
できればもっと強い能力が良かったけど、イケメンだしリンカーコアもＳＳ＋！
それだけじゃなく生まれた先がなのはちゃんの家の隣！お母さんは元管理局員！

何これ！？神は僕にオリ主になれと！？

他に転生者らしい人物は見かけない。多分海鳴にはいないかもしれない。

なのはフラグは士郎さんの件で立てたし！ハーレム目指すぞ！

え？お前みたいなのはキモがられて無理だって？

ＨＡＨＡＨＡ！残念だったね、僕は前世は女性だからちゃんと考えてあるんだよ！

さて、今日は入学式だ。アリサちゃんとすずかちゃんのフラグの算段はついてるし。しかも昨日の夜、お母さんが僕に入学祝いにデバイスをくれるって！
封雷剣キター！！

オリ主まっしぐらだねこりゃ。

第６話　義務教育が１８年になりました（後書き）

とりあえず主要登場転生者はこの３人です

あとはモブや使い捨てですね

第7話　汚物は消毒（ボルテッカ）だ！（前書き）

今回少し長いです

第7話　汚物は消毒（ボルテッカ）だ！

～利文ＳＩＤ～

入学式から数週間ほどたった。

日中は学校へ行き、夕方ははやてに勉強を教えてる。これでも高校は卒業してるんだ。

今日は日曜日。はやてと一緒に図書館に来てる。今日は何を借りようかな？

「はやてゴメン、ちょっとトイレに行ってくるよ。」

「じゃあ私この辺におるから。焦らんでええよ。」

そう言われても待たせるのは失礼だからね。少しは急ぐか。

ふぅ。さてはやては何処だろ？この辺って言ってたから近くにいるはずなんだけど…あ、いたいた。

？誰だ？はやてと話してる人。黒髪黒目の…！こいつはやての頭を撫でやがった！

そうか、こいつ転生者か！頭撫でるだけでフラグ立つとでも思ってるのか？そう簡単にいくとでも…まさかフラグメーカーの特性や主人公キャラの能力を持ってるとか？だとしたらやばい！

「はやて、待った？」

「あ、トシ君。大丈夫やで。」

黒髪のやつ驚いてるな。
僕より少し背が高いから年上かな？

「はやて、この人は？」

「さっき本取るの手伝ってくれた翔君や。」

「直人でいいよはやて。」

翔　直人？気いた事があるな…ああもう睨むなよ！しかもいきなり名前で呼ぶとか！ありえん！

「えっと、アハハハ…せや、買い物に行かんと。トシ君帰ろ。じゃあさっきはありがとうございました、さいなら。」

買い物？そうか、どうやらはやてはこいつが気に入らないみたいだな。

「え、ちょっと「そうだね、帰ろうか。じゃあ失礼します。」おい！」

変態は相手にしない方が良いからね。

急いでその場から離れ図書館から逃げた。
念話が聞こえたような気がしたけど無視だね。

「いや～話し合わせてくれて助かったわ。ありがとな。」

「当然さ。あいつに何されたんだ？」

頭撫でられたのは見たけど。

「本取ろうとしてたら助けてくれたんよ。でも何か嫌な感じがしてな、馴れ馴れしいし…いきなり頭撫でるし…」

「うん、ちょっとボルテッカで消してくるよ。夕飯までには帰るから。」

『死刑決定だな。全力で潰せ！』

きっとハーレム狙いの屑だ。
はやてのために抹殺せねば！

「ちょ、それ必殺技やろ！？あかんて、死んでまうわ！シータも止めんかい！」

「あんなナンパ野郎絶対許さん！」

「私は大丈夫やから。それに私トシ君一筋やし／／／（ボソ）」

はい聞こえてます。

［『リア充爆発しろ…』］

やかましい。

「わかった。とりあえず帰ろうか。」

「せやな。」

結局本借りれなかった。

ｏｒｚ

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「そんな事があったのか。」

「うん。近い内にまた出ると思うけど。」

嫌だね、こういう馬鹿。にしても翔直人か…直人、直人…ん？もしかして…

！？

『封時間結界？一兎、もしかして。』

多分直人ってやつだな。

「早速お出ましか。テックセッター！」

俺も準備しとくか。

「マーチ、セットアップ！６８口径デンジャラス・ラビット！」

服装が黒いコートに変わり、光の粒子が装甲となり右手を包み銃を形成していく。

Ｐ．Ｖ．Ｆは名前を呼ぶ方が速く展開できるのだ。

よしかかってこい！

「そこのモブ野郎も転生者か。」

来た。

赤と銀色のバリアジャケットで、額に青い宝石のようなものがついた額当てを付けており、胸部は少し大きなカラータイマーのような黄色っぽいコアが付きその周り三方向に青い模様がついたアーマーが、左手には胸部に似たデザインの手甲が装備されている。

こいつグリッドマン！完全に変身しないで、似たデザインのバリアジャケットか。

［一兎、あれってもしかして…］

［グリッドマンだな。魔力も俺達以上だし気おつけろ。］

しかし懐かしいな。

「くそ！せっかく親に無理言ってこっちの学校に入学したのに。」

ご苦労なこったな。

「なのは達より一つ上で、てめーらみたいな邪魔までいるなんて。しかも何でかませ犬がはやての傍にいるんだよ！」

「うるさい！」

ランスだしな。

「おい、そこのモブ！」

は？俺？たしかに一兎は見た目地味だけど、主人公だぞ。

「うるせーな。何だよ。」

「こんな雑魚キャラじゃなくて俺に付かねぇか？カイを潰すのに戦力は欲しいしな。そうすれば原作介入させてやるし命は助けてやるよ。それにハーレムで飽きたやつがいたら分けてやるぞ？」

はぁ？何様だこいつ。完全に俺達をナメてるな。
馬鹿にしやがって！
しかも分けてやるって。最低だな。

「命ごいをするのは貴様だろ。」

「マイナー能力のお前にチャンスをくれてやったのに。俺は主人公能力でＳＳＳだぜ？」

だから俺も主人公能力だって。

「で？何の用？僕を無視しないで欲しいんだけど。まあ大方予想はできてるけど。」

あ、忘れてた。

「んなもん決まってんだろ。お前殺してはやてを俺の物にすんだよ。お前が死んだとこを俺が慰めればフラグ立つだろうしなｗｗｗ」

救いようがないな。

「二対一で勝てると思ってるのか？」

「馬鹿か？魔力も上、能力も主人公だ。俺がオリ主なんだよ！負ける理由がねぇ！」

「ドン引きです。」

でもあいつの方が能力は上だ。きついぞ。

「…私をかませ犬だの雑魚呼ばわりするのはかまわない。だが、貴様のような蟻ごときがはやてを汚す事は断じて許せん！」

あ、トサカ立ってる。

相当キレてるな。

「一兎、「俺もやるぞ。」わかった。」

俺もこいつは許せないしな！

「は！じゃあ死ねよ！こい、ゴッドゼノン！」

魔法陳から人型のロボットが召喚された。こいつアシストウェポンを召喚する事もできるのかよ？

「ゴッドゼノン、お前はモブを殺せ。」

俺か！変態はモロトフに任せるしかないな。

■□■□！

ゴッドゼノンは俺に殴り掛かってきた。俺は強化された身体能力で回避しながらマガジンを装填、対物弾をセットしフルオートで発砲する。

ガガガガガガ！

全弾命中。だが全く効いてない。何て装甲だ。

『魔力で強化されてる。通常弾じゃ弾かれちゃう！』

「なら至近距離でラピッドショットだ！」

懐に潜り込み3発の弾を集中させ胴体に撃ち込む。

■□■□！？

装甲が凹みバランスを崩す。

よし！効いてる！このまま…

のわ！

体制を立て直したゴッドゼノンに殴り飛ばされた。

内観還元力場のおかげで怪我はないが、衝撃で気を失いそうになる。

なんて馬鹿力だ。

見るとゴッドゼノンが両腕を前に突き出してる。

次の瞬間には右手が俺に向かって飛んできた。

真上に跳躍し回避するが左手が目の前まで迫ってくる。とっさにデ

ンジャラス・ラビットで防御するがP．V．Fは能力者の神経と繋がっており、さらに魔力も付属しているのか激痛が襲いかかる。

『一兎、しっかり！』

やべえ、これが実戦か。

近づいてきたゴッドゼノンに足払いをし、倒れたスキに離れ魔力弾のマガジンに入れ替える。

「こいつ、魔力供給でも受けてんのか？」

『だろうね。流石SSS、魔力のゴリ押しでくるなんて。』

モロトフは…向こうも手こずってるな。

なら…

「マーチ、何とかしてスキを作って矢をぶち込むぞ。」

『S・S？（スペシャル・ショット）機械には効果ないじゃない！』

「馬鹿、魔法の方だよ。この前覚えた。」

P．V．Fは簡単なストレージデバイスの代わりみたいにもなる。

デンジャラス・ラビットをS・S発射形態にしS・Sではなく魔力の矢を放つ魔法だ。

『たしかにあれなら倒せるかも。よしやろう！』

「おし、勝負だ！」

魔力弾をばらまきながら走る。魔力を利用してるので精神製の弾より威力は上だ。

俺は右ストレートを避け、そのまま腕からゴッドゼノンに飛び乗り頭にラピッドショットを撃つ。
ゴッドゼノンの頭が半壊する。

「くらえ！」

デンジャラス・ラビットが変形し弦が伸びクロスボウの形態になる。さらに魔力が集中し矢を形成、ゴッドゼノンを狙う。

やけくそになったのかゴッドゼノンは殴り掛かってくる。
回避する暇なんか無い。

「貫け、アスペルガーアロー！」

『Ａｓｐｅｒｇｅｒ　Ａｒｒｏｗ』

放たれた矢が左腕の付け根の辺りに命中。そのまま左胸をえぐり腕がもぎ取れる。

ズゥゥン

ゴッドゼノンが倒れた。

起き上がっては…こないな。
ふぅ。勝った。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤ～

「スパークビーム！」

左手から拳大の魔力弾を撃ってくるがランサーで弾く。

「テックレーザー！」

肩からレーザーを撃ち反撃する。

「無駄だ。バリアーシールド！」

直人は左手に盾を召喚し防ぐ。

『物理と魔力の複合装甲か。レーザーじゃ火力不足だ。』

「プラズマブレード！」

盾から剣を引き抜いた。

「プラズマウェーブ！」

斬撃波が飛んでくる。
回避しながらバーニアで近づく。

「でりゃあああああ！」

「おらぁ！」

剣と槍がぶつかり鍔ぜり合いになる。

『身体能力はこちらが上だ、押しきれ。』

「むん！」

ランサーを振り直人を吹っ飛ばす。

「うお！？」

そのまま近づきランサーで追撃に入る。

「この野郎！電光雷撃剣グリッドマンソード！」

盾と剣が合体し、斧と剣が組み合わさったような剣になりそのまま突きを繰り出してくる。

げ、やばい？

直撃は避けたが肩に刺さり、そのまま肩の装甲が両断される。
何だこの切れ味は？危ないってまじで！

「死ね！」

再び剣で切り掛かってきた。
くそ！
ランサーで応戦する。

ザン！

「げ！？」

ランサーが切れた？

『飛べ！』

何とか空に逃げたが直人も飛び追ってくる。

「おらおら！所詮、かませ犬は、主人公に、勝てないんだよ！」

次々と繰り出される斬撃を避けるが反撃できない。
どうする？
カートリッジを使っても良いが今は補充ができない。
一兎は？無理か…

今は全速力で逃げる回るしかない。

「ちょこまかと逃げんな！」

どうするどうするどうする？

僕の装甲じゃ防げないし、勝ってるのは身体能力とスピードだけだ。
スピード？

！

そうだ！

装甲を畳みバーニアの出力を上げる。

「クラッシュイントルード！」

直人に向かって突進する。

「は、早…ぐは！？」

体当たりが次々と当たる。どうやら見切れないみたいだ。

直人は剣も落としてしまい、完全に翻弄されてる。

「はぁぁぁ！」

鳥型の紅い魔力波をまとい全力でぶつかる。

「うわぁぁぁぁ！？」

直人はそのまま地面に落ちる。

「アスペルガーアロー！」

？

どうやら一兎も終わったようだ。

そうだ！

「そら！」

右手からテックワイヤーを射出し直人を捕まえる。

「一兎、退いて！」

そのままゴッドゼノンに向けて投げる。

ドカァ！

よし、命中♪

「危ないだろ！」

「ごめんごめん。」

一兎なら避けられると思ってたし。

「糞が！本気で潰してやる！」

『Ｒｅｃｏｖｅｒｙ』

ゴッドゼノンを修復した？目茶苦茶だろ！？

「超神合体！」

分離したゴッドゼノンが直人と合体し肩にドリルのついたロボットのような姿になった。

「サンダーグリッドマンかよ！？」

一兎も焦ってる。

「サンダーグリッドファイアー！」

胸から炎を吐く。熱！

ジャンプして回避する。

一兎は空中でデンジャラス・ラビットを構える。

「ラピッドショット！」

ドドドド

魔力弾が命中するが効いていない。

「一兎、僕がやる！ボルテッカ！」

首からボルテッカを放つ。

どうだ？

「貧弱貧弱ぅ！」

耐えた？

なんて装甲だ。

「終わりだ！サンダァァグリッドォォォ…」

右手に魔力が収束していく。

凄い魔力だ。

万事休すか？

何か、何かないか…

ん？あれはグリッドマンソード？

あれだ！

ワイヤーで剣を拾い直人に切り掛かる。

「貴様、俺のグリッドマンソードを！」

「でやぁぁぁぁ！」

胸部装甲に傷がつく。

「モロトフ、どけ！」

さらに一兎が飛び掛かり魔力の矢を傷口に押し当てる。

「アスペルガーアロー！」

放たれた矢は直人の身体を貫通する。

「うおぉぉぉ！？」

直人は膝を付き今にも倒れそうだ。

まだ耐えるのか？
今度こそとどめだ。
直人の両腕をつかみ持ち上げる。
「シータ、カートリッジロード。」
『ラーサ。』
カートリッジを使い魔力を高めフェルミオンに変換する。
「カートリッジ？何故貴様が！？」
『直人、こいつ魔力を別の物に変換しているぞ！』
そう、砲撃魔法じゃない反物質砲だ。多分ＳＳＳなら死にはしないだろう。
「魔法じゃない？まさか「ボル…」アクセプター、全魔力を防御に回せ！早く！」
くたばれ。
「テッカァ！！！」
ボルテッカが周りを巻き込みながら直人を飲み込む。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

……

大惨事だな。封時結界じゃなかったらとんでもない事になってたな。

……

「フッ…いくらＳＳＳといえどこの至近距離からのボルテッカではひとたまりも…何ィ？（蝶☆棒読み）」

消し飛んだ家の残骸にボロ雑巾みたいになってる直人がいた。

「まて、お前反物質砲撃ったろ？」

『反物質？殺傷設定じゃない！』

「まぁ、半分犯っちゃう気だったし。生きてるから結果オーライでしょ。」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「さて、こいつをどうする？」

テックワイヤーでがんじがらめになった直人がいる。

「ああ、俺に任せろ。」

そう言って俺はデンジャラス・ラビットを変形させる。

「記憶を改竄するの？」

「記憶を？何故貴様みたいなモブがそんな能力を？」

はぁ…モブって。

「悪いが俺の能力は主人公能力だよ。」

「疾走する思春期のパラベラムっていうラノベのね。」

驚いて目が点になってるな。

「記憶をいじるんじゃないよ。Ｓ・Ｓはな精神力の代わりに魔力を使うことで内容が少し変化するんだ。精神力だと記憶への介入だけど魔力だとリンカーコアへの介入になるんだ。」

「リンカーコア？まさか、待ってくれそれだけは止めてくれ！」

「はは、そりゃ良いや。」

リンカーコアをいじり二度と魔法が使えないようにしてやるんだ。
記憶をいじってもこいつの性格が変わる訳じゃないしな。

「なぁ、お前達に協力する。だから頼む！」

「お前俺達を殺そうとしただろ？正当防衛で殺されても文句は言えないんだぜ。命は助けてやるんだ、感謝しろよ。記憶もそのままでな。」

直人の顔が見る見る青くなってく。

「嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

さて今は帰り道だ。
変態は成敗したしな。

「一兎もえげつない事をするね。」

『俺はあれで良かったと思うぞ。』

「あれ位しなきゃまた何かしでかすだろ。記憶の改竄も相手は改竄されたのを知ってるし。」

ま、これで敵は一人減った。

「そうだね。じゃあ僕は帰るよ。じゃあね。」

「おう。じゃあな。」

しかし強いなモロトフのやつ。

俺も頑張んなきゃな。

第7話　汚物は消毒（ボルテッカ）だ！（後書き）

グリッドマンは名作だと思います

あれは現代でやるべきだったなぁ

状況～無印開始まで

サンタ「今回は無印開始時の各キャラの状況の説明をします。」

利文

はやてとのリア充生活を満喫中。
なのは達とは3年生になった現在も違うクラス。
なのでなのは達については一兎から聞いた情報のみです。
グレアムに監視されてると予想している。
そのため実戦訓練は週一位に減っています。
ですが訓練のおかげで戦闘力は比較的高い。
ボルテッカクラッシュイントルードの練習中。
バインド魔法が使えない。
7話から無印開始までの間に他の新しい転生者を確認しておらず、
海鳴には自分を含め3人だけだと思ってる。
魔法はミッド・ベルカの複合式。

一兎

なのは達と一年生からずっと同じクラスだが、特に関わっておらず
ただのクラスメートとして接してる。

普段は魔力を隠してる。
魔法訓練で魔力運用、圧縮能力は比較的高いレベルに。
ただし転移魔法も使えず他の転生者の襲撃も7話以降ないため総合的な戦闘力は高くない。
誘導魔法も下手で、速度、貫通力に優れた実弾とほぼ同性能の魔力弾が主な攻撃。
飛行魔法を所得したが走る方が速い。
魔法はミッド式。

戒

なのは、アリサ、すずかにフラグを立てる事に成功。
一兎はただのクラスメートとして認識している。
とゆうより自分以外の転生者に気付いていない。
魔法は元管理局員の母から鍛えられたため、比較的高レベル。
時空管理局の存在を認知（原作知識ではなく母から聞いた話しとして）
転移、結界魔法も使える。
はやてとはまだ遭遇していない。
ハーレム狙いだが性格は直人より良く、場合によっては諦めるつもり。
魔法はベルカ式。

はやて

利文とのリア充生活以外は基本原作通り。
利文がテッカマン（生物兵器）だと認知。
シータについても認知しているが、魔法は知らない。

なのは、アリサ、すずか

基本原作通りだが戒を巡りたまに修羅場る。

高町家

基本原作通りで戒の事はなのはの幼なじみなので、少しは認めている。

テスタロッサ家

原作通り。

アースラ組

原作通り。

グレアム組

八神家の監視から、利文＝テッカマンだと知っている。
特訓も時折監視しているがアリア、ロッテ単体でも対処可能なレベルの戦闘力なので基本無視している。
それ以外は原作と同じ。

サンタ「こんな感じですね。」

利文「僕って強い方なの？」

サンタ「転生者の中ではね。一応強さ順だと、プレシア、リンディ、アリア、ロッテ＞＞＞＞クロノ＞＞＞＞フェイト、アルフ≧利文＞戒＞一兎≧ユーノ＞なのは、かな。」

利文「何これ？狙われたら絶望的じゃん。」

一兎「俺転生者で一番弱いのか…実戦経験の差か？」

戒「僕は妥当かな。ＫＹ以下なのは悔しいけど。」

なのは「最弱……」

ユーノ「大丈夫だよなのは、あくまで開始直前の状態なんだから。」

フェイト「一応強いんだ、私。」

アルフ「総合的な戦闘力の順位だしね。」

サンタ「クロノは正式な教育を受けてるしフェイトもそれなりに鍛えられてるしね。私は本来ＫＹ狩りなんて無理だって思ってますし。」

クロノ「あの二人に鍛えられたしな。そう簡単に負けないはずなん

だが…」

利文「ボルテッカクラッシュイントルード使えるの？」

サンタ「あれはブレードの固有兵装じゃなく特訓で習得した技ですし。ランスにも使えると思ってますよ。」

戒「僕の出番は？」

サンタ「これから増えます。」

はやて「私がヒロインなん？」

サンタ「はい。勿論。」

次回から無印に入ります。

私はアニメしか知らないので一応Ｓｔｒｉｋｅｒｓまでの予定です。

お気に入り登録してくれた方々本当にありがとうございます。

これからもがんばります。

第8話　本編とゆう名の人生（前書き）

一応無印開始です

第8話　本編とゆう名の人生

［誰か、助けて…］

～一兎ＳＩＤ～

来たな。

ようやくか…

とりあえず俺はフェイトに付く。

目標はプレシアの説得だ。プレシアは本当はフェイトをどう思ってるのかによるがな。

彼女が原作で言ってた通り嫌っているのか、それとも本当は大切に思ってるからあんな事を言ったのか。

前者なら俺はフェイトを守るだけだ。記憶を操作しても無駄だし。

後者なら何としてでも説得する。アリシアの遺体もちゃんと埋葬してやりたいし。もしかしたらジュエルシードでプレシアの治療ができるかもしれないしな。

大魔導師って言われてるんだ。アルハザードとかゆう有るのかどうかもわからない場所を目指してるんだ。俺達が集める間に治療法を

見つけられるかもしれない。
戒は味方にできるかわからないし、モロトフはまだ介入しない方が良い。
よし、まずはフェイトとのエンカウントだな。
ジュエルシードを探してれば会えるかもしれないし。二次創作じゃテンプレだしな。

「おっし！明日から忙しくなるぞ、頼むぞマーチ。」

『任せて！』

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤ～

無印開始か…６月までは大した出来事はないけど、カウントダウンは始まった。
僕達転生者の存在で未来が変わる可能性は十分にある。
まずははやてが無印に関わらないようにしなきゃ。

…原作の道を辿った方が良いよね？いや、余計な事は考えるな。あれはあれで最良の結果なんだ。リィーンフォースの事もしかたない…

ま、今日から今まで以上に気を引き締めなきゃ。また直人みたいなやつが現れるかもしれない。逆にはやてを消そうとしてるやつもいるかもしれない、アンチってやつが。

負けないぞ！

まずは朝ご飯だ！

「なーなートシ君、昨日変な夢見たんやけど…」

「変な夢？」

「傷だらけの男の子が森の中で倒れとる夢なんや。それがえらいリアルな夢なんよ。」

はい僕も見ました。

「まぁそうゆう夢を見る事もあるさ。」

「せやな。…なぁ、よく寝れへんかったから今日は一緒に寝てくれへん？／／／」

…上目遣い…勝てる気がしない。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

ユーノも来たし、今日からか。

うん、やっぱ緊張するな。これから先、命に関わる事も沢山あるだろう。大丈夫だ、僕はオリ主になるんだから。

「封雷剣、僕は大丈夫かな？」

僕は机に置いてある剣の形をしたアクセサリー、デバイスの封雷剣に話しかける。

『大丈夫ですよ若、私がいます。私は転生者用のデバイスですが、若と出会う前からリリー様と戦っています。つまり余所の転生者のデバイスより戦力は上です。』

そう、封雷剣はお母さんが使っていたデバイスなのだ。

…初めは転生者なのにお下がりってが気に入らなかったけど、お母

さんと模擬戦をしてわかった。僕はチートじゃない。

魔力と能力だけじゃやどうにもならない。
ゲームだってそうだ、いくら強いキャラを使ってもまともに操作もできなきゃ負ける。
ここは現実なんだ。一歩間違えれば死ぬ。

『それに若はリリーのご指導を真面目に受けていました。自信を持って下さい。私も自身の経験を活かし全力でサポートいたします。』

僕にはこいつが必要だ。

「ありがとう…俄然やる気が湧いてきたぞ！絶対オリ主になって皆幸せにしてやる！」

僕のハーレムでね！

『あ、遅刻しますよ。』

やべ！

第8話　本編とゆう名の人生（後書き）

魔法少女は次かな

第9話　魔王少女誕生（前書き）

戒の初戦闘です

第9話　魔王少女誕生

～戒ＳＩＤ～

今は学校の帰り道。たしかこのあたりでユーノの念話が聞こえるはずだ。

［助けて…］

ん～一応聞こえる事にしとくか。時空管理局も魔法も知ってるし。

僕はなのはと同時に歩くのを止める。

「どうしたの二人とも？」

「何？いきなり立ち止まったりして。」

二人が声をかける。

「なんか聞こえなかった？こう、声みたいな…」

「うん、何だろ。」

「え？聞こえないわよ。」

「私も。」

やっぱ二人にリンカーコアは無しか。

［助けて…］

「！こっち！」

「なのは？どこいくの？」

なのはが走り出し皆で追いかける。

お、いたいた。ユーノだ。

「イタチ？」

「多分フェレットじゃないかな？」

「かなり弱っているみたいだね。」

「ど、どうしよう？」

「とりあえず病院、急ご！」

そんなんで後は原作通り動物病院に運び預かってもらった。

本当に緊張してきたね。

［頼むよ封雷剣。］

［『お任せあれ。』］

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

夜だ。

どうすっかな～戒のやつも気になるし…よし、見に行こう。

「６８口径デンジャラス・ラビット。マーチ、魔力隠蔽頼んだぞ。くれぐれも見つからないようにな。」

『おっけー。』

デンジャラス・ラビットを展開し窓から飛び降りる。そして屋根から屋根へと跳び移りながら動物病院へ向かう。一応空は飛べるが適性が低いから遅い。こうやって足を使った方が速い。

しかし内観還元力場は凄い。前に魔法での身体能力強化と比べてみたが、桁違いに高い。

前世では決して不可能な行動、まるで忍者みたいだ。すっげー楽しい。

ん？何かが壁から生えて…いや、モロトフだ。あいつランスの姿で壁に垂直に立ってる。
ネウロみたいだ。でも面白そうだな、魔法だったら教えてもらおうかな。俺陸戦魔導師だし。

「モロトフ。」

「ああ、一兎。こんばんは。」

「おう。お前も見に来たのか？」

「うん、気になるし。」

やっぱ同じ理由だ。
…どうやらまだ始まってないらしい。

「はやてはどうしたんだ？」

「日課のマラソンって言ってきた。」

なるほど。
こっちは勝手に出たからな。帰りは気おつけないとな。

「そういえばその壁張り付き、魔法か？術式あるんなら教えてほしいんだけど。」

「ごめん、無理だ。これランスの能力だから。」

ちぇ。

グォォォォォ！

お、思念体出たな。もうちょいだ。
ん？モロトフのやつどうも落ち着きがないな。

「どうした？興奮するのは解るが落ち着けよ。」

「…ねぇ、なんか今すっごく乱入したい。」

は？

「そんで思念体にぶちのめされなきゃいけない気がする。」

「待て、自分が何言ってんのかわかってるのか？」

「わかってるんだけど体がね、なのはに見せ場を作れって言ってるような気がして…」

見せ場？主人公、初戦闘、負ける……！

「まさか…怪物だー！→警察ｏｒ自衛隊参上！→わーやられたー→主人公参上→変身→勝利ってやつか？」

「多分その警察、自衛隊ポジションだよ。」

…これがかませ犬の特性か…

「やばい、我慢できそうにない…」

え？

『一兎、ランスを止めろ！全力でだ！』

「応！？チェーンバインド！」

バインドで拘束する。

うわ！暴れるなよ！

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！いや、やっぱこのまま！無印介入はやばい、頑張れ一兎！」

ふざけんなぁぁぁぁ！！

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

念話が聞こえたしなのはも向かってるだろう。僕も行くか。

「戒。」

「お母さん…」

やべ、お母さん忘れてた！
当然聞こえてたよね念話。
詰んだ？介入できない？

「えっと…その…」

「行きなさい。」

「え？」

止めないの？まじ？

「助けを求める人がいれば助ける。人として当然でしょ？それに良い機会だわ、可愛い子には旅させろってね。」

お母さん…

「私の息子でしょ？未来のエース。」

！！！

「いってきます！」

「いってらっしゃい。封雷剣、頼んだわよ。」

『勿論です。』

行くぞぉぉ！

「封雷剣、セットアップ！」

夜の町を飛び動物病院へ急ぐ。

見つけた、なのはもいる。

あ、危ない！

「スタンエッジ！」

剣を振り雷の魔力弾を放つ。

よし、こっちに気が付いたか。

「なのは、大丈夫？」

「へ？戒君？」

「か、彼も凄い魔力だ…」

着地し剣を構える。
で…でかい。子供の視点とはいえこいつはすごいな。

『怖…くはないようですね。』

「当たり前だ。お母さんのセイクリッドエッジ連射の方が怖い。」

あれを連射するなんて有り得ないだろ。

「そこのフェレット、あれは？」

「あれは忌まわしき力の元に生まれた思念体です。なんとかして封印しないと…」

「できるのか？」

「ごめんなさい…今の僕には…」

僕もできないんだけどね。
やっぱし魔法少女にまかせますか。

「僕も封印できないし。デバイスある？あればなのはに、彼女にわたして。僕が時間を稼ぐから、その間に。」

そう言うと僕は思念体へ向かって飛ぶ。

「グリードセイバー！」

雷を纏った封雷剣で切る。

ゴァァァ！

大きな切り傷ができるがすぐに再生してしまう。

げげ、効いてない？

『再生能力…ならば手数か再生力を上回る力で攻めましょう。』

「よし、スタンエッジ・チャージアタック！」

魔力を溜め雷の槍のような魔力弾を撃つ。さらに撃つと同時に一気に近づく。

「はあ！」

前世のゲームでもよくやったチャージアタックとの同時攻撃。

このまま切り刻む！

「我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり。」

よし、向こうもやってるな。

『若、前です！』

！

「うわ！
壁にたたき付けられた。
痛！
ゆっくり変身を見てられないか。
「契約のもと、その力を解き放て。」
「契約のもと、その力を解き放て。」
振り下ろされる腕を避ける。
早く早く早く！
「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。」
「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。」
「「この手に魔法を！」」
「レイジングハート！セットアップ！」
よし！
あとはこいつを止めれば。
「ライド・ザ・ライトニング！」
雷の塊を伴い体当たりを繰り出す。
グォォォォォ！？！？

流石に効いてるな。

「今だ！」

「リリカルマジカル、封印すべきは忌わしき器ジュエルシード！」

「ジュエルシード、封印！」

『シーリングモード、セットアップ』

「リリカルマジカル…ジュエルシード、シリアル？？？、封印！」

終わった。

疲れたし帰るかな。

『まだＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩがありますよ。』

何…だと？

あ、なのは達に説明しなきゃ。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤ～

「封印したね。」

「…ああ。」

疲れ果てた一兎がいる。
ごめんよ。

実は戒が来るまでずっとかませ犬症候群が発症してました。

「帰るわ…誰かさんのせいで無駄に体力と魔力消費しちまったし。」

「本当にごめん。」

「特性消してないんだろ？しかたないさ。」

笑いながら答える。

「俺は明日からジュエルシードを探す。フェイトと会わなきゃいけないし。」

「うん、頑張ってね。無印は任せたよ。」

「そっちも気おつけろよ。おやすみ。」

「おやすみ。」

一兎はそう言って帰っていった。

僕も帰りますか。

[…戒には勝てそうかな?]

[『魔力以外は全てランスの方が上だ。あいつが攻めてきても今の状態なら返り討ちだな。』]

…無印か…無事に終わると良いけど。

第9話　魔王少女誕生（後書き）

戒「僕性格変わってない？」

サンタ「成長したんですよ。母に魔法を教わって。」

第１０話　雷と銃（前書き）

ＰＶ２００００、ユニーク３０００

ありがとうございます

第１０話　雷と銃

～戒ＳＩＤ～

あの夜からユーノは僕の部屋で寝泊まりしている。

ジュエルシードを封印した後ユーノから説明を聞き、僕達は当然協力する事にした。

ついでに僕の事（転生以外）も話しユーノの変身についても話しておいた。温泉のときに女湯に行くのは許せないしね。

淫獣なんぞに良い思いをさせるか！

で、現在2個目の犬がいるんだけど…

「なのはぁ！早くレイジングハート起動してぇ！」

「え？えっと…どうやるんだっけ？」

「だから起動パスワードを…」

はい、一人暴走体に襲われてます。なのはに被害がないのは良いけど…

やっぱり昨夜のやつより強い。

『若、落ち着いてよく相手を見て下さい。』

「簡単に…言うなって！」

少しでも油断すれば頭から噛みちぎられそうだ。
封雷剣で牽制しながら時間を稼ぐ。標的が僕だけだから、距離に注意すればなのはに襲いかかっても助けに行けるしね。

グルァァァァ！

ああもう、すばしっこいし取り込まれた犬を傷つけないようにしなきゃいけないし。何でこんなに一気に難易度上がるの？

「戒君、準備できたよ！」

待ってました！

「時間稼ぎは終わりだ、一気に攻めるぞ封雷剣！」

『ええ、とどめといきましょうか。』

！！ガァァァァァ！

暴走体も危険を察知したのか飛び掛かってくる。
残念だがそれは負けフラグだ。

『Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｓｐｈｅｒｅ』

飛び掛かってきた暴走体との間に大きな雷の魔力スフィアをだす。

暴走体はスフィアとぶつかりよろける。

くらえ！

「チャージ…ドライブ！」

そのままスフィアを突くとスフィアが円錐形となり暴走体を貫く。

！？！？！？

そしてそのまま倒れピクリとも動かない。

やりすぎたかな？

「なのは、封印を！」

「あ、うん！レイジングハート、お願いね。」

『シーリングモード、セットアップ。』

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアルＸＶＩ封印！」

封印が終わり２個目のジュエルシードも無事回収し、飼い主も見送った。

さて今僕は凄く悩んでいる。この後の巨大な木とフェイトの件だ。

実は僕は翠屋ＪＦＣに入っていない。一応応援に行くつもりだがその場でジュエルシードを回収するかしないか、さらにどうやって回収するかだ。
なのはにきちんと意思を固めてほしいけど街の被害は見過ごせない。しかも回収するにしたって面識がないのにいきなりわたせってのもね…。

フェイトは僕が介入した事で回収したジュエルシードが減り、虐待が酷くなる可能性がある。

初回はアルフの相手をして時間を潰せば良いけどそれ以降はなぁ…

『若が正しいと思った行動をすれば良いのですよ。リリー様も自分の正義を貫き続けましたし。』

…自分のねぇ…

「…自分勝手の間違いじゃない？お母さんについては。」

『……』

否定しないんだ。

まぁなるようにならぁね。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

俺は毎晩ジュエルシードの探索をしている。まぁまだ四日目だがな。

勿論本命はフェイトだ。

ジュエルシードを探すのが一番遭遇する確率が高い。なのはとの初戦闘の時だと俺は介入が難しいから、できればその前にってね。

一応他の転生者とは出会っていない。同じ手段でフェイトに近づこうってやつがいるかもしれないし。

しかしまだフェイトとは遭遇していない。

もしかしてこちらに気づいて警戒しているのか？

…心配になってきた。

『一兎、２時の方向２００ｍ先にジュエルシードっぽい反応があるよ。』

「！見つけたか。とりあえず封印するぞ、危ないしな。」

『ラジャー！』

あったあった。見た目はただの宝石だな。
綺麗だなこれ。

「封印もすんだしどうする？」

『今はとりあえず預かっとけば？封印はしたんだし余程の事がない限り大丈夫だよ。』

「んじゃそうす…「それをこちらに渡してください。」え？」

金髪に黒いバリアジャケットの少女。さらにスタイルグンバツな犬耳娘。
フェイト&ａｍｐ;アルフ出現。

「痛い目に合いたくなかったらさっさとよこしな！」

「アルフ、ちょっと言いすぎだよ。」

「あ、えっと…と、とにかくジュエルシードを渡しな！」

…うん、あれだ。二人とも格好がな…目のやり場に困る。

「『見とれてないで話しなよ。』」

あ、そうだった。

「なんだよいきなり。いきなりジュエルなんたらだっけ？これよこせとか言われても困るんだよ。」

「…ジュエルシードです。私達はそれを集めてるんです。」

「理由は？」

「……お母さんに頼まれたから。」

原作と変わらずか。

「あ～もう！フェイト、こいつぶっ飛ばして奪っちゃおうよ！」

待て待て、物騒すぎだろ犬。

「待てよ、別に渡さないとは言ってないだろ？とにかく話し合おう。ジュエルシードについても知りたいし。」

「……」

警戒してるな。よし。

「わかった。ほれ！」

「え？ちょ、え？」

ジュエルシードをアルフに投げる。
ついでにバリアジャケットとデンジャラス・ラビットも解除する。
「これで信じてくれるか？敵対する気はないんだ。話しをしたい。」
「フェイト…」
「わかりました。」
そんな感じでお話しできるようになった。
Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩじゃないよ？

「なるほど、結構危ないなこれ。」
原作知識どうりだな。
「…なあ、俺にも手伝わせてくれないか？ジュエルシード集め。」
「は？何言ってんだい？あんたには関係ないだろ。」
「それに危ないし…」

まっ当然の反応だな。

「だけどそんなヤバそうな物が町中にあるんだろ？俺はこの町に住んでる、だから早く片付けてほしいんだよ。」

嘘じゃない。

「でも…」

『サー、ここは協力してもらうのが得策かと。彼は魔力も高く役立つ可能性は十分にあります。』

バルディッシュは乗るか。

アルフはフェイトに従うだろうし、どうなるかはフェイト次第か…

「バルディッシュ……じゃあお願いします。」

よかった。これで介入できるな。

「決まりだな。そういえば自己紹介はまだだったな。俺は佐々木一兎、一兎でかまわないよ。」

『私はマーチ、よろしくね♪』

「フェイト・テスタロッサ。私もフェイトで良いよ。この子はバルディッシュ。」

『よろしくお願いします。』

「私はフェイトの使い魔のアルフだ。ま、よろしく。」

こうしてフェイトに協力できるようになった。
さて、戒とも戦う事になるだろうしプレシアの件もある。
忙しくなるな。

第１０話　雷と銃（後書き）

アルフの格好もアレですね

臍とか

第１１話　主役は遅れちゃいけない気がする（前書き）

テッカマンのデザインはアニメ本編よりＴｗｉｎ　Ｂｌｏｏｄの方が好きです。

第11話　主役は遅れちゃいけない気がする

～利文ＳＩＤ～

さて無印が開始してから数日、今日は日曜。
はやてと夕食の買い物に出掛けてる。

日曜？何かあったような気が……
気のせいか。

「トシ君、今度はもっと遠くまで飛んでみたいんやけど、ええかな？。」

「ん？ああ良いよ。来週はちょっと長めに夜更かししよっか。」

「せや、それならお弁当持って行って外で食べへん？夕方くらいに出掛けて。」

「それも良いね。」

テッカマンの事を教えてからしばらくして、はやては空を飛びたいと言いだした。
断る理由もないし二つ返事で引き受けはやてを連れて飛び廻ったんだ。
それからというものはやてはえらく気に入ったのか時々飛ぶ事をねだるようになり、月に2、3回空中散歩に出掛けるようになったね。
べ、別にデートとかそんなんじゃないからね！

まあ僕も初めて飛んだときは興奮したな。
最近は天井を歩くのにハマってる。普段と違う視点ってのがなかなか楽しい。
このままA'　sまで何もないと良いんだけど。

!!!!

この感じ、まさか…
「『ジュエルシードだ!近いぞ。』」
こんな町中で?
あ、あの巨大樹か!すっかり忘れてた。
「な、何やあれ!?」
げ、こっちに来る!
「はやて、逃げるぞ!」
右にはやて、左に車椅子を抱え全力で走る。
僕の身体能力なら逃げきれるはずだ。
「ハハ、私寝ぼけとるんやろか?あんな大きな木が町中に生えとる

なんて。」

「僕にも見えてるから！よし、ここまで来れば一安心かな。」

車椅子を下ろしはやてを座らせる。

これだけ離れれば木に追いつかれることもないだろう。

「なあ、あれなんなん？」

「わからない。でももう大丈夫だよ、帰ろう。」

そう言って車椅子に手をのせる。

後は主人公組に任せれば良い。エンカウントする危険性もあるしね。

「木の周りにいた人達大丈夫やろか…」

…たしかにアニメでは見えなかったが人的被害が出ない訳がない。

ならばこのまま無視するのも後味が悪い。

「なぁ、助けられへんかな？テッカマンならあの木どうにかできへん？」

……あの三人が来るまでなら…うん、人助けだ。助けられるのに何もしないなんて人で無しだ！

「少なくとも巻き込まれた人達を助ける位なら…いってくるよ、先に家に帰ってて。」

「気おつけてな。無茶しちゃあかんで。」

「うん！」

ひとまずビルの影に隠れる。テックセットを見られる訳にはいかないし。

「テックセッター！」

テッカマンランスに変身しビルから飛び出しテックランサーを取り出す。

「テッカマンランス！」

下でははやてが僕を見上げてる。

［行くぞシータ。一兎にも連絡してみて。］

［『ラーサ。』］

全速力で現場に向かう。

うわ、目茶苦茶じゃないか！

とりあえず瓦礫とか木で逃げれなさそうな人から助けるか。

［モロトフ！まさか木のやつか？］

一兎か。

［うん、今逃げ遅れた人達を助けてる。来れそう？］

［もう向かってる。］

よかった。よし救助を始めよう。

「ボルテッカ！！」

ドゴォォォン！

転んだ男性に迫る木の根をボルテッカで破壊する。

「早く逃げるんだ！」

「あ、ああ！」

まだなのは達来ないのか？

『一兎が来たし、人も減ってきたがどうにもならんな。我々で封印

するか？』

「それはまずい、とにかく今は待つんだ。」

僕が持っていても意味ないし。むしろ危険だ。

キャァァァァ！

瓦礫か落ちてる。まずい、あの人潰されるぞ。

「だぁぁぁ！」

ザン！

瓦礫をランサーで切り捨てる。

「大丈夫？って石田先生!？」

何でこんな所にいるんだ？

「え？その声、もしかして利文君？」

ば、バレた？

どうしよ…

「どうしたの？そんな特撮物の怪人みたいな格好して。それに何、あの大きな木は？」

「えっと…今はそれ所じゃないんで後で説明します。とにかく今は逃げてください！」

「そ、そうね…後でちゃんと説明してね。」

……どうしよ…ちゃんと説明するか、身体の事だけは。

『ランス主役が来たぞ。』

はぁ、ようやくか。

［そろそろずらかろう。後はあいつらに任せれば終わる。］

［了解。ありがと、来てくれて。］

［まあ今回は始めから介入するつもりだったからな。町の被害を考えれば当然だ。］

嬉しいねぇ。

こうして僕達は解散した。結構な人数に見られたけど仕方ないね。

…そうだ石田先生がいた。

家に帰れば先生がいた。
どうやらあのまますぐに来たらしい。

結局僕の身体について、この家にいる理由とはやてに話した事は全て話した。
先生も黙ってくれるそうで良かった。

次の日、学校では僕や一兎の事が噂になっていた。

［結界使い忘れてたな。］

……あ

第１１話　主役は遅れちゃいけない気がする（後書き）

次は猫です

ついに二人がエンカウントします

第１２話　危険な兎と雷の剣（前書き）

ギルティギアはザッパを使ってます

第１２話　危険な兎と雷の剣

～戒ＳＩＤ～

誰なんだ?この前のジュエルシード事件に誰かが介入した。
わかっているのは一人が全身黒ずくめでボウガンみたいな物を持ってた子供、もう一人は槍を持った怪人、そして二人とも巻き込まれた人を助けていたとゆう事だ。

転生者…だろうな。片方の能力は仮面ライダーの怪人とかだろう。
ボウガンのやつはわからないが。
クラスメート達に見せてもらった写真もブレててよく見えなかったし。

考えられるのはフェイトやはやて側の転生者、介入する気はない奴、裏で暗躍する奴、一番怖いのはＡ'ｓが終わりＳｔｒｉｋｅｒＳまでの間に現れるやつだ。
そういうやつに始めから介入している転生者、僕みたいなのがやられるのはよくあるからね。

ハーレムは簡単にはいかないな。

…もうフラグ立ててたらどうしよ…
襲うのは馬鹿らしい。そういうのは死亡フラグだし。第一、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて何とやらだ。

とにかく明日の月村家で少しはわかるかな。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

広い庭を走る。
フェイトとアルフは空を飛び目的地へ向かう。

「フェイト、魔力反応が三つ。多分魔導師だ。」

「管理局かな？とにかく急ごう。」

はい、現在月村邸にいます。

さて、いよいよだな。勝てるのかどうかはわからないが、フェイトがなのはの相手をする時間位は稼がないとな。

いた。

「フェイト、俺が先に仕掛ける、アルフはあのイタチを頼む。」

「うん。」

「あいよ。」

左手で非殺傷設定の魔力弾入りのマガジンを生み出し装填する。

ドドドドド！

フルオートで発射、勿論威嚇射撃だ。

「ジュエルシードを渡して。」

「蜂の巣にされたくなかったらな。」

全員驚いてるな。

今回は本来フェイト一人だしな。

そういや名前からバレる可能性があったな。クラスメートだし。

［フェイト、アルフ少しまずい事になった。］

［まずい事？］

［あの二人、学校のクラスメートだ。］

［げ、どーすんだよ！］

［戦える？友達なんでしょ？］

ろくに話した事もありませんが。

［友達じゃない、ただのクラスメートだ、大丈夫。ただ名前からバレる可能性があるから気おつけてくれ。］

［わかった。じゃ剣を持った男の子をお願い。］

［りょ～かい。］

戦闘開始だ。

俺は戒と対峙してる。

向こうではフェイトとなのは、アルフとユーノだ。

「君も転生者だよね。」

「ああ、勿論だよカイ。」

「わかるのか。ついでに君の能力も教えてくれると嬉しいんだけど。」

「お断りだ、よ！」

デンジャラス・ラビットを発砲。戒は三角形の魔法陣を展開する。
見た目通りベルカ式か。

防げたのは最初の数発だけで、残りは全て貫通した。

「うわ！？」

バリアジャケットも貫きよろける。

「いったあ。何だよそれ？」

「質量兵器とほぼ同性能の魔力弾だ。簡単には防げないぞ。」

よし、効いてる。このまま急所を狙い気絶してもらう！

「そらよ！」

ドドドドド！

フルオートで発砲、でもちゃんと狙いはついてる。ずっと射撃訓練をし、調整で射撃の才能も貰ったんだ。

戒は空に逃げシールドを張りながら近づいてくる。

ガガガガガ！

！？

防がれた？シールドに角度を付けて受け流してるのか！

「スタンエッジ！」

雷の魔力弾をトラウマ・シェルで防ぐ。

『一兎、離れて！』

いつの間にか戒が近くにいた。

「ヴェイパースラスト！」

剣を大きく振り上げる。

ちぃ！

急いで飛びのくがトラウマ・シェルが切り裂かれる、だが俺までは届いていない。

いや、まだだ。

「ライトニングジャベリン！」

続けて短い雷の槍を繰り出してくる。

P．V．Fで防ぐが雷が機関部に突き刺さる。

全身に声にならない程の激痛が走る。

「がはぁ！？！？」

着地に失敗し地面に倒れる。

「え?え?も、もしかして殺傷設定でやっちゃった?」

『いいえ、非殺傷設定になってますよ。』

「はぁはぁ、この銃はな…俺の神経と…繋がってんだ。怪我はない。」

「あ、そうなんだ。」

こいつ強い。弾も初回しか通用しなかったし動きも良い。

『ヘッドショットに急所狙い。なかなかの腕前ですが、射撃だけです。若には勝てませぬぞ。』

「君はフェイトに付いてるようだけど、どういうつもりだい?アリシアの蘇生とかできるの?」

「死者蘇生とか無理に決まってるだろ。一応原作よかはましな結果にするつもりだ。」

いや、絶対にする。

「本当?」

「ああ。」

「フェイトが狙いか。」

「んな以前襲ってきた変態といっしょにするな。そういうお前はどうなんだよ。」

俺はハーレム狙いとかそんなんじゃないさ。

「う…たしかに僕はハーレム狙いさ。でもそんな他の転生者を襲うような外道じゃないよ。」

たしかに、さっきの魔法も非殺傷設定だったしな。少なくとも悪人ではなさそうだな。

「この前の木の時にいた怪人は？」

怪人？ああモロトフか。
テッカマンなら怪人みたいだしな。

「さっき言ったハーレム狙いの転生者に襲われてね。そいつと一緒に戦ったんだ。襲ってきたやつはリンカーコアを駄目にしてやったけどな。」

そういやあいつは今何やってんだろ。

『あなたはその怪人を知ってるのですね？』

「ああ、もう一人の転生者だ。今海鳴には少なくとも俺とお前、怪人の三人の転生者がいる。」

「三人か、もう一人は誰なんだい？」

話してていぶ落ち着いてきたな。痛みも引いてきたし。

「悪いが話せない。良い奴だよ。できれば俺と知り合いってのは黙っていてほしいな。」

「わかった、聞かなかったこ…っ！」

何だ？急に黙って。

［一兎、こっちは終わったよ。ジュエルシードも手に入れたし。］

［長居するのもあれだし、さっさと帰ろよ。］

ああ、向こうが終わったのか。

［ＯＫ、すぐにそっち行く。］

「と、ゆう訳だ。温泉の時は負けないからな。」

「名前、教えてほしいね。僕は戒だ。」

『封雷剣です。』

「悪い、まだ教えられないな。とりあえず俺はパラベラムって呼んでくれ。」

『私はマーチ。次こそは蜂の巣にしてやるんだからね、覚えてろ！』

まんま悪役の台詞だぞ。

そうして俺はその場から立ち去った。

「あの女の子、フェイトの敵じゃないね。」

「うん、管理局員じゃなさそうだし。そっちの男の子は？」

「負けたよ。俺が弱いのかあいつが強いのかはわからないけど。」

「え、大丈夫？怪我とかなかった？」

「大丈夫。次は負けないさ。」

「しっかりしなよ男の子だろ。」

ハイハイ

情けないな。

次は絶対に勝つ。

あ、温泉にどうやって行こう…

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

なのはを背負いアリサとすずかの元へ向かう。ユーノは僕の頭の上だ。

「ごめんね戒君、重くない？。」

「大丈夫だよ。なのはこそ大丈夫？」

「うん、平気。…戒君とこんなに近くにいれるし／／／」

可愛いなあ。

「僕もごめん。こんなとこに乗っかって。」

「一応ユーノを探しに行くって事になっるんだし。この方が良いよ。」

毛並みも結構気持ち良いしね。

「戒、あの黒い子はどうだった？」

「私も気になるの。もしかしたらこの前人助けしてたって子かもしれないし。」

ん～パラベラムの奴は話しても良いかな。

「うん、人助けしてたの彼みたいだ。パラベラムって名乗ってた、多分偽名だろうけど。」

「じゃあ、もう一人の槍を持ってた人については？」

ユーノ、危ないからじっとしてて。

「知らないってさ。」

「そう…あの女の子がジュエルシードを集める理由も気になるし…」

「次会った時に聞いてみれば良いさ。とにかく戻ろう。二人が心配する。」

「もうちょっとこうしていたいのに…（ボソ）」

まったく。

「ねえ、あの黒い男の子声、私どこかで聞いた事あるような気がするんだけど、戒君は？」

「いや、わからないな。もしかしたら海鳴に住んでるんだろうね。年も近そうだから同じ学校なのかもしれないし。」

ん？同じ学校？
まさか名乗らないのは同じ学校で正体がバレないようにするためなのか？
だとしたら僕なら転生者だし黙ってるけど、なのははそうはいかないからな。

二人の転生者か…
あの能力は何なんだろう。それにもう一人のやつは何者なんだ？

第１２話　危険な兎と雷の剣（後書き）

ＰＶ３００００、ユニーク４０００

読んでいただきありがとうございます！

これからも頑張ります

第１３話　物欲センサー？（前書き）

連休って素晴らしい

第１３話　物欲センサー？

～利文ＳＩＤ～

今日は一人で買い物だ。どうやらスーパーで豚肉が安いらしい。
ついでに福引もあるようだ。
ふむふむ。お、今日は豚汁か。

大根はカゴに入れたし。ええっと、あとは…ん？

「一兎！」

「？おお、モロトフか。お前も買い物か？」

「うん、夕食のね。」

一兎の買い物カゴには白滝、豆腐、椎茸が入ってる。

「今日はすき焼きかい？」

「まあな。親戚から良い肉を貰ってね。そっちは？」

こっちは何年も食べてないな。…今度はやてに相談してみようかな。

「うちは豚汁だ。今日は豚肉が安いからね。ついでに福引も。」

「俺もだ。一緒に行こうぜ。」

「良いよ。じゃ早く買い物終わらせよう。」

中年の女性がくじをしてる。どうやらハズレだったようだ

「特等沖縄旅行、一等プラズマテレビとＤＶＤプレーヤーか。」

「二等は…海鳴温泉無料宿泊券!?」

「どうしたの?そんな声出して。」

「あ…」

「実は温泉にどうやって行こうか悩んでたんだ。」

あの温泉の話しか。

「親に頼んでみれば?」

「理由聞かれたら困る。特に何かある訳じゃないからな。それにフェイトを理由にするのも色々とまずい。」

「そっか、僕が当たったらあげるよ。」

［良いのか？って行くのは危ないか。あいつら全員いるしな。］

そういう事。

まず一兎がやった。

「当たれぇぇぇ！！」

どうだ？

カランカランカラン！

「おめでとう、一等大当り！」

…ある意味ラッキーだね。

「…あ…ありがとうございます…」

うわ。全然嬉しそうじゃないな。

［モロトフ頼む。］

［『お願い、絶対当てて！』］

［『これは外せないな。』］

［ハハハ。］

プレッシャーかけないでよ。

よし、こい！

「おお！二等大当り！まさか二回続けて当たるなんてね！」

神は僕を…いや、一兎を見捨てなかった。

「モ、モロトフ！いよっしゃぁぁぁぁ！」

「一兎、譲っても良いけど条件があるから。」

「ははは…は？」

［『お、おい！別にくれてやっても良いだろ！』］

［『そーだよ、ケチ！』］

ちょっとは考えろよこいつら。

「ハァ、流石にただってのはね。交換にしない？景品一人占めになっちゃうじゃない。」

「あ、そうか。じゃ交換だな。」

「おいおい君、良いのかい？」

「俺ん家テレビはあるんで。」

「僕も旅行する時間がなくて…」

正確には海鳴温泉に行きたくないんだけどね。

「そうかい…じゃ二人ともおめでとう。」

周りも騒がしい。一等と二等が続けて出たんだししかたないか。

「テレビはお家の人を呼んだ方が良いだろ。代車は貸してあげるよ。」

「いいえ、結構です。」

そう言ってテレビを担ぐ。

フフフ、こんな物軽い軽い♪

「じゃあね、一兎。温泉楽しんできてね！」

「お…おお。なんつー馬鹿力だよ（ボソ）。」

さて、はやてはどんな顔するかな？

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

本当によかった。このままだとフェイトに任せる事になるとこだった。

よし、まずは親の説得だ。

「ただいま。母さん、福引で海鳴温泉の無料宿泊券当たったよ。」

「そうなの？じゃあ今度の連休に皆で行きましょ♪」

「でかした一兎！じゃあ私も予定空けとくね。」

姉さんも乗り気だな。

「俺も行きたいな。連休は温泉だ！」

いよっしゃ！

後はフェイトに連絡だな。

［フェイト？今時間ある？］

［大丈夫だよ。何かあったの？］

［この前言ってた温泉なんだけど俺も行けるようになったよ。家族で行く事になったんだ。］

［そっか…でも良いの？家族旅行なんでしょ？］

［気にするな、ジュエルシードの方が大切だ。協力するっつたろ？］

［…ありがとう。］

やっぱ気にしてるんだな。家族旅行なんてした事ないのかもな…

…

［終わったら少し遊ぼうぜ。卓球とかもあるし、なんならトランブでも持っていくよ。アルフと三人でやろう。］

［…うん！］

［じゃああたしは背中でも流してもらおうかな♪フェイトも一緒にさ。］

おい犬、何言ってんだ！

［え、アルフ？わ、私も？］

落ち着けよ…

［…アルフ、俺にフェイトの裸体を見せたいのか？］

［裸体！？えええ！？アルフ、私と一兎は別にそういう関係じゃなくて…［覗いたら噛み付く。］…］

覗かねーよ。

［…一兎？私、一兎はそういう人じゃないってわかってるからね。］

［勿論だ。じゃあ旅館で会おうぜ。］

［うん、じゃあね。］

［またねー。］

……風呂か…

！？

俺は何考えてんだ！？

うぉぉぉ！

煩悩退散煩悩退散煩悩退散！！！

第１３話　物欲センサー？（後書き）

ＴＨＥ　ＢＡＴＴＬＥ　ＯＦ　ＡＣＥＳやった事ないんですよね…

第１４話　素晴らしき温泉（前書き）

何か長くなりそうなので分割します

第１４話　素晴らしき温泉

～戒ＳＩＤ～

さあさあ来たぞ海鳴温泉！
原作のメンバー＋僕だ。ちなみに僕の両親はこの連休が結婚記念日と重なるため夫婦で旅行に行くので欠席。
…お母さんが介入したら絶対に原作崩壊するだろうな。
今のとこは僕に任せてくれてるけど…

温泉♪温泉♪
あ、ユーノ忘れるとこだった。

「行くわよ、ユーノ！」

「キュ！？」

「あ、アリサちゃん？」

遅かった？

［戒、なのは助けて！］

まだ間に合うか。
僕はユーノをアリサから取り上げる。

「アリサ、ユーノ嫌がってるだろ。」

「そうだよ、ユーノ君は男の子だし。」

「え～。」

口を尖らせて可愛いけど駄目だよ。

「じゃあ戒君も一緒に来れば良いんじゃないかな／／／」

はい？すずかさん何爆弾発言してるんですか？

「そ、そうよ！私達はまだ９歳なんだから問題ないし！すずかよくやったわ（ボソ）。」

話しの論点がずれてませんかアリサさん？

「ユーノ君はお兄ちゃんに預けておけば…」

魅力的なお誘いなんですがそのお兄ちゃん達がも……ヒィ！？

「戒君、少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

「父さん、俺も参加させてもらうよ。」

親バカ&ｓｉｓコンが来たよ。

僕死ぬの？

「三人とも、この状況でも一緒にって言う？」

「「「ユーノ（君）のことお願いね。」」」

た、助かった…

「お前ら何騒いでんだよ。」

？

「あら佐々木君じゃない。」

「本当だ、偶然なの。」

クラスメートの佐々木だ。隣にいる中学生位の女性は姉かな？

「木崎に高町、さらに月村にバニングス、いつもの木崎ハーレムの連中か。」

クラスでハーレム扱いされてるのか僕は。

「一兎のクラスメート？」

「うん。」

「ふ～ん。ま、いいや私先に温泉に行くから。」

女性は手を振りながら風呂場に入っていった。

「佐々木、あの人お姉さん？」

「そうだよ。」

「佐々木君もお姉さんがいたんだ。」

「まあな。」

すると恭也さんが間に割り込んできた。

「佐々木君、だっけ？俺は高町なのはの兄の恭也だ。先程のハーレムについて詳しく聞きたいんだが…」

ブラコン余計な事聞かないで！

佐々木、頼む変な事言うなよ！

「いや、女の子達と仲が良いから皆羨ましがってるだけですよ。ハーレム呼ばわりしてるのも一部の連中だけですし。」

佐々木には僕の気持ちが伝わったらしい。

「…そうか。」

納得、してくれたかな？

「佐々木、風呂に行こうよ。じゃあ皆後でね。」

「うん。またね。」

「佐々木、君も来てたんだね。」

「福引で当てたんだよ。」

福引?

「ああ、そういえば一等と二等が続けて出たって話しを店で聞いたが、君だったのか。」

「はい。俺が当てたのは一等なんですけど友達のと交換しまして。」

「一等だろ?もったいなくないかい?」

僕だったら交換しないけどな。

「テレビはいらなし、旅行行きたかったんで。」

それでももったいないような…

「佐々木も変わってるな。」

「お前には言われたくねぇ。」

酷い。

佐々木とも別れ今はなのは達と旅館の中を見て回ってる。
たしかこの辺りでアルフと遭遇するんだっけ。

［戒、なのは、前！］

？

「はぁい、おちびちゃん達。」

出たよ犬。
…しかし格好がエ…

［戒君、何か変な事考えてない？］

［イエ、カンガエテマセンヨナノハサン。］

読まれてる！？

「君達かね、うちの娘をあれしてくれちゃったのは？」

僕はフェイトに何もしていませんが。

「ちょっと、なんなのあんた！？」

「あ、アリサちゃん？」

［あの、あなたはこの前の…］

前回の件でアルフがいたからな、原作と違いなのはもユーノもすでに身構えてるな。

「……あ、ごめんね。人違いだったみたいだよ、悪かったね。」

「わかればいいのよ！」

［今の所は挨拶だけね。］

［あなた達は一体何なんですか？］

［ユーノ、今は皆がいるし落ち着いて。］

「おや、可愛いフェレットだね。よしよし、なでなで。」

ユーノの頭を撫でる。

ユーノもおとなしくしているが内心はかなり緊張してるだろう。

［忠告だよ。子供はいい子にしてな。じゃないと、ガブッっといくよ！］

「それじゃあね。」

そう言って風呂場へ歩いていった。

多分もう一人の転生者、パラベラムもいるのだろう。
一応僕の方が実力は上だが何かしら対策を立ててる可能性もある。
大丈夫だ…絶対。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

戒と別れてから俺はフェイトとジュエルシードを探している。

「ありがとう、旅行なのに手伝ってくれて。」
「いや、いいさ。俺がやりたくてやってんだし。迷惑か？」

「ううん。」

嬉しそううだ。アルフと二人っきりで探してたんだ。手を差し延べてくれる人がいるのは嬉しいだろうな。

『４…いや、５時の方角から反応があるね。きょりはもう少しでわかるよ。』

よし。

「すごいね、マーチは。」

『感謝します。』

『私こういうの得意だし。裏方専門だからね。』

「あとは夜にしよう。フェイトも風呂に行きなよ。」

「じゃあそうしようかな。」

そういやもうアルフはあいつらに会ったのかな？

［あ、もしもしフェイト、一兎？こちらアルフ］

［アルフ、どうしたの？］

来たな。

［ちょっと見てきたよ、例の二人。］

［そう…でも、一言声を掛けてほしかったな。］

［あぁ、ごめんねフェイト。そうそう、あの娘だけどやっぱり大した事ないね。でも金髪はちょっと手こずるかも。］

［『あいつＳＳ＋はあったしね。』］

［そっか。一兎、やっぱり私が相手しようか？］

［悪い、俺がやりたい。］

負けたままってのもしゃくだ。

［『目指せリベンジ！』］

［それでジュエルシードの方はどうなんだい？］

［マーチのおかげで大分特定できてきたよ。今夜にでも捕獲できそう］

［さっすが私のご主人様！］

いや、やったのはマーチなんだが…

［私は特に何もしてないよ。］

［そういやアルフは今何してるんだ？］

［今？温泉入ってるんだよ。最っ高だよ～！］

そうだ、こいつ今風呂入りながら念話してるんだった。

［……へぇ、私達が探してるのにアルフは温泉にいたんだ。］

［あ…あの…い、一兎も入ってたじゃないか。］

［一兎はしかたないよ。…ご飯抜きにしようかな…］

［フェイト！？それだけは許して！］

［そのへんにしとけ。フェイトも行ってこいよ、せっかく来たんだし。］

［…うん。じゃあまた夜にね。］

フェイトは旅館の方へ向かった。温泉が楽しみなのか足どりも軽い。

「マーチ今夜は勝つぞ。」

『でもどうするの？障害物も多いし砲撃魔法も未完成なんだよ。』

「それでもやるさ。」

フェイトを不安にしたくないし、足手まといになってたまるか。

第１４話　素晴らしき温泉（後書き）

風呂は大好きです

第１５話　湯煙の夜（前書き）

ああ…温泉入りたい

第１５話　湯煙の夜

～戒ＳＩＤ～

！

ジュエルシード！

［なのは、ユーノ急ごう。ユーノは僕に乗って！］

［うん。］

［黒い子達がいるだろうから気おつけて。］

旅館から抜け出しセットアップする。

多分パラベラムの協力で原作以上にジュエルシードを持ってる可能性がある。あまり向こうに渡るのはまずい。今日はこっちが貰う！

いた。

金髪ツインテールのフェイト、犬耳に尻尾のあるアルフ、そして黒いバイザーをしたパラベラム。

「それを、ジュエルシードをどうする気だ！それは危険な物なんだ！」

「さあね。それにさ、あたし親切に言ったよね、いい子にしてないとガブってね。」

するとアルフが狼へと変身した。
やっぱりちょっとグロい。

「なのは、下がって！」

僕はなのはの前に立つ。
この後アルフが飛び掛かってくるはずだ。

「お前の相手は俺だろ！！」

早い！いつの間に？

パラベラムが僕の腕を掴み投げ飛ばす。
とんでもない馬鹿力だ。
なのはから離れてしまう。

「戒君！」

「なのは、ごめん僕はこいつの相手をしなきゃ。ユーノ、なのはをお願い！」

森の中へと移動する。
こうなったら早く倒してフェイトから奪うしかない。

「時間稼ぎはさせないよ。そちらにジュエルシードをあまり渡したくないしね。」

「随分とナメられてるな。フェイトのとこには行かせないし今回は勝つ！」

『リベンジキタコレ！』

簡単にはいかなそうだな。

「とにかく今回はジュエルシードを貰う！ついでにそっちの顔も見せてもらうよ。」

「良いぜ、勝てたらな。」

何？

『ほう。自信があるようですね。』

「ならば話しは別だ。お母さん直伝の技、受けてみろ！」

「親が騎士だったのかよ…まあ良い、行くぞ！」

パラベラムは木の上を跳び回り発砲してくる。
まるで忍者だ。
飛行魔法を使わずこんな戦い方をするって事は陸戦魔導師か。

「エリクソンシューター！」

誘導弾と早く直線に飛ぶ弾を同時に撃ってくる。
早い。でも誘導性能は高くない。

「うぉぉぉ！グリードセバー！」

魔力弾をまとめて薙ぎ払う。

「どりゃぁぁぁぁぁぁ！」

魔力弾を囮に飛び蹴り？

「うお？」

ドゴォ！

間一髪で避ける。地面を見ると陥没してる。
危な！

［『若、これは身体強化の魔法ではありませんね。』］

［多分。神経と繋がってる銃といい、あの銃があいつの能力で身体能力も銃に何かあるんだろうね。解析できる？］

［『やってみましょう。』］

ズォォォォン！！

空が桃色に染まる。
たしかフェイトは無事でなのはが負けるんだっけ？

［戒、なのはが！］

［ごめん、こっちも無理。でも勝てば顔を見せてくれるらしいからこっちも必死なんだ。］

［わかった。撃墜はされてないから大丈夫そうだし。頑張って、もしかしたら彼らの正体がわかるかもしれないし！］

さてと…

ヒュン！

危な！？
弾かすった！

「向こうは終わったけどやるんだろ？」

「当たり前だ。顔、見せてもらうよ！」

スタンエッジで牽制し、さらにスタンエッジ・チャージアタックを放ち同時に飛ぶ。
回避しきれず障壁を展開。一気に距離が縮む。

近づけばこっちのもんだ！

「ちぃ！」

パラベラムは障壁の強度を上げたのか全く動かない。

「ライトニングスフィア！」

目の前に大きな雷の魔力球を出す。

雷が障壁を削っていく。

とどめだ！

「チャージ…ドライブ！」

スフィアを突き伸びた雷が障壁を貫通。パラベラムに襲いかかる。

「甘い！」

パラベラムはバックステップで避けるが予想通りだ。

そのままパラベラムへ飛び掛かる。

「ライド・ザ・ライトニング！」

雷を伴った体当たりを繰り出す。

直撃。

「ぐわぁぁぁぁぁ！」

『Ｒｅａｃｔｅｒ　Ｐｕｒｇｅ．』

ドガァァァァン！

ダメージに耐えられなくなったのかそれとも逃げるためなのか、バリアジャケットが爆発を起こし吹っ飛んでいく。

「…えと、もしかして逃げられた？」

『大丈夫です。反応がありますから気絶してるのでしょう。それと解析が一部できましたが。』

「一応教えて。」

『あの銃から未知のフィールドが形成されいます。おそらくそれが身体強化を行っているのでしょう。』

「じゃあバイザーがデバイスなのかな。」

『でしょうな。』

煙りが晴れてくる。

パラベラムは…いた。

赤いシャツと黒いズボン。さらに銃も無くなっている。
リアクターパージをしてバリアジャケットが爆発したんだ、コートは無くなってるな。

「僕の勝ちだね。約束通りバイザー、デバイスだよね？それ外してもらうよ。」

「……」

？

何だ？様子がおかしい。

！

パラベラムの右腕に光の粒子が集まる。
集まった粒子は装甲となり右腕に装着されていく。

ダンダンダン

さらに装甲が集まり銃を形成していく。

銃を再び作った？いや、違う。今まで使ってる銃よりさらに大きな銃だ。

「何だよこれ…」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

大丈夫だと思った。
毎日射撃訓練をしてた。
新しい魔法の練習もした。

でも俺は弱かった。

一人でやるには限界がある。

モロトフみたいに命懸けの実戦訓練をしてる訳じゃない。
戒みたいに良い指導者がいる訳じゃない。

自分の能力を過信していたんだ。

ざまあないな。
馬鹿だな俺…

負けるのか。
しかたないか。ごめん、フェイト…

駄目だ、負けちゃ駄目だ。
俺の顔がバレれば絶対にフェイトに迷惑がかかる。
戒は黙っているだろうが今はまだ早い。

勝ちたい、もっと力が欲しい。
少なくとも二人の足手まといにならない位の力が！

『第一リミッター解除。』

？

リミッター？そんなもの知らな…まてよ…まさか！

立ち上がる。

痛い。でも怪我はない。
非殺傷設定だったし内観還元力場もある。
痛いのは魔力ダメージのせいだ。

身体が重い。

バリアジャケットも無くなってる。

リミッターが解除された。

そうだ、俺は全ての能力をまだ使えてなかった。その一部が今使えるようになった。

はは…なんだよこれ。
タイミング良すぎだろ…

…でも、悪くない！

ナイスな展開じゃないか！

来い！

右腕を構えた。
俺の右腕に新しいP・V・Fが展開される。
デンジャラス・ラビットよりも一回り大きい、まるで攻城用の大型

弩砲だ。

銃の本体側面には名前を示す刻印がある。

＞Ｃａｌ１２０　Ｕｎｆｏｒｇｉｖｅｎ　Ｂａｌｌｉｓｔａ＜

これが俺の新しい力。

悪いな、勝負はこれからだ！

第１５話　湯煙の夜（後書き）

バリスタ出すの早かったかな？

第１６話　許されざる者の弩砲（前書き）

戦闘が短い…

どーにかならないかな…

第16話　許されざる者の弩砲

～利文ＳＩＤ～

さて、今はやてと近所のレンタルビデオ屋で借りてきた映画を見てます。

ちなみに今まで使ってたテレビはリサイクルショップに売りそのお金で今夜は外食だ。
はやての料理は最高だけどたまには外食も良いね。

ゾク

っ！？

何だこのプレッシャーは！

いや、この感覚は…

「トシ君？何さっきからブツブツ言うとるん？」

「はやて…どうしよ…今パワーアップした敵に突っ込んで返り討ちに合わなきゃいけない気がするんだ。」

「……へ？」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「何だよこれ…」

「……１２０口径アンフォーギヴン・バリスタ…」

左手で百科事典を何冊も積み重ねたようなマガジンを生み出し銃に差し込む。

さらにチャージングハンドルを引き初弾を装填。銃口からはまるで剣のように矢が伸びている。

「俺の新しいＰ．Ｖ．Ｆだ！」

そのまま銃口を戒に突き付ける。

「ちょ…ちょっとまってよ。一人につき能力は一つじゃないのか？」

「馬鹿、一人につき一人のキャラの能力だろ？」

「あ…じゃあその銃も能力の一部なの？」

ニヤ

「そういう事だぁぁぁぁ！！！」

戒へ向かい跳ぶ。スピードはデンジャラス・ラビット以上だ。

銃を水平に振る。

戒はギリギリで防いだが吹っ飛ばされる。

圧倒的なパワーだ。

「悪いな、このまま強引にごり押しさせてもらう。」

戒が立ち上がる。

「ゲホ…ねぇ、なんで初めからそれ使わなかったの？目茶苦茶強いじゃん。」

「今使えるようになったんだよ。…都合が良すぎるけどな。」

「うわ…土壇場で新しい力に目覚めるって…負けフラグ立った？」

「処刑用ＢＧＭのリクエストは？」

「負けるつもりはないけど…ＢＧＭは欲しいな。…うん、きただにひろしの＞果てなき希望＜で。」

「龍騎か。」

銃口を戒に向ける。

「ダニーのファンなんだよ。」

剣を構える。

『ミュージック、スタート！』

音楽が始まると同時に発砲する。

てかこいつにこんな機能あったのかよ！？

［『メイド・イン・ゴットを甘く見ないでね♪』］

…ツッコミを入れたら負けだな。

撃った矢型の弾が戒にせまる。

『若、防いではいけません！』

「っ！」

戒は横に跳び、矢は後ろの木に当たる。矢は木に刺さると爆発し大量の魔力弾をばらまく。

アンビバレント・フレシェット弾。

矢の形をしたケースに弾が大量に詰まっている。矢が刺さったとこで爆発、大量の弾を内部にぶちまけるアンフォーギヴン・バリスタの弾だ。

『内部破壊型ですか。当たれば内側から目茶苦茶にされますね。』

「えぐい攻撃するね！」

「知るか！」

再び接近。剣と矢がぶつかり合う。

やはり近接戦は相手の方が上だ。

「この野郎！」

戒を蹴り飛ばし怯ませる。

「な！？」

そのまま矢で突く。戒はシールドで防ぐが、そのまま撃つ。

発射の勢いで矢が突き刺さり爆発。飛び出した大量の魔力弾が戒を襲う。

「ぐぁぁ！」

追撃を止めない。

戒の腹部に矢を刺し持ち上げる。

手足をばたつかせ逃れようとするが無駄だ。

そのまま零距離射撃。

パイルバンカーみたいだな。

ドン！

「が…」

体内で魔力弾が炸裂する。

戒を投げ飛ばす。

フラつきながら剣を杖代わりに立つ。どうやらまともに立つ事もできないようだ。

「さっきのお返し、耐えてみろよ？」

「…万事休すか…」

銃口に魔力が集中する。

今ならこの魔法が使える気がする。

砲撃魔法を。

『Ｆｒｅｕｄ…』

行け！

「バスタァァァァァ！！！」

青紫の光が戒を包む。

ドガァァァァァン！

気絶してるな。

バリアジャケットはボロボロだが怪我はないな。

「マーチ、やりすぎたかな？」

『…前回はデンジャラス・ラビットを串刺しにされたし、今回も痛かったから良いんじゃない？』

…ま、いっか。

とりあえず運ぶかな。

「戒君！」

「戒！」

っとなのはとユーノか。

「ちょうど良いとこに来たな。こいつ運んでくんないか？なに、気絶してるだけだ。」

「…」

おい、睨むなよ。

「あなた達は一体何者なんですか？ジュエルシードが危険な物だとわかってるんですか？」

「だから彼女に協力してるんだよ。町を守りたいしね。」

「私達も同じです！それなら協力し合えるんじゃ…」

「フェイトは別の目的で集めてる。本来はどっちに協力しても同じなんだが…俺は彼女に協力すると決めたんだ。悪いね。」

助けたいしな。

二人…いや、三人か。フェイト、アルフ、プレシア。

彼女らを和解させたい。ちゃんと家族に戻してやりたい。

「これ以上話しても無駄だよ。帰らせてもらうぜ。」

「あの、最後に一つだけ聞かせてください！」

？

「答えられる内容ならな。」

「…えっと…私と何処かで会った事ありませんか？」

まだ気づいてないか。

以外とわからないもんだな。

「ナンパされるとは驚きだな。」

「え？…ち、違います！そうじゃなくて！」

少し怒ってるかな。

「わかってるよ。でも会ってたとしても答える訳ないだろ？自分の正体を簡単にバラすかっての。」

「……」

さてそろそろ行かないとフェイトが心配するな。

「じゃ、いい加減に帰らせてもらうぜ。じゃあな。」

「あ、待て！」

「あ、私高町なのはです！あなたは？」

っと。ここでやっぱり聞かれるか。

「パラベラム。」

俺はそのまま森へと駆け出す。

［フェイト、アルフ聞こえるか？］

［一兎？大丈夫だった？］

［さっきすごい魔力を感じたんだけど、もしかして一兎かい？］

ああ、あの砲撃か。

［俺だよ。ちょっと新しいＰ．Ｖ．Ｆが使えるようになってね。］

［新しいＰ．Ｖ．Ｆ？もしかして前に言ってたエゴ・アームズの事？］

［そうだ。そいつのおかげで今回は勝ったよ。］

［『リベンジ達成♪』］

［へぇ、やるじゃないか！］

［無事でよかった…］

心配かけちまったみたいだな。

［心配してくれてありがとな。明日は遊ぼうぜ。少し休憩だ。ウノとか持ってきたしな。］

［うん。］

［そうそう一兎。］

［なんだ？リクエストでもあるのか？］

［ウノってなんだい？］

…あ。

［多分ゲームじゃないかな？ルール、教えてね。］

［勿論だ。］

こっちのゲームを知ってる訳ないか。

リニスと訓練とかそんなんばっかだったんだろうな。

……よし。

［なあ…二人とも。俺に戦い方を教えてくれないか？］

［は？］

［一兎は十分強いし、何で？金髪の子にも勝ったんでしょ？］

［今回は力でごり押ししただけだ。そんなんじゃすぐに駄目になる。俺は今までまともな訓練をしてないんだ。頼む。］

［あたしはフェイトが良いならかまわないけど。］

［そうだね。私達で良ければ良いよ。］

［ありがとな。］

もっと強くなってやる。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

あ～怠い。

昨夜はこっぴどくやられたしな。

新しい力…か。

［ねえ、パラベラムのやつ何で急にあんな銃を出せるようになったのかな？］

［『……日頃の特訓の成果では？』］

？

…何だ？

あいつは今までアンフォーギヴン・バリスタとゆう銃を使えなかった。能力に制限があったのか？

僕は？…使えない魔法がある。って事は…

［転生者にはリミッターが付いてるのか？］

［『……そうです。数は違いますが転生者には全員リミッターが付いています。訓練などでの成長、周りの状況で解除されます。』］

やっぱり。

［『彼は今回敗北すれば正体がばれてしまいますからね。おそらくその危機的状況がリミッター解除の原因となったのでしょう。』］

［僕のリミッターは？］

［『一つだけですね。しかしまだ解除はできません。』］

残念だ。

でもいつかは解除できるだろう。

［『まずは己を鍛える事が大切です。頑張りましょう。』］

［そうだね。よし、明日からの特訓メニュー作り直すか！］

テンション上がってきた！

［戒、また女湯に連れてかれそうなんだよ！助けて！］

やれやれ。

第１６話　許されざる者の弩砲（後書き）

まだパラベラム最終巻出てないのに…

スペシャル・ショットどうしよう…

第17話　喧嘩する程仲が良い（前書き）

利文「主人公なのに…」

一兎「出番ないな。」

戒「まぁ無印だし、しかたないよ。」

第17話　喧嘩する程仲が良い

～戒ＳＩＤ～

「いいかげんにしなさいよ！」

アリサが机を叩く。
この時期なのはとアリサは喧嘩する。

「こないだから何話しても上の空でぼうっとして！」

「ごめんねアリサちゃん。」

「ごめんじゃない！それに戒も一体全体どうしたのよ！」

っと僕もか。
最近リミッターの事やパラベラム、フェイトについて考えてたからね。僕もボーっとしてたんだろうな。

「その…ごめん。」

「私たちと話してんのがそんなに退屈なら、いくらでもぼうっとしてなさいよ！！いくよすずか！」

「あ、アリサちゃん！？」

アリサは怒って教室を出て行ってしまった。

「…なのはちゃん…戒君。」

すずかも…か。でもまだ話せない。話すのはもっと後だ。

「いいよすずかちゃん、今のはなのはが悪かったから…」

「僕もだ。」

「そんなことないと思うけど…とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね。」

「うん、ごめんね。」

「頼むよ。」

そうしてすずかもアリサを追って、教室から出て行った。

「…怒らせちゃったなぁ、ごめんねアリサちゃん。」

「しかたないよ。話す訳にはいかないし。仲直りするためにも頑張ろう。」

「うん。」

やっぱ元気ないな。

はぁ。

「珍しいな、お前らが喧嘩するなんて。」

「あ、佐々木君。違うよ、私がぼーっとしてたからアリサちゃんに怒られただけ。」

「怒られただけ、か。」

「こっちにも事情があってね。ごめんね、うるさかったでしょ。」

「いいさ。俺には協力できそうにないしな。まあ頑張れよ。」

そう言って佐々木は教室から出ていった。
少し騒ぎすぎたかな。

「帰ろう、なのは。」

「そうだね。」

とにかく今はジュエルシードの事が先だ。
早く二人と仲直りしたいしね。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「…冷凍食品？」

「その…料理できなくて…」

「あたしもだ。」

「おいおい…」

学校の帰り、フェイトの家に寄ってこうとしたら玄関前で会った。
何でも夕食の買い物に行くとこらしい。
正直嫌な予感がした。聞くとずっと冷凍食品ばっか食べてたらしい。
育ち盛りだろ。何やってんだ。

テンプレならここで料理の一つでも作ってやるのだが、生憎俺は料理ができない。…前世でもろくに家事をしてなかったな。

でもこのまま放っておくのもな…

そうだ！

俺は携帯電話を取り出し家へ電話する。

「一兎？どうしたの？」

「買い物に行くのちょっと待て。もしかしたらまともな物食わせてやれるかもしれない。」

「「？？？」」

さて、どう話すかな。

「しかし一兎にこんな可愛い彼女がいたなんて。まさか弟に先を越されるとは…」

「か、彼女？ち、違います！」

「姉さん、あまりからかわないでよ。」

はい、家に連れてきました。
親には両親が仕事でいない友人とその姉を夕食に招待したいって話したんだが…案の定誤解されたな。

「なあ一兎、本当に良いのかい？」

「フェイトにちゃんとした物食べさせたいだろ？食生活、心配じゃないのか？」

［そりゃそうだけど…］

［じゃあ遠慮するな。フェイトの為だと思え。］

しかし本当にろくな物食べてないとは…今後もちょくちょく連れて来るか。

「はいはい、そんなにからかわないの。二人ともこんなんでよければ好きなだけ食べてってね。」

「ありがとうございます。」

「すいません…」

遠慮するなっての。

「じゃあ送ってくるから。」

「「ごちそうさまでした。」」

「気おつけてね。」

食事も終わり二人を送るとゆう理由で外出する。
勿論ジュエルシード探しだ。

「ありがとう一兎。おいしかったよ。」

「本当悪いね。」

「いいさ。また来いよ、こっちの方が身体にも良いし。」

「でも…」

「遠慮するなよ。あんなんじゃ身体壊しちまうし。心配してるんだぜ?」

「…」

ん?

「本当に…グス…ありがとう…」

おいおい!泣き出したよ!

「フェイト…」

「気にするなよ、友達…だろ?」

「友達?」

「ああ。だから助け合うのは当然だ。嫌か?」

「ううん。…友達か。」

…本当子供らしくないな。

「行こう。今日も頑張って探そう。」

「うん！」

「よっしゃ！」

こうして俺達は町を駆け抜ける。

ジュエルシードを探して。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

ユーノからの念話を聞きなのはとジュエルシードの元へ走る。

「なのは！」

「うん！」

なのはが封印のために砲撃を放つ。しかも別の場所からフェイトも砲撃を加わる。

「リリカルマジカル！」

「ジュエルシード、シリアルＸＩＸ！」

「「封印！」」

ジュエルシードは沈黙した。

フェイト、パラベラムの二人と対峙してる。ユーノとアルフもやってきた。

一触即発とはまさにこの事だな。

「この前は自己紹介できなかったけど、私なのは、高町なのは。私立聖祥大学付属小学校三年生。」

「同じく私立聖祥大学付属小学校三年生、戒＝キスク＝木崎だ。」

なのはと共に名乗る。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ．』

「っ！」

なのはがレイジングハートを構える。

ドドドド！

正面から何発もの光の矢が迫る。

パラベラムか！

『Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ.』

なのはが空へ逃げる。すかさずフェイトが切り掛かる。

助けに行きたいがそうはいかなかった。

パラベラムが右腕の銃をボウガン型の銃に変え僕を狙う。さらに銃は変形し弓のようになる。

「アスペルガーアロー！」

青紫に輝く矢が放たれる。

「くっ！」

シールドで防ぐが簡単に貫通する。体をねじり避けるがバリアジャケットをかすり、傷つける。

「今回はそれなんだ。」

剣を構え直す。

「ああ。能力に頼ってちゃ強くなれない。今回はデンジャラス・ラビットで行かせてもらう。」

兎？

「危険な兎って…面白いね。」

なのはの言う通り聞いた事声だな…思い出せない。

「何かと兎に縁があるんでね。」

兎？Ｒａｂｂｉｔ、うさぎ、ウサギ、兎…！

黒い髪…顔を見られたくない…兎…聞いた事ある声、まさか。

「時間稼ぎなら大歓迎だぜ。この後ヤバイ事が起きるし、体力は温存しとかなきゃな。」

…そうだ！この後二人がぶつかってジュエルシードが暴走するんだった！

ええい、考えるのは後だ。

「でも何もしないのもあれだしね。スタンエッジ！」

雷の魔力弾を放つ。

「同感！」

障壁で防がれそのまま道路を走り発砲してくる。

ドドドドド！

距離を保ちながら弾膜をはってくる。

防いではいるが近づけない。こうしてる間にも時間はすぎていく。

「フェイト！」

「なのは！」

まずい、暴走した！

「キャァァァァ！」

「なのは！！」

急いで吹き飛ばされたなのはをうけとめる。

「大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ。」

向こうは…大丈夫そうだな。

でも、どうする？

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「フェイト、大丈夫か？」

「大丈夫。ごめんね、戻ってバルディッシュ。」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．』

目の前には青く光るジュエルシードが浮かんでる。
このままじゃいけない。

デンジャラス・ラビットを投げ捨てジュエルシードを握る。

何だこれ！？
フェイトはこんなキツいの一人でやったのか？

「くっ……！」

手の装甲にヒビが入り出す。

「一兎！」

フェイトも加わり二人で抑える。

「止まれ、止まれ。」

「止まってくれ…！」

光が治まってきた。

やった！

「ハァハァ…マーチ、頼む。」

『ラジャ！』

封印成功。

P・V・Fを解除する。掌がボロボロだ。

「アルフ、一兎をお願い。」

「わかった。大丈夫かい？」

「ああ。大丈夫だ。」

すっげー痛いがな。

「今回もいただいていくからな。」

「…あ。」

アルフに担がれ俺達は立ち去った。

「いった！」

「あ、ごめんよ。」

「一兎、本当に大丈夫？」

マンションへと戻り俺はアルフに手当してもらってる。

「大丈夫だよ。痛いだけで怪我自体はたいした事ないんだし。」

「でも…」

「気にするなって！ああアルフ、もう大丈夫だ。」

手には包帯が巻かれてる。

明日どうするかな。

「帰れる？途中まで送ろうか？」

「平気だって。第一俺が送るって出てきたんだから。」

「まあ、そうだな。逆になっちゃうね。」

俺は立ち上がり帰る支度をする。
とはいっても上着を羽織るだけだが。

「明日母さんに報告に行くから一兎はゆっくり休んでて。」

！ついに来たか。ここが一番の勝負所だ。

「…なあ、俺も一緒に行って良いか？」

「え？」

「一兎止めときな。その…」

「いいよ。」

「フェイト！？」

「だって一兎が協力してくれたおかげで5個も手ぬ入ったんだし。
一兎が家族を紹介してくれたんだから私も紹介しなきゃ。」

まさか今日の夕食がこんな効果があったとは。…予想外だな。
でもこれで時の庭園に行けるな。

「協力者だし…大丈夫か。」

「おし、じゃあまた明日な。」

「うん、また明日。」

「気おつけて帰んなよ。」

いよいよか…明日プレシアを説得できるかでこれから大きく変わる。
いや、失敗すりゃ殺されるかもしれない。
できるかじゃない。
やるんだ！

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

「戒、どう？」

「多分当たりだ。」

家に帰りユーノとある物を見てる。

「なのはには何て話す？フェイトって子が言ってた言葉が聞こえて

なかったみたいだけど…」

「次にあいつらに会った時に聞いてからだ。まだ決まった訳じゃないしね。」

「そうだね。でもやっぱり彼は…」

僕達が見てるのはクラスの連絡網のプリントだ。

勿論ユーノは読めないから僕が読んでるんだけど。

プリントにはこう書かれてる。

＞ささき　いっと＜

＞佐々木　一兎＜

「兎、聞いた事ある声、この前の温泉。」

「ああ、多分パラベラムは佐々木だ。」

第17話　喧嘩する程仲が良い（後書き）

連休終わっちゃったな

第１８話　まさに人生の分かれ道（前書き）

書きたい事がごちゃごちゃしていて難産でした

少し長めですがどうぞ

第１８話　まさに人生の分かれ道

何ブツブツ呟いてるんだ？

［なあ…本当に来るのかい？あの女、一兎に何するかわかんないし…正直、私は反対だ。］

アルフ？

たしかに危険だしすっげえ怖い。でも逃げる訳にはいかない。

俺は未来を変えるために来たんだ。

［今の一言でなんとなく予想がついたよ。ならなおさらお前達だけで行かせられないな。］

［…いざという時は頼んだよ。］

［任せろ。］

「フェイト、そろそろ行こうぜ。」

「あ、ごめん。じゃあ行こうか。」

俺達を囲むように黄色の魔法陣が展開する。

「次元転移、次元座標。８７６Ｃ、４４１９、３３１２、Ｅ６９９、３５８３、Ａ、１４１３、７７９、Ｆ、３１２５、開け、誘いの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ。」

光に包まれる。
さて、腹決めか！

「すげぇ…」

まるで魔女の館だな。
でかいし薄暗いし。

「じゃあ先ひ報告に行くから。そこで待ってて。」

「フェイト、私も行くよ！」

「大丈夫だから、ね？」

…どうするか…今から介入するか？フェイトに怪我させたくないし
…だけどジュエルシードは５個、原作よりかは多い。

「フェイト、俺は…」

「一兎も待ってて。すぐ終わるだろうし、ちゃんと紹介したいから。
」

…こうなったら乱入しかないな。

「…わかった。アルフとここに居れば良いんだな？」

「うん。ちょっと待っててね。」

扉が開きフェイトが入る。

ビシ！ビシ！

しばらくすると音が聞こえてきた。フェイトを叩く音と悲鳴が…

やっぱしこうなるのかよ！

「あんまりじゃないかあの女…」

「これが反対してた理由か！どけアルフ！」

アルフを押し退け右腕を突き出す。

「１２０口径アンフォーギヴン・バリスタ！」

Ｐ．Ｖ．Ｆを展開、マガジンを差し込み扉を狙う。

「フロイトバスター！」

ドガァァァン！！

砲撃が扉を破壊する。
中に入ると傷だらけのフェイトと鞭を持ったプレシアがいる。
「一兎!?」
「?ああ…ぼうやがフェイトの言ってた協力者ね。」
プレシア・テスタロッサ
紫の胸元の開いたドレス、黒いマント。
一見美人に見えるが顔は青白く瞳だけはギラつき狂気が見え隠れしている。
「何の用かしら?今私達は忙しいの。」
「やかましい!」
俺はフェイトを吊す鎖を矢で切る。倒れるフェイトはアルフが支える。
プレシアと視線が合う。
全身が押し潰されるようなプレッシャー。
これが殺気ってやつか?怖い、今すぐにでも逃げてしまいたい位だ。
だけどここで逃げてはいけない。
覚悟を決めたはずだ!
「アルフ、フェイトを連れて外にいろ。俺はこいつと話しがある。」

「馬鹿！殺され「行け！」…っ！」

二人が出ていく。

…ここからが本番だ。

……やべぇ口が動かない。

何へタレてるんだ俺は！

「…で、何の用かしら？」

小馬鹿にしたような口調。

完全にナメられてるな。

「…何故こんな事を？」

「できの悪い娘をしつけているだけよ。」

「だとしてもやりすぎだろ！」

「ふふふ…ずいぶんとフェイトを気に入ってるようね…」

笑ってる？

「悪いか？」

こいつの考えがわからねえ。

「フェイトから聞いたわ。P・V・F…パラベラム能力だったかしら?あなたの銃…いえ、パラベラムに死人を蘇らせる事は可能かしら?もしくは死体に元の心を戻すとか…」

…なるほど。

たしかアリシアの身体自体は保存されてるんだっけ?無いのは命だけ。心があれば生き返ったようなもんだ。

精神、心に関する能力、パラベラム。だけど心を破壊する事はできても戻す事はできない。

「無いな。とゆうか人の話しを聞け!」

「ならば用はないわ。」

無視かよ。

「さっきっからあんた、蘇るとかなんとか。もしかしてジュエルシードを集めてるのって誰かを生き返らせるためか?」

「あなたには関係ないわ。消えなさい。」

死んだ奴は絶対に生き返らねぇんだ、生き返っちゃ駄目なんだ。

そんな事ができたら人は悲しむこともできなくなっちまう。

生きる事を怠けてしまう。

人生がまるでゲームみたいになっちまう。

そんなの駄目だ。

「いい加減にしろ！さっきっから馬鹿にしやがって！あんたはフェイトに何をやらせるつもりなんだ！あんたは何がしたいんだ！」

「あの人形も好かれたものね…」

こいつ！

「…いいわ、ついて来なさい。」

？

プレシアは部屋の奥へ歩き出した。

俺は後ろからついて行く。

俺の目の前にはフェイトと瓜二つの少女がいる。ただしガラス張りの機械の中にだが。

この少女がアリシアか。

「フェイト…じゃないな。」

「アリシア。私の本当の娘よ。」

「本当の？」

こいつフェイトの事は何とも思ってないのかよ。

「ええ、フェイトはアリシアのクローンですもの。」

「…嘘みたいな話しだけど、本当みたいだな。これが蘇るとか何とか言ってた理由か。」

「ええ、だからジュエルシードがあればあの子は用済み。欲しければ譲ってあげても良いわよ?ただしこれからも協力してもらうけど。」

駄目なのか?完全にプレシアは狂ってんのかよ?

…ふざけんな。

「ふざけんじゃねえ!フェイトは物じゃない!あんたの娘じゃないのかよ!」

「私の娘はアリシアだけ。この子だけよ!私は取り戻すのよ、私のアリシアの過去と未来を…こんな筈じゃなかった世界の全てを!」

この馬鹿野郎!

「あんたがやってる事はアリシアの命を侮辱してるだけだ!」

「何ですって!」

服の襟を掴み俺を睨む。

「ああそうだ!死人を生き返らせるなんてその人の人生を、命を汚

してるだけだ。しかもあんたは娘の死体をこんな機械の中に閉じ込めて辱めてるんだよ！」

「黙れ！貴様のような小僧に私の何がわかる！」

たしかに前世でも俺は独身だ。子供もいない。子を失った親の気持ちなんかわからない。

でも。

「何度でも言ってやる！あんたは大切な娘の命を玩んでるだけだ！死んだ人間はな、生き返っちゃいけないんだよ！」

「……」

…命を玩ぶか…

人の事言えないかもな。

俺も転生とゆう神の遊びに付き合った。

自分の命で。

矛盾だらけかな。

「…じゃあ…どうすれば良いのよ…」

？

「私は何を生きがいにして生きれば良いのよ…私にはアリシアが全てだったのよ…」

掴む手に力が抜けていく。

「あんたにはフェイトがいるだろ。」

「私が今まであの子に何をしたと思ってるの?あの子に酷い事をしてきた…ずっと…何を今更!私にはフェイトを愛する資格なんかないのよ!」

そうか。少しはフェイトの事を思っていたのか…
だからか?俺にあんな事を言ったのも…

「あんたの娘だろ。血の繋がった、あんたが産んだテスタロッサ家の次女だろ?大丈夫、仲直りできる。親子だろ?」

「あ…ああ…」

プレシアが力無く座り込む。

「…私はやり直せるかしら?」

「ああ。フェイトはきっとわかってくれる。まずは謝ろう、それからだ。」

「そうね…!ゴフッ!」

急に咳込み吐血する。

「おい、しっかりしろ!」

「ゼェゼェ…病気でね…あまり…長くはないのよ。」

そうだった、プレシアの身体は…

「フェイト達を呼んでくれないかしら？全部話すわ。」

「おい、無理するなよ。」

「お願い。」

…しかたない。

フェイト達の所まで走り出す。
全力疾走、時間はかけたくない。

アリシアの生体ポッドの前、プレシアは二人に全てを話した。

フェイトは何も言わず黙って話しを聞き、アルフは始終プレシアを睨み続けた。

「…母さん。」

「何かしら？」

先に口を開いたのはフェイトだ。

「私は娘でいて良いんですか？私はアリシアではないけれど、私は母さんの娘でいたい！」

フェイト…

「ごめんね、ごめんねフェイト。あなたは私の娘よ、アリシアの妹、フェイト・テスタロッサよ。」

プレシアがフェイトを抱きしめる。

「母さん…！」

和解できたみたいだな。

「本当に馬鹿だったわ。何が大魔導師よ。娘を虐待し、自分の身体まで駄目にするなんて。」

プレシアの私室だ。彼女には今は休んでもらわなければ。

「母さん、そんな事言わないで。」

「フェイト…ありがとう…こんな私を心配してくれて。」

全く…

「で、これからどうするんだい？アリシアを生き返らせるのは止めるんだろ？」

「ええ。…ちゃんとお墓作ってあげなきゃね。」

これからか…アリシアの蘇生を止めるんじゃジュエルシードを集める理由がなくなる。
ユーノに渡すのか？

「…ねえ、母さんの病気をジュエルシードで治せないかな？」

プレシアは少し考えると。

「わからないわ。不可能ではなさそうだけど…」

不可能ではないか。決まりだな。

「じゃあ今度はプレシアさんの治療の為に集めよう。」

「そうだよ。私達が集めてる間に母さんは治療法を探せば良いんだよ！」

「…そうね、やれるだけやってみましょ…ゴホゴホ！」

間に合うかどうかが問題だな。本当に大丈夫か？

「母さん…そうだ。アルフ、母さんの事お願いできないかな？」

「あたしが？」

「うん、ジュエルシードは私と一兎でやれば良いし。母さん一人にしておくのは心配だから。」

たしかに一人にしておくのは危険だ。だけど集めるにはフェイトがやらなければならないし俺は論外、ならばアルフが適任だろう。

「それはかまわないけど…なあ一兎、デンジャラス・ラビットって人間以外にも使えるのかい？」

「心があるなら使えると思うけど…おい、まさか…」

なんだか嫌な予感がするんだが。

「あたしからプレシアに関する記憶を消してほいしんだ。」

そうきたか！何考えてんだこいつは。

「アルフどうして？」

「プレシアが本当に反省してるのは信じられる。けど私はやっぱり今までの事を許せない…」

許せないか。わからなくはないけど…

「このままだと私はプレシアに何をするかわかんないしね。二人き

りなんて尚更だ。そんな事すればフェイトが悲しむ。だから…頼むよ。」

「俺がアルフの記憶の中に入るんだぞ、しかも改竄を覚えてるとはいえ無くした記憶は元には戻せない。それでも良いのか？」

「ああ。…フェイト、止めないでくれよ。こればかりは…」

「アルフ…わかった。私は何も言わない。」

「ありがとう。」

ハァ…

「一応聞くけどプレシアさんは？」

「お断りするわ。そんな事すれば私は自分の罪から逃げる事になるもの。」

そりゃそうだな。

記憶の改竄か…リンカーコアに介入した事はあるが記憶は初めてだな。

あまり良い気はしないけど、しかたないか。

デンジャラス・ラビットを展開しマガジンをセット、セレクターレバーを【S・S】にセット。デンジャラス・ラビットが変形、光の弦が伸びクロスボウの形態をとる。

そして射出態勢になった光の矢でアルフを狙う。

「撃つぞ。本当に良いんだな？」

「ああ。早くしてくれ。」

引き金を引く。すると光の矢が放たれアルフを貫く。

アルフの記憶の中、俺は何をすれば良いのかわかる。

アルフの記憶の中にいるプレシアを【破壊】するのだ。

原作の佐々木一兎も同じ方法である少女の記憶から自分を消した。

俺は記憶の中、プレシアを次々と破壊していった。

場面が変わる度に一人、また一人と。

全てのプレシアを破壊し終わると意識が身体に戻る。

気持ち悪い。

他人の記憶を勝手に見て捏造する。

こんなに嫌な気分は初めてだ。

こんなの、簡単に使うもんじゃないな。

余程の事がない限り使わない方が良い。

改竄は成功した。

アルフはというと。

「変な気分だ。何かが足りないような…とにかく変な気分としか言いようがない。二度やりたくないね。」

感想を述べてたね。

勿論プレシアとは初対面といった感じで、丁寧に自己紹介までしていた。

本当に無いんだな。

フェイトもプレシアも複雑な顔をしていた。

親しい人の記憶なんて二度ごめんだ。

そうゆう訳で、これからはフェイトと二人で探す事になった。

フェイトは以前以上に気合いが入ってる。
当然だ。親を助けるためなのだから。

俺も頑張るか。
プレシアさんを助けるために。

第１８話　まさに人生の分かれ道（後書き）

作中でもデンジャラス・ラビットの能力は凶悪な方でしたね

強いとかそうゆう意味じゃなくて

第１９話　空気より目の前の危険（前書き）

前半少しギャグパート入ります

ＰＶ５００００、ユニーク７０００ありがとうございます！

第１９話　空気より目の前の危険

～利文ＳＩＤ～

皆さんお久しぶりです。
主人公なのに出番のないテッカマンランスです。
まあ無印に介入しないと言ったのは自分なんだけど…

「おい！俺の話しを聞いてるのか貴様！」

おっと、すっかり忘れてた。
現在他の転生者に襲われいたんだった。

「ああごめん。で？」

「がぁぁ！ムカつく！はやてにフラグ立てやがって！貴様は絶対俺が倒す！」

勘弁してくれ、最近ストレスが貯まってるんだ。
…勿論出番が無いからではない！

はやてが昼ドラに影響されたのか、スキンシップが過激になってきたんだよね。
理性を保つのに必死なんだ。

「レッツ・マイトガイン！」

「テックセッター。」

イライラする～。

僕はテックセットし相手もセットアップする。

右肩に４００系新幹線【つばさ】、左肩には３００系新幹線【のぞみ】、胸部にはＳＬのような鎧が装備されてる。

マイトガイン。好きだったなあ。

なんだか余計に腹立たしい。

「銀の翼に希望を乗せて、灯せ平和の青し「ボルテッカァァァァ！！！」ギャァァァ！」

キメ台詞を言ってるが知るか。

とりあえずイライラするので黙らせる。

何度も言うが出番が無かったからではない。

「空気読みやがれ！人が『Ｖｏｌｔｅｋｋａ．』うぎゃぁぁぁぁぁ！」

第一前回の出番がかませ犬症候群って…

「この！動輪け「ボルテッカ！」どわぁぁぁぁ！」

ちなみにボルテッカは魔法で撃ってるから連発できる。

一応ＡＡＡ＋だし。

あ、そうそう。ボルテッカの呪文も考えたんだよね。ＳＬＢの星よ

集え～とかかっこ良いしね。使う事はないだろうけど。
ボルテッカは叫ばなきゃ。
声でマイク破壊できるかやってみたいな。

「ちょっと待て、俺が悪かった。話し合おう！」

…そっちからいちゃもんつけてきたんだろ。

そういやせっかく魔力光が紅色だからクリムゾンスマッシュを習得しようと練習したけど上手くいかないんだよね。足からどーやって出すんだよ。
またイライラしてきた！

「…カートリッジロード。」

「へ？」

八つ当たりだ！あいつぶっ飛ばす！

「傀儡の騎士よ、その雄叫びにて抗う者に破滅を与えよ！命を食らい付くし全てを滅ぼせ！」

「落ち着けって！な？」

逃がすか！非殺傷設定にしてるから死ぬ事はないだろうし！

「轟け！破壊の咆哮！」

「ヒィ！？」

「ボルテッカァァァァァ！！！」

「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

まだ僕のバトルフェイズは終了してないぜ！
次はクラッシュイントルードで…

『もう許してやれよ…』

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

佐々木が学校を休んだ。しかも無断欠席らしい。
もしかして気づかれたかな？

いや、違う。
たしかあの暴走の後、フェイトはプレシアに報告に行くんだった。
一緒について行ったんだろう。

…大丈夫かな。

まあ夕方になればわかるか。

「戒、なのは、ジュエルシードだ！」

来た！

公園へと走る。

「ユーノ君お願い！」

「任せて。封時結界、展開！」

封時結界が展開され周りの色が変わる。

オォォォォォ！

ジュエルシードを取り込んだ木。まるで絵本に出てくる木のお化けだ。

ドドドドド！

黄色い魔力弾と青紫の矢が飛んできた。

命中するが全てバリアに防がれる。

フェイトとパラベラム…いや、佐々木だ。
ここにいるって事は大丈夫だったみたいだな。

「バリアか、面倒だな。」

「うん…この間より強いね。それに…あの子達もいる。」

化け物は根を振り回し攻撃してくる。

「ユーノ君、逃げて！」

ユーノが林の中へと飛び込む。

『Ｆｌｉｅｒ　Ｆｉｎ.』

「ちぃ！」

僕となのはは空へと逃げる。

「二人とも、ここは一時休戦して協力しない？」

「俺はかまわない。フェイトは？」

「私も良いよ。」

決まりだね。

「僕とパラベラムでバリアを破壊する。本体はなのはとフェイトが！」

「うん！」

「そういう事ならこれだな。」

「行くよ、バルディッシュ。」

なのはとフェイトは少し離れ、佐々木はデンジャラス・ラビットを出す。

「ミスるなよ？」

「君こそ。」

僕は左手で円を描き、そこから雷の剣を飛ばす。

「セイクリッドエッジ！」

同時に佐々木はデンジャラス・ラビットを変形させ光の矢を放つ。

「アスペルガーアロー！」

雷の剣と光の矢がバリアを貫く。

「「今だ！」」

なのはがレイジングハートを、フェイトがバルディッシュを構える。

「ディバイン！」

『Ｂｕｓｔｅｒ．』

「撃ち抜け、轟雷！」

『Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｓｍａｓｈｅｒ．』

ドォォォォォン！！

二色の砲撃が化け物を飲み込む。

オォォォォォ

化け物は消えジュエルシードが現れる。

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔ　ｕｐ．』

『Ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔ　ｕｐ．』

「ジュエルシード、シリアルⅤ？！」

「封印！」

ジュエルシードの封印が終わる。

なのはとフェイトは宙に浮かんで向き合う。

「ジュエルシードには衝撃を与えないほうがいいかもね。」

「うん、私のレイジングハートとフェイトちゃんのバルディシュも、あんな事になるのは可哀想だから。」

「私は、譲れない。絶対に！」

「私はフェイトちゃん達とお話をしたいだけなんだけど…私達が勝って、ただの甘ったれじゃないってわかったらお話、聞かせてもらうよ。」

そしてなのはとフェイトが互いにデバイスを構える。

「ごめん！その前に聞きたい事があるんだけど！」

「「え？」」

「おいおい…」

うん。KYだな僕。
でもこれだけは聞かなきゃ。

「ごめんね、邪魔しちゃって。でも教えてほしいんだ…パラベラム、君の事について。」

「……」

「単刀直入に聞こう。パラベラム、君は佐々木一兎だろ？」

「！」

フェイトが驚いたような表情をする。決まりだな。

「え？佐々木一兎って…もしかして！」

「なのはのクラスメートだよ。温泉の時も彼はいた。」
いつの間にかユーノも戻ってきた。
「あ～あ。バレたか。」
佐々木はバイザーを外す。黒髪、黒い瞳。
クラスメートの佐々木一兎がいた。
「ありきたりだけど聞いて良いかな?何でわかった?」
「なのはが聞いた事がある声って言ってた。つまりなのはと面識がある人物。そしてこの前フェイトが君の事を【いっと】と呼んでいたのを僕とユーノは聞いていたんだ。」
「!ごめん一兎、私のせいで…」
「いいさ。」
「続けるよ。あと君は兎に縁があるって言ってた。君の名前は一匹の兎と書いて一兎。自分でもバラしてたんだよ。まさか三年間も同じクラスなのに声で気がつかなかったなんて。」
ずっと原作やなのは、アリサ、すずかの事ばかり考えてたからな。
我ながら煩悩まみれな三年間だったな…
「そんな…佐々木君だったなんて…なんで佐々木君はフェイトちゃんと一緒にいるの?」

「さあな。簡単には教えられないな。」
佐々木が銃を構える。
「なら、佐々木君にもお話聞かなきゃね！」
なのはも構える。
…あれ？ちょっと待てよ？何か忘れてるような…
突如水色の魔法陣が展開され、そこから黒髪の少年が出てきた。
「ストップだ！ここでの戦闘行動は危険すぎる！」
そうだ！クロノが来るんだった！
…人の事言えないからＫＹとは言わないでおこう。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」
フェイトが飛びのく。
「一兎、逃げよう！」
「了解！」
佐々木がクロノに向かって発砲しフェイトはジュエルシードに手を伸ばす。
「待て！」

佐々木の射撃をシールドで防ぎ、さらにフェイトに向かって魔力弾を撃つ。

直撃。フェイトが落ちる。

「フェイトちゃん！」

「フェイト！１２０口径アンフォーギヴン・バリスタ！」

佐々木が銃を替え跳躍。フェイトを受け止める。

ナイスキャッチ。

着地した佐々木をクロノが狙う。

「駄目！」

なのはが間にはいる。

「なのは、危ない！」

射線上に割り込むなんて危険すぎる。

「止めて！撃たないで！」

「！？」

「なんだか知らんが逃げさせて貰う！」

佐々木はフェイトを抱えたまま走り去る。

すごいスピードだ。

相変わらず人外じみた身体能力だな。

…管理局か。僕の実力じゃクロノには勝てないだろうからＫＹ狩りなんかできない。

とゆうより僕はクロノの行動は正しいと思う。もし流れ弾がジュエルシードに当たりでもすれば…考えただけでも恐ろしい。

第一僕はお母さんから管理局について聞いている。へたに攻撃すれば面倒な事になるな。

クロノがジュエルシードを取る。

すると近くに魔法陣が展開し緑の髪をした女性が映ってる。

リンディ・ハラオウンか。

『クロノ、お疲れ様。』

「すみません、片方は逃がしてしまいました。」

『ううん、ま大丈夫よ。でね、ちょっと話しを聞きたいから、そっち子達をアースラに案内してくれるかしら？』

「了解です、すぐに戻ります。」

魔法陣が消える。

さて、アースラでお話だ。こっちの都合の良い条件にできるよう交渉してみるか。

［知恵貸してよ？］

［『勿論ですとも。』］

第１９話　空気より目の前の危険（後書き）

マイトガインの玩具持ってあなぁ

最終回で泣きました

幼少の頃ですが

第２０話　ルールとは（前書き）

前回の呪文、厨二全開だった…

第２０話　ルールとは

～一兎ＳＩＤ～

現在フェイトの住むマンションにいる。
あのあと走り回りながらフェイトの転移魔法で逃げた。どうやら振り切れたらしい。

「で、時空管理局ってなんなんだ？」

一応俺はこの世界の住人だ。聞いておいた方が良いな。

「魔法関係の警察とかそうゆうの、って言えばわかるかな？」

「だいたい意味はわかった。」

これからは厳しくなるな。さっきは介入してなかったが、管理局にも転生者がいる可能性もあるし。

「一兎は管理局に投降して。これ以上迷惑をかけたくないよ。」

……は？

「向こうに顔もバレちゃったし。母さんとの仲直りとか、一兎にはもう十分助けてもらったよ。」

「今さらそれはないだろ？最後まで付き合うさ。」

「でもこのままだと一兎まで…」

まったく。

「別に悪い事してる訳じゃないんだ。だってフェイトは母親を助けるために集めてる、俺はそれを手助けしてるだけだ。」

我ながら見苦しい言い訳だな。

「だけど！」

「俺はフェイト達を助けたいからここにいるんだ。俺じゃ駄目なのか？」

「…本当に良いの？」

「フェイトのためなら地獄の底だろうと付き合うぜ。」

うわ、キザな台詞。

でも本心だ。

「一兎…ありがとう／／／」

…恥ずかしいな、笑われてるかも。失敗したな。

でもこれで管理局とも敵対する事になった。

家にはしばらく帰れないな。

今なら着替え位なら持ってこれるかな？

『…フラグ？』

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

僕達はアースラの中へ入り艦長室へと足を運んだ。

ちなみにすでになのははユーノが変身魔法を使ってるのを知ってたから特にに騒ぎはなかった。

「艦長、来てもらいました」

盆栽がいくつも置いてあり、畳がおかれその上に茶道用具一式、そしてししおどしも置いてあり和風の雰囲気…いや外国人の古い日本

のイメージを表したようだ。
そして畳の上の赤い絨毯の上で正座してる女性がいた。
「お疲れ様。どうぞどうぞ、楽にして。」
とりあえず座り自己紹介をした。
すると。
「あなた、もしかしてリリー＝キスクさんの？」
「はい、息子です。」
どうやらリンディさんはお母さんを知ってるらしい。
何かブツブツと言ってた気がするけど聞こえなかったな。
そして原作通りユーノがジュエルシードのことを話した。
「なるほど…あのロストロギア……ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね。」
「…それで、僕が回収しようと。」
「立派だわ。」
「だけど…同時に無謀でもある。」
ここまで言われると少し傷つくな。
無謀はないでしょ。

「あの…ロストロギアってなんなんですか？」

なのはがリンディさんに向かって質問した。

「まぁ、遺失世界の遺産…といっても分からないわね。」

えっと…と少し考えてからリンディさんから少し長い説明が始まった。

「次元空間の中にはいくつもの世界があるの。それぞれに生まれて育っていく世界……その中にごく稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学、進化しすぎたそれらが、自分たちの世界を滅ぼしてしまってその後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産。」

「それらを総称して、ロストロギアと呼ぶ。」

リンディさんの説明からクロノがつないだ。

「使用法は不明だが、使いようによっては世界どころか次元空間さえも滅ぼすほどの力を持つこともある、危険な技術…」

「然るべき手続きをもって、然るべき場所に保管されてなければいけない品物。あなたたちが探しているロストロギア…ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし…最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物。」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した振動と爆発、あれが次元震だよ。」

うん、あれはすごかったな。

「たった一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まって動かした時の影響は計り知れない…」

「聞いたことあります。旧暦の４６２年、次元断層が起こった時のこと…」

「あぁ、あれはひどいものだった。」

「隣接する並行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇。」

そう言って三人が顔を伏せた。

「繰り返しちゃいけないわ。」

湯呑みに角砂糖を入れる。

甘い物は好きだけど緑茶に入れるのはナンセンスだと思うな。

「これより、ロストロギア…ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「「え？」」

リンディさんの言葉になのはとユーノが驚く。

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「えっ!?でも!」

いよいよか。
ここでビシっと言ってやるぞ!

「次元干渉が関わっているんだ。民間人の出る話じゃない「と言いたい所だけど。」…母さん?」

へ?

「状況がこんな状態ですし、あの二人組に対抗できるのがクロノ一人とゆうのも不安です。それに三人ともこのまま引き下がる気はないでしょう?」

そう言って僕達に微笑む。

「ですから、回収作業を手伝ってくれませんか?」

ええ!ちょ、なんで!?
せっかく格好良くキメようと思ったのに。

…しかたないな。

「はい、是非!元はといえば僕の責任ですし。」

「私もフェイトちゃん達とちゃんとお話したいし。」

「僕もやるよ。」

『少しよろしいでしょうか？』

何を言い出すんだ封雷剣？

『局員から一般人への協力要請は基本、禁じられているのでは？』

「えっと、あなたは…」

『封雷剣といいます。以前はリリー様と管理局で働いておりました。』

「そう…リリー＝キスクの…たしかにそうですが、先程も言ったように緊急事態ですので。それにそちらから協力を申し出るように誘導するのもあまりしたくはありませんし。」

原作とは違うな。僕達の存在で変わったんだろうな。

『なるほど。』

「あの、戒君のお母さんの事ご存知なんですか？」

「僕も聞きたいです。お母さん、現役の頃の事あまり話してくれなくて…」

すっごく気になるんだよな。

「リリー＝キスク。たしか１２歳で入局し、逮捕率１００％という凄腕の局員だと僕は聞いてる。」

まじ？目茶苦茶すごいじゃん！

「ついでに逮捕者の病院送りと戦闘による器物破損も１００％なのよね…色々敵にしたくない物騒な人だったわ。」

「「「はい？」」」

［封雷剣？］

［『若さゆえの過ちですな。』］

否定しないんかい。

ん？敵にしたくない？

「あの…もしかして僕達に協力を要請したのってお母さんが…」

「イエ、カンケイアリマセンヨ。」

視線そらさないでください。

空気が重い…

「あ、あの…クロノさん一人とおっしゃっていましたが、他に魔導師はこの船にはいないんですか？」

ナイスユーノ！

「一応武装局員が数名いるよ。他にもアースラへの配属希望はいたんだけど色々と問題があってね。」

「問題ですか？」

なんだろ？

「能力はあるが性格に問題がある人が多くてね。士官学校の同期もろくなのがいなかったな。話した事もないのに僕を何故か嫌ってる人とか、逆に積極的に言い寄る人とか。」

「そういえばエイミィがクロノは同性、異性どちらにもモテモテだ、って言ってたわね。」

「思い出させないでください！ああ、鳥肌がたってきた…」

多分転生者だな。前者はクロノを蹴落とそうとしたやつ、後者はクロノに取り入ってアースラに搭乗しようとしたやつか。

そんな感じで管理局に協力する事になった。
ただ原作と違いなのはの両親、高町家には魔法の事も話す事になった。
原作より早い。

佐々木の事も話したが、すでに家にはいないらしい。多分フェイトと行動してるのだろう。

無印も半分以上過ぎた。
もうひと踏ん張りだ。

第２０話　ルールとは（後書き）

あまり原作からは外れないようにしてます

第２１話　エンカウント？（前書き）

必殺技は叫ぶのが正義

第２１話　エンカウント？

～利文ＳＩＤ～

「あ～すっきりした♪」

『…外道。』

マイトガインをフルボッコした帰り道です。
あの後泣くまでボコりました。やり過ぎた気がするけど正当防衛だよね？

『明らかにオーバーキルだ。少しは自重しろ。』

「うう…でもこれであいつは近づいてこないから良いでしょ？」

『とはいえやり過ぎだ。しかもカートリッジを４発も使うなんて…俺達は今カートリッジを補充できないんだぞ！以前の分を含めて合計５発、半分近く使ってしまったではないか！』

シータには６発入りマガジンが両腰に付いており、合計１２発のカートリッジが搭載されてる。

だが予備は無いため、ヴォルケンリッターに分けてもらわなければ補充ができないのだ。

まさか調子に乗ってこんなに使ってしまうとは…
あと一ヶ月ちょっと。なんとかして節約しなければ。

おっと、家に着いたな。

「ただいまー。」

「おかえりー。ご飯にする？お風呂にする？それともわ、た、し？」

ベタだなぁ。

「はやて、嫌じゃないんだけど反応に困るから止めて…」

「恥ずかしがりやさんやなトシ君は♪せや、さっき佐々木って子から電話が来てな、伝言頼まれとったんや。」

佐々木…一兎か。何だろう？

色々とどうでも良いような内容だったが、黒が～とか、しばらく学校を休むと言ってたし。でも放っておくのも危険だ。

しかたないな。

「シータ、封時結界頼むよ。」

『ラーサ。』

結界に入りテッククリスタルを手元に召喚する。
いくぞ！

「テックセッター！」

紅い光に包まれテッカマンへとテックセットする。

「テッカマンランス！」

結界内を飛んでると…いた。

『蜘蛛…だな。』

多分蜘蛛を取り込んでるのだろう、３m位の巨大な蜘蛛がいた。

うわ～気色悪い。

「さっさと片付けよう。テックランサー。」

ランサーを構え蜘蛛に向かって飛ぶ。

蜘蛛は尻部から糸を飛ばしてくる。だけど遅い。

連続で飛んでくる糸を避け近づく。そしてランサーの柄で思いっ切り殴り、空中へ打ち上げる。

「クラッシュイントルード！」

そのまま追撃。
このまま封印させてもらう。

「は！」

最後にランサーで地面に叩き付ける。

「とどめだ。シータ、この前習得したあれでいくぞ！」

『いや、あれは失敗じゃないのか？』

「クリムゾンスマッシュにはできなかったけど、これは別の技として使うから良いの。いくぞ！」

僕は空へ飛び上がり構える。

「究極ぅ！」

さらに右足に魔力を込め一気に蹴り抜く。

「ゲシュペンストキィィィック！！」

『ただの飛び蹴りだろ…』

やかましい！これで良いんだよ！

蜘蛛に命中し、勢いで地面を引きずり回す。
ズガガガガガ！

『ジュエルシード、シリアルＩＸ。』

「封印！」

封印が終わると小さな蜘蛛がその場から立ち去った。

そういえばこれ、どうしよう…
どこか人の少ない場所に捨てくるかな。

『魔力反応４つ。近づいてくるぞ！』

嘘！？

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

アースラに来てナンバーＶ？のジュエルシードを回収した。

ここは原作でも見た所だな。

今はアースラで待機中。なのはとユーノの三人でだべってる。以外と暇だな。

「佐々木君、フェイトちゃんと一緒にいるんだよね？」

「そうだろうね。家にもいなかったし。」

「彼の両親も心配してるだろうね。」

いきなりの家出、さらに魔法ときたもんだ。佐々木家はかなり混乱してるだろうな。

『三人とも、すぐに出撃準備てくれ。封時結界を感知した。』

「結界？もしかして。」

「佐々木君とフェイトちゃんだ！」

「よし、いそごう！」

『今回は僕も出る。結界の近くに転送するから急いでくれ。』

僕達はすぐに部屋から出ていった。

そして結界内。
そこにいたのは佐々木とフェイトではなかった。

ベージュ色の装甲に槍。
こいつってたしかテッカマンランス？

とゆう事はこいつも転生者か。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。君は何者だ？」

「名はテッカマンランスだ執務官。私に何か用かな？」

ランスは槍を消しこちらを向く。

「そのジュエルシードを渡してもらいたい。そして君がなぜそれを持っているか話してもらう。」

ちょっと強引かな。堅いな頭。

「そこの君、ちょっと武器をしまってくれないかな？ついでになのはにも頼んでほしい。」

なんだいきなり。

「なぜだい？ランス。」

［クロノをいじるためだよ。カイ。］

…ま、良いか。

［なのは、レイジングハートを待機状態にして。］

［ふぇ？なんで？］

［いいから。］

僕達はデバイスをしまう。

クロノは僕達の行動に気づいてないようだ。

「いきなり武器を突き付け脅す連中の言う事を聞くと思うのか？」

「脅すだと？これは警告だ。」

「警告か。後ろの三人はまともだが、君は横暴で非常識な男のようだな。」

「後ろの？」

クロノが振り向く。

僕はとりあえず笑っておいた。

なのはとユーノも苦笑いしてる。

「……何をしてるんだ君達は？」

「いや、いきなり武器を持ってちゃ脅してるようだし…」

「私は戒君に言われて…」

「僕は元々デバイスありませんし…」

なるほど。

［こういう事か。］

［うん、平和的にすませたいしね。］

［…その言葉遣いはなんなの？］

［念話の方が地だから。］

わざとなんだ。

「で？君は？私も見てのとうり丸腰なんだが。」

「……」

返す言葉もないか…どう見てもクロノが脅してるみたいな構図だしね。

『クロノ、とりあえずＳ２Ｕをしまいましょ。』

「母さ…艦長、しかし。」

『しかたないわ。とにかくお話を聞きたいからアースラに来てもらいましょ。』

「断る。」

『…何故ですか?』

「質問で反すようですまないが、何故私がそちらの指定した場所へ行かなければならないのだ?話しならばここでできるだろう?」

『こちらにも事情聴取というものがありまして。来ていただけませんか?』

来ないだろうな。でもジュエルシードだけでも渡してもらいたいし。

「はぁ…私は先程妙な力を感知した。そうしたら巨大な蜘蛛がいてね。」

「蜘蛛!?」

なのはは嫌だろうな。

…僕も嫌だな。相手したくない。

「このまま放っておくのも危険と判断し蜘蛛を退治したのだ。そして残ったこの石をどうしようか迷っていた所に君達が表れたのだ。これで全て話したぞ。」

『事情はわかりました。ではその石、ジュエルシードをこちらに渡していただけませんか?それは大変危険な物なのです。』

「良いだろう。執務官、受け取れ。」

クロノに向かって投げる。
クロノは受け取りなのはに渡す。

「レイジングハート、頼む。」

『了解しました。』

ジュエルシードがレイジングハートの中に入る。
これで二つ目。

「あの、もしかして町に大きな木が出たとき皆を助けていた怪人ってあなたですか？」

槍を持った怪人だっけ？たしかにこいつかも。

「ん？ああ、そうだ。」

「やっぱり！」

「ならばその件についても話しがしたい。アースラまで同行してもらえないか？どうやら君は町を守るために行動してるようだ。そういう事なら悪いようにはしない。」

原作介入したいならここでついて来るはずだ。

［君は佐々木の知り合いなんだろ？原作介入するなら今がチャンスだ。］

［今はまだ介入したくないからね、帰るよ。一兎によろしくね。］

今は？

「すまないが帰らせてもらう。さらば！」

転移魔法だ。
逃げられたか。

「エイミィ、追跡は？」

『ちょっと待って…え！？テッカマンって人の転移先、宇宙空間だよ！』

そういえばテッカマンって単体で宇宙空間で活動できるんだっけ。

「馬鹿な！宇宙空間だなんて死ぬぞ？」

「単体で宇宙に！？ありえないよ…」

もし一緒に転移させられたら即死だな。
あれ、強すぎじゃない？あいつ。

クロノ達は騒いでるし、なのはは呆然としてるし、ユーノも何かブツブツ言ってるし。今日はここまでだな。

テッカマンランス。きっとまた会うだろう。
今はって事はいずれ介入してくるはずだ。
敵になっても多分大丈夫だろう。かませ犬で有名だし。

帰ろ。

第２１話　エンカウント？（後書き）

今回目茶苦茶な気がする

第２２話　最後の六つ（前書き）

以外とペースが落ちない

第２２話　最後の六つ

～一兎ＳＩＤ～

家出をしてから１０日程過ぎた。あれから管理局に見つからないようにジュエルシードを探してる。

見つけたのは原作通り？とＶの二つ。原作でむこうが回収したＸ？は、俺がフェイトと会った時に見つけたからむこうも多分二つ。これで俺達は７個、主人公組は８個だ。

あと残りの６個は海にあるのだろう。

原作ではフエイトが見つけたのだろうが俺から話してみるか。

そういえば家族はどうなってるんだろう？

終わったら謝らなきゃな。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

テッカマンと会ってからジュエルシードは見つかってない。
原作より一つたりない。向こうが回収したのだろう。

とりあえず海の６個が見つかるまで待とう。多分二人が先に見つけるだろうし。

「そういえば戒、君は母から魔法を習ったんだよな？」

クロノから話しかけるなんて珍しいな。

「うん、デバイスもお下がりだし。クロノとユーノは学校だっけ？」

「そうだよ。一応卒業してるんだ。」

「僕は士官学校だ。エイミィとも同期でね。」

「じゃあちゃんと勉強してないの私だけなの？」

「私としては習った訳でもないのに軽々と魔法を使ってるなのはちゃんが信じられないんだけど…」

たしかに。以外と魔法って難しいしね。

「優秀な子ばかりで将来が楽しみね♪」

いやぁ、それほどでも。

そういえばお母さんには管理局に入るように言われたな。勿論入るけど将来どうしよう…近いうちに考えとこう。

「見つけたっ！」

「何だって！？」

海のやつか！

「沿岸部の海中に、６つ。これで全部だね。でも、この魔力反応は…」

モニター画面の中で二人が海で巨大な嵐の中を戦っている姿だった。

「何とも呆れた無茶をする娘だわ…」

「無謀ですね…間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を超えている。」

「僕達も早く現場に行かなきゃ！」

「放っておけば、あの子は自滅する。仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けば良い…」

「そんな…フェイトちゃん…」

「気持ちはわかるけど、私たちは常に最善の選択をしないといけないの。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実。」

たしかにこれが組織だ。

でも僕はこのまま傍観するつもりはない。

［ユーノ、ゲート開ける？］

［そうだ！ユーノ君お願い！］

［うん、二人とも頼んだよ！］

ユーノが転送魔法の準備をし僕達が転送ポートに走る。

「ちょっとあなた達！？」

「ごめんなさい！命令違反なのはわかってますが僕達にはできません！」

止めても無駄だよ。

「わかった…執務官権限において魔導師３名、ジュエルシードの封印、及び回収を命じる！」

「クロノ！？」

クロノが、声を上げた。

「やはり無視できません。このままでは彼女の命が危ない。責任は僕が！」

あんた漢だよ、ＫＹじゃなかったんだね！

「わかったわ…好きにしなさい。そのかわり、彼女もちゃんと助けるのよ。」

リンディさんは苦笑する。

「転送！」

クロノがゲートに駆け込むとユーノがゲートの転移魔法を起動させた。

眼下に広がる青い空、白い雲。

やっぱり空の上か！

でもセットアップする時間があるから良いか。

「レイジングハート！」

「封雷剣！」

「「セーット、アップ！」」

『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ.』』

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

荒れ狂う嵐の中フェイトと二人必死になって飛び回る。

ジュエルシードを発動させたは良いが空戦の苦手な俺と魔力の尽きかけてるフェイトでは辛い。

竜巻と雷が俺達を襲う。

「くそ…フェイト、大丈夫か！？」

「うん。でもちょっと苦しいかも…ううん、弱音を吐いちゃいけない。母さんはもっと苦しんでるんだから！」

原作と違いフェイトの消耗は小さい。だがこの状況はまずい。

あいつらは来ないのか？

「フェイトちゃん、佐々木君！」

来たか！

「！」

フェイトが身構える。

「落ち着け、僕達は君達に危害を加えに来たんじゃない。」

は？クロノ？何故？

「今はジュエルシードの封印が大事だ！」

戒も現れる。

「まずはジュエルシードを停止させないとまずい事になる。」

ユーノがバインドを放つ。

「手伝って！ジュエルシードを止めよう！」

フェイトになのはから魔力供給がされる。

『Ｐｏｗｅｒ　ｃｈａｒｇｅ．』

『Ｓｕｐｐｌｙｉｎｇ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ．』

「二人できっちら半分こ。」

バルディッシュの魔力刃に光が戻る。

これならいける！

「フェイト、今回もとりあえず協力し合おう。流石に二人で６個は無茶だ。」

「うん。」

よし、もうひと踏ん張りだ。

「ユーノが止めてくれてる。今のうちに全員で一気に封印する！」

「了解！行くぞ封雷剣！」

「お願い、レイジングハート！」

「１２０口径アンフォーギヴン・バリスタ！」

「バルディッシュ！」

全員が武器を構える。

「せーの！」

なのはの掛け声で一斉に放つ。

「ブレイズカノン！」

「セイクリッドエッジ！」

「フロイトバスター！」

「サンダーレイジ！」

ドオォォォォン！！！

目の前に6個のジュエルシードが浮かぶ。

なんかすごいな。

「友達に…なりたいんだ。フェイトちゃんとも、佐々木君とも。」

「ずっとクラスメートだったしね。僕もなのはと同じ気持ちだ。」

こうもストレートに言われると照れるな。

「……ありがとう。でもジュエルシードが関わるなら、あなた達とは友達になれない。これは母さんを助けるのに必要だから！絶対に渡せない！」

フェイトがバルディッシュを振るう。

魔力刃がなのはを襲うが、戒がなのはとの間に割り込み防ぐ。

「母さんを助けるって…どういう事なんだ？話しを聞かせてくれ！」

プレシアさんを助けるのに必死になって周りが見えてないのか？

ある意味原作よりまずいんじゃ…

「く…一兎！ジュエルシードを！」

ち！余計な事を考えてる場合じゃないか。

ジュエルシードに飛びつく。

「させるか！」

クロノか？邪魔だ！

「退けぇ！」

力任せにバリスタで薙ぎ払う。

「うわぁぁぁ！」

クロノは海に叩き付けられる。

よし。

！

ジュエルシードが三つ？まさか！

見るとクロノの左手には三つのジュエルシードがある。

やられた！

ビシャアァァァァァン！

今度はなんだ？

空から紫電がなのはと戒に迫る。

「うわぁぁぁぁ！」

「キャァァァァ！」

「なのは！戒！」

「まずい。ユーノ、二人を！」

プレシアさん？なんで？

「フェイト、一兎！逃げるよ！」

アルフまで？いつのまに。

「一兎！逃げよう！」

考えてもしかたない。多分プレシアさんの指示で来たんだろう。

「転移するよ。しっかり捕まって！」

俺達はアルフに連れられ離脱した。
そして連続転移をした先は時の庭園だった。

第２２話　最後の六つ（後書き）

フェイトは大切な人のためなら暴走するタイプだと思います

第２３話　プレシア・テスタロッサ（前書き）

鈍感て難しい

第２３話　プレシア・テスタロッサ

～一兎ＳＩＤ～

時の庭園、プレシアさんの私室に案内された。
部屋には丸められた紙や本が床に散らばっている。ベットには机が取り付けられその上には本が積まれ、読めないが文字や図面、計算式のようなものが書かれた紙が置いてある。

「プレシア、連れてきたよ。」

「ありがと。」

ベットに横たわるプレシアさんは以前よりやつれたような気がするが、アルフの看護のおかげか顔色は前よりかはましだ。

だが先程の魔法が堪えたのだろう酷く疲れたような顔をしている。

「母さん、なんで次元跳躍魔法なんて使ったの？あんな魔法使ったら身体が…」

「フェイト、あの二対一の状況で逃げれたの？一兎は黒い魔導師の相手とジュエルシードの回収をしてたし。」

「はい…」

「それだけじゃないわ。白い魔導師二人を攻撃したのも間違いよ。余計な戦闘をせず、すぐにジュエルシードを回収して離脱するべき

だったわ。」

「ごめんなさい…」

すっかり落ち込んでしまったな。

「まあまあ、フェイトも反省してるし。あたしが助けに行けたから良いじゃないか。」

「ありがとな、アルフ。」

「ありがとう。」

「いいって♪」

本当優秀だな、アルフは。

「ところで、時空管理局はいつから現れたのかしら?」

「この前母さんに報告にいった日の夕方だから…」

「だいたい十日前ですね。」

「げ…あの後すぐに出たのかい?」

「そう…一兎は大丈夫なの?ご両親には話したのかしら?」

「話してませんし、家出してきました。顔もバレちゃって。」

驚いてるな。

正体がバレなければ家出しなかっただろうけど…いや、どの道バレただろうからこれで良いか。

「ごめんなさいね、あなたまで巻き込んじゃって。」

「俺は自分の意思でやってますから。フェイトを手伝いたくてここにいますし、プレシアさんも助けたいと思ってます。だから後悔なんてしてません。」

「へぇ。」

「一兎…／／／」

「あらあら。……フェイトも気に入ってるようだし、才能もあるし…うん…合格ね。（ブツブツ）」

?、何か言ったかな?

「ねぇ一兎、うちに婿入りしない?」

は?

「そりゃ良い♪」

「母さん!?アルフ!?え…たしかに…その…母さんの言う通り、良いなって思うけど…でも私なんかで…あ…うん。が、頑張るよ母さん。（ボソボソ）」

何言ってるんだこの人は。フェイトだって困ってるだろ。

「あの、なんかフェイトも困ってますし…そういう冗談は…」

……

あれ？なんで皆ため息ついてんの？

「…フェイト、頑張んなよ。」

「大丈夫よ、私も経験したから。」

「ありがと…」

『知～らない。』

解せぬ。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

現在アースラの会議室。僕となのは、ユーノ、リンディさん、クロノ、エイミィさんが席に着いてる。

前回の件については原作と違いクロノの指示だったので当然何のお咎めも無い。

今後の事について話し合うためだ。

「さて、問題はこれからね。クロノ、事件の大本について何か心当たりが？」

「はい。エイミィ、モニターに。」

クロノが立つ。

「はいは～い。」

テーブルの中央に球状の立体映像が現れ、その中に黒衣の女性が映されていた。

「あら！」

「そう。僕らと同じ、ミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テスタロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法な研究と事故によって放逐された人物です。登録データとさっきの魔力反応も一致しています。そして、あの少女、フェイトはおそらく…」

「フェイトちゃんが言ってた母さんって。」

「親子…ね。」

「そういえばフェイトは母さんを助けるために必要だって言ってたな。」

「うん。それにフェイトちゃん、初めて会った頃となんか違う気がするの。前は少し寂しそうな目をしてたのに、この前は違ってた…」

「たしかに。なのは達に襲いかかってきた時の彼女…すごい必死だった。」

多分佐々木がプレシアを説得したのだろう。
助けるのと言ってたのはアリシアの蘇生かプレシアの治療かはわからない。いや、後者の可能性の方が高い。
アリシアについては何か蘇生させる手段を持っていたのかもしれない。

どっちにしろよかった。
これなら最悪の結果にはならないだろう。

「エイミィ!プレシア女史についてもう少し詳しいデータ出せる?放逐後の足取り、家族関係、その他何でも!」

「はいはい。すぐ探します。」

「とりあえず、一旦なのはさんと戒君、ユーノ君は休憩を取ってもらっていいわ。ただ、データが出次第、また呼び出すからそのつもりはしておいてね。」

「「「わかりました。」」」

「ねえ、フェイトちゃんなんで変わっちゃったんだろ？前はあんなふうに襲いかかってはこなかったのに…」

アースラの食堂で休憩してた所、なのはが話しかけてきた。

「お母さんを助けるってのが関係してると思うな。ただそれだけじゃないような気がするけど。」

「僕もそう思う。今までジュエルシードを集めてたのもきっと彼女のお母さんの指示だ。ただ最近になって集める理由を知ったんだと思う。」

理由か…蘇生か治療か。

「うん、戒の言う通りかもしれないね。理由の内容がフェイトの母親にとってとても重要な事なんだよ。」

「じゃあ、フェイトちゃんはその理由でやる気が出てあんな事を？」

「あくまで予想だけどね。」

まさかアルハザードを目指してるのかな？

フェイト達がそれに賛成してるなら大問題だぞ。

それにプレシアが本当に改心したかもわからないし。

『やっほー。三人とも、ちょっと会議室に来て。プレシア・テスタロッサについてわかった事を話すから。』

「「「はーい。」」」

早いな。

「…プレシア・テスタロッサ。ミッドの歴史で二十六年前は、中央技術開発局の第三局長でしたが……当時彼女が個人で開発していた、次元航行エネルギー駆動炉【ヒュードラ】使用の際、違法な材料で実験を行い失敗…結果的に中規模次元震を起こした事が原因で、中央を追われ地方へと異動になりました。随分揉めたみたいです…失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性は無かったと、辺境に異動後も、数年間は技術開発に携わっていました。しばらくの後行方不明になって、それっきりですね。」

「家族と、行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは綺麗サッパリ抹消されちゃってます。今、本局に問い合わせて調べてもらっていますので…」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には、と。」

抹消か。実験の失敗の原因は管理局だっていう意見もあるからな。きっとそうだ、全部なんてのは簡単にできない。

管理局の闇か…そういうのを嫌ってスカリエッティに付く転生者もいるだろう。

僕も許せない、だから内側から変える。佐々木も協力してくれるはずだ。

「…プレシア女史もフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した直後では早々動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…あなた達は、一休みしておいたほうがいいわね。」

リンディさんが立ち上がる。

「あ、でも…」

「特に戒君となのはさんは、あまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょう。一時、帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ。」

「……はい」

「そうですね。」

たしかこの帰宅でアルフが見つかるんだっけ。
でもフェイトの様子から起こる可能性は低い。
あくまで可能性の話しだけど。

アルフが見つかれば佐々木も一緒かもしれない。
とにかくこの帰宅で少しはわかるかな。
見つからなければ原作より長引きそうだな。

第２３話　プレシア・テスタロッサ（後書き）

一兎のは特性ではありません

第２４話　決闘と決着（前書き）

そろそろ無印終わりです

第２４話　決闘と決着

～戒ＳＩＤ～

「やっぱりなのはちゃんは防御を固めるのが先ね。そんで誘導弾でバインドに追い込む。フェイトちゃんって子は紙っぽいからなのはちゃんの全力は耐えられないでしょう、掛かったら直ぐさま砲撃の用意、逃げられない絶望を味あわせつつ消し飛ばしなさい。」

「ふむふむ。」

「……」

「妥当かな。」

実際固定してドカン、てのは原作でやってたし。

「佐々木って子は封雷剣の映像を見る限りなのはちゃん一人では難しいわね。戒とユーノの三人掛かりで潰しなさい。」

僕一人でも苦戦するしね。

「戒となのはちゃんで足止め、そのスキにユーノのバインドで捕まえて、あとは二人で泣くまで叩けば良いわ。二人掛かりだったら、分散させてなのはちゃんとユーノでフェイトちゃんを速攻で捻りなさい。あとはさっき言った通りよ。」

「ね、お母さんに相談して正解だったでしょ？」

「うん♪ありがとうございます、お…お母様／／／」

「いや、二人とも何納得してるの！」

「ごめんね～私ベルカ式だから荒いのよ。」

「荒すぎですって！「ああん？」ヒィ！？ごめんなさい何でもないです！」

なのはがフェイトに勝ちたいって言うからお母さんに相談したんだ。

いやはや流石お母さんだね。

『何か違うような…』

？

ま、良いや。

そういえばすずかやアリサに聞いた所アルフらしき狼は拾ってないらしい。

長引きそうだな。

その日の夜。

［高町なのは、戒＝キスク＝木崎、ユーノ・スクライア、聞こえて

ますか？」

フォイト？

「フェイトちゃん！？」

「僕のように無差に念話を飛ばしたのか。」

「よかった…今日はあなた達に話しがある。明日の朝、私とお互いのジュエルシードを賭けて一対一の勝負をしてほしい。」

フェイトから勝負を持ち掛けるのか？

「そんなの受ける訳無いじ「いいよ。」なのは？」

「僕も賛成だ。この方が手っ取り早くてわかりやすい。」

アルフが居ない以上、このままだと進展しないからね。

「二人とも…しかたないな、良いよ。」

「で、どっちが相手すれば良いのかな？」

「私はどちらでも構わない。場所もそちらに従う。」

「戒君、私がやっても良いかな？」

「無茶だ。戒が相手をした方が良いよ。」

「ごめん、ユーノ君。でも私、もう一度フェイトちゃんとお話しし

たいの。」

Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩですね、わかります。
っと、ふざけてる場合じゃなかった。

「…了解。なのはに任せるよ。」

「場所は？」

「海鳴臨海公園で。」

「わかった。じゃあまた明日…」

念話が切れる。

決闘か。おそらくフェイトは原作と違い、あまり消耗はしていないだろう。
なのはの勝率は低い。

「二人とも、一応リンディさんに話しておいた方が良いんじゃないかな？」

「え…でも。」

「ユーノの言う通りだ。話す位はしておいた方が良い。」

原作ではこの決闘で時の庭園の場所を見つけたし。

「…うん。」

明日か…なのは大丈夫かなあ？

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

あれから俺達はマンションに戻らず時の庭園で寝泊まりしてる。
残りのジュエルシードは管理局にあるからな。だから今は今後の事についてプレシアさんからの指示を待ってる。

「一兎、ちょうどよかった。今呼びに行くとこだったんだよ。」

「アルフ。もしかしてこれからどうするか決まったの？」

「ああ…まあね…」

どうしたんだ？なんか暗いな。

「何かあったのか？」

「…管理局に投降する事にしたらしい。」

な…なんだって？

「おい！どういう事だよ！」

思わずアルフに掴みかかる。

「まだ治療法が見つかってないし、時間がない。今の状態じゃ無理なんだ。」

「助からないのかよ！」

冗談じゃねぇぞ！

「違う！今はとにかく養生して体力に回復しようって事になったんだ。悔しいけど、管理局に投降して病院に入った方がプレシアには良いし時間も稼げる。少なくとも病人に手荒なまねはしないだろうしね。」

「そうやって時間を稼ぎつつ治療法を探すって訳か。」

「そうさ。」

たしかにこんな簡単に治療できたらここまで悪くはならなかっただろう。

「しかたないか…」

「すまないね、今まで散々世話になってたのに…そうだ、フェイト

を見なかったかい？さっきから探してるんだけど。」

そういえば見かけないな。

…まてよ、たしかそろそろなのはと…まさか！

「アルフ！急いで探すぞ、嫌な予感がする！」

頼む、外れてくれ！

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

海鳴臨海公園。

なのはとフェイトの決闘が始まった。

［良いか戒、ユーノ。佐々木一兎と使い魔のアルフがいないとゆうのはあまりにも不自然だ。特に決着が着いた時は気おつけてくれ。］

［わかった。］

［うん。］

フェイトは何故か一人で現れた。たしかに一対一の決闘だけど妙だ。
何故一人で来た？
一人では負けてしまえば逃げる事もできないのに。

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ．』

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「ファイア！」

「シュート！」

二人が魔力弾を撃ち合うがなのはは回避しフェイトは切り払う。
そのままなのはに切りかかるが、シールドに防がれ魔力弾の一発がフェイトの背後から迫る。
間一髪で防ぐがなのはを見失う。

上だ。

上からなのはが突撃してくる。

バルディッシュで防ぐと爆発が起きた。

今のとこは佐々木とアルフの気配は無い。

「戒、なのはは大丈夫かな？」

「信じるしかないよ、僕達にはね。」

実際かなり心配だ。

「でもなのはも強くなったね。初めてフェイトと戦った頃だとすぐに負けてしまったのに。」

「うん、僕みたいにお母さんにしごかれた訳でもないのに。実戦と僕との模擬戦だけであんなになるなんて。」

アースラに居た時、僕はなのはと訓練室を借りて特訓をしてた。
一応僕の方が強いけど、なのはの成長スピードは凄まじい。
これが白い魔王か…

なんだ？すごい魔力だ。

『Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ．』

フェイトの周りに大量の魔力スフィアが浮かんでる。

まずい、しかもなのははバインドに捕まってる！

「「なのは！」」

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

まてまて！

「フォトンランサー・ファランクスシフト！撃ち砕け、ファイア！」

大量の魔力弾がなのはに向かって放たれ、次々と命中し爆煙が巻き上がる。

あんなのくらって大丈夫なのか？

なのはは無事なのか？

さらにフェイトは左腕を掲げ、残った魔力弾を集める。

煙りが晴れだしなのはの姿が見え始めた。

無事だ。所々バリアジャケットが焦げてるが耐えられたみたいだ。

「撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね。今度はこっちの…」

レイジングハートを構える。

『Ｄｉｖｉｎｅ…』

「番だよ！」

『Ｂｕｓｔｅｒ．』

桃色の砲撃が放たれる。

フェイトは左手に集めた魔力弾を投げるがディバインバスターに掻き消される。

そのままフェイトに命中するがシールドに防がれる。

まだ余裕がありそうだ。

だけどもう終わるな。

「受けてみて…ディバインバスターのバリエーション！」

なのはの正面に大きな魔法陣が展開されていく。

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．』

周囲に四散した魔力が集まる。

「っ？バインド！」

フェイトは反撃しようとするがバインドに捕まり動けない。

「これが私の全力全開！スターライト…ブレイカァァァァ！！！」

なのはが膨大な極太の桃色の魔力砲撃を放ちフェイトに直撃する。

ドオォォォォォン！！！

勝ったな。

そのまま砲撃は生みまで到達し巨大な水柱を作る。

「ハァ…ハァ…」

流石に堪えたのかなのはは肩で息をしてる。

そうだ、フェイトは…え？

そこにはボロボロになりながらもバルディッシュを握るフェイトがいた。

「馬鹿な！今の砲撃を耐えるなんて！」

「直撃したのに、嘘でしょ？」

有り得ない…

「……母さんの…病気を…治すんだ…」

病気？

プレシアの治療の為に集めてたのか！

だからあんなに必死に…

「まさか彼女、気合いだけで耐えたのか？」

「信じられないけど、そう思うね。」

「そして…母さんと…一兎と…アルフと…皆で…」

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ．』

バルディッシュに再び魔力刃が形成される。

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

叫びながらなのはに切りかかる。

まずい、今のなのはには防ぐ魔力も回避する体力もない。

突如なのはの前に橙色の魔法陣が展開される。

「トラウマ・シェル全開！」

そこから一兎が出てきてフェイトの攻撃を防ぐ。

「え…一兎？…なんで？」

フェイトは知らない？何が起きてるんだ？

『そこまでよ、フェイト。』

「母さん！？」

さらに紫色の魔法陣が展開される。
プレシア・テスタロッサが写ってた。

『フェイト、もう良いの…ジュエルシードを集めなくても。』

「え?え?どうして!」

『詳しい事は後で説明するわ。…そこのあなた、ごめんなさい、決闘なんかになってしまって…』

「い、いえ!むしろ私の方がフェイトちゃんに痛い思いさせちゃった気が…」

『そう…時空管理局、見ているかしら?』

『ええ。』

リンディさんだ。

『リンディ・ハラオウン…』

『大魔導師とも呼ばれた貴女に名前を覚えていただけて光栄に存じます。』

『まあ良いわ。私は今回の事件の主犯として管理局に自首、投降します。娘のフェイトと使い魔のアルフ、フェイトの友人の佐々木一兎には私が指示を出しジュエルシードを回収させてました。全ての責任は私にあり、この子達には何の罪もありません。どうか、お願いします。』

プレシアが頭をさげる。

『わかりました。すぐに彼女達を保護します。』

『ありがとうございます。こちらの座標は佐々木一兎君に聞いて下さい。でわ…』

魔法陣が消える。

「そんな…」

フェイトは力尽きたのか倒れそうになったが、佐々木に支えられる。

終わったのか？

こんな呆気なく？

僕らは急な展開に付いていけず、ただ呆然としていた。

第２４話　決闘と決着（後書き）

時の庭園での決戦はありません

第２５話　名前を呼ぼう（前書き）

一兎「無印完結。」

戒「ねえ、一兎が主人公でよくない？」

利文「異議あり！僕の出番はこれからだ！」

第２５話　名前を呼ぼう

～戒ＳＩＤ～

プレシアの通信の後、クロノが現れ二人を連れていった。

これで無印は終わりだ。

プレシアの投降も佐々木の介入のおかげだな。

実を言うと傀儡兵と戦ってみたかったんだけどな。…いや、不謹慎だな。

次元震も起きなかったし、これで良かったんだ。

しかしオリ主になると意気込んでたのに何もやってないな。……

……Ａ's で頑張ろう。

時の庭園からアースラに連行されたプレシアは、車椅子をアルフに押してもらいながら現れた。

あんなに仲良さそうなのは意外だ。やっぱりフェイトの事、全部知ってるのかな？

今度佐々木に聞いてみよう。

「ありがとう、二人とも。」

ユーノが頭を下げる。

「気にしなくて良いのに。」

「そうだよ、私もやりたくてやってたんだし。」

「でも…」

まったく…子供らしくないな。人の事言えないけど。

「あのね、僕はユーノが断っても手伝ってた。将来管理局に入るつもりだったし、町を守りたかったしね。だからお礼なんていらないよ。」

「私もユーノ君のおかげで魔法に出会えたし。」

「戒…なのは…うん、でもお礼だけは言わせてほしい。本当にありがとう。」

「やれやれ…どういたしまして。」

「どういたしまして♪」

「「「アハハハハハハ！」」」

自然と笑みがこぼれる。

「よかった、皆そろってるようだな。」

クロノが食堂に入ってきた。

「あ、クロノ君。そうだ！フェイトちゃんと佐々木君は？」

「事情徴収は終わったらしいけど、二人はどうなるの？それに今回の事件についても色々知りたいし。」

悪い扱いにはならないだろうけど気になる。

「その件について説明しに来たんだ。まずプレシア・テスタロッサの話しによると、ジュエルシードを集めてたのはプレシアの病気の治療が目的だったらしい。」

「病気？」

「そういえばフェイトちゃんがそんな事言ってたの。」

「専門的な事は僕にはわからないが、そうとう酷い状態らしい。」

「そんな…」

「だからフェイトはあんな事を…」

「フェイトちゃんとアルフさんがジュエルシードを集めて、その間にプレシアさんが治療法を探すって予定だったんだ。」

「そういう事だ。だが、結局治療法は見つからず時間もない。よってジュエルシードの収集を止め、管理局に投降したんだ。少なくと

も病院への入院はできるしね。」

「そうか…」

じゃあアリシアはどうしたんだ?

「佐々木って子は?」

「どうやら偶然ジュエルシードを拾い、フェイトと遭遇。ジュエルシードが危険な物だと聞いて回収を手伝う事になったらしい。彼も事情は知らされてたそうだ。」

そしてこうなったのは佐々木のおかげだ。

比較的平穏に終わったしね。

「そうだったの…」

「あの、三人はこれからどうなるの?」

「僕も気になる。佐々木はクラスメートだし、聞く限りじゃ皆悪い人には思えない。」

クロノは少し微笑むと。

「大丈夫、彼女達はあくまで医療行為が目的だった。被害もジュエルシードによるものばかりだし、せいぜいロストロギアの違法所持と公務執行妨害が主な罪状だ。」

よかった。

「あとは偉い人達にその辺りの事実を理解させるかだが、ちょっと自信はある。リンディ艦長もそうだけど、僕らの上司も理解してくれるはずだ。心配しなくて良い。」

「クロノ君…」

「クロノ…」

今すっごくかっこ良いよ。

「フェイトも母親を助けたいがために行動していたし、佐々木一兎も似たようなものだしね。娘を独りにしないよう病と戦い懸命に生きようとする人を、そして人の命を助けるために一生懸命だった子を罪に問うほど、時空管理局は冷徹な集団じゃないよ。」

「クロノ、ありがとう。」

感謝するしかないな。

「し、執務官として当然の発言だ！私情は別に入ってない！」

照れちゃって。

「別に照れなくて良いのに♪」

「いやぁ、クロノの意外な一面が明らかに。」

「エイミィさんが見たら何を言うことやら。」

「三人とも、年上をからかうなぁぁぁ！」

そして僕達は日常へと帰った。

それから数日後。
プレシア…さんの状況や管理外世界の住人だとゆう事もあって佐々木の裁判はすぐに終わり、今日帰ってくる。そのついでにフェイト達と面会ができるようだ。

僕は、なのは、ユーノ、佐々木の両親と海鳴臨海公園へと足を運んだ。

佐々木の両親はプレシアさんに呼ぶよう頼まれた。
たしかに人様の息子を事件に巻き込んでしまったのだ。きちんと謝罪したいのだろう。

そして静かに波の音が耳に響く中、公園にはフェイト、佐々木、クロノ、アルフ、プレシアさんがいた。

「あんまり時間は無いんだがしばらく話すと良い。佐々木さん達は

こちらに。」

クロノはプレシアさんとアルフ、ユーノ、佐々木の両親を連れて離れる。

なのはがほほ笑むとフェイトは複雑そうな顔をする。

「フェイトちゃん。」

なのはから話しかける。

「クロノ君から聞いたよ。お母さんの為だったんだね。」

「…ごめん。友達になりたいって言ってたのに…あんな事して…」

「ううん、気にしないで。だってフェイトちゃんは何も悪い事してないもん。」

「高町もこう言ってるんだし。な?」

そう言いながら佐々木はフェイトの頭を撫でる。

顔、赤いくない?

いつの間にフラグ立てたんだ…

「お友達になりたいって思ってた。でも…悲しいけど、これからでかけちゃうんだよね?」

なのはが悲しそうに言う。

「そうだね、少しだけ…。」

「プレシアさんがあんな状態だからな。今日これたのもかなり無茶言ったんだ。」

「なるほどね。」

そういえばアリシアの事とかは僕らは聞かされてない。

「ねえ、アリシアはどうなるんだ？」

佐々木に念話をかける。

「一段落ついたら埋葬する。蘇生しようとしてた事については、事態がややこしくなるからかリンディさん達は黙っていてくれるらしい。」

事件はクロノが教えくれた通りに処理するのか。

てかアリシア蘇生しないんだ…ちょっと残念。

「だからフェイトの事を知らないのはお前達…いや、なのはとユーノだけだよ。」

プレシアさんの暴露がなかったからな。いずれは話すだろうけど。

元々子供に話すような内容じゃないしね。

「後、来てもらったのは…返事をするため。」

フェイトが視線をそらしながら俯いて呟いた。

「そういや、そうだったな。」

「え？」

「君達が言った言葉。友達になりたいって。」

海上で話した事だ。

「あ…うん、うん！」

「返事、聞かせてくれるんだ。」

なのはも嬉しそうだ。

「私にできるなら…私でいいならって。一兎は…一兎から友達になってくれた。だけど…どうしたら自分から友達になれるのかかわからない。だから、教えてほしいんだ…どうしたら友達になれるのか。」

「そんなの簡単だ。ね、なのは。」

「うん！友達になる方法、すごく簡単。名前を呼んで。初めはそれだけでいい。ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶの。私は高町なのは…なのはだよ。」

「なのは…」

フェイトがつぶやく。

「僕は、戒＝キスク＝木崎。戒だ。」

「戒…」

「そう！」

なのはがフェイトの手を握る。

「ほら、佐々…一兎も！」

そう言いながら一兎と肩を組む。

「あ…えと…戒、なのは…で良いんだよな？」

恥ずかしがっちゃって。

「うん！」

なのはが涙ぐむ。

「少しわかったことがある。友達が悲しいと…同じように、自分も悲しいんだ。」

「っ…フェイトちゃん！」

なのはが泣きながらフェイトに抱きついた。

フェイトも目に涙を浮かべる。

「…ありがとう、なのは。今は離れてしまうけど、いつかきっと会える。そしたらまた、君の名前を呼んでもいい？」

「うん…うん。」

「会いたくなったら…君の名前を呼ぶ。だからなのはも…私を呼んで。なのはが困ったら……今度はきっと、なのはを助けるから。」

「これでいいのだ。ってやつかな？」

「違いない。原作よりかはハッピーエンドだな。」

「一兎のおかげでね。」

君は一番の功績者だよ。

「俺は自分のやりたいようにやっただけだ。褒められたもんじゃない。」

素直じゃないな。

「さて！二人とも、一生のお別れって訳じゃないんだ。もう泣かないで、ね？」

「グス…うん。」

「そうだね…泣いてばかりじゃ始まらない。戒も元気で。」

「うん。フェイトもね。」

フェイトと握手する。

「一兎、本当にありがとう。母さんの事も…全部…一兎がいなかったら、きっと酷い事になっていた。」

「前にも言ったけど、俺はフェイトを助けたくてやったんだ。それにこれからもフェイトが助けてほしければ、何処にいても駆け付けるさ。」

「絶対…だからね／／／」

わぉ。一兎もやるねぇ。

「ねえ…戒君は私が助けてほしい時は駆け付けてくれる？」

「勿論さ。全力全開で飛んでくよ。」

「あぅ…／／／」

「時間だ…もういいか？」

クロノがこちらに歩いてきた。

「…うん。」

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトを呼ぶと自分の髪を結んでいたリボンをほどいて、それをフェイトに差し出した。

「思い出にできるもの…こんなものしかないんだけど。」

「じゃあ、私も…」

フェイトもなのはと同じように自分のリボンをほどいてなのはに差し出す。

「ありがとう…なのは！」

「うん…フェイトちゃん！」

「きっとまた…」

「うん。きっとまた。」

別れの時が来た。

フェイトたちが集まって転移魔法の魔法陣が展開、視界が青く光ると皆はその場から消えていた。

しばしの別れか。

「帰ろう…なのは、ユーノ、一兎。」

「うん。」

「そうだね。」

「悪い、俺はこれから説教タイムだ。」

ああ、そういや家出してたんだっけ。

「にゃはは…」

「自業自得だ。…じゃあ明日学校で。」

「おう。学校でな！」

一兎は両親の元へと歩いてく。ドナドナが聞こえた気がするが気のせいだろう。

無印は終わった。これから数ヶ月は平和だろう。

でも他の転生者。特に僕や一兎の事が気に入らないやつは僕達を襲ってくるかもしれない。実際一兎は一度襲われた事があるらしいし。

それにテッカマンランスもいる。一兎の知り合いらしいから学校で聞いてみよう。

次はA's だ。

気合い入れなおさなきゃね！

第２５話　名前を呼ぼう（後書き）

無印終了です

原作との大きな相違点は

フェイト、プレシア和解

プレシア生存、ただし病気は治ってません

アリシアの埋葬

なのは、フェイトがアリシアのクローンだと知らない

時の庭園は無事

高町家、魔法の存在を認知してる

位でしょうか

もう少しあるような気もしますが……

実は当初の予定ではプレシアはアースラでフェイト達に看取られ死亡する予定でしたが、もう少し頑張ってもらう事にしました

そろそろ空気な主人公が、本格的に活躍する予定です

これからもよろしくお願いします

テックセッター！

第２６話　プレゼントを考えるのって大変だよね（前書き）

恋愛描写って難しい

第２６話　プレゼントを考えるのって大変だよね

～利文ＳＩＤ～

五月の末のある日。

「ふ～ん、偶然佐々木にねえ」

「そうなの、偶然一兎君に会ったの」

「それで色々あって仲良くなったって訳」

「そういえば佐々木君とは一年生からずっと同じクラスだったのに、今まであまり話した事ないよね」

「まあな。それと一兎でかまわないぞ。戒もなのはもそう呼んでるし」

屋上でお弁当食べようと行ってみたら、なんと一兎がいた。

…あれ？なんでこんなに早く帰ってきてるの？絶対裁判とかあるはずなのに。

そういえば戒となのはもＧＷが終わった頃には戻っていたな。

次元震とかでしばらく帰れなかったんじゃ……ああ、起きなかったんだ。

多分一兎がうまくやったんだな。

それに、戒とも仲良さそうだな。
僕もA-Sの後、仲良くなれるかな?
そういえば今どうなってるんだろ。
…危険だけど、少し話してみるか。情報ほしいし。

「佐々木!」

「ん?おお、諸星か」

こっちに気付く。
ちなみに苗字で呼ぶのはカモフラージュだ。あまり親しそうにすると、一兎の友達だからと彼女らに引き込まれたりしそうだし。

「一兎、誰だ?」

「ちょっとした知り合いでね。悪い少し席外すわ」

屋上の隅へと移動する。

「家出から帰ってきたんだって?」

「ああ。悪いな、心配かけて」

「何でこんな事したんだい?」

「ちょっと助けたい娘がいてね」

フェイトの事か。

「へぇ。彼女？」

「違えよ、馬鹿」

むぅ…こう否定されるとからかいずらいな。

「で、その娘は助けられたのかい？」

「ああ。ただ、問題があってな。彼女の母さんが病気でね…しばらく入院が必要らしい。だからしばらく会えなくてな」

入院……プレシアは生きてるとゆう事か。

「それにあっちこっちから怒られてな。たまんねえよ」

管理局か。

「何だか大変だったのはわかったよ。じゃあ僕は行くよ。皆を待たせてるんでしょ？」

「悪い。じゃあな」

そう言って４人の所へ歩いて行った。

なるほどね…

学校が終わり、家へと帰る。

ひとまず一兎の会話から無印の状況を考えてみよう。

まずプレシアの生存。いや、まだ生存と決まった訳じゃない。

「トシ君、ＤＶＤ借りに行かへんか？明日休みやし♪」

「うん。」

彼女の病状はとても悪いはず。あくまで入院しただけで助かるかどうかはわからない。

「じゃあ、何にする？私はたまにはホラー映画がええなあ。」

「うん。」

それと管理局。

最近は転移先での特訓は止めてるから気付かれてはいないだろう。

「……トシ君、私の話し聞いとる？」

「うん。」

一兎は逮捕されたはずだから、少なくとも今一兎の周辺は管理局が見張ってるかもしれない。これからはあまり近づかない方が良いな。

「聞いとらへんやないかい！」

「うお！？」

耳が！？

何だ！？

「ようやく気付いたんかい。何ボーっとったんや？」

ああ、はやてか…ビックリした。

「ごめん、少し考え事してて…」

「もしかして学校で告白でもされたんか！？トシ君の浮気者！」

何故そうなる？

「そんな訳ないでしょ。僕ははやて一筋だから。」

「ほんま？」

「ほんま。第一、僕全然モテないし。」

前世を含めてもラブレター一つ貰った事ないし。

いかん、情けなくなってきた。

「何か複雑な気分やな…まあええわ。何考えとったん？」

「ちょっと前に学校で家出した子がいてね。顔見知りだから少し不安だったんだけど、今日帰ってきててね。彼の事を考えてたんだ」

「そうなんか。その子大丈夫やったん？」

「大丈夫。心配ないよ」

「よかった。それで、トシ君。散々私の事無視したんやけど…私寂しかったな～♪」

う…

「えと……何かしてほしい事は？」

「ええの？せやなぁ…じゃあ、駅前の喫茶店にカップル専用のメニューがあるんやけど、それ食べに行きたいなあ♪」

……たしか学校で聞いたけど、二人で一つの飲み物を飲むようなアレがあったような…いかん！目茶苦茶恥ずかしい！

「はやて、それは勘弁してくれ！あのハート型のストローは恥ずかしすぎて死んでしまう！」

「え～。あれが一番やりたかったのに…」

可愛い顔したって駄……く…くそ…反則だよそれは…

「…わかった。外は恥ずかしいから家でならＯＫだ」

「しゃーないなあ。じゃあ、とりあえずＤＶＤ借りに行こ！」

「了解」

家でも十分恥ずかしいんだけどなあ…

「キャーこわ～い♪（棒読み）」

はやてが抱き着いてくる。

これがしたいからホラー映画借りてきたのかな？

今の状況、悪くはない。むしろ最高だ。

だけど照れる。

…よし、別の事考えよう。

そういえばはやての誕生日はもうすぐだ。

［シータ、今年の誕生日プレゼントどうしようか？］

［『今年はインパクトより堅実にいった方が良いぞ。去年の月のかけら、はやてはそれなりに喜んでたがドクター石田は若干引いてたしな』］

去年は転移魔法で月に行き、月面の一部をランサーで手の平サイズに切つて持ち帰ったのだ。勿論放射線等の処理もシータと魔法のおかげで解決済みだ。
月の一部って事ではやてはまあまあ嬉しそうだったけど…実は後で石田先生に怒られてしまったのだ。

［じゃあどうしようか？鉱山にでも侵入して宝石でも探す？］

［『お前は金で買うとゆう考えは思い浮かばないのか？』］

それも考えたけどさ。

［だって、せっかく魔法とかがあるんだ。普通の人にはできないプレゼントができそうじゃない］

単体で月に行くなんて転生者でも一部の人しかできないだろうし。

［『まったく……そうだな…指輪なんてどうだ？』］

プロポーズでもしろと？

［さすがにまだ早いよ］

結婚か…僕は彼女を幸せにできるだろうか？

［『なら花束はどうだ？』］

［切り取った花なんか喜ばないよ。でも花か…そうだね、植木鉢に植えれば…］

［『決定だな。あとは何の花にするかだ』］

［花なんて詳しくないからな。思い浮かばないよ］

［『誕生花ならはずれはしないだろう』］

誕生花ねえ…

図書館で調べてみるか。

あれ？なんか普通のプレゼントじゃない？

「な～な～、今夜は怖くて一人じゃ寝られへんから、一緒に寝て♪」

なんだか前にもあったような…

まあ断らないけど。

とりあえずはやての誕生日プレゼントの用意が今やるべき事だな。

あれ、誕生日？何か忘れるような……そうだ、ヴォルケンリッターだ。

彼女達とのエンカウントをどうするかだ。絶対警戒されるし、僕の話しを聞く可能性は低い。

はやてが気絶しないでくれると助かるんだけどなぁ……

じゃあ当日は一緒に寝るか？初めからその場にいるから危険性は低そうだ。

後で駆け付けてもはやてが気絶してたら、説明してくれないから確実に怪しまれる。

恥ずかしいけど、当日はこれで行こう。

第２６話　プレゼントを考えるのって大変だよね（後書き）

絵が描けるようになりたい…

第２７話　宇宙の騎士、守護騎士と出会う（前書き）

ついに登場

第27話　宇宙の騎士、守護騎士と出会う

～利文ＳＩＤ～

あれから毎晩僕はこっそり出かけてる。はやてのプレゼントを探すためだ。
どうやら6月4日の誕生花はウツギとゆう花らしい。ただ、この花は木に咲いてるので用意が大変だ。一応小さい木らしいが。
とりあえずシータに手伝ってもらい、あっちこっち飛び回ってる。
日本中に分布してるので大変だ。

そんなんでちょうど良いサイズのを見つけたのは2日の夜。
ギリギリだったな…

木の周りを土ごと掘り返し植木鉢に植える。
どこに隠そうかな？

「やっぱ家じゃ無理だよね。」

『部屋には入るが、はやてに確実に見つかるな。外に…近所の公園に隠そう。』

「そうしますか」

いよいよか。

……不安しかないや。

そして3日の夕方。

トゥルルルルン、トゥルルルルン

「トシ君、電話お願い」

「はいよ～」

受話器を取る。

「もしもし？」

『石田です。利文君よね？』

石田先生か。

「はい、こんにちは」

『明日の事なんだけど…少し遅くなりそうなの。ごめんなさいね』

「かまいませんよ。先生が来てくれるだけでもはやては喜びますし」

『そう…出来るだけ急ぐから。あと利文君、今年のプレゼントはあんな危ない物じゃないでしょうね？』

去年のあれか。

『放射線が検出されなかったから良かったけど…しかも勝手に月から持ち出すなんて、下手したら犯罪よ』

「もうしませんよ。今年は普通のにしましたし」

でも勝手に木を掘り返したのもまずかったかな？

『なら良いんだけど。じゃあはやてちゃんによろしくね』

「はい。ではまた明日」

受話器を置く。

「誰やったん？」

「石田先生だよ。明日少し遅れるってさ」

「そっか…まあ先生もお仕事があるし」

「しかたないね。でも先生もちゃんと来てくれるよ」

「うん。…ほんま、先生には感謝しきれへんな」

おじさんとおばさんが亡くなってから、石田先生には随分とお世話

になっている。はやての誕生日には毎年来てくれるし。

「あ、そういえばグレアムおじさんから手紙来たんや。誕生日おめでとうって」

「そうなんだ。今年は早かったね」

グレアムからは毎年誕生日カードが送られてくる。

彼なりの誠意なのだろう。

闇の書起動まであと数時間。

いかん、緊張してきた。

そして夜、何故かはやてに呼ばれた。

なんだろう?

とにかく行ってみるか。

トントン

「はやて、入るよ」

「あ、うん。ええよ」

部屋に入るとはやてはベットに座っている。何故か少し落ち着きがない。

「どうしたの？なんかそわそわしてるけど」

「えっと……ちょっと隣に座ってくれへん？」

なんだろ。

とりあえずベットに腰掛ける。

「で、何かな？こういうふうに呼び出すのって珍しいね」

「えと…その…ちょっとお願いがあってな」

本当にどうしたんだろ。様子がおかしいな。

「少しだけ目閉じてじっとしててほしいんやけど…」

「まあ、良いけど…」

はやてに言われた通りにする。

するとはやては僕の顔を引き寄せ。

チュ

……今何をされた？

キスをされた。

誰に？

はやてに。

うわあ、なんか柔らかいなあ。

じゃない！

え？ちょ、いきなり？

心の準備とか！

たしかに嬉しいけど！

むしろ大歓迎……じゃなくて！
落ち着け僕！
素数を数えて落ち着くんだ！
1、3、5、7、11、13、15、17…あ15は違う。

唇が離れる。

「……」

「……」

沈黙。

何を言えば良いのかわからない。

「はやて…えっと…」

「ごめんな」

「え？」

「トシ君との仲を…その…進展したくて…」

……僕は馬鹿だな。

「どうしても今年中にって…でもチャンスがなくて…それで……っ！」

はやてを抱きしめる。

「ごめんね。僕恥ずかしがりやとゆうか…ヘタレで…はやての気持ちに気付いてなかった」

「私がワガママなだけや。トシ君は悪くな……ん！」

自分の口はやての口を塞ぐ。
唇が触れ合うだけの軽いものだ。

「…はやて／／／」

「……あ…えと／／／」

顔が真っ赤だ。当然僕も赤い。
すっごく顔が暑いし。

「おおお、おやすみ！ほ…ほな、明日の誕生日プレゼント期待しとるで！」

そう言ってはやては布団に潜り込んだ。

「おやすみ」

自分の部屋に戻る。

「あわわわわわわわわ！やっちまったぁぁぁぁぁぁぁ！」

『落ち着けランス』

そうだ落ち着け、深呼吸して…

「はあ、はあ、はあ……ＯＫ、もう大丈夫だ」

まさかはやてと……思い出しただけでも恥ずかしくなってきた。

だけど…うん、僕も男だ。
このまま逃げるなんてしない。
はやてのために。
最愛の彼女のために。
絶対にはやてを幸せにするんだ！

『そういえば一緒に寝る予定じゃなかったか？』

「そんな事できるか！ただでさえ理性がレッドゾーンなんだぞ。ビーストモードにトランスフォーム寸前だったんだよ！」

『わかったって。とにかく１２時まで待とう』

「そうだね」

暇つぶしに本でも読むか…

……

ＺＺＺ…

『……きろ…起きろランス！』

ぬお！？

「何何何！？」

『闇の書が起動した。急げ！』

っ！

この魔力！

はやての部屋に駆け込む。

「はやて！」

部屋には黒装束の四人組。ヴォルケンリッターがいた。

はやては…意識があるな。

「トシ君！」

「誰だ？」

「主の親族の方かしら？」

「にしては似てねーな」

「ん？」

全員集合か。

そんなに睨まないで。こっちが悪者みたいだ。

「あの、貴女達は「気おつけろ、こいつ人間ではない！」はい？」

ザッフィー？なんでわかるの！？

「何？貴様、何者だ！」

レヴァンティン構えないでよ！

「いや、僕は…」

「どうせ敵だ！潰しちまえ！」

あんたも黙れ！

ああもう！

「テックセッター！」

状況に耐えられずテックセットする。

「お前ら人の話しを聞け！」

本気で怒るぞ！

「正体を現したな化け物め！シャマル、ザフィーラ、主を！こいつは私とヴィータで叩く！」

「おっしゃ！」

「応！」

「わかったわ。主こちらへ」

「ちょ…え？」

シャマルがはやてを抱え、ザフィーラが二人の前に立つ。

「だから人の話しを聞けって言ってるでしょ！」

首のボルテッカ発射口を開く。

お互いに睨み合う。

「やめんかい！！！」

はやて？

「あんたら一体何者なんや！そんでトシ君、変身するなんて警戒されるに決まっとるやろ！」

え～っと……

「しかもこんな所でボルテッカ撃とうとすんなや！私も巻き込まれるやろ！」

あ

「ご…ごめん、はやて…」

「あ…主？」

「「「……」」」

もしかして怒ってらっしゃいますか？

「全員リビングへ移動！駆け足！」

「「「「「はい！？」」」」」

リビングにて、とりあえずの状況と闇の書について説明される。

うう…四人の視線が痛い。

「そっか～この子が闇の書ってもんなんやね」

はやてが闇の書を手に取る。

「はい」

「僕がこの家に来た時にはもうあったね」

「せやな。綺麗な本やから大事にとってあったんよ」

「覚醒前と眠っている最中に…闇の書の声を聞きませんでしたか？」

「ううん…私魔法使いとちゃうから漠然とやったけど…」

漠然か。一応何か感じてはいたみたいだね。

「分かったことがひとつある。闇の書の主として守護騎士みんなの衣食住、きっちり面倒みなあかんゆうことや。幸い住むところはあるし　料理は得意や。明日みんなのお洋服買うてくるから、後でサイズ計らせてな？」

みんな呆然としている。

当然だ。今まで道具として扱われてたのだろう。
主の私利私欲のために。

「今日は夜も遅いから、続きはまた明日や」

もうすでに日付は変わってるが、それを言うのは無粋だな。

「あ、あと…シグナム…やったっけ？」

「はい。何でしょうか？」

「今回はちょっとゴタゴタしとったし、あんな状況だったからしかたあらへんけど……」

はやては急に目付きを鋭くし、静かに言った。

「次トシ君のこと化け物呼ばわりしたら絶対に許さへんからな」

はやて…

「も…申し訳ございません！」

「はやて、僕は気にしてないから。事実なんだし」

「そんな事言わんといて！トシ君は人間や。私の一番大好きな人なんや！」

嬉しさのあまり、思わずはやてを抱きしめる。

「ありがとう……」

「トシ君／／／」

『イチャつくのはその辺にしておけ。夜も遅いしな』

「っ！えと…じゃあ僕が部屋に案内しとくよ」

「う、うん。お願いな。皆おやすみ～」

四人を連れてリビングを出る。

「少し、話しをしたい。良いか？」

さっきよりかは口調が柔らかいな。
はやてに怒られたのが効いたんだろう。

部屋に着く。

「で、話しって？」

「主は貴様を信頼してるようだが、私はできん。一体何者なんだ？」

「我々のようなプログラムでもない妙な臭いだ」

「……」

「皆落ち着いて、ね？」

さて、どう話したものか……いや、普通に話せば良いか。

「正確に言と改造人間だ」

「改造人間？」

「そ。生物兵器…テッカマンに改造された人間。それが僕だ」

「じゃあなんでこの家にいるんだよ」

「僕を改造した研究員に助けられてね。偶然この近くに転移したんだ。そんではやての両親に拾われて、それ以来ここに住んでる」

こんなもんかな？

「ならば一つ聞かせろ。貴様は主をどうするつもりだ？」

「どうするつもりって…はやては僕の最愛の人。ただそれだけだ」

「「「「……」」」」

う～ん、なんかイマイチ信用されてないような。

「ねえ…私は信用しても良いと思うんだけど…」

「シャマル！？」

「たしかに。主にとっても大切な人でもあるしな」

「先程の言葉も偽りはなかろう」

「シグナム？ザフィーラまで？」

ヴィータは反発するか。

「そんなに僕が気に入らないかな？僕ははやてに危害を加えるつもりなんかない。ただ、守りたい大切な人なんだ」

「……ちっ、しかたねーな。でも変な事したらブッ飛ばすからな！」

「わかったよ」

なんとかなったな。

押し入れから布団を取り出す。

「じゃあ布団は置いとくから」

「ああ……先程は主の想い人とは知らずとんだ御無礼を…」

「気にしてないよ。あとそんな堅苦しい言い方しなくて良いから。おやすみ」

部屋を出る。

疲れたな。

はやてとの事やヴォルケンリッター。一晩で色々な事があった。

明日は学校休もう。

生活用品や衣服を買わなきゃいけないし。

さっさと寝よう

第２７話　宇宙の騎士、守護騎士と出会う（後書き）

戦わなければ生き残れない

第２８話　修練こそ騎士道（前書き）

シグナムとザフィーラの口調って似てるような…

第２８話　修練こそ騎士道

辺り一面の砂漠。

「でえい！」

ランサーで突き、切るが当たない。
全部受け流し、避けられる。

「うおぉぉぉぉぉ！」

「ハアァァァァ！」

ガキィィン！

ランサーとレヴァンティンがぶつかり合う。

何度目の鍔ぜり合いかはわからない。

「だあ！」

力任せに押し飛ばす。

「チィ！」

シグナムとの距離が開く。

くらえ！

装甲を畳み突撃する。

「クラッシュイントルード！」

高速の体当たり。
簡単には避けれまい。

回避が不可能と判断したのかシグナムは剣を構える。
障壁を出さない？

「甘い、紫電一閃！」

レヴァンティンが炎を纏う。
そしてそのまま僕を迎え撃つ。

ガァン！

非殺傷設定なので切れはしない。だが僕の身体は吹っ飛ぶ。
もしレヴァンティンではなくバットだったらホームランだっただろう。

バーニアを吹かし体制を立て直す。

「おおおお！」

そのスキをシグナムは見逃さなかった。
僕に迎って突っ込んでくる。

正面から来るなら撃ち落とす！

首に魔力を集中させ、一気に放つ。

「ボルテッカァァァ！」

紅い砲撃がシグナムを襲う。

そのまま地面へと着弾。

ドゴゴゴゴゴ！

すさまじい爆発と爆音。

「やったか？」

カチャ

背中に何かが突き付けられる。

「残念だったな」

いつの間にか背後に回り込まれレヴァンテインが突き付けられてた。

避けられた！？まさか！

「まいった。僕の負けだ」

レヴァンティンが鞘に収められる。

「まさかあの距離から避けるなんて…」

「予想が外れれば危なかったな。首から砲撃なんて、普通思い付かんぞ」

「予想？」

「会った夜、主はやては【撃つ】とおっしゃってたからな。巻き込むなとも言ってたから砲撃と読んでいたのだ。どうやら私の勘は当たったようだな」

ああ、たしかそんな事言ってたな…

「悪くはないが、まだまだ未熟だな」

「攻撃も直線的だな。だからシグナムに見切られる。まあ、これから鍛えれば良い」

厳しいなザッフィー。

さて、先程シグナムと模擬戦をしていた。ザフィーラもいる。
何故こんな事をしてるかというと……とりあえず回想シーンに入ろう。

ヴォルケンリッターが現れてからもう一週間はたつ。
あの後は僕は学校を休みはやてと買い物に出掛けた。
婦人服売り場に入るのは抵抗があったが、はやて一人に荷物を持たせるわけにはいかないからね。
下着がどうのこうの言ってたが無視する事にした。

「や～いむっつり～」

……

夜には石田先生も訪れはやての誕生日パーティーが開かれた。
ヴォルケンリッターについては、すでに石田先生にははやての親戚だと説明しておいたのでなんとか誤魔化せた。
プレゼントも喜んでくれたしね。そのまま庭に植える事になった。

こうして僕らの新しい生活が始まった。

ヴォルケンリッターが来てから随分と変わった。
はやては家族が増えて嬉しそうだし、家事もシャマルが手伝ってくれるおかげで楽になった。

ちなみに原作と違いザフィーラは人間形態で過ごす事が多い。
家で男が僕一人ってのはかなり辛い。

そんな訳で食事中や僕が居る時は大体人間形態だ。
はやても僕の気持ちを察したのか何も言わなかった。
あとモフ毛は最高だったな。

ある日、シグナムが騎士甲冑の事を言い出した。

「え？騎士甲冑？」

「ええ…我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

「自分の魔力で作りますので、形状をイメージしてくだされば」

「そっか…せやけど、私はみんなを戦わせたりせぇへんから…」

はやては眉間に指を当てて考えていた。

「せや！皆でテッカマンを甲冑にして……」

「却下だ！止めてくれはやて！」

「私も流石にアレは…」

シャマルも引いてる。

「え～。それなら…服でええか？騎士らしい服。な？」

「ええ…それなら構いません」

「ほんなら、早速資料探して…かっこええの考えてあげな♪」

そして午後。僕とはやて、シャマル、ヴィータは【といざるす】という玩具屋に来た。

そう、全員の騎士甲冑のデザインの資料を探すためだ。

「ここは？」

「ええからええから。こういうところにこそ、それっぽいのが…」

騎士か…僕も宇宙の騎士って名乗ってみようかな…

ふと見るとヴィータが何かをじっと見つめていた。

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

シャマルが呼びかけるが聞いていない。

それほど夢中なのだろう。

「はやて」

はやての側に行き、小声で呼ぶ。

「わかっとる。お願いな」

「ラジャー」

僕は皆と離れ、先にレジに行く。
彼女が見とれていたものを持って。

そしてデパート帰り道。

「いい風ですね」

「ホンマや」

「いいお天気ですし」

「絶好のお散歩日和やな」

はやてとシャマルの後ろに僕とヴィータが続く。
ヴィータの手には紙袋が抱き抱えられてる。

「ヴィータ」

「？」

「もう袋から出してええで」

袋に手を入れ、中の物を取り出す。

ウサギのぬいぐるみだ。

「うわぁ♪」

ヴィータが嬉しそうな顔をする。

「はやて、ありが…」

二人は先に進んでしまった。

「ほら、行こう」

「お…おう！」

二人の元へ駆け出す。

そして数日後。

学校から帰るとシグナムに呼ばれた。

「何か用かな？」

「ああ、実は騎士甲冑が完成してな。確認がてら模擬戦でもと思ってな」

「僕と？」

「ああ。以前からテッカマンの力に興味があってな。ずっと手合わせしたいと思ってたのだ」

バトルマニアだなぁ。
でもこの申し出はありがたい。
どうやって特訓に誘おうか迷ってたんだ。

「いいよ。でも条件がある」

「条件？」

「僕の特訓に付き合ってほしい。たしかにはやては闇の書の完成を望んでないから戦いなんてまず無いだろう。でも人生は何が起きるかはわからない。いざとゆう時に僕ははやてを守れるよう強くなりたい。だからお願いできないかな？」

「フ…望む所だ」

いよっしゃ。

「ならば私も参加させてもらうぞ」

いつの間にかザフィーラが部屋に入ってきた。

「勿論だ。構わないな？」

「うん。むしろお願いしたい位だ」

こういう訳で、模擬戦をする事になった。

回想終わり。

初の模擬戦は僕の負けで終わった。
やっぱり強い。能力だけではどうにもならないか。

「しかしボルテッカはすごい威力だな。ザフィーラ、防げそうか？」

「正直難しいな。テッカマンとは皆あのような力を持つのか？」

「とゆうかボルテッカはテッカマン達の標準装備だよ」

二人が驚いた顔をする。

「達？お前以外にもテッカマンがいるのか？」

「いるよ。詳しい数は知らないけどね」

「そして全員があんな砲撃を…」

「まあね」

よく考えると恐ろしいな。

「しかし何故首からなのだ？」

ランスの一番の謎だ。
首から攻撃ってのはかなり珍しい。

「不意打ち用ではないか？シグナムが言ったように、首から砲撃など予測されにくいしな」

たしかに。

「そういえば胸からが一番多かったな」

「ほう…是非他のテッカマンとも手合わせしてみたいものだ…」

他のねぇ…

「多分無理。僕の生まれた世界がどこにあるかもわからないし。力を嫌う人もいるだろうし」

「……そうだな…すまない、不謹慎だった」

「気にしてないよ」

そこまで落ち込むことはないさ。

「では、次は私と戦ってもらうぞ、利文」

連戦ですかい…

特訓の夜は長い。

第２８話　修練こそ騎士道（後書き）

二人が苗字ではなく名前で呼ぶのは使用です

第２９話　夏が近づいて（前書き）

１００００００ＰＶ、１００００ユニークありがとうございます

第２９話　夏が近づいて

～利文ＳＩＤ～

7月も後半になり夏休みが近づいてきた。クラスでは夏休みの話題があちこちから聞こえる。

「やっぱ彼女だろ！せっかくの夏休みなんだし！」

放課後、隣の男子生徒の話しが聞こえる。

小学生の会話じゃないだろ…

しかし彼女か…はやてとは最近二人きりになった事がない。いつもヴォルケンリッターの誰かがいるからだ。

皆は邪魔をしてるつもりではないのはわかる。でもたまには二人きりになりたい。

何とかならないかな…

「なあ、諸星もそう思うだろ？」

急に話しかけられる。

「ごめん。聞いてなかった」

「だから彼女だよ。夏は恋人と過ごすのが最高だろ？」

「そうかもね」

夏でなくとも恋人と過ごすのは楽しい。

「あ～彼女ほし～」

「だよな～」

……本当にこいつら小学生か？まるで高校生だ。

「あの…」

ん？

後ろを振り向くとクラスメートの女子生徒がいた。
彼女の後ろには友人であろう二人の少女がいる。

「ほら、頑張って」

「ファイト！」

まてよ…この状況って、まさか…

「これ、読んでください！」

彼女は僕に一通の手紙を差し出した。

薄い桃色の封筒が小さなシールで蓋をしてある。

どう見てもラブレターです。

教室がざわめく。
ヒソヒソと話してる人もいれば、キャーキャー騒ぐ人もいる。
なんだかすごい事になってるな。
教室にはまだ人が沢山いるのに…
とゆうかこんな物を渡されても困る。僕にははやてがいるのに。
「返事、絶対聞かせてください！」
「え？ちょっと！」
彼女はそのまま走り去ってしまった。
どうしよ…読まずに捨てるのはなんだか失礼だし。
とにかく明日、きっぱりと断ろう。
っ！殺気！？
「諸星ぃぃぃ！」
「ずるいぞ！」
何故にこうなる？
……まじ？
「まってよ！そんな事言われても…」
「たしかに諸星君って、勉強もできてスポーツ万能。背も高いし。」

転生してから身体能力が高いからか、スポーツが楽しくてね。前世では理系だったのに。

じゃなくて！

「で…どうするんだよ？」

「断る訳ないでしょ。皆の前で勇気出して言ったんだよ」

いや…僕にははやてが…

ええい、とりあえず逃げる！

鞄を持ち外へ走る。

「あ、逃げた」

「待てぇ！」

待てと言われて待つ奴がいるか！

とにかく明日断ろう。話せばわかるさ。

夕食後。

「さてヴィータ。お勉強の時間やで」

「別にあたしは良いじゃないか」

「あかんで。私も一緒なんやから」

「うう…」

勉強にはヴィータも参加してる。嫌そうだけどちゃんと勉強してるんだよね。

「じゃあ今日は昨日の復習からにしようか」

鞄を開け、教科書を取り出す。

パサ

「利文、何か落ちたぞ」

ヴィータが拾う。

げ！それは！

「……トシ君、なんやこの手紙は？えらく可愛ええな…」

「はやて話しを聞いてくれ、誤解だ」

「ザフィーラ」

「御意」

ザフィーラに羽交い締めにされる。

「違う、受け取っただけだ！浮気じゃない！」

「え～これから裁判を始めるで。裁判長と検事は私や」

「それ絶対有罪じゃないか！だから誤解なんだってば！」

理不尽だろ。

「ほぅ…なら説明してもらおか。嘘ついたらお仕置きや」

なんかシグナムとヴィータが素振りしてるし…

「せめてもの情けだ。一撃で終わらせる」

助けてぇぇぇぇ！

「ク、クラスメートの娘に渡されたんだ。まだ読んでないけど…勿論断るつもりだよ！」

「へぇ。シャマル、ザフィーラ、どう思う？」

「嘘はついてなさそうですね」

「同じく」

「僕ははやて一筋だ！」

はやては少し考えると。

「……せやな。トシ君は私にメロメロやし…ザフィーラ、離したげてや」

ようやく解放される。

助かった…

寿命が縮んだ気がするよ。

「てか、この手紙捨てて良いんじゃねーか？どうせ断るんだろ」

ヴィータが手紙を持つ。

「そないな事したらあかんで。ラブレターを読まずに捨てるなんて…書いた人の気持ちを踏みにじるようなもんや。ちゃんとトシ君に返さな」

「…ほら」

手紙を受け取る。

「明日返事する。彼女には悪いけどね」

「人騒がせなものだな」

「でも面白かったわ」

なんて事言うんだ。こっちは必死だったんだぞ。

「じゃあ、トシ君には私を不安にさせた罰として、久しぶりに一緒にお風呂や」

ピシ

空気が凍る。

「久しぶり…だと？」

え？シグナム？何故騎士甲冑を？

「利文！貴様、主になんてことを！」

危な！

「違う、介護だって！止めてぇ！」

「私、お嫁に行けへんなぁ♪」

煽るな！

「大丈夫ですよ。お婿さんに来てもらえば良いんですから♪」

「せやな♪」

それは魅力的だな…ってヴィータ、カートリッジロードするなぁぁぁ！

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

学校の帰り道。
今日は戒と二人きりだ。

「戒、お前ってすごいな」

「何が？」

「あの三人だよ。今日も修羅場ってたじゃないか」

ハーレムなんて初めて見たぞ。

「ここまで来るの大変だったんだよ」

「狙ってできるもんじゃないだろ」

「一応前世は女だったからね。その経験を活かして」

そうだったのか。

「よくやるわ…」

「フェイトは加えないから、安心して」

「そうかい」

嘘じゃないだろう。

「もしかして…ハーレム嫌い？」

「俺が嫌いなのは優柔不断なハーレムだ。戒は堂々としてるからまだましだよ。あと鈍感も許せん」

……

何故黙るんだ？

『そちらも大変ですな』

『自分で言ってて気づかないなんて…』

「ドン引きです」

解せぬ。

っ！？

「封時結界？まさか転生者！」

「またかよ…二度目だぜ、俺…」

「あんた達ね。原作を目茶苦茶にしてるやつらは」

帽子を被った赤いロングヘアーの少女と蛇柄のジャケットを着た少年が現れた。

二人とも俺達より年上。中学生位に見える。

「ねえ、これ以上原作に関わらないでくれない？リリカルなのはが壊れるの見たくないの」

原作主義か…

「聞くだけ無駄だろルーシー。さっさと殺しちまおうぜ」

やる気満々だな。

「悪いけど断るよ。殺される事も、介入を止めるのも。封雷剣、セットアップ！」

「同感だな。マーチ、セットアップ！６８口径デンジャラス・ラビット！」

戦闘体制に入る。

「本当は殺したくないけど…しかたないわ。威、やるわよ。楓、セットアップ！」

「せいぜい楽しませろよ…変身！」

少女が赤い宝石を掲げ、少年は紫の小さな箱を突如現れたベルトに差し込む。

少女の帽子が消えバリアジャケットの姿になる。

赤い髪に瞳。そしてネコ耳…いや、あれは角だ。

そして少年はコブラのような紫の鎧を装備してる。

こいつら…

「すぐに終わるわ。脳の血管をわずか1ミリ動かすだけだから」

「イライラさせんなよ」

第３０話　角と蛇の襲撃（前書き）

敵転生者を考えるのも楽しい

基本使い捨てだけど

第３０話　角と蛇の襲撃

～戒ＳＩＤ～

「おい、あの黒いやつの能力はなんだ？」

「パラベラムよ。私がやるからカイをお願い」

「おう」

仮面ライダー王蛇、そしてディクロニウスのルーシーが僕らを狙う。

「ねえ、あのルーシーってやつ任せて良い？」

「エルフェンリートか…６８口径なら通用するだろ。任せな」

そう言うと同時に跳躍、発砲する。

ルーシーは回避し一兎を追う。

「さて…俺達も始めるか」

コブラ型の杖、ベノバイザーを取り出し後頭部をスライドさせ、一枚のカードを入れる。

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ．』

金色の奇妙な剣、ベノサーベルを召喚した。

「ハッハァ！」

ベノバイザーから紫の砲撃を放つ。

あれ、デバイス代わりにもなるのか。

サイドステップで回避。

ふと見ると王蛇が見当たらない。

『上です！』

上？

見上げると今にも剣を振り下ろうとする王蛇がいた。

「うお！？」

ドガァ！

ギリギリで避ける。

危ない危ない。

今度はこっちの番だ。

「うぉぉぉ！」

封雷剣を構え切り掛かる。

ガキィン！

王蛇も応戦する。

キン！キン！

「楽しいなぁ、おい！」

ギィン！

「どこがだ！」

キン！

こいつ…強い。

能力とかそんなんじゃない。戦い慣れてるんだ。

「オラァ！」

またベノバイザーから砲撃を放つ。

「ちぃ！」

回避し、ひとまず距離をとる。

剣と杖、さらに近距離での砲撃。目茶苦茶だ。

『ＡＤＶＥＮＴ．』

紫の巨大なコブラ、ベノスネーカーが召喚される。

ルーシーのベクターは、近接戦型の僕には辛い。だから王蛇の相手をしたのだが…
冗談じゃない。

二対一だっての忘れてた…

シャァァァァ！

ベノスネーカーが毒液を吐き出す。

「当たるか！」

避けた毒液がアスファルトを溶かす。

直撃したら……考えたくないな。グロすぎる。

「ライトニングストライク！」

ベノスネーカーに雷を落とす。

シャァァァ！？

ベノスネーカーが怯む。

よし効いてる。

「俺を忘れんなよ！」

王蛇が僕に飛び蹴りを繰り出す。

「ぐわぁ！？」

背中を蹴られ倒れるが、受け身を取りすぐに立ち上がる。

危ない。

封雷剣を構え直す。

「……おい。転生者にリミッターがあるのは知ってるか？」

なんだ急に。

「知ってるよ。それがどうしたんだ？」

「フッ…良い事を教えてやる。俺にはな二つあるんだ。だがな…全部解除されてんだよ」

なっ！？まじ？

『ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ．』

王蛇はサイの頭のような手甲、メタルホーンを召喚した。

メタルゲラスとエビルダイバーとも契約した状態なの？

まじでやばい！

「さて…命ごいをするか？ま、聞いてやんねぇけどな」

くそ、馬鹿にして…

「なめるなぁぁぁ！」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

目の前の少女、ルーシーの能力。
原作通りなら射程距離は２ｍ、本数は４本。射程外への攻撃は物を投擲するしかない。

本来なら俺が絶対的に有利だ。
６８口径ならベクターでも逸らしきれないだろうし。投擲物も物理的なものなら力場で防げる。
だが相手は魔力を持ってる。
油断はできない。

「……まあ、普通なら６８口径なんて無理よね」

「なら降参してくれるのか？おねーさん」

「んな訳ないでしょ！」

俺に向かって飛び掛かってくる。

正面から？

良い的だっての！

デンジャラス・ラビットをフルオートで発砲する。

ドドドドドド！

だが一発も当たらない。

全弾逸らされた？

「魔力で強化してるのよ、無駄なんだから！」

『避けて！』

ちっ！

その場から飛びのく。

俺のいた場所の空気が僅かに歪む。

ベクターは透明だ。目視は難しい。

「ベクターを画面に表示できるか？」

『やってみるよ。振動と魔力を感知すれば…』

ヒュン

うお？今かすったか？

「この！」

トラウマ・シェルを展開する。

バチィ！

よし、防げた！

「やっぱり物理的な物しか透過できないか…面倒ね…」

なるほどな。防御は簡単には貫けないらしい。

こっちは攻撃が逸らされる。…よし、弾が逸らされるならこれでどうだ！

「アスペルガーアロー！」

変形したデンジャラス・ラビットから光の矢を放つ。

「甘い！」

矢が空中で止まる。

おいおい…止めたのかよ。

どうする？アンフォーギヴン・バリスタに変えるか？だがトラウマ・シェルを展開できないから防御が不安だ。

『一兎、解析できたよ。やっぱ魔力を探知した方がやりやすかったね。モニターに映すよ』

ナイスタイミング！

見るとルーシーの背中から赤い触手のような物が４本生えてる。

見える、見えるぞ！これなら！

ルーシーに向かって走る。

「この！」

ベクターで殴ってくるが見えてるし動きが単純だ。こいつ実は弱い？

ベクターを回避し接近。

デンジャラス・ラビットで殴り飛ばす。

「ああ！？」

すかさずアンフォーギヴン・バリスタを展開。マガジンを差し込み、狙いを定める。

「あんた、俺をなめてないか？これでもけっこう鍛えてるんだぜ」

「うるさい！能力は私の方が強力なんだ！」

ベクターを振り回すが目茶苦茶だな。

後ろに跳び発砲する。

「無駄だって言ってるでしょ！」

矢は全て掴まれてる。

今だ！

一気に接近する。ベクターは矢を掴んでいるから使えない。

もらった！

矢を突き刺し零距離射撃。

ドン！

「ガ！？」

その場に倒れる。

「そんな…」

「能力に頼りすぎだ」

さて、戒は？

あいつが苦戦してる？どうやら王蛇の方はやばい相手らしいな。

急いで助けないと。

王蛇と離れた瞬間を狙い発砲する。

「うお！？」

「え？一兎？」

戒の元に走る。

「大丈夫か？」

「助かったよ。あいつ強くてさ」

「モンスターもいるしな。よし、一気に片付けるぞ」

「なんだよ、やられたのか？使えねえな」

王蛇がルーシーへ歩み寄る。

「ごめん」

「ちっ…まあ良い。多対一も慣れてるしな」

慣れてるって…嘘だろ？

こりゃ戒が苦戦する訳だ。

「リミッターも全て解除されてるらしいよ」

「ありえん…後手に回ると厄介だ。一撃で決めるぞ！」

「ＯＫ！セイクリッドエッジ！」

「フロイトバスター！」

雷の剣と砲撃が放れる。

「っ！？」

ドゴォォォォン！！！

どうだ！

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

煙りが晴れる。

見えたのはルーシーだ。

よく見ると少し浮いてる。

え？

ドサ

ルーシーが倒れる。いや、投げ捨てられたのだ。

こいつ、仲間を盾に！

「何…で？」

「近くにいたお前が悪い」

「原作を…守るんじゃなかったの？」

フラつきながら立ち上がる。

「馬鹿言うな。俺はあいつらが邪魔だからてめぇを利用してただけだ。原作？ハ！俺はな原作の連中が大嫌いなんだ！全員ぶっ殺してやるんだよ！」

なんだって！？

「貴様ぁぁぁぁ！」

ルーシーが叫ぶ。

……

なんだ？何も起きない？

「嘘、ベクターが出ない？」

「頭を触ってみろ。盾にしてた時に角を折ったのさ」

「あ…ああ…」

よく見ると角が無くなってる。

「オラァ！」

王蛇がルーシーを殴る。

「なあ…どっかで見た事ないか？この状況」

たしかに。なんかデジャヴュだな。

……っ！こいつまさか彼女を殺すつもりか？

「え？…嘘……嫌…止めて…」

「死ね」

ベノバイザーの頭をスライドさせる。

駄目だ。止めないと。

「「やめろ！」」

一兎も同時に駆け出す。

「邪魔するな！」

『『ＡＤＶＥＮＴ』』

カードを二枚同時に？

グォォォ！

シャァァァ！

サイ型モンスターのメタルゲラスとエイ型のエビルダイバーが召喚され、僕らの妨害をする。

「ちっ、どけ！」

「やめるんだ！」

駄目だ間に合わない。

「嫌ぁぁぁぁぁ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ．』

王蛇はバック宙をしベノスネーカーの吐く毒液とともにルーシーへ襲いかかる。

ベノクラッシュ。龍騎で多くのライダーを殺害した技だ。

バタ足のような連続蹴りが繰り出される。

蹴りが当たる度に蹴られた身体が溶ける。

「ハァ！」

グシャ

ルーシーの頭が砕けた。

そんな…死んだ…？

メタルゲラスとエビルダイバーが死体に近づく。

「これはベノスネーカーのでお前らのエサはあっちだ」

なんて奴だ。

たしかに僕達を殺そうとした人だ。だからって死んで良い理由にはならない。

「さて、あと二枚あるぜ。どっちが良い？」

ファイナルベントのカードを取り出す。

「ふざけんなぁぁぁ！」

一兎が矢で切り掛かる。

だが王蛇はいとも簡単に避け一兎に砲撃を放つ。

「がはぁ！？」

「一兎！」

一兎が吹っ飛び倒れる。

「まずはてめぇからだ」

させるか！

一兎の下へと走る。

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ．』

王蛇が波乗りのようにエビルダイバーに乗り、体当たり…ハイドベノンを繰り出す。

僕は一兎と王蛇の間に立ち応戦する。

「ライド・ザ・ライトニング！」

ファイナルベントを相殺できるかはわからない。

いや、負けるか！

衝突。

ガガガガガガ！

「うぉぉぉぉ！」

「ちぃ！」

ドオォォン！

「ぐあ！？」

ドサ

一兎を守れたけどこっちのダメージも大きい。

「戒！」

「邪魔しやがって。そんなに死にたきゃお前から殺してやるよ！」

『ＵＮＩＴＥ　ＶＥＮＴ．』

三体のモンスターが重なり、ベノスネーカーが頭と尾、メタルゲラスが体、エビルダイバーが翼になり、ジェノサイダーに合体した。

「消えろ！」

「逃げろ戒！」

立ち上がるので精一杯だ。逃げられない。

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ．』

ジェノサイダーが自分の腹部を食い破るとブラックホールが出現する。

王蛇がそこに蹴り込む技、ドゥームズデイ。

ブラックホールに吸い込まれるのだ、文字通り消される。

そんな……僕は死ぬのか？
ああ…駄目だ…
王蛇が錐揉み蹴りを繰り出す。だがその瞬間。
「ディバインバスター！」
「うお！？」
桃色の砲撃が王蛇に直撃する。
助かった？今のもしかして。
「戒君！」
「なのは！どうしてここに？」
助けにきてくれたのか？
でもどうやって？
「ユーノ君が結界を見つけたの。そしたらあの人が…」
ユーノか。見るとユーノが一兎を支えて歩いてくる。
「一兎、しっかりして。戒、君も大丈夫か？」
「なのはのおかげで生きてるよ」
ボロボロだけど生きてる。一兎もだ。

「二人のおかげで助った。ありがとな」

「本当、死ぬかと思ったよ。ありがとう」

「そんなことないよ」

「友達なんだ。当然でしょ」

「話しは終わりか？」

こいつ無事だったのか？

いや、ダメージはある。だけどあまり効いてないみたいだ。

「くたばり損ないと雑魚か。カードも殆ど使っちまったが、問題無い。かかって来いよ。ぶっ殺してやるぜ」

まだやれるの？

「どうしてこんな事をするの！？」

「うぜえから殺す。理由はそれで十分だろ？それに人殺しは楽しいしな。お前らもやってみればどうだ？癖になるぜ」

「な…」

「そんな…」

つくづく最低なやつだ。

「まあ、ここで死ぬやつに話しても無駄か…」

『ＡＤＶＥＮＴ．』

ジェノサイダーを自分の側に呼び出す。

「全員エサにしてやるよ」

どうする？今の僕と一兎にはきつい。

勝てるのか？

「……スビーム…」

するとどこからともなく現れ一本の光線が王蛇の腹に当たる。

「うお？」

よろめくだけだ。

「今のは？」

「誰！？」

周りを見渡すが誰もいない。

なんだったんだ？

「なんだ今のショボいのは？出てこい！」

……

いない。
何をしたかったんだ？

ピシ

ん？

カラカラン

「なっ！？」

王蛇のベルトのデッキが壊れた。

これが狙いだったのか？

「しまった！」

王蛇の変身が解ける。

これなら勝ち目はある！

グォォォォ…

あれ？ジェノサイダーの様子がおかしいぞ。

「契約が？ちくしょう！」

ガァァァ！

契約？…あ！

王蛇…威の胴体に噛み付く。そしてそのまま振り回し地面にたたき付ける。

「ぐは！こ…こんな蟹みたいな終わり方…アガァ！？」

グチャグチャ

ジェノサイダーの身体に隠れて見えないがわかる。
喰われてるんだ。
封時結界も消えた。

「い…嫌…」

「う…」

ジェノサイダーがこちらを振り向く。口には下半身だけになった威がくわえられてる。

ガァァァ！

どうやら僕達をエサと認識したらしい。

「っ！封時結界！」

封時結界が再び展開される。

「ユーノ君？」

「ごめん、こいつを外に出す訳にはいかない！なんとかしなきゃ！」

「たしかに。助けを呼ぶ時間もくれなさそうだしな」

一兎がアンフォーギヴン・バリスタのマガジンを入れ替える。

「やろう、皆！」

封雷剣を構える。

ガァァ！

ジェノサイダーが僕達目掛けブレスを吐く。

散開して回避。

「でもどうするの？」

「俺に考えがある！」

まじ？流石一兎！

「考えって？」

「俺とユーノのバインドで固定。あとはなのはのスターライトブレイカーでぶっ飛ばす！」

なんじゃそりゃ。

「賛成！」

なのは？

「ただのごり押しじゃないか！てゆうか僕は？」

「えと…囮だ！」

「なんでやねん！」

「でもあいつを倒せる余力があるのはなのはだけだ。それに賭けよう」

しかたないか。

「やるしかないか…スタンエッジ！」

雷の魔力を撃つが効いてない。

「こっちだ！」

ジェノサイダーの周りを飛び回る。

僕に噛み付こうと首を振り回す。

「「チェーンバインド！」」

二人のバインドが両腕を縛る。

ガァ！

だが尻尾をたたき付けバインドを破壊する。

尻尾がじゃまだな。ん？まてよ…よし！

「うぉぉぉ！」

ジェノサイダー目掛け飛び出す。

僕を丸呑みにしようと襲いかかる。だが、ギリギリで避け懐に潜り込む。

そのまま後ろに回り込み封雷剣に魔力を込める。

全力だ！

「ヴェイパースラスト！」

切り上げ尻尾を切断する。

するとバランスを崩し倒れる。

ジェノサイダーは首が長く頭も大きい。

尻尾を失えば当然重心が崩れ前に倒れてしまう。

予想通りだ！

「ユーノ！」

「よし！チェーンバインド！」

ユーノのバインドが頭を縛り地面に固定する。

「まだまだ！」

『Ｃｈａｉｎ　Ｂｉｎｄ．』

さらに一兎が胴体を縛る。

必死に逃げようとするが立ち上がれないらしい。手足をバタつかせるだけだ。

「「「なのは、今だ！」」」

「うん！」

なのはが魔法陣を展開、魔力を収束させていく。

「咎人達に滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！」

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．』

「スターライト、ブレイカァァァァァ！」

ドゴゴゴゴゴ！！！

直撃。

ガァァァァァ！？

やったか？

そこにはピクリとも動かないジェノサイダーがいる。

「やった…のかな？」

「えっと……多分」

「やったよ。よく見ろ」

見るとジェノサイダーは炭酸水の泡のように光の粒子となって消えていった。

か…勝った。

力が抜け座り込む。一兎なんかは仰向けに倒れている。

「俺まじで死ぬかと思った」

「僕もだよ」

「ひとまず時空管理局に連絡しよう。なのは、お願い。僕は二人の手当てをするから」

「うん」

ユーノに治癒魔法をかけてもらう。

痛みが引いてきた。

［ねぇ、前襲ってきたのもこんなんだったの？］

［あ～、以前はハーレム狙いのやつだったよ。王蛇の方が強かった］

……そっか。

［デッキを破壊したやつって誰だろう？］

［助けてくれたのは確かなんだが…少なくともモンスターの契約が切れて暴れるのは知ってたんだ。良いやつとは限らないな］

顔も能力もわからないし。

ビームってのは聞こえたんだけどなあ。

……人が死んだんだよな…二人も。

なんであんな簡単に人を殺せるんだ？

ゲームじゃないんだ。

私利私欲のためとはいえ普通じゃない。

また、あんな奴が出てくるのかな？

いや、管理局に入れば犯罪者とも戦う事になるんだ。そいつらだって人を殺す事を躊躇わないだろう。

怖い。

だけどやるんだ。戦わなきゃ。

僕はもっと強くならなくちゃいけない。

もっと強く！

第３０話　角と蛇の襲撃（後書き）

この話しを書きたいがために王蛇を出しました

ガードベントとかジェノサイダーとかを

第３１話　夏休みは学生の天国（前書き）

ブラスターランスどうしよう

またもやモブ転生者です

第３１話　夏休みは学生の天国

～利文ＳＩＤ～

夏休みに入った。

ヴォルケンリッターの皆も今の生活を楽しんでる。

ヴィータはゲートボールにハマり、今では老人会のアイドルだ。

最近は毎日のように遊びに行ってる。

シグナムは剣道場でのアルバイトを始めた。じっとしてるのは性に合わないらしく、道場でのバイトが楽しいらしい。

そういえばこの前道場に通う大学生にデートに誘われたとか言ってたな。

シャマルは完全に主婦みたいだ。家事をしたり、近所の奥様達と談話したり、さらには老人会の方々にはヴィータの母親扱いされたりしてる。

そんなに老けては見えないけどな…

ザフィーラは基本番犬だ。僕の要望もあってか人間形態でいる事も結構あるが、やはり狼形態の方が多い。そしてたまにヴィータと一緒にゲートボールに行っては老人達のアニマルセラピーとして可愛がられてる。

「久しぶりやな、二人きりってのも」

「そうだね。本当に久しぶりだ」

現在シグナムはバイト、ヴィータはゲートボール、シャマルは買い物で、ザフィーラはその荷物持ちに出かけてる。

二人だと静かだ。賑やかなのも良いがたまには静かに過ごすのも良い。

そんで僕の今の状況だが、はやてに膝枕してもらってる。

はやてがしたいと言ったんだからね！

…はい、最高です。

「はやて、重くない？」

「全然、大丈夫やで」

そっか。

しかし膝枕ってのは何と言うか…癒されるな。

「二人になれたのは嬉しいけど……なんか少し寂しいな」

「それもそうだね。でもいなくなった訳じゃないし、僕ははやてと久しぶりに二人きりになれたのが嬉しい」

「珍しいな、トシ君がそないな事言うなんて」

自分でも意外だ。

「夏休みだからかな？」

「ふ～ん。まあ私も色々補給できるからええけど」

「補給って？」

起き上がりはやての隣に座る。

「なんやろなー？」

はやてが抱き着く。

「はやて…」

「トシ君…」

顔が近づきそして……

「只今帰りましたー！」

うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？

思わず飛びのく。

ちょシャマル？びっくりしたぁ。

「あらぁ…もしかしてお邪魔でした？」

「空気読んで～な」

心臓止まるかと思った…

とゆうか恥ずかしい……

「そういえばザフィーラは？」

「さっきから居るぞ」

後ろ！？

「ご…ごめん。気付かなかった」

「…まあ良い」

あ～驚いた。

［何をしてたのか話してくださいね♪］

……悪魔め。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

前回の襲撃から数日たった。

あの後アースラが駆け付けてきてくれたおかげで、その日には家に帰れた。

後で聞いたのだが、浅倉威は指名手配の連続殺人犯だったらしい。おそらく契約モンスターにエサを与えるためにやったのだろう。死亡についても、使役していた生物の暴走によるものと片付けられた。

ルーシーはただの一般人だったらしい。人を殺す手伝いを頼んだやつに殺されるなんて…

さて、話しは変わって今は夏休みだ。

アリサやすずかにも遊びに誘われてるし、なのはとの魔法の練習もある。

いや～忙しいな～♪

ハーレムはやっぱり大変だけど、その忙しさがまた楽しい。

因みにフェイトは諦めた…とゆうか一兎との事を応援している。人

の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られてなんとやらだ。

そういえばフェイトとのビデオメールは一兎を介して行ってる。今度はアリサとすずかも誘おうって話しになってる。

メールによると裁判もアースラメンバーのおかげで無事に終わり、プレシアさんの容態は大分良いらしい。

フェイトやアルフの看病もあるが、やはり自分が生きたいとゆう気持ちが大切なのだろう。病は気からとも言うし。

それに今度一兎と嘱託魔導師試験を受けるらしい。

僕は…もうちょい後かな？

「来週は？」

「皆と遊んだり結構忙しいかな」

夕食の時間。夏休みについて話しが出た。

どうやらお父さんが休みを取れたらしく家族で出かけようってなったんだ。

「なのはちゃんにアリサちゃんやすずかちゃん、あんた凄いわね。で、誰が本命なの？」

「別にそんなんじゃないよ」

「なるほどな、全員か」

ギク

「ハーレムねえ。教育間違えたかな…」

「たしかに重婚を認めてる世界もあるけど……お母さんは反対ね」

家族は反対か。

「お母さんは嫌いなの？」

「私はナンバー1よりオンリー1だから。今は良いとしても、絶対将来騒ぎになるわよ」

「お父さんはどう思う？」

「俺も良いとは思わないな。人とゆうより動物みたいだ」

たしかに動物にはハーレムを作るやつが多い気がする。

動物みたいか…

そういえば僕は何故ハーレムを目指したのだろう？

別に前世がレズだった訳じゃない。

美少女に囲まれたかったから？

重婚なんてのも簡単にできるもんじゃない。法律で許可されてなきゃ駄目だし。

考えれば考える程訳がわからなくなる。

僕はハーレムを作って何がしたかったんだ？

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

俺は嘱託魔導師試験を受けに管理局に来た。勿論フェイトとアルフも一緒だ。

「なんだか緊張してきたね」

「そう固くなるな。俺達なら大丈夫だ」

「そうだよ、そんなに緊張したらかえって落ちるよ」

「う…うん。落ち着いて……」

大丈夫か？

しかし俺も少なからず緊張してる。

……よし、行くか。

筆記試験が終わった。
クロノに参考書を貸してもらったおかげか自信はある。
次は儀式魔法試験だが、俺は習得してないため受けるのはフェイトだけだ。
戦闘試験で点を稼がなきゃな。

そういえば戦闘試験はどうなるんだ？
たしか原作ではクロノだったが…
誰でも良いか。とにかく全力でやるだけだ。

『それでは受験番号一番、二番の方、出身世界と名前を言ってください』

「ミッドチルダ出身、フェイト・テスタロッサです」

「第９７管理外世界【地球】出身、佐々木一兎です」

戦闘試験会場にいる。さて、どうなる事やら。

『では戦闘試験を開始します。実際に戦闘を行ってもらいますので

試験官を二人送ります』

二人？

するとクロノともう一人、黒い短髪の女性が現れた。

「クロノ？それに…」

「なあクロノ、その人は？」

「ああ、試験官のクロ・ニャーミー一等陸尉だ」

「はじめまして」

歳は二十代半ば位かな。中性的な顔立ちだ。

「僕が一兎、彼女がフェイトの試験官を担当する。まずはフェイトの使い魔との合同試験からだ。ニャーミー一等陸尉よろしくお願いします」

「了解。しかし局員最後の仕事がこんな楽しそうな仕事なんてな」

最後？

「クロノ、最後って？」

「彼女は今日限りで寿退職するんだ」

へえ。

「結婚なさるんですか、おめでとうございます」

「ありがとう。そんな訳だから、最後に俺を楽しませてよ…フェイトちゃん、アルフちゃん」

「はい、負けません」

「むしろこっちの台詞だよ！」

張り切ってるな。

しかし俺の相手がクロノか。ある程度実力がわかってるせいかやりにくいな。

［君は原作介入できたんだね］

念話が飛んでくる。

っ！？彼女は転生者だったのか。

［まあな。運が良かったよ］

［まあ頑張りなよ。俺は介入できなかったけど、最後に原作キャラと戦えて嬉しいよ］

［そうか。フェイト、強いからな］

［フフフ…楽しみだ］

彼女は肉球の模様の描かれたカードを取り出す。

「試験開始だ！」

第３１話　夏休みは学生の天国（後書き）

彼女の能力、わかりずらいかも

第３２話　テストは好きか？俺は嫌いだ（前書き）

今回クロノ嫌いな人は注意

あとパラベラムのネタバレ？がほんの少しだけあります

本当に少しだけです

第３２話　テストは好きか？俺は嫌いだ

～一兎ＳＩＤ～

なんだありゃ？
クロさんがセットアップしたんだが、着てるバリアジャケットが異常だ。
猫の着ぐるみなんだよ。しかも黒猫の。
すると彼女は自分の腹の部分を開き手を突っ込むと、中から緑色の筒…いやガトリング砲を取り出した。
なるほど、サイボーグクロちゃんか。
破壊のプリンス…
フェイトとアルフ怪我しないと良いけど。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～フェイトＳＩＤ～

「……猫？」

「あんた馬鹿にしてんのかい？」

「大真面目さ」

…ちょっと可愛いかも。

ってこの人試験官なんだった。油断しちゃ駄目だ。

［油断しちゃ駄目だよアルフ。試験官なんだし、絶対強い］

［了～解］

「じゃあ試験を始めるけど、準備は良いか？」

「はい」

「いつでも良いよ」

するとクロさんはニヤリと笑うと。

「じゃあ……試験開始！」

ガガガガガ！

右手の銃から魔力弾を撃ってきた。

一兎の魔力弾に似て誘導性はないけどとても速い。

［アルフ、この人一兎と似た戦闘スタイルなんだと思う］

［陸尉って言ってたしね］

なら空から撹乱しながら攻める。

私達は不規則的に飛びながら魔力弾を回避、少しずつ距離を縮める。

あの銃なら接近すれば！

「フォトンランサー・マルチショット！」

フォトンランサーで牽制し、その間アルフが接近する。

「でやぁぁぁぁ！」

「そら！」

アルフが殴りかかるがシールドで防がれる。

でもそれは囮。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｓｌａｓｈ.』

クロさんの後ろに回り込み、バルディッシュを振りかぶる。

貰った！

すると彼女の尻尾が真っ二つに割れた。

「え？」

「残念でした」

尻尾から魔力弾が発射される。

とっさにシールドを張る。

直撃。そして爆発。

貫けてはいない。どうやら爆発によりダメージを与えるのに特化した魔力機雷のようだ。

「てめーも邪魔だ！」

「うえ！？」

アルフを掴み私に向けて投げる。

「え？アル…キャ！？」

「ごめんよフェイト」

アルフがぶつかり私にのしかかる。

「そらそら！」

再び発砲。アルフが私をを掴み飛ぶ。

「どうするフェイト？」

「次は同時に行こう」

「あいよ！」

再度接近する。次は尻尾にも注意しないと。

「かかってこいやぁ！」

お腹に手を入れ、今度は身の丈の倍はありそうな大剣を取り出す。

ちょっと待って！そんなの何処に入ってたの！？

「この！」

「ムダ！」

アルフが魔力弾を撃つが剣で薙ぎ払われる。

でもあんなに大きいんだ。振れば隙は大きいはず。

「そら！」

私を目掛け剣が振られる。

引き付けギリギリで回避。

今だ！

再び切り掛かる。

だが彼女は手にした銃を私に投げ付けてきた。

「痛！」

顔に直撃。
続けて私を蹴り飛ばす。

「フェイト！」

アルフがクロさんを殴るが剣を盾にして防ぐ。

「おら！」

そのままアルフを押し退ける。

「アルフ！」

慌てて駆け付けようとするが、今度は剣が投げ付けられる。

同じ手は通用しない。

剣を払いのける。
だが彼女はその間にアルフに接近。足払いをし転ばせ、いつの間にか取り出した黒い箱のような物をアルフに押し付ける。

ドドン

爆発音。

あれは銃だったの？

「アルフ！？」

返事がない。駄目だ、やられちやった。

「優秀な使い魔だけど、俺に勝つにはまだまだだな。使い魔やられちやったから合同試験は終わり」

負けた。すごく強い…

「なあ、ハラオウン執務官。このまま彼女の個人戦闘試験もやっちゃって良いかな？一からやり直すのも面倒だ。それにもう一人いるんだし」

「……そうですね。フェイトは？」

「かまいません」

…一人で勝てるかな？いや、勝つんだ！

「わかった。このまま試験を続けよう」

クロノがアルフを連れて行く。

「フェイト、頑張って」

「次は勝てよ」

「うん！」

一兎も応援してくれてる。

頑張らなきゃ。

［ほほう…彼氏に良いとこ見せようと張り切ってるね］

［!?ち、違います！一兎とはまだそんな関係じゃ…］

［まだねぇ。つまり…シシシ♪］

ううう…

「さて、一対一なんだけど…正直さっきので腕前は大体わかったんだよね。そこでさ、お互い全力で撃ち合わない？」

へ？

「あの…そんなんで良いんですか？」

「試験官は俺だ。ぶっちゃけ俺が撃ちまくりたいだけ。で、どうする？力と力の正面衝突といかない？」

クロさんは緑色の筒…最初に使ってたものに似てるが、もっと大きい銃を両腕に持ってる。

…この人には策は通じない。経験が違いすぎる。

ならば正面衝突の方が分があるかもしれない。

「わかりました…受けて立ちます」

『Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ．』

「そうこなくっちゃなあ！」

『Ｆｕｌｌ　Ｂｕｒｓｔ．』

両腕の銃を私に向ける。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

全力…全開！

「フォトンランサー・ファランクスシフト。撃ち砕け！」

「アンミリテッド・バレット！」

「「ファイア！！！」」

お互いの魔力弾がぶつかり合う。

ドドドドドド

「アッハハハハハハハ！！！」

弾膜同士の衝突。

お互いが相手の魔力弾を撃ち落とし合い一発も通さない。

「っ！」

少しずつ押されだす。
負けたくない。絶対に！

「楽しいね！君に会えて本当に良かったよ！」

ついに魔力弾が貫かれた。

「じゃあね！」

次々と命中する。

意識が遠のく。

負けちゃった…

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

フェイトが負けた。
なんだよあの弾膜…出鱈目にも程がある。

「フェイト！」

アルフが駆け寄り抱き上げる。

俺も行かなきゃな。

「フェイト、大丈夫か？」

「負け…ちゃった…不合格かな？」

心底悔しそうだ。

「試験は勝ち負けじゃないよ。ニャーミー陸尉、どうですか彼女は？」

「最っ高！使い魔も優秀だし息もぴったり。文句なしに合格だ！」

「本当…ですか？」

「勿論！最後の仕事に相応しい相手だったよ。ありがとう、これで心置きなく辞められる」

「あ、ありがとうございます！」

よかった。

「さて…次は一兎、君だ」

「一兎、頑張って」

「頑張れよ」

「おう！」

フェイトは観戦するそうだ。

しかし緊張するな。

よく二次創作でボコボコにされてるイメージがあるが実際どうなんだろうか。

以前戦った時はジュエルシードを奪われ完全に出し抜かれたしな。

たしか無印、A's ではかなりの強キャラだ。

まあ良いさ。全力を出す。それだけだ。

「68口径デンジャラス・ラビット」

P．V．Fを展開、マガジンをセットする。

「準備は良いらしいな。では試験を始める！」

「ラピッドショット！」

弾を収束させ威力を上げる。
クロノは飛び回り避ける。
「スティンガーレイ！」
魔力弾が放たれる。
速い！
俺は走りながら避け、反撃する。
「目茶苦茶な身体能力だな。上からじゃらちがあかないな」
クロノが高度を下げ近づいてくる。
接近戦か。受けて立つ！
跳躍。そしてＰ．Ｖ．Ｆで殴り掛かる。
「おっと」
避けられた。
そしてＳ２Ｕを向ける。
反射的にトラウマ・シェルを展開し攻撃に備える。
『Ｂｒｅａｋ　Ｉｍｐｕｌｓｅ．』

S2Uがトラウマ・シェルに触れると同時に破壊される。
爆発の勢いで下がりながら魔力弾をばらまく。
クロノとの距離が開く。

「120口径アンフォーギヴン・バリスタ！」

P・V・Fを入れ替える。

より強力な内観還元力場のおかげでさらに身体能力が上がる。

「うおぉぉぉぉ！」

発砲しながら突撃。先程とは比べものにならない程速い。

クロノはシールドを張るが刺さった矢が爆発し簡単に壊れる。

防御が崩れた。

「貰った！」

そのまま俺は切り掛かる。

「ちぃ！」

矢は届いたが浅い。バリアジャケットを切り裂いただけだ。
クロノは上空に逃げる。

ことごとく見切られるな。

「スティンガースナイプ！」

魔力弾を撃ってきた。

げ。あれ目茶苦茶誘導性が高いやつじゃ…

「スナイプショト！」

魔力弾が向かってくる。

引き付けてから避けるが何度も襲ってくる。

「しつこい！」

切り払い破壊。そしてクロノに銃口を向ける。

『ストップ！』

え？

『動かないで。周りにバインドが設置されてる』

何？まさか俺がスナイプを避けてる間に？

「ここまでかな？」

S2Uを俺に向ける。

下手に動けばバインド、だがこのままだとやられる。

あまり使いたくないが…

マガジンを精神弾に入れ替え、アンフォーギヴン・バリスタのレバーを【S・S】にセットする。

「ブレイズ…」

アンフォーギヴン・バリスタが割れ内部の機関部や制御系が露出する。そしてその中心では光の粒子が球体の形をとって回転する。

間に合え！

「カノン！」

引き金に指をかけ…

ドオン

砲撃がバリスタを直撃。

激痛が走る。機関部に当たったんだ、ダメージはでかい。

「うお…」

間に合わなかったか…

その場に倒れる。

「一兎？大丈夫か？」

クロノが降りてきた。

「大丈夫じゃねえよ…内部に直撃って…痛いなんてもんじゃない…」

「神経に繋がってるんだっけそれ？……やった僕が言うのもなんだが…想像しただけで痛そうだな」

「気絶しなかった自分を褒めたいよ」

P．V．Fを解除し寝転ぶ。

「あ～俺も負けか…あと少し早ければ勝てたのに」

「何をしようとしたんだ？」

「ちょっとな…」

「…まあ良い。これで試験は終了だ。お疲れ」

ああ、そうだった。

「で、俺大丈夫そうか？」

すっげぇ不安なんだが。

「合格だ。ただ少し周りを自分で見た方が良い。だから囲まれるんだ」

索敵とかマーチに任せっぱなしだしな。

「残念だったね、一兎」

「格好悪いとこ見せちまったな」

「ううん。凄かったよ」

「ありがとな」

［さて…これからA－ｓだけど頑張ってよ］

［ああ。…あんたは良いのか？］

［俺は今の人生を楽しんでるんだ。原作介入なんてしたらこの幸せが逃げちまう。俺はこれから結婚して幸せになる。それだけだ］

［幸せなんだな…元気で］

［また縁があったら会おう。じゃあね、オリ主君♪］

［その呼び方止めてくれ！なんか嫌だ！］

こうして嘱託魔導師試験は終了し、俺達は無事合格した。

第３２話　テストは好きか？俺は嫌いだ（後書き）

初めてフェイト視点を書きました

あと私の中ではクロノは強いです

第３３話　たとえこの手を汚しても（前書き）

いよいよです

第３３話　たとえこの手を汚しても

無人世界にシグナムと対立する。
もう何度目の模擬戦かわからない。

「こい」

「行きます」

同時に飛び出す。

「ハァ！」

「でやぁ！」

ガキィン

お互いの刃がぶつかり通りすぎる。

「テックレーザー！」

肩からレーザーを連射するがシグナムは飛び回り回避する。

ちい。

ランサーを構えシグナムに接近する。
シグナムもこちらに飛んでくる。

「「紫電一閃！」」

魔力の付属した斬撃がぶつかり合う。

「まさか私の魔法を使うとはな！」

「技は盗むものでしょ！」

紫電一閃は使い勝手が良さそうだし威力もある。

シータに術式を解析させて正解だったね。

「フフフ…本当に面白い！」

シグナムが離れる。

『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ.』

レヴァンティンが蛇腹剣の形態をとる。

「だあ！」

刃がまるで生き物のように襲い掛かる。

『カートリッジロード』

ランサーの柄の先端にワイヤーを括りつけ、魔力を付属し振り回す。

「だあぁぁぁ！」

まるで巨大な円盤だ。

伸びてきた刃を薙ぎ払い、さらにシグナムに振り下ろす。

「うお！？」

鞘で受け止めるが地面にたたき付けられる。

今だ！

バーニアを最大出力で吹かし突撃する。

シグナムもレヴァンティンをシュベルトフォルムにしこちらに向かってくる。

「そら！」

「なんの！」

ランサーを投げるが切り払われる。

「ハァ！」

横向きに切る。脇腹に直撃。装甲が軋む。

だが当たった瞬間にレヴァンティンを掴み固定、さらにシグナムの首にワイヤーを巻き付ける。

「なっ！？」

首のボルテッカ発射口を展開する。

「僕の勝ちだ」

「一本とられたな」

勝った…

「ハハ…やったー、初めて勝ったー！」

模擬戦を始めてから約三ヶ月半。
ようやく一勝した。

「フッ…油断したなシグナム」

「捨て身とはな…だが負けは負けだ。強くなったな利文」

「ありがとう！」

「たが先程の戦法は褒められたものではないな。捨て身とゆうのは簡単に使う物ではない」

ううう…
まだ合格とは言えないな。

「ただいま」

「おかえり～」

十月も後半、どんどん寒くなってくる。

［利文、後で話しがあるのだが…］

シグナム？しかも念話で？

［良いけど…］

［そうか。なら夜にでも］

［わかった］

そして夜。

人気の無いビルの上、僕とヴォルケンリッターが揃ってる。

あれ？皆いるの？

「で…話しって？皆いるって事はただ事じゃなさそうだけど…」

「ああ、実は……」

シグナム達の話しは闇の書がはやての病気の原因である事、そのせいで命の危険に晒されてる事を聞いた。

そうか…もう…

「主を助けるには闇の書を完成させるしかない。だが、我々にはあまり時間がない。単刀直入に言おう。利文、手伝って欲しい」

「勿論強制はしない。我々の行いは犯罪だ」

「人間以外からは蒐集できないの？」

対象を動物のみにできれば罪もだいぶ軽くなるし。

「蒐集はできますけど…人間以外だとすごく効率が悪いんです。勿論命は奪いませんよ。魔法生物だけだと、多分間に合いません」

無理か。たしかにたしかに魔法生物だけで完成させられるなら人は初めから襲わなかっただろう。

「利文、やっぱ良いよ。はやてに黙っててくれるだけで良いからさ」

「いや。手伝うよ」

「…本気か？」

「本気。僕だってはやてを助けたい。彼女を死なせてたまるか」

「利文……わかった。協力感謝する」

シグナムが頭を下げる。

「頭上げてよ。僕にとってはやては大切な人なんだ。当然だよ」

「期待してるぜ」

「利文の実力は私とシグナムが保証しよう。ここ数ヶ月、何度も模擬戦をしてたからな」

「なんであたしも誘わなかったんだよ！」

「夜にやってたからよ。…そうだ、私から考えが有るんだけど」

考え？少し不安なんですけど…

「考えとは？」

「蒐集中は利文君に主とゆう事にしてもらうの」

僕が主？

「え、なんで？」

「管理局の目を欺くためよ。それにテッカマンなら顔もばれないし。囮にしちゃうようで悪いけど、お願いできないかしら？」

「僕は構わないよ。皆は？」

「良いんじゃねーか？」

「私は賛成だ」

「同じく」

反対意見はない。

「決まりだ」

「利文君はこれから主ランスね」

なんだか恥ずかしいな。

そうだ、一つ聞かなきゃいけない事があった。

「ねぇ、皆からは蒐集できないの？皆から蒐集して少しでも頁を稼げば襲う人や生き物も減るし」

しかも最後に現れる猫姉妹への対抗策になる。闇の書は一人につき一回までしか蒐集できないからだ。

「悪い、それはできねーんだ」

なんですと？

「私達は本来闇の書の一部なの。だから蒐集される事は闇の書に還元される事になるわ。私達の蒐集は最後の手段なの」

無理か。ならばせめて…

「そうだ、僕のリンカーコアならできるはずだ」

「正気か？蒐集はかなりの苦痛を伴うのだぞ」

「なら尚更だ。他の人にもそんな思いをさせるんだし…」

「……わかった。シャマル」

「はい……闇の書、蒐集」

『Ｓａｍｍｌｕｎｇ.』

っ！？

「ぐあああああ！？」

何これ？全身が絞られるような痛みだ。

蒐集が終わる。

「ハア…ハア…終わった？」

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

こりゃ意外ときついな。

「今日は休め。本格的に蒐集に参加するのは回復してからで良い」

「アハハ……これで闇の書の一頁目は僕か…」

「私が送ります。立てますか？」

「大丈夫、立てるよ」

フラつきながらも立ち上がる。

「皆、頑張ろう。絶対はやてを助けるんだ！」

「無論だ」

「まっ、今日の所はあたしらに任せな」

「今は休め」

「じゃあ送って行きますね」

なんだか初っ端から格好悪い気が……いや頁の足しになったんだし良いか。

数日後。

あれから僕も回復し蒐集に参加した。

一応家には必ず誰かがいるようにしている。

はやてを一人にしたくないしね。

今日はシグナムがお留守番だ。

そして僕はザフィーラと蒐集している。

「ぐは……」

先程まで戦っていた数人の魔導師が倒れる。

僕は今夜、生まれて初めて人を襲った。

「闇の書、蒐集」

『Ｓａｍｍｌｕｎｇ.』

「ぐわぁぁぁぁ！」

「がぁぁぁぁぁ！」

思わず目を背けたくなるような悲鳴だ。

「ごめんなさい」

謝っても意味はない。

時間になり待ち合わせ場所へと向かう。

「ハハ…人に襲われた事はあるけど、襲うのは初めてだ。変な気分だ」

「大丈夫か？無理して蒐集に参加しなくても良いのだぞ」

「大丈夫。覚悟はしてるんだ……やれる」

「…そうか」

待ち合わせ場所に着く。

そこにはシャマルとヴィータ、そして黒髪にマフラーの見知らぬ少年がいた。

「お…来た来た」

「ヴィータ、この少年は？」

「ああ、ちょっと危ねーとこを助けてくれてな。紹介するぜ、こいつはジョジョ。で、この二人はと……主ランスとザフィーラだ」

「主？」

少年が睨む。

多分転生者だな。マフラーにジョジョってことはジョセフか。

「ヴィータ、それは嘘だろ？こいつは主じゃない」

「な！？」

「っ！？」

「え…」

あれ？

「なんで知ってるって顔だな。俺はこいつを知ってるんだ」

「は？知り合いだったのかよ！？」

「知らないよ、初対面だ」

「嘘をつくな！こいつは俺の親父を殺したんだ！」

……待て待て、話しが見えないんだけど。

「え？」

「皆、騙されちゃ駄目だ！こいつは今まで沢山の人を騙し、殺してきた悪党だぜ！皆に近づいたのも本当の主を騙し利用するためだ！」

……なるほど。こいつは僕が彼と同じく自分から協力を申し出たと思ってるんだ。
しかも僕を追い出そうとして…

「…おい、ジョジョと言ったな。その話しは本当か？」

え？ザッフィー？何言ってるの？

「ああ本当だ。こいつはとんでもない大悪党だ。先月もロストロギアを奪うために沢山の子供を人質にして殺したんだ！親父の敵、と

らせてもらうぜ！」

手甲型のデバイスを起動する。

「なるほど。どうやら悪党は貴様の方らしいな」

「は？」

「ジョジョ…てめぇ！」

「結界は張りましたから、遠慮無くやっちゃってください」

［ごめんね、僕はやての幼なじみなんだ］

するとジョジョの顔色が見る見る青ざめてくる。

ようやく自分の行いを理解したのだろう。

［謝るから頼む！知り合いだと…さっきのは冗談だって言ってくれ！協力するから！］

［自業自得だ］

［わかった！情報がある、なのは達には転生者が二人いるんだ！お前一人じゃきついだろ？な？］

僕を追い出そうとした奴の台詞じゃないな。君一人でどうするつもりだったんだよ。

［それ知ってるよ。君は信用できないから、さよなら］

「う……うおぉぉぉ！波紋疾走！」

やけくそになったのか飛び掛かってくる。

メキィ

ザフィーラのカウンターが顔面に命中。

なんか思いっ切り凹んだような……

気のせいか。

「ごめん…あたしのせいで……」

「ヴィータちゃんは悪くないわ」

「そうだよ」

「とにかくこいつをどうするかだな…」

ジョジョは完全に気絶している。

「とりあえず蒐集しちゃおうか」

「そうだな」

「こいつ魔力高いし頁稼げるな」

蒐集が終わる。結構頁が増えたな。

「ねえ、明日は休みにしない？こいつで明日の分まで稼げたし」

「賛成！」

「そうね…明日は久しぶりに皆で過ごしましょう」

こいつはほって置くか。
死にはしないだろう。

第３３話　たとえこの手を汚しても（後書き）

今回独自解釈多かったな

利文の蒐集、王蛇に放たれたビーム…さて次は？

第３４話　始まりとは突然な物だ（前書き）

はじまります

第３４話　始まりとは突然な物だ

～戒ＳＩＤ～

冬真っ盛りな十二月。

夏休みにはユーノも部族に帰ってしまい少し寂しいが、フェイトと同じくメールをしている。
最近ロストロギア関係でクロノと会ったりしてるらしい。

そんなある夜。

『若、結界です』

「また転生者か？」

やっぱりなのはの近くだと煩いなあ。

［戒君！］

［なのはも感知したの？］

［うん］

［『対象二名、高速で接近中』］

［『どうやらこちらが狙いのようですな』］

狙い？十二月だし……闇の書事件か！
母さんは？
結界の外か……リミッターが掛かってるから母さんが狙われる心配はないか。いや、母さんだったら返り討ちにしてるかも…

［なのは、行こう］

［うん、とにかく外に］

あれ？そういえばレイジングハートが二人って言ってたような…

ビルの屋上。
周囲を見回すがまだ見当たらない。

『来ましたな』

正面か。

見ると赤い光が見える。

『魔力弾です』

なのはがシールドを展開し防ぐ。

「なのは！」

急いで駆け付けようとする。

「ハァ！」

『右です！』

え？

その場を離れる。

何者かが僕のいた場所を殴る。

「……ほう」

銀髪に青い犬耳。ザフィーラか。

でもなんで？たしか最初の襲撃はヴィータだけだったはずじゃ。

考えてもしかたない。多分僕がいたから二人掛かりで来たのだろう。

「ああ！」

なのはが吹き飛ぶ。

「なのは！」

「よそ見とは余裕だな！」

飛び蹴りを繰り出してきた。

シールドで防ぐ。

「封雷剣、セットアップ！」

『Ｓｅｔ　ｕｐ.』

騎士甲冑を展開し封雷剣を構える。

「貴様もベルカか」

「近代だけどね」

「まあ良い。悪いが貴様の魔力を貰うぞ」

蒐集か。されてたまるか！

「お断りだ！」

ザフィーラに飛び掛かる。

「グリードセバー！」

雷を纏った斬撃を繰り出す。

「ふん！」

シールドに阻まれる。

固い！

「ふん！」

押し返される。
バランスを崩しそうになったが押された勢いを利用し上空に逃げる。
「まだまだ！」
再度接近。
封雷剣を振るうが、尽く受け流される。
強い！
「むん！」
回し蹴りから裏拳と反撃してきた。
封雷剣で防ぐが、体格差もあり衝撃が大きく身動きが取れるない。
「てあ！」
「うわあ！」
殴り飛ばされビルにたたき付けられる。
「痛ったあ」
立ち上がる。どうやら壁を突き抜け部屋に入ってしまったらしい。
ザフィーラだからって油断した。
徒手空拳とはいえ子供と大人。リーチもパワーも差が出る。

まずいな。

「キャァァァ！」

僕が開けた穴の隣からなのはが入ってきた。
いや、正確には僕と同じように壁を破壊して吹き飛ばされたのだろう。

「なのは、大丈夫？」

「ゲホ、ゲホ。なんとか…」

ヴィータとザフィーラが入ってきた。
よく見るとヴィータの帽子がない。
原作通り怒らせちゃったのか。

「帽子はどうしたのだ？」

「この女、あたしの帽子を吹っ飛ばしやがったんだ！ぜってー許さねー！」

マジギレかい…
だけど笑えないぞこの状況…

「ぶちのめす！」

ヴィータがグラーフアイゼンを振りかざし飛び掛かる。

くそ！

グラーフアイゼンが振り下ろされる。

その瞬間。

ガキィン！

金髪の少女が黒い杖で受け止めた。

フェイト…

「ごめん、二人とも。遅くなった」

「ユーノ君？フェイトちゃん？」

「来てくれたのか？」

「ヴィータ！っ！？」

ザフィーラがとびのき、その場に青紫の何本もの矢が刺さる。

「生きてるようで何よりだな」

「一兎も」

一兎までもが現れた。

「仲間か」

ヴィータか離れる。

「少し違うな」

一兎がアンフォーギヴン・バリスタを構える。

『Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ』

「友達だ」

フェイトが静かに言った。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤ～

「でな、すずかちゃんて娘と友達になったんや」

「そっか。今度会ったらお礼言わなきゃな…」

どうやら今日はやてはすずかと会ったらしい。

本格的にＡ's が始まったな。

近い内に主人公組と戦う事になるな。

……悪いけど全力でやらせてもらおう。下手に手加減して負けたら全部パーだからね。

♪♪♪

電話？

「もしもし？シャマル？そんな、ええのに……え？もう…わかったわ、トシ君に頼んでみるな。…シャマル買い物して迷子になってもうたんやって。迎えに行ってくれへん？」

迷子？

「良いよ。電話変わって」

「はい」

はやてから携帯電話を受け取る。

「もしもし？」

［ごめんなさい、今ヴィータちゃんとザフィーラが手こずってるみたいで…人数もいて大変なの］

あれ？もしかしてエンカウントした？

……そうだった…今日か…

［わかったよ。直ぐに行く］

「うん…じゃあ迎えに行くね」

電話を切る。

「シャマルも迷子になるんやな」

「そういう事もあるさ。ついでに皆も拾ってくるよ」

「いってらっしゃい」

はやてに見送られ家をでる。

周りに人は……居ないな。

「テックセッター！」

テッカマンランスにテックセットする。

「テッカマンランス！」

空を飛び皆の所へ急ぐ。

『急ぐぞ』

「勿論！」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

「民間人への魔法攻撃…軽犯罪では済まないぞ」

「あんだテメェら？管理局の魔導師か？」

「時空管理局嘱託魔導師、佐々木一兎だ」

「同じく嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ。抵抗しなければ弁護の機会が君達にはある。同意するなら、武装を解除して」

「誰がするかよ！」

「断る！」

二人がビルの外へ逃げる。

「ユーノ、二人をお願い」

「うん」

だが二人は立ち上がった。

「僕は大丈夫だ」

「私も」

…たしかにそんなにダメージを受けてなさそうだ。
なのはもリアクターパージをしていない。

「わかった。じゃあユーノは索敵を頼む。敵は二人とは限らないしな」

「まかせて」

俺達はビルを出て二人を追う。

「僕となのはは男の人と戦う。一兎とフェイトは女の子の方をお願いできるかな？」

「うん」

「任せな」

ビルの屋上に立ちヴィータを狙う。

「空戦苦手だからな、援護に廻るぞ」

「わかった」

はじめますか。

『Ｅｒｉｃｓｓｏｎ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．』

誘導性を追加したアンビバレント・フレシェット弾を撃つ。

「グラーフアイゼン！」

『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ．』

鉄球を打ち出す。鉄球は次々とエリクソンシューターと衝突、爆散していく。

だが俺の方が弾数が多い。

「障壁！」

『Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ．』

バリアを展開する。

着弾。それと同時に爆発し大量の魔力弾がばらまかれる。

「何！？」

流石に大量の魔力弾は防ぎきれなかったらしくバリアが破壊される。

「ハァァァァ！」

フェイトが切り掛かる。

ガキィン

鍔ぜり合いになる。

「おりゃあ！」

フェイトを突き飛ばす。

離れたのは好都合だ。

ヴィータに向かって発砲。

「ちっ…って、うわあ！」

避けられた。だがそこにザフィーラがぶつかる。

「ザフィーラ！」

「すまん」

今だ。

チェーンバインドで二人を捕縛する。

「なに！？」

さらに緑の鎖も追加される。

「ユーノ！」

「これなら逃げられないはずだ」

五人で取り囲む。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ。」

「くっ……」

二人が睨む。

「……っ！フェイト、戒、離れて！」

え？

「ゲシュペンストキィィィック！」

「ハッ！」

戒は蹴りをギリギリ避け、フェイトは切り放される。

……ついに来たか。

「シグナム？それに…」

「主！」

主？

「シグナム」

「はっ」

バインドを切断する。

「どうした二人とも。油断したか？」

「うるせーよ。こっから逆転するとこだったんだ！」

「言い訳をするな。すまない、助かった」

「気にするな」

「さて…そこの金髪少年二人と白い少女はお久しぶりかな？」

戒、なのは、ユーノの事か。

「あなたはたしか……テッカメンランスさん！」

「誰が鉄仮面だ！」

「違うよなのは。テッカマセランスだよ」

ランスが盛大にずっこける。

色々と台なしだな…

「かませ言うな！」

「二人とも違うよ。てゆうか戒はわざでしょ！」

「三人とも知り合い？」

「ジュエルシードの時に一度会った事があって」

「なるほどな」

「初対面の者もいるようだからな。自己紹介させてもらおう」

ランサーを俺達に突き付ける。

「私の名はテッカマンランス。闇の書の主だ！悪いが君達の魔力を頂戴する！」

第３４話　始まりとは突然な物だ（後書き）

いよいよです

第３５話　戦いの嵐だ（前書き）

ＰＶ１５００００、ユニーク１７０００ありがとうございます！

第３５話　戦いの嵐だ

～戒ＳＩＤ～

テッカマンランス……今はってのはこの事だったのか。

闇の書に付く。

たしかにこれなら無印で介入したくない訳だ。

「魔力って……どうしてこんな事をするの？」

「悪いが話すつもりは無い。やれ」

「「はっ！」」

「おっしゃ！」

来る！

シグナムがフェイト、ヴィータがなのは、ザフィーラが僕に向かって来る。

「ハァ！」

「この！」

拳と封雷剣がぶつかり合う。

［ユーノ、逃げる用意を頼む］

［うん、とにかく時間を稼いで］

一兎は？ランスの相手か。

ユーノが結界をどうにかしてくれると良いんだけど…

「ヴォルケンリッター、盾の守護獣ザフィーラ。幼き騎士よ名を聞かせてもらおうか」

「私立聖祥大学付属小学校三年生、カイ＝キスク＝木崎。こっちは封雷剣だ」

『以後、お見知りおきを』

「木崎か……おとなしく魔力を渡せば命までは取らぬぞ」

「はいそうですかって言う訳ないでしょ」

封雷剣を構える。

「それもそうだな」

ザフィーラも構える。

「「うぉぉぉぉ！」」

同時に駆け出す。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

道路のど真ん中。テッカマンランス…諸星利文と対峙してる。

［まさかアンフォーギヴン・バリスタが使えたなんてね…］

［敵対するんだ。全部教える訳ないだろ］

マガジンを新しい物に入れ替える。

［それもそうだね。…手加減無用、容赦しないからな。本気で蒐集させてもらう］

［上等だ］

「来い、全力で潰してやる」

「こっちの台詞だ！」

ランスに向け発砲。

ランサーで切り払いながら接近してくる。

甘いんだよ。

銃口から飛び出た矢で薙ぎ払う。

隣のビルにたたき付ける。

「この程度！」

だがすぐ立ち上がるがる。

頑丈だな。

『カートリッジロード』

「でやぁぁぁぁぁ！」

ランサーの柄にワイヤーを巻き付け振り回す。

周囲の建物に傷がつき電柱が真っ二つになる。

なんじゃありゃ！？

範囲も威力も目茶苦茶だろ！

「フロイトバスター！」

砲撃を撃つが弾かれる。

カートリッジ付きだと強いな。

「なんの！」

ギリギリまで引き付けて回避。

「くらえ！」

再び発砲。

上空に飛び上がり避けられる。

ワイヤーを引き戻しランサーを回収。そして俺を目掛け投擲する。

危なっ！

バックステップで回避。

だが次の瞬間には俺の目の前にランスがいた。

ドガァ！

俺の衿を掴みビルにたたき付ける。

「は…離…」

「おぉぉぉぉぉ！」

ビルに押し付けたまま上空へと引きずられる。

ガリガリガリ

ビルが削れ凄まじい衝撃に襲われる。

く…くそ、身動きが取れない。内観還元力場のおかげでダメージはほとんど無いがこれはやばい。

衝撃が止む。

どうやらビルを通りすぎたようだ。

「だあ！」

投げ付けられる。

「うお！？」

屋上にある貯水槽にぶつかり身体が埋まる。

こんなもん！

力付くで脱出。

上を見るとランスがでかい魔力の塊を持ち上げてる。

元気球かありゃ？

「ハッ！」

真上へ投げ自身も魔力球の中へ突入する。

…まさか。

『Ｖｏｌｔｅｋｋａ…』

「クラッシュイントルード！」

それブレードの技だろ！

…そういやブレードは訓練で身につけたんだっけ？

ってそんな事考えてる場合じゃない！

紅い隕石のようにボルテッカクラッシュイントルードが迫る。

直撃したらおしまいだ。

ひたすら走るが向こうの方が早い。

「うわぁぁぁぁぁ！」

全力で真上に跳躍。

俺の真下を通りすぎた。

あ…危ねえ…

いや、まだ終わってない。

旋回して再びこちらへ向かって来る。

そうだ、この技はボルテッカを纏ったクラッシュイントルードだ。

身も蓋も無い言い方をすれば超強力な体当たり。方向転換も可能だ。

「くっそぉぉぉ！」

終わった…そう思った瞬間、左腕が引っ張られた。

ランスはそのまま通りすぎ、ビルに突っ込み爆発を起こす。

え？誰だ？

「危なかったな一兎」

「クロノ！」

来たのか？

「彼の相手は僕がやる。今なのはが結界破壊の準備をしている。君も援護に向かってくれ」

なのかが？

「一人で大丈夫か？」

「…すまないが一人でやらせてくれないか？大丈夫だから」

そういや前回の闇の書事件で……

「了解。任せたよ」

「ああ。それと下ろして良いか？目茶苦茶重いんだが…」

P．V．Fは重いからな。魔法で支えてるとはいえきついだろうな。

「落としてかまわねえぞ」

「わかった」

クロノが手を離し俺は落下する。

姿勢を直し着地。アスファルトにひびが入る。

「負けるなよ！」

「僕を誰だと思ってる！」

期待してますよって。

皆の元へと走り出す。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

グォォォォ！

狼形態となったザフィーラが噛み付いてくる。

封雷剣を噛ませ防ぐ。

流石にデバイスをかみ砕くほどの力はないようだ。

「この！」

腹を蹴り追い払う。

「ごめんね。後で拭いてあげるから」

噛み付かれたせいか封雷剣は涎まみれだ。

『ワックスもお願いします』

贅沢だな。

ザフィーラが再び襲い掛かる。

「しつこい！ライド・ザ・ライトニング！」

「ぬっ！？」

とっさにシールドを二重に張る。

一枚は破れたが二枚目は駄目だ。

「本っ当に固いな！」

「我は盾。そうやすやすと貫けると思うな！」

このままじゃじり貧だ。

［ユーノ、まだか？］

［ごめん、転送の準備はできてるけど、空間結界が破れない］

結界か…どうしよ…

［私が壊すよ。スターライトブレイカーならできる。一兎君もこっちに向かってるってクロノ君が言ってたから］

たしかに一兎がなのはの代わりに相手をしてくれれば…

よし、これに賭けるか。

［ユーノ、なのはとタイミングを合わせて転送を］

［了解！］

「こんのー…っ！？」

ヴィータの目の前を何本もの矢が通りすぎる。

「話しは聞いた！なのは、早めに頼むぜ！」

一兎か。じゃあランスの相手はクロノか。

なのはがビルの屋上に立ちレイジングハートを構える。

「レイジングハート、カウント！」

『わかりました。カウント…9…8…7…6…5…4…3…2…1…』

「っ！？」

急になのはがふらつく。

「なの…は…？」

なのはの胸から一本の腕が生え、手には小さな光の球がある。

そして光が小さくなっていった。

「なのは！っああ！？」

駆け付けようとするがザフィーラに突き飛ばされる。

畜生…

『Ｃｏｕｎｔ　ｚｅｒｏ．』

「ス…スターライト……ブレイカー！」

極太の砲撃が結界を貫いた。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤ～

「久しぶりだな執務官」

「…君が闇の書の主か？」

先程投げたランサーを回収する。

「いかにも。勿論蒐集を止めるつもりも、投稿する気もない」

「そうか…ならば、捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで逮捕する」

杖を僕に突き付ける。

「やってみろ！」

クロノに襲い掛かる。

「紫雷一閃！」

上空へ回避しこちらに魔力弾を撃ってくる。
左右に回避しながら追いかける。
「クラッシュイントルード！」
連続で体当たりを繰り出す。
「ぐあ！？」
次々と命中。
ビルにたたき付ける。
「とどめだ！」
ランサーを構え、たたき付けた場所へ向かう。
「スティンガーレイ！」
魔力弾が撃たれる。
ランサーを回転させて防ぐ。
爆煙が上がる。
『Ｂｌａｚｅ　Ｃａｎｎｏｎ．』
「何っ？うわあ！」
直撃。
危うく墜落しかけるが、ギリギリで持ち直す。

「おのれ！」

クロノはビルから抜け出し僕を見下ろしてる。

「なめるな！」

再びクロノ目掛け突撃する。

『まて、そっちは！』

急に身体が動かなくなる。

バインド？設置していたのか？

まずい！

クロノの周りに無数の魔力刃が浮かんでる。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

次々と魔力刃が放たれ、爆発する。

地面に墜落。

身体中が痛むが立ち上がる。

何本か装甲に突き刺さったままだ。

「強いな…」

凄まじい爆音が聞こえた。

なんだ？

見ると桃色の砲撃、おそらくなのはの魔法であろう砲撃が結界を破壊した。

「ここまでだな。守護騎士達にも戦闘を停止させろ」

杖を突き付ける。

ランサーは手元に無い。

でもまだ負けてない。

「フフフ……これで勝ったと思うな」

「なんだと？」

首の発射口を展開する。

「ボルテッカァァァァァ！」

「なっ…！？」

とっさにシールドで防ぐが一瞬で破壊される。

「うわぁぁぁぁぁ！」

ボルテッカがクロノを飲み込む。

「残念だったな」

ランサーを回収し飛び立つ。

［皆、大丈夫？］

［ああ］

［こっちもだ］

［全員無事だ］

［蒐集は？］

［女の子が一人だけですけど、かなりの魔力だったので頁は稼げました］

なのはか…

［よし、急いで帰ろう。はやてが待っている］

［おう！腹も減ったしな！］

［そうだな］

［一旦散っていつもの場所でまた集合］

散開し逃げる。

さて、ここからが本番だ。

絶対にやってみせる！

第３５話　戦いの嵐だ（後書き）

なんだか悪役みたいだ…

第３６話　怪我の手当てはお早めに（前書き）

じわじわと進みます

第３６話　怪我の手当てはお早めに

～戒ＳＩＤ～

僕達は倒れたなのはに付き添って本局まで来た。

ついでに手当てもしてもらい、なのはの病室へと向かってる。

「いや、君達の怪我も軽くて良かった」

「クロノ…ごめんね、心配かけて…」

「俺らよりお前は大丈夫なのか？砲撃の直撃をくらったって聞いたけど」

「直撃って…」

ボルテッカか。

「何…非殺傷設定だったから魔力ダメージだけだ。怪我もたいしたことない」

「なら良いんだけどね」

しかし、完全にやられた。

なのはも蒐集されてしまったし…

病室のドアが開く。

中にはベットに座るなのはと医師がいた。

「ああ…ハラオウン執務官。ちょっとよろしいでしょうか？」

「はい、なんでしょう？」

「こちらへ」

二人が出ていく。

部屋には僕と一兎、フェイトが残る。

沈黙。

非常に気まずいな。

「お前ら黙ってないでさ、何か話せよ。久しぶりなんだしさ」

一兎が沈黙を破る。

「そう…だね……あ、あの…ごめんね。折角の再開がこんなで。怪我、大丈夫？」

「ううん。こんなの、全然。私のことより、なのはが…」

「私も全然平気。フェイトちゃん達のおかげだよ。元気元気」

なのはが微笑む。

フェイトは暗い顔をする。

「フェイトちゃん？フェイトちゃん…あっ！」

立とうとするが、フラつき倒れそうになる。

「なのは！」

フェイトが受け止める。

「あはは…ごめんね。まだちょっとふらふら…」

「うん…」

「…助けてくれてありがとう、フェイトちゃん。それから…また会えてすごく嬉しいよ」

「…うん、私も…なのはに会えてうれしい」

そして二人は抱き合う。

「……あのさ、僕達の事忘れてない？」

「俺、百合に興味は無いんだけどな……」

二人が顔を上げ僕達を見る。

「ふ…ふぇ？ち、違うの！」

「忘れてた訳じゃなくて…あ、あとなのはとは友達だよ！」

「「アハハハハ！」」

必死になっちゃって。

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤ～

クロノに連れられ部屋に入る。
中にはユーノがいた。
「あ…」

「ユーノ君！」

「ユーノ、久しぶりだね」

「うん。二人とも久しぶり」

フェイトがバルディッシュに歩み寄る。

「バルディッシュ…ごめんね。私の力不足で…」

「破損状況は…特にバルディッシュは正直あをまり良くない。今は自動修復をかけてるけど…基礎構造の修復が済んだら、一度再起動して部品交換しないと。レイジングハートもだいぶくたびれてるし…」

なのはもレイジングハートの前に立つ。

「そういえばあの人達の魔法、戒に似ていたね」

「あれはベルカ式だよ」

「ベルカ式…」

「その昔…ミッド式と二分した魔法体型のことだよ」

ユーノの説明から戒が続けていく。

「遠距離や、広範囲攻撃をある程度度無視して…対人戦闘に特化した魔法なんだ。そして優れた術者は騎士と呼ばれている」

「確かにあの人…ベルカの騎士って言ってた」

ユーノが頷き説明を続ける。

「そして…ベルカ式の最大の特徴は、デバイスに組み込まれているカートリッジシステム。儀式で圧縮した魔力を弾丸に込めて…瞬間的に爆発的な破壊力を得る……危険で物騒な代物だな」

「ちょっと待てよ。戒もベルカ式なんだろ？なんで封雷剣に無いん

だ？」

搭載されてても不思議じゃないな。

「そういえば…」

「封雷剣、どういう事だ？」

『たしかに私には搭載されてますが、リミッターで制限されております』

もしかして、これが戒の神に架けられたリミッターなのか？

「解除は？」

『……少し考えさせてください』

それなりに負担もあるしな。

「その件は後だ。まずは二機の修復が優先だ。……フェイト、一兎、そろそろ面接の時間だ。なのはと戒もちょっと良いかい？」

～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤ～

「失礼します」

「クロノ、久しぶりだな」

中には青い制服着た顔の輪郭が髭で包まれてる初老の人が立っていた。

ギル・グレアムか。

「ご無沙汰しています」

それからソファーに座り用意されていた紅茶を差し出された。

「保護監察官と言っても、まあ形だけだよ。リンディ提督から先の事件のことについても、君達の人柄も聞いている。とても優しい子だとね」

「あ、ありがとうございます」

「恐縮です」

フェイトが照れくさそうに頭を下げて言った。

「……ん？なのは君と一兎君は日本人で、戒君はハーフなんだな

？懐かしいな、日本の風景は」

「え？」

「私も、君と同じ世界の出身だよ。イギリス人だ」

「ええ！？そうなんですか！？」

「あの世界の人間は、ほとんど魔力を持たないが…稀にいるんだよ。君達や私のように、高い魔力資質を持った者が」

それからグレアムが資料の載っていたボードを再度見つめる。

「はは…なのは君とは魔法の出会い方まで私とそっくりだ。私の場合は、管理局の局員だったんだがね。もう、五十年も前の話だよ」

「はあ…」

「それに戒君はリリー＝キスク君の息子なんだってね？」

「母をご存知で？」

「彼女の暴れん坊っぷりには手を焼いたよ。だが、だが正義感に溢れた人だ。彼女の子である事を誇ると良い」

……正直、管理局時代のお母さんって黒歴史だね。恥ずかしいよ。

「フェイト君達は、なのは君達と友達なんだね？」

「はい」

「クラスメートでして…」

「約束はただひとつ……友達や、信頼している人を裏切ってはいけない。それができれば、私も君達の行動には何の制限もしないと約束しよう。できるかね？」

「……はい、必ず」

「勿論です」

二人が頷く。

「うむ、いい返事だ」

それから僕達が話を終えて出て行く時、クロノがグレアムの方を向いた。

「提督もう聞き及びかもしれませんが先程、自分たちはロストロギア…闇の書の捜索捜査担当に決定しました」

「そうか…君がか。言えた義理ではないかもしれんが、無理はするなよ？」

「大丈夫です【急時にこそ冷静さが最大の友】。提督の教え通りです」

「ん…そうだったな」

「では…」

クロノが頭を下げて部屋を出て行こうとした。
やっぱりはやてについて一言言わせてもらおうかな。
「あの…グレアムさん…」
「何かな？」
「戒、余計な事は言わない方が良い。警戒させたら危険だ」
……それもそうか…
「今度お会いできたら…母の事聞かせていただけませんか？」
「私の話しで良ければね」
グレアムが微笑む。
言いたい事はあるけど、我慢だ。
僕達は部屋を出て行った。
～ＳＩＤ　ＯＵＴ～

～グレアムＳＩＤ～

闇の書……必ず封印してみせる……

「ギル」

「君か」

「やはりあの生物兵器の少年は覚醒に利用できる。それに後々面倒な事にもなるしな。彼女の目の前で処分する」

利文君か…
やはり彼にも犠牲になってもらわねばならないか…

「私が実行する。お前は気にするな」

「ああ…」

彼が立ち去る。

……すまない二人とも…これしか方法が無いんだ…

第３６話　怪我の手当てはお早めに（後書き）

グレアムの協力は一本誰でしょう

第37話　ようこそ海鳴へ（前書き）

変身はロマンですね

第37話　ようこそ海鳴へ

～利文ＳＩＤＥ～

その日の夜。

勉強も終わり皆でテレビを見てる。

「はやてちゃん、お風呂の支度できましたよ」

「うん、シャマルありがと」

「ヴィータちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね」

「はーい」

「明日は朝から病院ですし…あまり夜更かしをされないよう」

「はーい」

「では、よいしょっと…」

シャマルがはやてを抱き抱える。

「シグナムはお風呂どうします？」

「私は今夜はいい。明日の朝にするよ」

「へえ、お風呂好きが珍しいな」

「偶にはそういう日もある」

「ほんならお先にな」

はやてたちは風呂へと向かって行った。

「……今日の戦闘か？」

「聡いな。その通りだ」

シグナムは服を捲り上げると、腹部に何かで切られたような痣ができていた。

「お前の鎧を撃ち抜いたか…」

「澄んだ太刀筋だった…良い師に学んだのだろうな。武器の差がなければ少々苦戦していたのかもしれん」

「だが、それでもお前は負けないだろう」

「そうそう」

「そうだな……ザフィーラ、お前の相手をした少年はどうだ？」

「なかなか出来る少年だ。経験を積めば化けるな」

「そうか……利文、お前の相手をした二人は？」

一兎とクロノか。

「でかい銃の方はなんとかなったけど…もう一人の魔導師は強かった。不意打ちで勝ったようなもんだ」

そういえば僕はアンフォーギヴン・バリスタのＳ・Ｓを知らない。

警戒しとかなきゃ。

「執務官って言ってたし。実力者なんだろうね」

「だが、主はやての為に負ける訳にはいかぬ」

「これから厳しくなるな」

「うん」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

現在は海鳴市。
アースラメンバーの引っ越しの手伝いに来てる。

「うわー！すごい近所だ！」

「本当？」

「なのはの家って何処？」

「あそこ！あの家が私の家！」

「へえ」

「僕の家はその向かい側だよ」

「そうなんだ。一兎の家は？」

「俺ん家は二人の家と学校の間だから…あの辺かな」

引っ越しも一段落つき、マンションから見える景色を眺めてる。

「フェイトー！」

「アルフ、母さん！」

アルフとプレシアが来た。アルフに車椅子を押されてるプレシアさんは前よりさらに痩せたが、顔色も良くかなり回復したようだ。

「アルフさん、プレシアさん！」

「お久しぶりです」

「二人もこっちに？」

「ええ。フェイトの保護者としてこっちでお世話になる事になったの」

「体調は大丈夫なんですか？」

「万全ではないわ。魔導師としてはもう駄目ね。でもこの半年でだいぶ良くなったわ。孫の顔を見る前に死ねるものですか」

フェイトと俺を見る。

何故俺？

「孫って…母さん／／／」

「良いわねぇ…クロノは浮いた話しも無いから心配なのよ」

リンディさんも来た。

「リンディ…ありがとう。私も連れてきてくれて」

「良いのよプレシア。家族は一緒に居るものなんだから」

いつの間にか仲良くなってるな。

「テスタロッサ家は隣よ。引っ越しは全部終わってるわ」

「本当に悪いわね」

「あの、フェイトちゃん家にもお邪魔しても良いですか？」

「母さん、良いよね？」

「ええ、是非いらっしゃい」

テスタロッサ家はハラオウン家と似てるが（同じマンションだし）、物が少ない事とドッグフードが大量にあった事が違いだ。
アルフが体力が大きく低下し、まだ完治していないプレシアさんの介護をしやすいようにベッド等にも工夫がされてたな。

「ねえフェイト…このドッグフードは？」

「アルフのだよ。地球のドッグフードが気に入っちゃったみたいで。スナック菓子みたいな感じで食べてるよ」

「アルフさん……」

俺も人間形態でドッグフードを食ってるのを初めて見た時は引いたな。

「おーい皆、友達だよ～」

友達？

玄関へと向かった。

「こんにちは」

「来たよー」

来たのはアリサとすずかだ。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

「二人とも来てくれたんだ」

「初めまして…っていうのも変かな？」

「ビデオメールじゃ何度も会ってるもんね」

「でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「うん！」

「私も！」

「いらっしゃい……もしかしてビデオメールの子達かしら？」

「はい、アリサ・バニングスです」

「はじめまして、月村すずかです。フェイトちゃんのお母さんですよね」

「プレシア・テスタロッサよ。それと彼女は親戚の…」

「アルフ・テスタロッサだ。よろしく」

どうやらアルフは基本人間形態で過ごすらしいな。

「「はじめまして」」

「お茶でもと思ったんだけど、生憎引っ越したばかりで何もないのよ。ごめんなさいね」

「そんな、気にしないでください」

「ねえ、それなら翠屋でお茶しようよ」

「賛成」

「俺も」

「「「私も」」」

「じゃあ行こう！」

そんな訳で皆で翠屋に来た。
ついでにリンディさんも挨拶にと付いてきた。

「ユーノ君久しぶり」

「きゅ…きゅー」

すずかがユーノの頭を撫でる。

「そういえばフェイトって学校は？」

「皆と同じ学校に転校する事になったんだよ」

「嘘！」

「俺らと？」

「やったあ！」

いつの間に決まってたんだか…

「皆、ちょっと良いかしら？」

「あ、お母さん」

「なんですか、桃子さん？」

「今夜翠屋で皆の歓迎会を開くのよ。戒君も一兎君もご家族を呼んでくれないかしら？」

「俺ん家も？」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

翠屋でのパーティーは木崎家、高町家、テスタロッサ家、ハラオウン家、佐々木家とアリサ、すずかで行われた。

クロノとエイミィさんは一兎のお姉さんと話していて、リンディさんはお母さんに絡まれてる。

僕達は料理に舌鼓しつつ会話を楽しんでる。

「フェイトちゃんみたいな可愛い娘がお嫁に来てくれるなんて、うちの子には勿体ない位ですよ」

「一兎君みたいな優秀な子は是非婿に来て欲しいですし」

「「……」」

「嫁！」

「婿！」

二人が睨み合う。

「母さん、みっともないから…」

「プレシアも落ち着いてさ…」

アルフと一兎のお父さんが宥める。

「お父さん、一兎の未来が掛かってるのよ！」

「黙りなさいアルフ！テスタロッサ家の存亡を賭けた戦いなのよ。負けられないわ！」

「「絶対に嫁（婿）に来てもらうんだから！」」

なんだか子供っぽいのかよくわからない喧嘩してるな。

「一兎、あれどうにかなんないの？」

「あれ？……親戚に結婚する人なんかいたっけな？」

「あんたの事でしょうが！」

アリサがツッコミを入れる。

「俺？なんでだよ」

「一兎……」

うわ…

「フェイトちゃん、頑張って」

「フェイト？……成る程ね」

「わ…私も応援してるからね」

女性陣が一兎を睨む。

「なあ戒……俺、なんかやったか？」

「気付かないのが悪い」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

夜。ビルの屋上から町を眺める。

「管理局の動きも本格化してくるだろうから、今までのようには行かないわね」

「少し遠出をする事になるな」

「なるべく離れた世界で蒐集しよう。そういえば今、何頁まできてるっけ？」

シャマルが闇の書を開く。

「……３５９頁…この間の白い服の子でかなり稼いだわ」

具体的な頁数は覚えてないが、原作よりかは行ってるはずだ。

「おっし、半分は越えたんだな！ズバッと集めてさっさと完成させよう！…早く完成させて……ずっと静かに暮らすんだ…皆で…」

「行こう。今日は僕とヴゥータ、シグナムとシャマルで行動、そしてザフィーラがお留守番だ」

全員が頷く。

「よし…行くぞ、レヴァンティン！」

『Ｓｉｅｇ.』

「導いて、クラールヴィント！」

『Ａｎｆａｎｇ.』

「やるよ、グラーフアイゼン！」

『Ｂｅｗｅｇｕｎｇ.』

三人がデバイスを掲げる。

「テックセッター！」

三人が騎士甲冑を纏い、僕はテックセットをした。

「さあ…行こうか」

第37話　ようこそ海鳴へ（後書き）

おのれディケイド！

第３８話　日常って良いものだね（前書き）

加速装置ＶＳクロックアップとかやってみたい

第３８話　日常って良いものだね

～利文ＳＩＤＥ～

「おはようはやて」

「おはよう」

朝起きたらすでにはやてが朝食の準備をしていた。

「ザフィーラもおはよう」

「ああ、おはよう」

ザフィーラは昨夜はお留守番だったためか起きていた。

皆は…まだ寝てるか。

シグナムがソファーで寝てるのが見える。

「朝ごはん作るの手伝うよ」

「ありがと」

料理を手伝う。

久しぶりだな。

「二人きりで料理なんて久しぶりやね」

「いつもはシャマルがいるからね」

野菜を切る。

包丁の音が響く。

「……ん…？」

どうやら起こしてしまったようだ。

「ごめん、起こしちゃったね」

「ああ…かまわない」

「ちゃんとベッドで寝やなあかんよ？風邪引いてまう」

「す、すみません…」

立ち上がり毛布を畳む。

「シグナム、夕べもまた夜更かしさんか？」

「ああ、その…少しばかり」

「ふふ…」

明かりがつく。

「あ、シグナム」

シグナムが振り返る。

「はい。ホットミルク、あったまるよ」

「ありがとう…ございます」

カップを受け取る。

［よく起きれたな］

［学校もあるしね］

［そうだったな…］

そうそう休む訳にはいかないからね。

「すみません！寝坊しました！」

シャマルが慌てて台所へ入ってきた。

「おはようシャマル」

「おはよ」

「おはよう。ああもう…ごめんなさい、はやてちゃん！」

「ええよ」

「……おはよう…」

ヴィータも眠そうな表情で入って来た。

「はぁ…めっちゃ眠そうやな」

「……眠い…」

「もう、顔洗ってらっしゃい」

「んあ…ミルク飲んでから…」

「ほら」

ミルクを渡す。

「シャマルも寝癖直したら？」

「え？あ…顔洗ってきます！」

こうしてまた一日が始まる。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

「さてみなさん…実は先週急に決まったことですが、今日は新しい生徒がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

「失礼します」

教室のドアが開きフェイトが入ってくる。

緊張しているせいか、少し顔が朱い。

「あの…フェイト・テスタロッサといいます。よろしくお願いします」

パチパチパチ

教室中から拍手が聞こえる。

さて、ホームルームが終われば早速質問攻めだ。

「ねえ、向こうの学校ってどんな感じ？」

「えと…私、学校には…」

「すげえ急な転校だよね。なんで？」

「ああ…その…色々あって…」

「日本語上手だね。どこで覚えたの？」

「前に住んでたのってどんなとこ？」

「えと…あの…」

こりゃすごいな。
絶えず質問が来るから困ってるね。

「フェイトちゃんすごい人気者」

「でもこれはちょっと大変かも…」

「ここは黒い王子様に任せますか」

「誰よそれ？」

「一兎に決まってるでしょ」

「俺かよ……ったく仕方ねえな」

一兎が人だかりに向かう。

「そこまでだ！転校初日の子をそんなわやくちゃにすんなよ！それに質問は順番にだろ」

「一兎！」

「え？佐々木君の知り合いなの？」

「まあな」

「じゃあ二人の関係を詳しく！」

「えっと…私と一兎は……」

なんだか火に油を注いじゃったかな？

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

放課後、俺達はなのはの部屋にいる。

「ねえ、皆はあの人達の事をどう思う？」

「えと…私はちょっと乱暴に見えたけど、そんなに悪い人には思え

なかったな…フェイトちゃんは、あの剣士の人と何か話してたよね？」

「うん、不思議な感覚だったんだけど…悪意みたいなのをちっとも感じなかった……二人は？」

「僕もなのはと同感かな。そういえば一兎は主と戦ったんだよね？どうだった？」

「一言で言えば…必死だったな。焦ってるようにも見えたし」

「そっか……もしかしてフェイトちゃんがジュエルシードを集めてたのとと同じような理由なのかな？誰かの為に闇の書の完成を目指してるとか」

そういやなのはは知らないんだっけな。本来の理由を。

「それはわからないね。可能性は無いとも言えないけど…」

「闇の書の完成を目指してる目的とか教えて貰えたら良いんだけど…話しができそうな雰囲気じゃなかったもんね」

「強い意志を固めちゃうと、周りの言葉って中々耳に入らないから。私も…そうだったしね」

ジュエルシード事件を思い出したのだろう。少し暗い顔をする。

「でも、言葉をかけるのは…思いを伝えることは…絶対無駄じゃないよ。言葉を伝えるのが、戦って勝つことなら、迷わず戦える気がするんだ」

「フェイトちゃん…」

「そうだよ。今は正面からぶつかり合うしかないよ」

「それしかないな」

俺達にできる事はこれしかない。
とにかく戦う。全力で。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

先生達の間で風邪が流行ってるらしく今日の午後は隣のクラスと合同で体育になった。

隣のクラス…そう、原作メンバーのクラスだ。

各クラス2チームに分かれてドッジボールの試合をする。

向こうのAチームは戒、なのは、すずかで、Bチームは一兎、フェイト、アリサだ。
僕はAチームなので向こうのAチームと試合する。
すずかが一番のくせ者かな。戒は多分大丈夫だろう。

「諸星、頼んだぞ！」

「任せて！」

スポーツは得意だからかクラスメートに期待される。
これは結構嬉しい。

「行くよ！」

先攻はこっちだ。
まずは運動神経の悪いなのはを狙わせてもらう。

「そら！」

「キャ！？」

当たり。勿論手加減してるからたいしたことない。

「ごめん」

「大丈夫、僕が仇をとるから」

戒がボールを拾う。

「たしか…諸星君だっけ?覚悟してもらうよ」

「かかってこい!」

「おりゃ!」

結構速い。身体能力は高いな。

でも常識レベルでだ。

ボールを受け止め投げ返す。

勿論本気だ。

「うわっ!?」

受け止めきれず落とす。

「木崎君、アウト」

「嘘でしょ……まさか…」

戒が外野に移動する。

そして試合が続きどんどん内野が減ってきた。

ついには僕とすずかの一騎打ちになってしまった。

「凄いね、諸星君って」

「月村さんもね」

流石は夜の一族…でもクラス対抗だし、負けるつもりは無い。

「おりゃあ！」

「ええい！」

もの凄い速度でボールが行き来する。

負けるものか！

「ふん！」

「っ！？」

これも受け止められたか…

「せえのっ！」

ど真ん中直球。

止める！

だが掴めずボールは腕に弾かれ飛んでいく。

「諸星君アウト」

負けた！

ははは、駄目だったか…

「いやあ、まいったよ」

「楽しかったね」

たまにはこういうのも良いな。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

……なんだよ、出鱈目にも程があるだろ。

そういやあいつ生物兵器だったな。

どうりですずかに対抗できた訳だ。

［一兎、君はランスの正体知ってるんだよね？］

どうしたんだいきなり？

［知ってるぞ］

［もしかして諸星君？］

……気付いたか。

［そうだ。諸星利文…あいつがテッカマンランスだ］

［やっぱね。あの身体能力でもしかして、と思ったんだけど］

［黙ってて悪かったな］

［良いよ、これはこれで面白かったし。……信用できるんだよね？］

［勿論だ。今は敵だけど、事件が終われば友達になれるさ］

［そっか……まあ今は戦うしかないね。皆に黙ってるのは悪い気がするけど］

［下手したら最悪の結果になるからな］

知らない振りをするしかない。

モロトフからはやての存在が知られれば、まずい事になるかもしれないしな。

A's終了のクリスマスまで刻一刻と近づいていく。

俺達は無事に終わらせる事ができるのだろうか？

第３８話　日常って良いものだね（後書き）

マーチのカートリッジどうしよ

第３９話　新しい力？……持病が…（前書き）

久しぶりに発症しました

第３９話　新しい力？……持病が…

～利文ＳＩＤＥ～

さて、市街地の上空。僕達の目の前には巨大な結界が見える。

「強層型の捕獲結界…」

「ごめんなさい……私のせいでザフィーラが…」

「シャマルのせいじゃないよ」

シャマルとザフィーラが管理局に見つかり結界に捕まりそうな所、ザフィーラがシャマルを庇い一人結界に取り残されてしまったらしい。

「だが、このままではまずいな。ヴィータも呼ぶか？」

「いや、はやてへの言い訳が思いつかないし、考える時間も無い。僕らでやろう」

シータとレヴァンティンから空のカートリッジが排出される。

「皆、行くよ」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

なのはが完治しレイジングハートとバルディッシュの修復も終わった矢先、武装局員が守護騎士二人を発見。内一人を強層結界に捕らえたらしい。

一兎、なのは、フェイトと共に結界内へと転送される。

そこにはクロノと青い服装の青年、ザフィーラがいた。

「この人数でってなんだかな…」

流石に五対一ってのは酷いような気が…

「仕方ないだろ。こっちも必死なんだ。やるぞ！」

全員が各々のデバイスを掲げる。

「封雷剣！」

「マーチ！」

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「「「「セーットアップ！」」」」

僕と一兎は今まで通りだ。
だけど二人は何かが違う。

『セットアップ、認識しました』

『新システムのチェック開始』

「え？こ、これって…」

「今までと…違う？」

二人の身体が魔力の帯に包まれる。

『二人共、落ち着いてよく聞いてね！レイジングハートもバルディッシュも、新しいシステムを積んでるの！』

「新しい…システム？」

『その子たちが望んだの。自分の意思で…自分の想いで！呼んであげて。その子たちの新しい名前を！』

二人は自分の相棒を見つめる。

『Ａｂｎｏｒｍａｌｉｔｙ　ｎｏｎｅ．Ｇｅｔ　ｓｅｔ．』

『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．』

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

『『Ｄｒｉｖｅ　Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．』』

バリアジャケットが展開される。

デザインも微妙に変わってる。

「こりゃ凄いな」

「うん。負ける気がしない」

僕達はビルの屋上に立つ。

「私たちは戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

「闇の書の完成を目指してる理由を！」

二人が話し合いを求める。

「何か理由があるなら話してくれ」

「何故こんな事を？」

「……」

ザフィーラは無言で構える。
どうやら話し合う気はないらしい。
「聞く耳持たずか…」
「予想通りだな」
全員が構える。
ドォォォォォン！
突如結界を外から破り二つの影が現れた。
「っ！シグナム！」
「それにテッカマンランスも」
「あの子はいないんだ…」
ヴィータがいない？
何故？
［原作とは少し違うね］
［だがやる事は変わらない］
二人が立ち上がりこちらを睨む。
「皆、ごめん。彼女と一対一で」

シグナムとか…

「うん、お願い」

「じゃあ僕も一対一でね。彼とも決着付けたいし」

「俺となのはでランスの相手か」

決まりだ。

「おあああああああ!!!」

え?

「えええええ!?」

「なっ!?」

ランスが腕からワイヤーを伸ばし、なのはとフェイトを連れていってしまった。

……け…KYだ…とんでもなく空気読めないやつがいる。

「あいつ…まさか……」

「ちょ、やばいんじゃない?」

「負けは有り得ないな」

はぁ？

［あいつの特性でな。かませ犬な行動をとっちまうんだ］

［かませ犬？］

たしかにランスはかませ犬キャラとして有名だけど……まてよ？
たしか二人はデバイスが強化されて初の戦闘だ。

［まさか……それ大丈夫なの？今じゃなくて味方になった時］

［俺に質問しないでくれ……とにかく残りの二人を近づけなければ勝てる］

［了解！］

シグナムとザフィーラの前に立つ。

「お前らの相手は」

「僕達だ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

……やっちまったぁぁぁぁ！

二人ともカートリッジ付いてるから、もしやと思ったけど…

負け確定じゃない！

これだからかませ犬は！

空気読めよ僕！

ワイヤーを解き、二人と対峙する。

「決闘などさせんぞ」

「……貴方が主の…」

「テッカマンさん、何故こんな事を？」

「フン、話した所で君達には理解できまい。金髪の少女よ、君の魔力も貰う」

ランサーを構える。

「負けません」

「話し合えばわかるはずです！私達が勝ったら教えてください、理由を！」

「やってみろ！これでも喰らえ！」

テックレーザーを放つ。

二人は上空に飛び上がり避ける。

『マスター、カートリッジロードを命じてください』

「レイジングハート！カートリッジロード！」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

なのはの魔力が急速に上がる。

『Ｓｉｒ．』

「うん、私もだね」

フェイトもバルディッシュを構える。

「バルディッシュ、カートリッジロード」

『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

フェイトもカートリッジを使う。

やばい、冷や汗が止まらない。

「アクセルシューター！シュート！」

レイジングハートから十二個の魔力弾が放たれる。

「え？」

自分でも驚いてるようだ。

『コントロールをお願いします』

「うん！」

目を閉じて集中。
魔力弾が僕を取り囲む。

「プラズマランサー…ファイア！」

さらにフェイトの周りの魔力弾が針のようになり僕に向かって放たれる。

「ちい！」

ランサーでアクセルシューターを切り脱出する。

だが、四方八方から二人の魔力弾が迫る。

誘導性が高くて避けきれない。

『まとめて薙ぎ払え』

「わかってる！」

ランサーにワイヤーを括り付け振り回す。
魔力弾をまとめて切り、全て破壊する。
『Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ.』
フェイトはバルディッシュを変化させ魔力刃を展開。
僕に接近してくる。
「ハッ！」
速い！ランサーを回収する暇なんかない。
左手でシールドを展開するが紙のように切断される。
「うお？」
バックステップで回避。そのまま距離を開ける。
「おのれ！ボルテッカァァ！」
首からフェイトに向かってボルテッカを撃つ。
だがその間になのはが割り込みプロテクションを張る。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ.』
直撃、そして爆発。
「他愛もないな……何！？」

無傷でした。

「……ねえ、フェイトちゃん。私、あの人をおもいっきりぶっ飛ばさなきゃいけない気がする…」

「奇遇だね。私もそう思ってたんだよ」

ちょ！助けて！

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

『『Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ.』』

二人がカートリッジをロードし、レイジングハートの先端に桃色の、フェイトの左手に黄色の環状魔法陣が展開する。

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ.　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ.』

「ディバイン……」

「プラズマ……」

身体に力が入らない。

「こんのお！」

なんでまたボルテッカ撃とうとしてるんだ僕は！

逃げなきゃいけないでしょ！

「バスター！！！」

「スマッシャー！！！」

二つの砲撃が放たれる。

こうなりゃやけくそだ！

「ボルテッカァァァ！！！」

紅い砲撃を放ち応戦する。

ドゴォォォォ！

砲撃同士がぶつかる。だがボルテッカは掻き消され、二人の砲撃が僕に迫る。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

直撃。視界が光に包まれる。

大爆発が起こり、墜落する。

幸い高いビルの屋上に落ちたので大事にはならなかった。

こんな所で特性か……命に関わるとこしまゃなかったからまだましだけど、これ下手したら死ぬぞ。

本気を出せないのがこんなにきついなんて…

ランサーを杖代わりに立ち上がり全速力で逃げる。

「待って！」

待つ訳ないでしょ！

ビルの影に隠れる。

ここまで来れば一安心かな。

「利文君、大丈夫？」

シャマルが駆け付けてきた。

「大丈夫だ。ごめん負けちゃった」

「今は逃げるのが先よ。早く結界を破壊しないと…」

そうだ、ここで闇の書の頁を消費させる訳にはいかない。

カートリッジは？充分にある。

身体もダメージが有るがあと一発位なら撃てる！

だがシャマルの背に杖が突き付けられる。

クロノだ。

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方達を逮捕します。抵抗しなければ弁護の機会があなたにはある。同意するなら武装の解除を」

「執務官、また君か！」

「追い詰めたぞ闇の書。さあ、投降するんだ」

この位置じゃ攻撃できない。くそ！

「フッ！」

「がっ！？」

仮面を着けた男性がクロノを蹴り飛ばす。

グレアムの使い魔！

……癪だけど一応感謝しておくか。

「くっ……仲間？」

「あ、あなたは…？」

「今から仲間が結界を破壊する。そのスキに脱出しろ」

え？ちょっと待って、【仲間が】？誰が？どうして？

「何者だ？」

「質問する余裕があれば守護騎士達にも伝えろ。時間が無い」

ちっ……

［皆、今から結界が破壊される。逃げる準備を］

［［応！］］

一体何をするんだ？

「よし……準備ができたらしいな」

結界の中心付近の建物から強い魔力を感じる。
あいつか？

「ギャリック砲！」

巨大な砲撃が上空へ放たれる。

ギャリック砲？しかもでかい！

結界を貫通。開いた穴から結界が消滅していく。

「逃げろ」

「……今は礼を言っとく」

シャマルと脱出する。

まさか……ベジータ？グレアムに味方してるのか？
とにかく頁は減ってないのは助かった。

グレアム側にも転生者がいる。ある意味最悪だ。

警戒しとかなきゃ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～???ＳＩＤＥ～

結界が破壊され全員脱出。

やはりモブの結界ではこの程度か。

［終わったわね。脱出して］

［すでにしている］

リーゼロッテか……

［しかし一人も蒐集できなかったとは……］

原作通りとはいえ、ここで蒐集できてれば早く完成させられたものを。

「仕方ないわ。今回は逃がした方が得策だったんだし」

闇の書の餌にするために王蛇を殺したのに…

予想通りミラーモンスター程度なら勝つ事ができたがこれではな。

転生者を蒐集させれば闇の書にあいつらの魔法を記録できたものを

……

まあ良い、時間はまだある。

フフフ……

第３９話　新しい力？……持病が…（後書き）

やっぱりかませ犬だとこうなります

第４０話　過去、現在、未来（前書き）

どうぞ

第４０話　過去、現在、未来

～利文ＳＩＤＥ～

「皆ごめん…」

「油断したな…次は頼むぞ」

帰宅後、夕食が終わりはやてが寝た後皆に説教されました。

やっぱりか……流石に二人もパワーアップしちゃ止められないか…

本気でどうにかしないとね。

「まあまあ、反省してるみたいだしその辺にしておきましょ。それより仮面の男性だけど…」

「助けてくれたんだっけ？でもなんか胡散臭いな」

前のジョセフの事を思い出したんだろう。

「少なくとも当面の敵ではなさそうだけど…」

「だが警戒しておいた方が良い」

多分ベジータの能力だろう……原作知識が有るはずだから…アンチか？

まさか…でも敵である可能性は高い。いや、もしかしたらグレアムを内側から潰すためにいるかもしれない。

まだわからないな…情報が少ない。

「だが、管理局の連中もこれでますます本腰を入れるだろうな」

「あんま時間も無いしな。急がねーと」

十二月も半分を過ぎた。

クリスマスまで後数日……勝負はこれからだ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

あの後マンションに戻り、なのはとフェイトは新しいデバイスについての説明を受けた。

俺も頼んでみた所、リンディさんが用意してくれるようだ。

戒は相変わらず解除されないらしい。

「問題は、彼らの目的よね」

「ええ、どうも腑に落ちません。主が蒐集に参加しているのも初めてですし、彼らは…主の指示だけでなく、自分たちの意思でも完成を目指しているようにも見えますし」

「ん？それって何かおかしいの？闇の書も、要はジュエルシードみたいにすっごい力の欲しい人が集めるものなんでしょ？主のためにあの子たちが頑張るのもわからなくないし、主も力を得るために動くんじゃない？」

「少し違うわアルフ。守護騎士がいるのだから、わざわざ自分の身を危険にさらす必要が無いのよ。主が出てくるなんて考えにくいわ。よほど焦ってるのかしら？」

「そういえばたしかに…」

焦るか……たしかにプレシアさんの言う通り、今まではそうだったのだろう。だが今回は違う。

はやての命がかかっているからな。モロトフも必死なんだろうな。

「それに闇の書はジュエルシードのように制御ができるようなものじゃないんだ」

「完成前も完成後も破壊にしか使えない…少なくとも、それ以外に使われたという記録は、これまで一度もなかったわ」

「それからもうひとつ。あの騎士たち…闇の守護者の性質だ。彼ら

は人間でもなければ使い魔でもない」

フェイト、なのは、エイミィさん、アルフが驚く。驚かなかった俺と戒は原作知識で知ってたし、プレシアさんも資料か何かで知ってたのだろう。

「闇の書に合わせて魔法技術で造られた疑似人格。闇の書の主の命令にただ従う…それだけの存在のはずだった」

「擬似生命体って……」

フェイトのやつ…まったく。

［馬鹿な事は考えるな］

［一兎…］

［お前はお前だ。心があって身体がある…な？］

［うん……いつか、なのは達にも話せるかな？］

［大丈夫だ。皆そんな事でお前を嫌ったりしないよ］

［……ありがとう］

［礼を言われる程じゃないさ］

話す……か。原作と違いプレシアさんの暴露が無かったしな…

「じゃあモニターで説明するね」

エイミィさんが部屋を暗くしてからモニターを目の前に出した。
そのモニターには闇の書と守護騎士達が映っていた。
エイミィさんは説明を始めた。

「守護騎士たちは闇の書に内臓されたプログラムが、人間の形をとったもの。闇の書は、転生と再生を繰り返すけど…この四人は、闇の書と共に様々な主の下を渡り歩いている」

「意思疎通のための対話能力は、過去の事件においても確認されてるんだけどね…感情を見せたって例は今までないの」

「たしかに、闇の書と主の護衛…彼らの役目はそれだけのはずよ」

「でも、あの帽子の子は怒ったり悲しんだりしてたし…」

「ザフィーラも話した感じ、機械とかそんなんじゃなくて感情があるようだったし」

「シグナムからも、はっきりと人格を感じました。成すべきことがあるって…仲間と主のためって…」

「主のため…か…」

クロノが呟く。

「あの…もしかしてフェイトちゃんみたいに誰かの治療とかそういう理由で完成を目指してるのかな?」

「僕もそう思う。闇の書が破壊にしか使えないのを知らないのかも

しれないし。知ってても制御できる自信があるのかもしれない」

まああながち間違いじゃ無いんだがな。

「可能性は否定できないけど……まあ、それらについては調査に当たっている局員からの情報を待ちましょうか」

「転移頻度から見ても彼らがこの付近にいるのは確実ですし……それになのはとフェイトのおかげでランスの装甲のかけらを回収できました。それから何か情報が得られるかもしれません」

いつの間に…

［ねえ、たしかテッカマンって生物兵器だよね？］

［ああ］

［人間じゃないのがばれればまずいんじゃない？］

［本人も覚悟の上だろ］

［心配だなぁ…具体的に言うとスカ博士とか……］

……色々と不安だな。

「それにしても、闇の書についてもう少し詳しいデーターが欲しいな…」

クロノはじっと黙り込んでふとユーノを見つめた。

「どうしたの？」

「そうだ……ユーノ、明日から少し頼みたいことがあるのだが」

「ん？いいけど……」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

翌日、学校の昼休み。

「な、なんだかいっぱいあるね…」

「……」

フェイトと一兎は手に持っている薄い雑誌を読んでいた。

「まあ、最近の携帯はどれも同じような性能だし…見た目で選んでいいんじゃない？」

「でも、やっぱメール性能のいいやつがいいよね」

「カメラが綺麗だと、色々楽しいんだよ」

「う～ん…」

フェイトは真剣に雑誌を見つめる。

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょ？」

「操作性も大事だよ」

「防水機能とかも結構便利だよ」

そういうのは頑丈だしね。

「外部メモリ付いていると、いろいろ便利でいいんだけど…」

「そうなの？」

「うん。写真とか音楽とか沢山入れておけるし…そうそう、メールに添付してお友達に送ることもできるの」

「あ～そうだよね～」

「けっこう使えるよね」

「うん、いいよね」

「俺はどれでも良いんだけどな」

お察しの通りフェイトと一兎の携帯電話を買う話しをしてる。

あ…一兎は親にはまだ早いからと言われて持って無い。
フェイトが買うって話したら、簡単に許可が出たけど。
ただお揃いにしなさいって言われてたな。

「フェイト、無理に俺に合わせないで好きなので良いんだぞ」

相変わらず鈍感だな。

「無理なんかじゃないよ。私は一兎とお揃いのが良くて……」

「まあフェイトが言うなら……」

どうにかならないのかな…

第４０話　過去、現在、未来（後書き）

前回ヴィータがお留守番だったのでなのははまだ名前を知りません

第４１話　衝突する力（前書き）

本日も行きます

第４１話　衝突する力

～戒ＳＩＤＥ～

ただ今ハラオウン家で夕食の準備中だ。

リンディさんは一兎のデバイス、マーチの強化とアースラの試験航行に出かけており、隣の部屋ではプレシアさんとアルフがランスの装甲の解析をしている。

「アルカンシェルか……あんな物騒なもの、最後まで使わずにすめばいいんだけど…」

「クロノ君もいなくて…エイミィさんが指揮代行だそうですよ」

「責任重大だね」

「実質、アースラのＮｏ．３だしな」

「はは…それもまた物騒な。ま、非常事態なんて…早々起こるわけが…」

エイミィさんがカボチャを手に取る。

すると部屋中にアラートが鳴り響き、目の前には『Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ』と赤い文字が表示された。

……

「なあ、こういうのをフラグって言うのか？」

「えと…エイミィさん…ドンマイ…」

モニター室に行き、エイミィさんがモニターを操作するとモニター画面にはシグナムとザフィーラの姿があった。

「文化レベルゼロ。人間の住んでない、砂漠の世界だね…」

「結界を張れる局員の集合まで、最速で四十五分…ああ…まずいなぁ…」

エイミィさんはモニターを操作しながらあれこれと頭を悩ませてるようだった。

「…エイミィ、私が行くよ」

フェイトがエイミィさんを見て言った。

「フェイトが行くなら俺も行く」

え？

「待ってよ一兎はマーチがいないじゃないか、僕が出るよ」

「大丈夫だ、クロノから簡易デバイス借りてるし」

［それにヴィータ達がいるはずだ。ザフィーラの相手をしたいのはわかるが、戒にはそっちを任せたい］

［わかった。気おつけて］

「…うん、お願い」

「うん」

「任せとけ」

二人が頷く。

［たしかフェイトが蒐集されるのって…］

［阻止するさ。絶対］

［前回の結界も他の誰かが破壊したし…あまり頁を稼がれちゃまずい。一兎も蒐集されないようにね］

［戒もな］

頼んだよ。

「なのはちゃんと戒君はここで待機していて」

「「はい」」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

ザフィーラ目掛けバリスタを発砲。

「っ！？」

障壁で弾かれる。

「よう。悪いが今日は俺が相手だ」

「あの時の嘱託魔導師か…」

「銃だからって卑怯だなんて言うなよ」

「……」

ザフィーラが下り、構える。

フェイトとの距離は…少し遠い。

なんとかして近づかなきゃな。

少しずつ近づくしかないな。

「さて…やるか」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

二人が戦闘を開始した直後にまたアラートが鳴り響いた。

「な…もう一ヶ所？」

エイミィさんがモニターを操作すると、モニター画面にまた別の世界でランスとヴィータが飛行をしている姿が映される。
そして、ランスの手には闇の書が握られていた。

「本命はこっち！？なのはちゃん、戒君！」

「「はい！」」

テッカマンランス…一兎が敵わなかった相手だ。気を引き締めなきゃ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

アンフォーギヴン・バリスタをフルオートで発砲する。
何発かは障壁に刺さり爆発する。

「ちっ！」

ザフィーラが飛びのく。

少しずつフェイト達の所に近づいてきた。

「お前達は何故こんな事するんだ?正直悪人には見えないんだが」

「答える必要は無い…」

…話しもしてくれないか。
少し鎌を掛けてみるか。

「テッカマンランスが本当に主か？」

ザフィーラの耳が反応する。

「今までの主は蒐集に参加してなかった……だが何故かランスは参加している…」

「我々に残された時間は少ない…余計な話しをしても無駄だ！」

飛び蹴りを繰り出す。

バリスタで防ぐが目茶苦茶痛い。

「こんのお…フロイトバスター！」

砲撃が直撃する。
いや障壁で耐えた。

「…なるほど。一カ所に集めるつもりか」

フェイトとシグナムにだいぶ近づいた。もう目視できる距離だ。

「…さあな」

このまま離れたくないな。
この距離をどう維持するかだ。

フェイトの方を見る。
仮面の男がフェイトの胸を貫いてる。
「あの男…」
「フェイト！」
もういたのか！
蒐集は…まだか。
「させるか！」
フェイトの元へ行こうとする。
だがザフィーラが立ちはだかる。
「悪いがあの男を利用させてもらおう」
仕方ない…使うか。
どの道使うつもりだったんだ。
少し長い時間になるが、しかたない。
マガジンを精神弾に入れ替え、アンフォーギヴン・バリスタのレバーを【S・S】にセット。
アンフォーギヴン・バリスタが割れ内部が露出、そしてその中心では光の粒子が球体の形をとって回転する。
「っ！？」
異様な力を察知したのか障壁を展開した。

残念だが防御は無意味だ！

「スペシャルショット発動！」

引き金を引く。

するとバリスタ中心部の球体が凄まじい光を放った。

思わず目をつぶる。

そして目を開け、徐々にに視界が正常になる。

目の前のザフィーラが止まる。

それだけじゃない。

地面も風も。俺とフェイト以外の物全てが止まった。

アンフォーギヴン・バリスタのスペシャル・ショット。

虚数力場を展開し、対象の時間を小刻みに戻して時間が止まってるのと同じ状態にする能力だ。

強力だが、発動中は止まってるものを傷つけられないし、消耗も激しい。

しかも時間を操作するのだから、多用するのも危険だ。

フェイトに近寄る。

「フェイト！大丈夫か？」

「……一兎？これって…」

苦しそうに答える。

「説明は後だ」

ゆっくりリンカーコアを体内に戻すように、フェイトを腕から引き抜く。

「う……」

「大丈夫か？」

倒れそうなフェイトを支える。

「大丈夫。これって一体…」

「アンフォーギヴン・バリスタのＳ・Ｓで時間を止めてる」

「時間を？凄い…」

「撤退するぞ。俺もお前も戦える状態じゃない」

「でも、今がチャンスじゃ…」

「攻撃しても消えるし、捕縛はできるがこの人数を捕まる余力も無い。それにこれは消耗も激しいから、逃げられたら追えないし反撃にあう」

すでに頭痛と眩暈がする。

「そろそろ限界なんだ」

「……わかった。行こう」

その場から立ち去る。

ある程度離れたら解除し、転移した。

逃げるか…フェイトが蒐集されなかっただけましか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「ヴィータ、ストップ」

僕達の目の前に白い服装の二人組が現れた。

「てめーら…」

「てめーじゃないよ。戒＝キスク＝木崎だ」

「私は高町なのは。あなたの名前は？」

「名乗るのが礼儀だ。教えてやれ」

「……ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士…ヴィータ」

「ヴィータちゃん…」

やっぱりこの二人が来たか…

ランサーを召喚する。

「すみませんが話し聞かせ「断る」ええ？」

「なにか私達にも手伝えるかもしれないし」

「うるせえ！管理局の人間なんて信用できるか！」

「私達…管理局の人じゃないもの。民間協力者」

「うっせえ！結局管理局に協力してるじゃねえか！」

もう…逆ギレしちゃって…

「落ち着けヴィータ。そうだな…協力してくれるなら、戒君の魔力を頂戴しようか」

「ごめん、それはできないかな」

やっぱり。

［利文、どうする？］

［なのはって子の相手をして。時間稼ぎで良いから。戒を蒐集する］

［へますんなよ］

わかってますって。

「ならば力付くで行く！」

「なのは、ヴィータをお願い！」

戒が離れ、僕が追う。

「そういえば初めてだね諸星利文君」

「一兎から聞いたんだ」

「うん」

「そうか…悪いけど全力だ。蒐集させてもらうよ」

ランサーを突き付ける。

「お断りだ！」

戒が剣を構える。

ガキン！

刃がぶつかり合う。

「そら！」

力任せに奮う。

「ぐっ！」

やっぱり身体能力は常識レベルか。

一兎よりやりやすい。

「紫電一閃！」

「ヴェイパースラスト！」

魔力の篭った斬撃がぶつかる。

「だあ！」

今度は押し切られたか…でも！

「テックレーザー！」

魔力弾を乱射。

戒は飛び回り避ける。

そこだ！

右腕からワイヤーを射出。戒を捕まえる。

「何!?」

そのまま引き寄せ、剣と首を掴む。

「とどめだ!ボル…」

首に魔力を収束させる。

「っ!?ライトニングジャベリン!」

ボルテッカを撃つ直前、首に雷が突き刺さる。

発射と同時に爆発。

「あ…ぐ…」

暴発させた?

戒は?

少し離れた場所に、ボロボロだが立っていた。

『今ので発射口の三つが爆発。威力も半分以下だな』

ちっ…

「ハア…ハア……なんて威力だよ…」

「暴発させるなんてね…やられたよ」

嫌だな。かなり痛い。
でも戦えなくはない。
それに戒の方がダメージが大きい。

「今度こそとどめだ」

カートリッジをロードし、ワイヤー付きのランサーを振り回し始める。

「…後ろ」

え?

「どはあ?」

背中に衝撃が走る。

「ヴィータ?」

「悪い、てこずっちゃって…」

そんな…あれ?戒は?

さっきいた場所に戒がいなくなってる。

「利文、あれ!」

あれ?

見ると砲撃魔法の発射体制に入ったなのはと、手で魔法陣を描く戒がいた。

……まさか…

「ディバイン…バスター！」

「セイクリッドエッジ！」

げぇ！

桃色の砲撃と雷の剣が襲いかかる。

だが僕達に当たる事はなかった。

「あ…あんたは…」

「あの時の！」

仮面の男が目の前にいた。

「逃げろ。その傷は見た目以上に深い」

な…

首に手を当てる。

手の平が真っ赤になる。

出血が酷い。

「おい、やべーぞそれ」

……ここまでか。

「逃げよう」

転移魔法を発動する。

「待て……っ！？」

仮面の男がカードを投げると二人にバインドが掛けられる。

グレアム達に転生者がいるとなると、彼らの行動がわからなくなる。
最終的に敵になるのか…それとも…

考えるのは後だ。血が止まらない。
早くシャマルに手当してもらわなきゃ。

第４１話　衝突する力（後書き）

あれ？戒が強い？

どうしてこうなった

第４２話　新しい決意（前書き）

今回、設定や原作キャラとか色々暴走しますので注意

第４２話　新しい決意

～一兎ＳＩＤＥ～

アースラ会議室。

俺とフェイト、戒になのは、プレシアさん、アルフ、クロノ、リンディさん、リーゼ姉妹がいる。

「それで、フェイトさんの蒐集は阻止できた、と…」

「時間停止能力か…嘱託魔導師試験の時に使おうとしてたのはそれか」

「まあな。でも軽々しく使うもんじゃ無いってのが良くわかったよ」

実はまだ頭痛がする。

「そしてなのはさん達の方にも仮面の男が現れた…」

「逃げられちゃいましたけど…」

「ごめんなさい…」

俺達も撤退するしかなかったからな…やられたよ。

「皆が出動してしばらくして、駐屯場の管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで、指揮や連絡がとれなくて…ごめんね、私の責任だ」

申し訳なさそうに俯く。

「んなこたないよ。エイミィがすぐシステムを復帰させたからアースラと連絡がとれたんだし…仮面の男の画像も残せた」

画面に戒となのはの攻撃を防いだ仮面の男が映る。

「でもおかしいわね、向こうの機材は管理局で使っているの物と同じシステムなのに…それを外部からクラッキング出来る人間なんているものなのかしら？」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで…いきなりシステムをダウンさせるなんて…」

エイミィさんも立ち上がる。

「内部…かしら…」

プレシアさんは気づいたか…

「つまりスパイがいるって事かい？」

「ええ。じゃなければこうも簡単にできるとは思えないわ」

「だけどそれならあんたが真っ先に疑われるわよ」

リーゼアリアが睨む。

「承知の上での発言よ」

場が凍りつく。

「その事は後でにしましょ。プレシア、テッカマンの装甲の解析結果を教えてくれないかしら？」

ナイスリンディさん！

「そうね。アルフ」

「はいよ」

アルフがキーボードを操作すると、ランスの画像と訳のわからないグラフ等が映された。

「実を言うと未知の物質が多くてね…わかった部分からの憶測になるけど…」

「手抜きしてるんじゃないの？」

「あたしらは真面目にやってるっての！」

「いい加減にしないか！…すみません、続けてください」

「…一言で言えば、これは…多分生物の外骨格ね」

あ～やっぱり。

「それって虫とかの？」

「そうよ。鎧のようなデバイスかと思ったけど…どうやら身体の一部みたい。少なくとも金属ではないわ」

「人間じゃ…ない？」

「だとすると主では無い可能性も出てきたな。外部からの協力者かどうかはわからないが…」

「なるほどね…でも主じゃないのなら何故？」

「仮面の男の仲間なんじゃない？」

「違うと思います」

「私も。本当に知らなさそうでした」

「かえってややこしい事になってない？結界を破壊したやつもわからないんだし」

結界を破壊したやつか…

［転生者だよね］

［だな。なんで向こうに付いてるかはさっぱりだけど］

原作知識はあるはずだからな…余計わからない。

過去の闇の書の被害者なのか？

「謎が謎を呼ぶとはよく言ったものね…エイミィ、アースラの航行に問題はないわね？」

「ありません」

「うん。では予定より少し早いですが、これより指令部をアースラに戻します。各員は所定の位置に！あ、あと一兎さんは後でマーチを返しますからデバイスルームに行ってください」

「はい」

強化が終わったか…よし、終わりは近い。気合い入れなきゃな。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

リビングで仮面の男について話し合ってる。

「助けてもらった…って事で良いのよね？」

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

そう…完成を望んではいる。だけど転生者の存在で理由がわからなくなっている。

「完成した闇の書を利用しようとしているのかもしれんな」

「ありえねえ！だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん！」

「完成した時点で、主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果があるはずもないしな」

「まあ、家の周りには厳重なセキュリティが張ってあるし…万が一にもはやてちゃんに被害がいくとは思えないけど」

「念のためだ。留守を増やした方が良いかもしれんな」

「私はできるだけはやてちゃんの傍にいるようにするわ」

「頼む」

はやてに危害を加える可能性も高い。
できるだけ僕もいた方が良いかも…

「ねえ、闇の書を完成させてさ…はやてが本当のマスターになってさ…それで、はやては幸せになれるんだよね？」

「なんだいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私たちが、それを

誰より知ってるはずでしょ？」

「そうなんだよ…そうなんだけどさ……あたしは何か、何か大事なことを忘れてる気がするんだ」

悪意ある改変…か。

暴走に立ち会った事は殆ど無いはずだし、覚えて無いのは仕方ないか。

「とにかくシャマルは主の傍にいるようにしてくれ。あとは交代で護衛に付くのが良い、蒐集は残った三人で行う」

ペースは落ちるけど…流石にシャマル一人は不安だ。

「わかっ……」

ガタン！

何かが倒れる音がした。

上？

まさか…

「はやての部屋からだ！」

全員ではやての部屋に駆け込む。

「はやて！？」

「しっかり！」

中に入るとはやてが胸を抑えて苦しそうにしていた。

「病院！救急車！」

「ああ！」

「下手に動かさないで！そっとしておいた方が良い！」

「う、うん」

はやて……

「うん、大丈夫みたいね。よかった」

「はい、ありがとうございます」

病院に着きどうにか落ち着きを取り戻したようだ。

「はあ…ほっとしました」

「だから、ちょぅ眩暈がして胸と手ぇが攣っただけ言うたやん。も

う…みんな大事にするんやから」

「本気で心配したんだよ」

「でも、頭打ってたようですし…」

「何かあっては大変ですから」

「はやて、よかった」

はやてがヴィータを撫でる。

「まあ、来たついでに検査とかもしたいから少しゆっくりしていってね？」

「はぁい」

はやてがあんまり気乗りじゃないみたいだ。

「さて、シャマルさん、シグナムさん…ちょっと」

「はい」

「ん？」

それからシグナムとシャマルが石田先生と病室から出ていった。

それからしばらくすると二人が病室に入って来た。

そしてはやての入院が告げられた。

「入院？」

「ええ…そうなんです」

「……」

はやてとヴィータが不安そうな顔をした。
入院って聞いちゃ普通不安になるよね。

「でも検査とか、念のためとかですから心配ないですよ。ね？」

「はい」

シグナムが花瓶を飾る。

「悪いの？」

「麻痺が広がっているらしい。時間も無くなってきた」

そうか…

「そろそろお迎えかな……（ボソ）」

……

「そんな事言わないでよ」

「へ？えと…その…」

「聞こえてたよ。さっきの」

「あ…あはは。その…冗談やって」

「そんな質の悪い冗談言わないでよ！なんでそんな事言うんだ！」

止めてよ…そんなの…

「利文君？病院だし、少し静かに…」

シャマルが宥めるが止まらない。

「本当は苦しいんでしょ？我慢しないでよ。僕達を頼ってよ…」

はやての傍に寄る。

「トシ…君……う…ああ…」

涙目になり僕に抱き着く。

「苦しい…怖い…嫌や！死にたくない！まだやりたい事が沢山あるんや！」

ずっと我慢していたのが爆発したのだろう。

はやてが泣きながら叫ぶ。

「大人になって、トシ君と結婚して…いつか子供もできて…そんな普通の幸せが欲しいだけなのに！嫌や、私はまだ死にたくない！」

「はやて…」

はやてを抱きしめる。

そうだ。我慢しなくて良いんだ。
苦しい時は苦しいって言って良いんだ。

「大丈夫。皆がいるから…」

死なせはしない。
必ず。

「…主、お話があります」

「シグナム！？」

「全て話そう。全てだ」

それからシグナムからはやての病気の原因が闇の書にある事、僕達が蒐集を行ってた事が話された。

「はやて…ごめん」

「私達のせいで…」

「申し訳ございません」

「ずっと黙っててごめん」

「……謝らんといて。私にも原因は有るんやし、皆は私を助けよう

としてくれてたんやろ？」

「でも…」

「人様の命を奪うような事もしてへんし。…うん、決めた」

決めた？

「どうしたの？」

「闇の書の主として命令するで。闇の書を完成させる事…そんで、皆でまた平和に暮らすんや…」

「おう！任せろ！」

「主……この命に架けても！」

「はやてちゃん！」

はやてが完成を望む…いや、何も世界征服をする訳でもないんだ。

はやてはただ病気を治したいだけ。悪い事じゃない。

償いは全て終わってからだ。

「皆、頑張ろう！」

うん…絶対に助ける。

「ねえ…何か忘れてないかしら？」

忘れてる？

「そういや…」

「うん。何か…」

「忘れてる気がするな…」

何だっけ？

「……そういえばザフィーラは何処におるん？」

「「「「あ…」」」」

第４２話　新しい決意（後書き）

原作のはやてって生への執着が低い気がします

多分ヴォルケンがはやてが我慢してるのを止めてれば、原作でもはやてが完成を望んでたと思います

第４３話　悪夢の聖夜（前書き）

Ａ－Ｓも終盤です

第４３話　悪夢の聖夜

～利文ＳＩＤＥ～

はやてが蒐集を望んだためか時間ができ、蒐集速度は上がった。

護衛に人数を裂くから遅くなりそうな気がしてたんだけどな…嬉しい誤算かな。

学校が終わり、はやてのお見舞いの帰り。

家の前でやっかいな人に出会った。

「あれ？諸星君？」

「月村さん？」

月村すずかど鉢合わせてしまった。

「あれ？ここってはやてちゃんの家じゃ…」

「ああ、僕ははやての家にお世話になっていて、ここに住んでるんだ」

「じゃあはやてちゃんの言ってた【トシ君】って諸星君の事だての？」

「うん。諸星利文…だからトシ君って訳。じゃあ君がすずか？」

「月村すずか。よろしくね。違うクラスだったから名前とかわからなかったね」

「ははは、以外と世間って狭いね。今日ははやてに？」

「うん。会いに来たんだけど留守で…はやてちゃんは？」

う…まぁ、僕の正体は転生者の二人しか知らないし、皆に警戒するよう言えば良いか。

「実は入院していて…検査入院なんだけどね。色々あってしばらくかかりそうなんだ」

「え？ど、何処の病院？」

「海鳴大学病院だよ。お見舞いに来るなら今度案内する」

僕が連れて行けば、その間に皆を離れさせられるし。

「じゃあ、明日お願いできるかな？」

「わかった。明日ね」

そうして彼女は帰って行った。

さて…皆に知らせなきゃ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

すずかからはやての入院を聞いた。
もうそんな時期か…

「ねえ、私達行っても良いかな？紹介してくれるって話しだったしさ」

「この人数で押しかけて良いのか？」

「でも良いと思うよ、ね」

「ありがとう」

そして放課後。

「諸星君！」

「月村さん…っとあれ？佐々木に…皆？」

紫の髪をした少年、諸星利文がいた。

「友達も連れてって良いかな？はやてちゃんに紹介したいの」

「ああ、良いよ」

「良かった」

僕達は簡単に自己紹介をし病院へ向かった。

トントン

「はやて、入るよ？」

「トシ君？ええよ」

皆で病室に入る。

「「「「「こんにちは」」」」」

「こんにちは！いらっしゃい！」

「おじゃまします。はやてちゃん大丈夫？」

「うん。平気や…あ、皆座って」

「ほら、椅子。あとコート架けはこっちだよ」

お見舞いは特に何も無く終わった。

自己紹介の時、はやてが僕達を少し変わった目で見ていたような…気のせいか。

今の所は原作通り。

このまま行けばはやても助けられる…はずだ。

このまま上手く行くと良いけど…

猫姉妹に転生者…大丈夫、利文もその時には味方になってくれるはず。

皆で力を合わせて解決するんだ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

皆帰ったが、僕はまだ残ってる。

「帰ったね」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、戒君、一兎君…皆ごめんな……」

あらかじめ四人が管理局の魔導師だとは話しておいた。

やっぱり罪悪感はあるようだ。

「全部終わったら一緒に謝ろう。ちゃんと謝って……きっとわかってもらえるよ」

「せやな…」

なんか楽しい話題は無いかな…そうだ。

「そういえばもうすぐでクリスマスだね」

「せやな。それまでに完成できそう？」

「ギリギリだけど…少し難しいかな？でも、その日位は家に一旦帰れるように石田先生に頼んでみよう。先生も一緒にパーティーってのも良いし」

「皆でか……トシ君、ごめんな、私のせいで…」

「大丈夫だって。謝らなくて良いよ」

「…ありがとう」

あと少し…

絶対に助ける。

何があっても。

はやてを！

それから数日。

僕は学校を休むようになり、蒐集にずっと参加している。

はやてにも学校に行くよう言われたが、時間が無い。

シャマルも侵食の速度が上がってるって言ってたし。

僕は蒐集対象の巨大な蛇のような生き物を見上げる。

「魔力を…貰うぞ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

ユーノから闇の書についての報告が来た。

…今までの主が信じられないな。
なんでわざわざ危険な物にしたんだ？

自分も破滅するような代物に…

「明日はクリスマス・イブだな」

「うん。サプライズパーティーをするって張り切ってたね」

明日か…

「俺達…大丈夫かな？」

「やれるさ。とにかく一番警戒するのは転生者だ。あいつが何を考えてるのかさっぱりわからない」

「原作知識がある分余計にな…考えてもしかたない。明日は勝負所

だ」

「利文…はやてと恋人同士らしいね。必死なんだろうな」

この前のお見舞いで知ったんだが、驚いたな。

「だったら尚更だ」

「ああ。彼の為にもね！」

決着だ。

負けられるものか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

クリスマス・イブ。

今日は全員ではやてのお見舞いだ。

いや、ザフィーラはまだ来ていない。こっちへ向かってる途中だ。

「はやて…ごめんね。あまり会いにいけなくて」

「ううん、元気やったか？」

はやてはヴィータの頭を撫でる。

「めちゃめちゃ元気！」

ヴィータは嬉しそうにはやてに言った。

コンコン

「どうぞ」

「「「「こんにちは！」」」」

っ！？

あの六人が入ってきた。

「すずかちゃん？それに…」

はやても動揺している。

「今日は皆さんお揃いですね」

「はじめまして」

「「あ…」」

「……」

「…はじめまして」

なのはとフェイトが固まる。

あとの二人は特に動揺はしてなさそうだ。

シグナム達はなのは達を睨む。

とくにヴィータ。少し落ち着きなよ。

病室の中でしばしの沈黙と緊張感が漂った。

「あ、すみません…お邪魔でした？」

アリサが微妙な空気になっていることを感じたのだろう。

「あ、いえ…」

「いらっしゃいみなさん」

「なんだ、よかった…」

「と、ところで、皆今日はどないしたん？」

すずかとアリサが笑顔で頷く。

「「せーの！」」

人が手に架けたコートを退かした。

手にはプレゼントらしき箱があった。

「「サプライズプレゼント！」」

「今日はイブだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント♪」

「ほんま？ありがとう！」

はやてが箱を受け取る。

「皆で選んできたんだよ」

「後で開けてみてね」

「うん」

はやても嬉しいのだろう。四人の事を忘れてるようだ。

「ああ、みんな…コートを預かるわ」

「お手伝いします」

シャマルが皆の傍に歩み寄ってコートを預かり、クローゼットの中にかける。

「念話が使えない……通信妨害を？」

すでにシャマルが妨害をしてるのか…手際が良いね。

「シャマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら造作もない」

シグナムはフェイトのコートを受け取りながら答えた。

「……」

そしてヴィータはなのはをじっと睨んでいた。

まったく…

「えっと…そんなに、睨まないで？」

「睨んでねえです。こういう目つきなんです」

「ヴィータ、嘘はあかん。なんや悪い子はこうやで」

はやてがヴィータの鼻をつまんで上下左右に動かします。

二人ともヴィータの様子に呆然としていた。

「…お見舞い…してもいいですか？」

「……ああ…」

まあ、断る訳にもいかないしね。

「諸星…」

「僕達も…」

「うん。騒がなければ」

一兎と戒のコートを受け取る。

それから数時間たち、空も暗くなっていた…皆ははやてのお見舞いを済ませ、病院を出た。

そして病院の屋上。

僕達は四人と対峙した。
ザフィーラも到着してる。

「はじめまして。本当の闇の書の主…八神はやていいます」

はやてもいる。
本当は病室にいて欲しかったんだけど…

一兎と戒も驚いてる。

まぁ…当然かな。

「は、はやてちゃんが…闇の書の、本当の主…」

なのは達は驚きを隠せないようだ。

「もう少しなんや…皆には悪いけど、邪魔しないでくれへん?」

「はやてちゃん…どうして！？」

「シャマル…」

「はい」

シャマルが結界を張る。

頃合いか…

「テックセッター！」

僕もテックセットする。

「諸星がテッカマンランスか…」

「そうさ。…君達で完成させられるな」

「ほんま？……そっか…皆、ごめんな」

ヴィータとシグナムがデバイスを起動させる。

「はやてちゃん止めて！」

「なんでこんな事の！？」

なのはとフェイトが呼び掛ける。

「皆に私の何がわかるんや…」

「はやて？」

「普通に学校に行けて、友達と遊べて…私は生まれてから一度も歩いた事が無い！学校にも行った事無い！あんたらに私の気持ちがわかるもんか！」

「は…はやてちゃん…」

「「……」」

はやては泣きながら叫ぶ。

「いつ死ぬかわからん私の気持ちがわかるんか？人並みな生活も幸せも望めないんや！私はまだ死にたくない！こんな苦しい思いをしながら過ごすのは嫌や！普通に生きたいだけや、そんな事も望んじゃあかんのか！？」

「だけど闇の書を完成させちゃ、君が…」

「なら私に死ねって言うんか？このまま闇の書に食い殺されるなんてごめんや！」

皆黙ってしまった。

「はやて…」

少し言いすぎじゃないか？
そう思いはやてを宥めようとする。

「そうだ、死んでしまえ」

っ！？

「誰…グハ！？」

凄い衝撃が襲い掛かる。

「利文？なっ！？」

「え？」

「バ…バインド？」

全員にバインドが掛けられる。

「な…なんや？何が起きとるの？」

「この人数だとあまりもたん。早く頼むぞ」

「またてめぇらか！」

猫か？うわ！？

何者かに踏み付けられる。

「大人しくしていろ」

緑の身体に黒い斑点、甲虫のような羽……セル！？

そうだ、アニメだとベジータの技も使っていた！

ヴォルケンリッターのリンカーコアが摘出された。

「うっ……あああぁぁぁぁぁ！！」

「あ、あ…あぁ……あ…あぁぁぁぁ！」

「ぐ…う……あぁ…があぁぁぁぁぁ！」

「ぐぅ…く……がはぁぁンぁぁ！」

「最後の頁は不要となった守護騎士自ら差し出す。これまでも何度か、そうだったはずだ……」

『Ｓａｍｍｅｌｎ』

闇の書のページがめくれていき、そこに文字が浮かびあがると同時に四人のリンカーコアが蒐集されていく。

そしてンカーコアが萎縮すると同時に、その身体が希薄なものになって行き、最後には、足元から霧散して、消滅していった。

「止めろ！」

「くそ、離せ！」

「い…嫌…止めて…」

はやては今にも倒れそうだ。

「お前、何考えてるんだ！止めさせろ！」

「黙れ。すぐに終わる」

くそ！離せ！

「なん…で…ヴィータ？シャマル？シグナム？ザフィーラ？」

はやては茫然と仮面の男を見上げる。

「さて、仕上げだ」

仕上げ？

するとセルは僕の首を掴むと投げ飛ばした。

「八神はやて、貴様は闇の書に選ばれた…貴様が望めは望む程人々が不幸になるのだ！お前のせいだ！」

「わ…私の…」

「はやて、聞くな！」

こいつ、許さん！

「ボルテッカァァァ！」

セル目掛けボルテッカを撃つ。

だが当たる直前にセルの姿が消えた。

何処だ？

「利文、後ろだ！」

後ろ？

後ろを振り向く、その瞬間。

「かめはめ波！」

青い光りが視界を被い、僕の意識は消えていった。

第４３話　悪夢の聖夜（後書き）

グレアム側の転生者はセルでした

ゲームやアニメでデスビームやギャリック砲を使ってましたね

第４４話　闇を喰らう者（前書き）

誤字修正しました

第４４話　闇を喰らう者

～一兎ＳＩＤＥ～

なんだよ…これ…
転生者はセル？しかも完全にあいつらの味方？
は！モロトフは？
かめはめ波の直撃で…

「おい！しっかりしろ！」

「トシ君！トシ君！嫌ぁ！」

ピクリとも動かない。
そんな…

セルがモロトフに近づき、頭を掴む。
だらりと身体が力無く垂れる。よく見ると胸部装甲も潰れ、全身にひびが入ってる。

「こいつもお前が闇の書の主でなければこんな目にあわなかった…」

「止めて…お願い…」

「諸星君！しっかりして！起きて！」

「くそ、離せ！」

全員がバインドから逃れようともがく。だが予想以上に頑丈で抜け出せない。

『駄目、込められた魔力が凄い……多分あいつも力を貸してるんだと思う』

ふざけんな！

「死ねぃ！」

モロトフを上空に投げ、両手から魔力弾を連射。次々と着弾し爆煙が上がる。

「フハハハハ！！！」

「あ……ああ…」

ドシャ

煙の中からモロトフが落ちる。

肩の装甲も失い、全身のひびは増え、あちこちから血が流れている。

「利文！」

「諸星君！返事をして！」

「クハハハハハハ！」

こいつ！絶対許さねえ！

「嫌ぁぁぁぁぁ！！！」

はやての足元に白い魔法陣が展開、目の前に闇の書が浮かぶ。

『Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ，Ｍｅｉｓｔｅｒ．』

俺達がバインドから脱出した時にはすでに遅く、魔法陣が中心から黒く染まっていった。

膨大な魔力の光がはやてを包み、空中に身体を浮かべる。

「我は闇の書の主…この手に…力を」

はやての左手に闇の書が現れそれを握る。

「封印…解放」

『Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ．』

そしてはやての姿が変わっていく。

長い銀髪、紅い瞳、黒い四枚の翼。

闇の書の管理人格の姿へと。

「一体…幾度こんな悲しみを繰り返せばいい？」

管理人格が涙を流しながら呟きセルを睨みつける。

猫姉妹はすでに逃げたようだ。
何故こいつはまだここにいる？

「……主よ……あなたの望みをかなえます」

足元に魔法陣を展開する。

「愛おしき人を…そして守護騎士達を傷つけた者を……今、破壊します」

セルは口元に笑みを浮かべながら管理人格をジロジロと見ている。

［一兎、今のうちに利文を。彼女の狙いはセルらしい］

［おう］

モロトフに近づく。
酷い…死んでないよな？

『……佐々木…一兎だな？』

「シータ！モロトフの容態は？」

『一応生きてる……だがこのままでは危険だ。できるだけ早く治療しなければ…』

治療って…ユーノがいれば応急処置位はできたが…
なんで俺は治癒魔法の類を覚えてとかなかったんだ！

モロトフを担いでその場を離れる。

「…スレイプニール、羽ばたいて」

『Ｓｌｅｉｐｎｉｒ．』

管理人格の背にある四枚の翼が大きくなり、空へと羽ばたきセルを見下ろす。

「ク…ククク…ハハハハハハ！！！」

「何を笑っている…」

「破壊するぅ？不可能だなぁ！貴様は俺様に傷一つつけられん！」

なんだこの自信は…

どうしてこんなに余裕なんだ？

「……滅べ。刃生みて…血に…」

するとセルが両手を額にかざす。

あれは…

「全員目を潰れ！早く！」

「太陽拳！」

まばゆい閃光が辺りを照らし目が眩む。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

眩しい…何も見えない。

「目くらまし？逃げるつもりか！」

「逃げなどせんわ！闇の書、もらった！」

「っ！？な…う…あぁぁぁ！？」

ズルズルと何かを飲み込む音がする。

嘘だ…まさか…こいつ…

視界が戻ってくる。

上空には黒い四枚の羽が生えた白いセルが、気色の悪い笑い声を上げながら浮かんでいた。

「最高にハイ！ってのはこういう事か！闇の書の力、素晴らしい！

笑いが止まらん！！！」

吸収…した…？

「な…何が起きたの…」

「はやてちゃん？え？」

二人は何が起きたのかさっぱりなようだ。

「馬鹿なあいつらは、俺様が闇の書に滅ぼされた生物の生き残りだと言ったら簡単に信じ…ククク……おかげでいとも簡単に闇の書を吸収できたわ！これで俺様は強靭！無敵！最強！」

そして僕らを見た。

「さて…この力を貴様らの身体で試させてもらう！」

指を鳴らすと結界が発生する。

やっぱりか！

「一兎、利文をお願い！」

「任せろ！」

一兎がデンジャラス・ラビットを展開。トラウマ・シェルを展開しながら、利文を担いで離れる。

「ブラッディダガー！」

セルの周囲に大量の血のような赤い剣が現れる。

「ぶるぁぁぁぁぁ！」

回避不可能な程の速度で放たれる。

着弾と同時に爆発。

なんとか防げたけど…

「はぁぁぁぁぁ！」

『Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ』

フェイトがバルディッシュを振り下ろす。

「フェイト！離れて！」

こいつは接近戦の方が強いはずだ！

余裕たっぷりに魔力刃が人差し指一本で止められる。そのままピクリとも動かない。

「なっ！？」

「弱いなぁ…」

左手をフェイトに向ける。

「ディバインバスター！」

なのはが砲撃を放つ。
だが片手で防がれた。

まだだ！

「でりゃぁぁぁぁ！」

ディバインバスターが消えた瞬間に切り掛かる。
だがまたしても指一本で止められる。

「そういえば貴様は蒐集されてなかったな…」

フェイトを蹴り飛ばし僕の首を掴む。

「ああ！？」

「フェイト！ぐ！？」

なんて馬鹿力だ！

「できれば全員蒐集されて欲しかったが…仕方ない！」

尾の先端が大きく開き、僕を飲み込もうと口を開く。

「な！？」

そして気持ち悪い感触が全身を被った。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

「戒！そんな…」

「戒君！？う、嘘…」

「冗談だろ？」

戒が吸収された？

二人とも茫然としている。

『皆、戒の反応は消えてないよ。でも早く助けないと…』

生きてるのは一安心だが…どうやってだよ。

「さて…次は貴様だ」

俺を指差す。

こいつ、全員吸収するつもりか？
そんな事されたら……想像もしたくないな。

「だがその前に掃除をせねばな」

セルが右手を掲げると、目の前にミッドチルダ式の桃色の魔法陣が展開されていき、その魔法陣に向けて魔力が集中されていく。

「おい…あれって…」

「スターライト…」

「ブレイカー？」

収束された魔力がどんどん膨らんでいく。

「逃げるぞ！とにかく距離を稼ぐんだ！」

「なのは！」

「ありがと！」

フェイトがなのはを抱き抱え飛び立ち、俺もモロトフを担ぎながら全力疾走する。

あいつ、まだ魔力を集めてやがる。

『サー、左方向３００ヤード、一般市民がいます』

一般市民？

『こっちでも補足したよ！案内するね』

マーチとバルディッシュの案内で一般市民の元へ向かった。

いた。二人の人影が見える。

「あの、すみません！危ないのでそこでじっとしててください！」

なのはが走っていた二人に声をかけた。

「え？」

「今の声って…」

その人影はアリサとすずかだった。

そういえば二人ともいたんだった！

「なのは…？」

「フェイト…ちゃん？」

「あ…」

アリサとすずかはなのはたちのバリアジャケット姿を見て驚いるよ

うだ。
なのはもフェイトも結界の中でアリサとすずかに会うとは思わなかったのか、かなり驚いていた。
「なのは！フェイト！来るぞ！」
「その声、もしかして一兎？」
魔力の収束を終えたセルが発射体制に入った。
「スタァァライトォォォ……ブルゥエィカァァァァァ！！！」
スターライトブレイカーが放たれ、街中に着弾し、そこから大きな光の波が俺達に向かってきた。
「「え！？」」
アリサとすずかが突然現れた光の波を見て目を見開く。
［フェイトちゃん！アリサちゃんたちを！］
［うん！］
フェイトは頷いてバルディッシュのカートリッジをロードした。
「二人共！そこでじっとして！」
フェイトに言われてアリサとすずかは手を握りあった。
『Ｄｅｆｅｎｃｅｒ　Ｐｌｕｓ．』

アリサとすずかの周りに金色の障壁が張られる。
そしてフェイトは信号機から飛び降りて二人の目の前でシールドを張って待機した。

「レイジングハート！」

なのははカートリッジをロードしてレイジングハートを構える。

『Ｗｉｄｅ　ａｒｅａ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.』

なのはの前に防御壁が張られた。

「トラウマ・シェル、最大出力！」

両脇に追加されたボックスマガジンのカートリッジからロードする。

できる限り頑丈にした。
耐えてくれ！

凄まじい衝撃が俺達を襲う。

もう少しだ…頼む！

［エイミィ！アリサとすずかが…結界内に、取り残されてるんだ！］

『余波が収まり次第、すぐに避難させる！なんとか耐えて！』

次第に余波が収まる。

二人は地面にヘタレこんで抱き合って震えていた。

「二人共、もう大丈夫だよ」

フェイトがアリサとすずかに声をかけた。

「すぐに安全な場所に運んでもらえるから、もう少し…じっとしててね」

「皆…」

「ちょっと…！？」

二人の足元に魔法陣が広がって二人はあっという間に何処かに転送された。

「見られちゃったね…」

「うん…」

「仕方ないさ。とにかく今は戒とはやての救出と、あいつをどうにかしないとな」

セルがニヤニヤと下品な笑みを俺達に向けていた。

第４４話　闇を喰らう者（後書き）

この展開は結構前から考えていました

第４５話　終わる夢　（前書き）

後書きに詳しい容姿を書きました

第４５話　終わる夢

～一兎ＳＩＤＥ～

「スタンエッジ！」

無数の雷の魔力弾だ放たれ、次々とトラウマ・シェルに着弾する。

防ぐのに精一杯で反撃できない。
かといってモロトフを置いて行く訳にはいかない。

「アクセルシューター！」

「ハーケンセイバー！」

フルドライブの二人の射撃魔法も直撃するが、蚊が刺した程度にしか感じてないらしい。

鼻歌まじりに二人に向けて砲撃を放つ。

「駄目、全然効いてない！」

「早く二人を助けなきゃいけないのに…」

チートにも程があるだろ。

『皆、もう少し頑張って。もうすぐクロノ君達が到着するから！』

それはものすごくありがたいし、到着まで生きてはいるだろう。
だけどそれでも勝てるか？

時間を止めるか？

いや、時間を稼ぐか捕縛できるだけだ。
解決策にはならない。

記憶介入は？

当てられても弾かれる可能性がある。

考えろ。
とにかくまずは二人を吐き出させる事。
そうすればかなり弱体化させられるはずだ。

でもどうやって？

「う…あ…」

モロトフの身体が僅かに動いた。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

ここはどこだ？
暖かい？

目が重いな…

なんとか目ん開ける。

ここは病院？

点滴が見える。
それに口には酸素マスクが付いている。

「目がさめたのね！よかった…」

あれ？この女性は…

「私がわかる？自分に何が起きたのかわかる？」

身体を持ち上げる。

胸には包帯が巻かれており、非常に息苦しい。

「ここは…」

「病院だよ。大丈夫?撃たれた傷、痛い?」

「撃たれた?」

「貴女、銃で撃たれたのよ」

そうだ…

「思い出した…」

友達とアメリカに旅行中、コンビニに入ったら強盗に合って……私、撃たれたんだ…

「思い出したの?よかった……今人を呼ぶからね」

彼女はナースコールを押した。
すぐに看護師と医師が来て説明を受けた。

どうやら私は胸に一発撃たれ重傷だったらしい。

でも助かって良かった…

医師達が出ていき、友人と二人きりになる。

「……大変だったね」

「強盗に合って、しかも撃たれちゃうなんて…人生最悪の日よ」

死ぬかと思ったわ。

「買い物していたら急に男が入ってきてさ…」

「店員を脅して…それで私達はこっそり逃げようとした所…」

「パン！だもんね」

そうだあいつは私に向かって撃ったんだ。
一発目で撃たれたのはわからなかったけど、二発目でようやく自覚したんだよね。

二発？

「ねぇ…あの医者さぁ、私は一発撃たれたって言ってたよね…」

「そうだよ」

「おかしいな……私【二発】撃たれたはずだよ」

まて…色々おかしい。
第一ここはアメリカの病院のはずだ。なぜネームプレートが日本語で書かれているの？
病室も六人用なのに私しかいない…

よく考えて…そして思い出して…

そうか…

「これ…夢か」

「そうだよ。夢だ」

私…いや、僕はセルに飲み込まれ吸収されたんだ。

これは僕が死ななかったらというＩＦの状況だ。

かなりおかしいけど。

「もう良いんだよ。あんな物語の中で生きるなんて。ここでもう一度人生をやり直そう」

やり直すか…

「ごめん。僕はあの時死んだんだ。そして今はあの世界で生きてる」

僕だけじゃない。一兎も利文も。

そして皆。

そうだ生きてる。一人の人として。

そうか……僕は最低だな。

ようやくわかったよ。

なんでハーレムなんて目指していたのかを…

僕は彼女達を物として見ていたんだ。

自分の欲望を満たすための。

結局、僕自身もゲームをやるような感覚で生きていたんだ。

現実を見ていない。

本当に愚か者だな…

人を物のように考えて…自分自身もだ。

「だったら、もうここに居れば良いじゃない」

「駄目だ、外では皆戦ってる。負けてしまえば沢山の人が犠牲になってしまう」

「でももう関係無いじゃない」

「関係無くない。友達がいるんだ……だから、ごめん。行くよ」

ベットから降りる。

すると僕の身体が子供の姿…戒の姿になる。

「そっか…残念だなぁ」

「ごめん」

「別に良いよ。ほら」

彼女が剣のアクセサリーを手渡す。

「封雷剣……また、一緒に戦ってくれる？」

『勿論ですとも』

ありがとう。

「頑張ってね」

「前世ではありがとう。楽しかった」

「私は夢よ」

「でも言わせてほしい」

友達だから。

「ふふ…じゃあね」

彼女の身体がだんだん薄くなり、消えていった。

「戻ろう、皆の所へ。今度はちゃんと現実を見て…やり直そう」

封雷剣を起動させ構える。

『……全リミッター解除』

封雷剣の先端の突起が肥大化し、リボルバー型のカートリッジになる。

……ありがとう。

「さあ！ここから出るぞ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～はやてＳＩＤＥ～

目が覚めると何も無い暗い所におった。

何やってるんやろ…

沢山の人に迷惑かけて、ヴォルケンリッターの皆も消えて、トシ君まで…

「主…」

長い銀髪の女性が現れた。

この人は…

「せや……闇の書、管制人格……」

「はい……申し訳ございません。あの男に取り込まれてしまうなんて…」

そんな…私は…ただ生きたかっただけなのに…

「この男は防衛システムと完全に融合しています。主を食いつぶすか、世界を破滅させて自壊するまで、止まらないはずなのに…なぜ理性を保てる？闇の書の闇を…」

駄目や、このままやと皆が…

私のせいで…

せや、こんな事、私は望んでいない。

皆に謝らなあかん。

トシ君も絶対に生きとる。

私は自分の罪を償うんや。

「ここから出るで。そして皆で謝るんや。闇の書の悲劇もここで終わらせる」

「ですが…」

「覚醒の時、今までの事、少しだけわかったんよ。自分が望むように生きられない悲しさ…少しだけわかる」

「主…」

「皆辛かった、悲しかった…でも私は自分の事しか考えてなかったんや……だからもう誰にも悲しい思いはさせへん。我が儘はおしまいや」

管理人格の頬に両手が触れる。

「名前をあげる。もう闇の書とか、呪いの魔導書とか言わせへん、私が呼ばせへん。私は管理者や。私なら出来る、ここから一緒に脱出する事が」

「無理です。私の一部…防御プログラムは完全に取り込まれています」

「繋がっとるんか。それなら…うん……止まって…」

止められる。絶対。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

身体中が痛い。
一体全体どうなってるんだ？
誰かに担がれてる？
「一兎…？」
「気づいたか？」
「今…どんな状況？」
一兎から説明を受けた。
セルが管理人格ごとはやてを吸収し、さらに戒まで吸収した！？

「な…くそ！こいつ！」

ランサーを杖代わりに立ち上がろうとする。
全身に激痛が走る。

「馬鹿！そんな身体で…」

「はやてを助ける、戒もだ」

「今のお前じゃ無理だ！」

「無理じゃない！」

バーニアを点火し、セル目掛け飛び立つ。

「セルゥゥゥゥ！」

「諸星君！？」

「まだ生きてたか！」

ランサーを構える。
血の味が…臭いが無くならない。

「はやてを…皆を解放しろ！」

「解放ぅぅぅ？死にぞこないの虫の話しなど聞けんなぁぁぁ」

「虫一匹殺せないやつがほざくな！」

その言葉にセルの眉毛が微かに反応する。

「そういえば貴様は蒐集されてたな…ならば貴様の技で消してくれるわ！」

セルが両手を突き出す。

っ！？

急いで障壁を展開する。

「ボルテッカァァァ！」

……あれ？

「な…何故だ？……っ！？馬鹿な、力が抜けていく？」

セルが急に苦しみ出す。

何がおきたんだ？

『皆、聞こえとる！？』

「はやて！」

無事だったんだ。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

「よかった！」

『皆！それにトシ君、大丈夫やったんか！？』

「なんとか生きてるよ」

『せや、闇の書の力を抑えとるんやけど…今のうちにこいつをどうにかして！』

『動きを止めて！内側と外から同時に攻撃を叩き込むんだ！』

その声…

「「戒！」」

「戒君！」

よかった…

「だったら話しは早いな」

セルの身体に三色のバインドが架けられる。

「クロノ！」

「それにアルフ！」

「ユーノ君も！」

クロノ、アルフ、ユーノが現れた。

三人とも魔法陣を展開しバインドを架ける。

「貴様程度に止められると思うな！」

セルがバインドを破壊しようともがく。

「「させない！」」

なのはとフェイトもバインドを架ける。

「行け！モロト…利文！」

一兎もだ。

よし！

「戒、合わせてよ！」

『任せて！』

セルの目の前に立つ。

そして首に魔力を込める。

「ボル…」

『ライジング…』

くらえ！

「テッカァァァ！」

『フォース！』

紅い砲撃が直撃。さらに腹部がはち切れるそうに膨らみ、そして青い雷が溢れる。

今だ！

開いた腹の穴に両手を突き刺し、中にワイヤーを射出する。

どこだ……いた！

二人を掴み引きずり出す。

「が…き…貴様…止め…」

顔面を踏み付け一気にワイヤーを巻き取り腕を抜く。

「ぷはぁ！」

「げほ…ごほ…」

二人を救出した。
はやてはすでに騎士甲冑の姿だった。
「戒君！はやてちゃん！」
「戒！はやて！」
「二人とも生きてるか！？」
「大丈夫だよ」
「皆…ありがとう…」
よかった…
「トシ君…こんなに傷だらけに…」
「大丈夫だよはやて。…それよりあいつだ」
セルが苦しそうに僕らを睨む。
背中の羽は消えたが身体は白いままだ。
「俺様が最強のチートになれたのに、邪魔しやがってぇぇ！」
ふざけてるのか？
『全リミッター解除』

もう本気で怒った。。

「貴様ら……許さん！許さぞ！」

許さない？

馬鹿を言うな。

「許さないのはこっちの台詞だぁ！！！」

『Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ．』

僕の身体が紅い光に包まれる。

「うぉぉぉぉぉ！！」

胸部装甲が再生、さらに胸の中心の突起の下にさらに二つ増え、三角に並ぶ。

そしてその横の両胸に紅い三つの球体、ボルテッカ発射口が形成される。

肩の装甲は横に大きく伸び、腕には二本の太い爪が生えた。

背中のスラスターは六枚の翼のように変化し、額の装甲は爪のように伸び、揉み上げのあたりから牙のような棘が生える。

そしてランサーは刃の長い二又矛のような形に変わる。

「セル！僕がお前を倒す！」

第４５話　終わる夢　（後書き）

ブラスターランスの容姿ですが

額の装甲
仮面ライダーブレイドの額をイメージ

胸
元々あった突起の下に二つ同じ突起が斜め下に向かって生えてます
発射口はエビルの色違いです

肩
テックレーザーを撃つ所はそのままにしてハイゴックの肩が伸びてるようなイメージ

背中のスラスター
ブラスターブレードの背中から下へ向かって生えてるスラスターが六つあります
ギャラリーさんの意見を参考にさせていただきました

下半身は特に変化していません

第４６話　進化する力（前書き）

やっと主人公らしくなりました

今回は処刑用ＢＧＭがあると良いです

やっぱ【永遠の孤独】ですかね

第４６話　進化する力

～戒ＳＩＤＥ～

利文の姿が変わった。
ブラスター化したのだ。

凄い……桁違いの力を感じる…

「まさか…ブラス「うぉぉぉぉぉ！」ぶるぁ！？」

利文がセルの首を掴みんで上昇する。

速い！

そのまま結界にセルを押し付け、力づくで外に出る。そしてすぐに見えなくなってしまった。
その間わずか三、四秒。

目茶苦茶だな…

「……えと…」

「は…速い…」

「「「……」」」

「トシ君…」

状況が把握できてない人が多いな。

「エイミィ、どうなってる？」

『どうなってるって…凄い速度で上昇していってる……ええ！？自力で大気圏突破しちゃったよ！』

「…馬鹿な」

あ～もう行っちゃったか。

「あいつに任せるしかないな」

「…そうだね」

宇宙空間じゃ何もできないし。

「あの…」

不意にはやてが口を開いた。

「ごめんなさい、迷惑かけてしもうて…」

「まったく…子供だからって限度があるだろ！」

「アルフ、止めて」

「そうだよアルフさん。はやてちゃんはただ自分の病気を治したかっただけなんだよ」

「俺やフェイトみたいにな」

「今回は彼女も被害者だよ」

四人でアルフを宥める。

そう、はやても被害者なんだ。悪意ある改変の、闇の書の闇の。

「う……わかったよ、もう何も言わない」

「皆……ごめんな…」

はやてが涙目で答える。

「ねぇ、守護騎士達は大丈夫なの？」

「そうだよ！ヴィータちゃんは？」

「シグナムも」

「たしかに心配だな」

「シャマルにザフィーラもね」

蒐集されて消えたっきりだし。

『主』

「うん。皆、ちょぉ離れてて」

全員がはやてから離れる。

「おいで、私の騎士達」

はやてが呟いた瞬間、凄まじい閃光に目が眩む。

そして目を開けると、はやてを中心に白いベルカ式の魔法陣が回転し、その周囲にヴォルケンリッターが勢揃いしていた。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

「主ある限り、我らの魂尽きること無し」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

杖を掲げたはやてが微笑む。

「皆…」

「よかった」

二人もほっとしてる。

そしてヴォルケンリッターが振り向きはやてを囲む。

「はやて…」

「すみません。このような事になって…」

「ええんよ……皆、おかえり」

はやてはヴォルケンリッター皆に向けて笑顔で言った。

「うっ…う…うわぁぁぁん！」

ヴィータが泣きながらはやてに抱き着き、はやては優しく受け取る。

「はやてっ！はやて！はやて！」

僕達も五人の元へ飛んでいく。

「すまないな、水を差してしまうようで。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。あの男…セルについて話しを聞きたい」

「はい」

「どうやらセルにはまだ闇の書の力が残ってるらしい。一体何が起きているんだ？」

たしかにあいつの身体は白いままだ。

「闇の書の闇…防御プログラムが完全に融合しとるんです。せやから私はそれを切り離したんやけど……直に暴走するかもしれへん。その前になんとかできるとええんやけど…」

「つまりテッカマン…諸星利文次第か…」

僕らは上を見上げる。

頑張れ、テッカマンランス。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「うぉぉぉぉぉ！」

セルを掴み結界を強引に突き破り、重力を振り切ってどんどん上昇していく。

「馬鹿め！俺様は宇宙でも活動できるのだ！それにまだ闇の書の力は残っているわ！」

知ってるさ。

［それがどうした！］

ついに大気圏外に到達。
眼下には青い地球が見える。

「いい加減に離せ！」

僕の手を振りほどき、両手を僕に向ける。

「ボルテッカァァァ！」

両手からボルテッカが放たれ、凄まじい衝撃と紅い光が僕を包む。

「フッ…いくらブラスター化したとはいえ所詮ランス。この至近距離からのボルテッカではひとたまりも……なにっ！？」

残念だったな…僕は無傷だよ。

「まさか！……はっ！」

気づいたようだね。そう、かませ犬は…お前だ！

「それで終わりか？」

「馬鹿な…俺様がかませ犬のテンプレ台詞を…」

「覚悟しろ、僕はお前を許さない」

ランサーを突き付けると、セルは拳を握り締め震えだす。

「何故こんな事をした？原作知識はあるはずだろ」

「黙れ、貴様に何がわかる！こんな姿で生まれ、世界を破壊する決意をした俺様の気持ちが！」

…そうか、彼はセルの姿で生まれたのか。

たしかに世間からは迫害されるだろうし…世界を破壊したくなった気持ちも想像できる。

でも…それでも許すわけにはいかない。

ごめん。

「こんなんじゃハーレム作れねぇじゃねぇか！」

はい？

「つーか神のやつ、俺様は全宝具とＥＸランクの魔力、ニコポにナデポ持ち、銀髪でオッドアイの超イケメンにしろと言ったのに！文句言ったらセルのまま転生させやがって！」

……つまり、自分の思い通りにならないから世界を破壊するのか？

「しかも原作開始二十年前だ！冗談じゃない、俺様がオリ主になれないなら全部消えてしまえば良いんだ！」

前言撤回、こいつは確実に滅ぼす！

「ふざけるなぁ！」

猛スピードで突撃し、ランサーを振り下ろす。

「うお！？」

ギリギリで上へ避けられ、距離が離れる。

逃がすか！

『Ｖｏｌｔｅｋｋａ　Ｌａｎｃｅｒ．』

ランサーの先端の又が大きくひらき、そこにフェルミオンが収束する。

「ふん！」

ボルテッカランサーを発射。

セルの右腕に命中し、跡形もなく肩の辺りから腕が消滅する。

「無駄だぁ！」

肩から新しい腕が一瞬で生えた。

再生能力か。

「ははは！どうした？その程度…ぐはぁ！？」

ランサーを投擲し腹に刺さる。
続けて右腕の爪を射出する。
爪はテックワイヤーで腕と繋がっており、ランサーの柄に巻き付く。
そしてランサーの先端の又が開き、つっかえになって抜けなくなる。

「おりゃあ！」

ワイヤーを手繰り寄せてセルを引っ張る。
さらに胸を蹴り、ランサーを掴んで強引に引き抜く。
背中から折り曲がるように胴体が引きちぎれる。
そして上半身だけになったセルを地球目掛け投げる。

「馬鹿な！ランスごときにぃ！」

首のボルテッカ発射口から発射したボルテッカを受け取め、その中に突入する。

「ボルテッカクラッシュインストルード！」

ボルテッカを纏った体当たりでセルごと地球に突入する。

「お…が…」

身体の前面は反物質による対消滅で消えていき、後ろ側は大気圏突入の空気との摩擦で焼け爛れていく。
本当ならとっくに消滅しているのに、それでも再生能力で生きてる。

『左に五度修正、目標海鳴市近海』

「どりゃぁぁぁぁぁ！」

「ぶるぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

日本が見え、さらに近づきついに海鳴市が見え始めた。

潰れろ！

海面に衝突する寸前に離脱。

セルはボルテッカに押し潰されながら海に激突。巨大な水しぶきをあげ、紅い光とともに大爆発が起きる。

「ハァ…ハァ…」

やった。

「トシ君！」

はやて？

後ろを振り向くとはやてが僕に抱き着いてきた

「よかった…無事で…」

「ごめん、心配かけちゃって」

はやての頭を撫でる。

見るとヴォルケンリッターを含めた皆が来た。

「勝ったのか？」

一兎が尋ねてきた。

「勝ったけど…まだ終わりじゃないよ」

爆発が起きた場所を見る。

そこには黒いドームのような空間ができていた。

セル…いや、闇の書の闇との決戦が始まる。

第４６話　進化する力（後書き）

二又になってるランサーは大きく開くギミックがあります

Y→Tのような感じに開きます

第４７話　夜と旅の終わり（前書き）

決戦です

第４７話　夜と旅の終わり

～利文ＳＩＤＥ～

僕の周りに全員が集まる。

「利文、お前なんか凄い格好じゃねぇか？」

ヴィータが装甲をつつく。

「たしかに…さっきはすぐに飛んでってもうたから、ようわからんかったけど…刺々しいなぁ」

はやても装甲を撫でる。

「進化したテッカマン…ブラスターテッカマンになったんだよ」

「進化した……是非戦ってみたいな」

「シグナム！」

「す、すみません！」

はやてに叱られてしゅんとしてるが、シグナムも興味津々だ。

全部終わったら相手してあげるか…

「彼の変貌も気になるが、今は時間がないので話しは後だ。あそこ

の黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。
僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない」

クロノの言葉に全員の顔が険しくなる。

「停止のプランは現在2つある。まず1つ、極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ、軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲アルカンシェルで消滅させる。これ以外に他に良い手ないか、闇の書の主と守護騎士の皆に聞きたい」

クロノがはやてとヴォルケンリッターに尋ねる。

「えっと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから…」

ジャマルが手を上げて答える。

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん…」

「アルカンシェルも絶対駄目！こんな所でアルカンシェル撃ったら、はやての家ぶっ飛んじゃうじゃんか！」

ヴィータが手で×印を作り猛反対する。

「そ、そんなにスゴイの？」

「発動起点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲…って言うと大体わかる？」

どんな戦略兵器だよ…

「僕らの家まで消し飛ぶでしょ！」

「あの…私もそれ反対！」

「同じく、絶対反対！」

なのはとフェイトがクロノに言い寄る。

「僕も艦長も使いたくないよ…でも、アレの暴走が本格的に始まったら被害がそれより遥かに大きくなる」

「暴走が始まると、触れた物を侵食して無限に広がっていくから…」

クロノとユーノの言葉に二人は沈黙した。

『はーいみんな！暴走臨界点まで後十五分切ったよ！会議の結論はお早めに！』

エイミィから通信が入って残り時間を言った。

あまり時間が無いな。

「何かないか？」

クロノは振り向いて、ヴォルケンリッターの皆に聞いた。

「すまない…あまり役に立てそうにない」

「暴走に立ち会った経験は我らにも殆どないのだ」

「でも、何とか止めないと…はやてちゃんのお家がなくなっちゃうの嫌ですし」

「…いや、そういうレベルの話しじゃないんだがな…」

「戦闘地点をもっと沖合にできれば…」

「つうか利文、お前太平洋のど真ん中とかに落とせなかったのかよ」

「海でも空間歪曲の被害は出る」

「そんな所に撃ったら海の生態系変わるでしょ！」

魚が食べられなくなる。

「あっ～！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいな！皆でズバッとぶっ飛ばしちゃう訳にはいかないの？」

「ア、アルフ…これはそんな単純な話しじゃ…」

結局、良案は無し…か。

「ズバっと…ぶっ飛ばす…」

「ここで撃ったら被害が大きいから撃てへん…」

「でも、ここじゃなければ…」

三人が思い付いたように顔を見合わせる。

「クロノ君！アルカンシェルって、何処でも撃てるの？」

「何処でもって…例えば？」

「今、アースラのいる場所」

「軌道上…宇宙空間で」

さっきまでいた場所か。

『管理局のテクノロジー…舐めて嘗めてもらっちゃ困りますな。撃てますよ～宇宙だろうと、何処だろうと！』

「おい！ちょっと待て君ら！まさか！」

「「「うん」」」

三人が頷く。

「なるほどね」

「たしかに被害はないな」

「つまり、こういう事か…全員で防御プログラムを攻撃し、コアを露出させる。そして、コアを丸ごと宇宙空間に転送して、アルカンシェルでぶっ飛ばすって作戦だね」

「そう！」

「馬鹿な……目茶苦茶だ…」

クロノも呆れてる。

『なんともまあ…相変わらずすごいというかなんというか…』

『計算上では実現可能っていうのがまた怖いすね。クロノ君！こっちのスタンバイは準備ＯＫ！暴走臨界点まで後十分！』

「実に個人の能力頼みでギャンブル性の高いプランだが…やってみる価値はある」

「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合六層式…。まずはそれを破る」

あれ？増えてる？

「バリアを貫いたら、本体に私達の一斉砲撃でコアを露出」

「そしたらユーノ君達の強制転移魔法でアースラの前に宇宙空間に転送」

『あとは、アルカンシェルで蒸発…と』

『うまくいけば…これがベストですね』

それから全員デバイスを構え、多数の触手がうごめく黒い淀と対峙する。

『暴走開始まで、後２分！』

「皆ちょっとええ?シャマル!」

「…夜天の魔導書、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム…闇の書の闇…」

そして、黒い淀みが破裂して消えるとそこからとてつもなく巨大な怪物が現れた。

アニメで見たやつと大体同じだ。しかし首から上が違う。

そう、テッカマンオメガの姿になっていた。

[ねえ…あれって…]

[若本だからってオメガかよ…]

[僕を蒐集したのも原因かも…]

「ぶるァぁぁぁァぁ亜亜ぁァァ!!!」

辺り一面に響くような大音量で叫んだ。

「おノぉれぇぇぇぇ!全…員コロす!全て、破壊シてくれ…ル!こ…殺…コロ!!」

まとな意識も無くしてるか…

作戦開始だ。

「先手行くぞ！宇宙の騎士テッカマンランス、星利文とシータ！」

肩の装甲が九十度回転し、装甲の裏側が前に出る。
そこには片方六個ずつ、合計十二個の赤いボルテッカ発射口があった。

さらに首の発射口も展開し、全部で二十三個の発射口に魔力が集まる。

『ターゲットロック。目標、バリケード』

「ボルテッカ・マルチブラスト！」

全ての発射口からボルテッカが発射され、雨のように降り注ぐ。
ボルテッカは次々とバリケードの触手を正確に撃ち抜き一掃する。

複数の標的をマルチロックし、大量のボルテッカで狙撃する。
シータの協力があってこそ可能な技だ。

『全ターゲットの破壊を確認』

「ヴィータ、なのは、今だ！」

「おし！ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータとなのはが前に出る。

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

ヴィータが名乗るとグラーフアイゼンがカートリッジをロードする。

『Ｇｉｇａｎｔ　ｆｏｒｍ．』

グラーフアイゼンの槌の部分が分解し、そこに紅い光が集まって先程よりも大きい槌が付加された。

「轟天爆砕！」

ヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶると、何十倍もの大きさに巨大化した。

「ギガントシュラーク！！」

そのまま振り下ろし、バリアを粉々に粉砕した。

「高町なのはと、レイジングハートエクセリオン！行きます！」

なのはは足元に魔法陣を展開した。

『Ｌａｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

レイジングハートがカートリッジを四発ロードして四つの桃色の羽が展開され、なのははレイジングハートを構える。

「エクセリオン…バスター！」

『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ.』

レイジングハートから衝撃波が放たれ、なのはに向かってきた触手をなぎ払う。

そして、四つの砲撃が放たれてバリアの一点を囲んだ。

「ブレイク…シュート!!」

さらに砲撃が放たれ、一体化してバリアを破壊する。

「フェイトちゃん!」

「シグナム!」

オメガの後ろに控えていたシグナムとフェイトが構える。

「剣の騎士シグナムが魂…炎の魔剣、レヴァンティン!刃と連結刃に続くもうひとつの姿…」

シグナムがレヴァンティンの柄と鞘を重ねると鞘も同じような刃になり、続いて弓の形態となった。

『Ｂｏｇｅｎ　ｆｏｒｍ.』

シグナムは弓を引いて魔力で作られた矢をオメガに向ける。

「翔けよ!隼!」

『Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ.』

輝いた矢が放たれ、バリアに直撃。爆炎と共にバリアを破壊する。

「フェイト・テスタロッサと、バルディッシュザンバー！行きます！」

フェイトの足元に魔法陣が広がり、バルディッシュはカートリッジを三発ロード。

さらにフェイトは一回転して衝撃波を放ち、触手を薙ぎ払いながら衝撃波で出来た竜巻がオメガを囲む。

「撃ちぬけ！雷神！」

『Ｊｅｔ　ｚａｍｂｅｒ．』

刃が伸び、そのままバリアを一刀両断した。

「一兎、戒！」

「頼むぞ！」

オメガの両隣にいた一兎と戒が構える。

「戒＝キスク＝木崎と封雷剣…参る！」

『Ｌａｏｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

封雷剣の下部に付いてる二つのリボルバーから、カートリッジが二発ずつ排出された。

「切り裂け、雷刃！」

封雷剣で円を描き、手を重ねる。

「ギガンティック・エッジ！！」

円から巨大な雷の剣を投擲する。

そして雷の剣はバリアに突き刺さり破壊した。

「佐々木一兎とマーチ！行くぜ！」

一兎が変型したデンジャラス・ラビットを向ける。

そしてカートリッジをロード、先端がドリルのような青紫の矢が形成される。

「一点突破！」

『Ａｓｐｅｒｇｅｒ　ａｒｒｏｗ.』

光の弦が引かれる。

「スパイラル…シュート！！」

目一杯引かれた弓から矢が放たれ、バリアを貫通。さらにオメガ本体をも貫く。

「ブるァぁぁぁぁァァぁぁぁ！」

オメガの周りにまた触手が出てきて砲撃を放とうとしていた。

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃など、撃たせん！！」

ザフィーラの鋼の軛が触手を次々と串刺しにしていき、触手が破壊される。

「「はやて！」」

はやてが夜天の魔導書を開き杖を構える。

「彼方より来たれ…やどり木の枝　銀月の槍となりて撃ち貫け！」

はやての足元に魔法陣が展開される。

「石化の槍！ミストルティン！！」

空に白い魔法陣が展開し、そこから白く光る槍が降り注ぎ突き刺さり、オメガが石に変わっていく。

そのまま自重に耐えきれず崩れていくが、触手やら頭やらが生えて再生していく。

「うわっ！」

「なんか…すごい事に…」

『やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！ダメージを入れたそばから再生されちゃう！』

「だが攻撃は通ってる。プランの変更は無しだ！行くぞ、デュラン

ダル」

『ＯＫ，Ｂｏｓｓ．』

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ」

クロノの足元に魔法陣が広がる。
そして海が凍りついていき、オメガをも凍らせていく。

「凍てつけ！」

『Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ．』

オメガの全身が凍り付く。

「いくよ…フェイトちゃん！はやてちゃん！戒君！一兎君！利文君！」

僕達はなのはに呼ばれて頷く。

これで…とどめだ！

『Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．』

なのはの周りから魔力の粒子がレイジングハートの先に集まっていく。

「全力全開！スターライト…」

フェイトの周りからは雷荒れ狂い、金色の魔力刃に降り注ぐ。

「雷光一閃！プラズマザンバー…」

はやての杖の先端が輝き黒い魔力が集まる。

「…ごめんな…おやすみな……響け！終焉の鐘…ラグナロク！」

一兎はアンフォーギヴン・バリスタを展開し変型させ、内部の光の球体が回転し前方に青紫の魔法陣が展開する。

「心滅粉砕！ハートレス…」

戒の足元に青い魔法陣が展開、封雷剣が雷を纏う。

「奥義！ライジング・フォース…」

僕は全ての発射口を展開。そこから黒いスフィアが形成され胸の中心へと集まる。

「ブラスター…」

「ぶルァァぁァぁぁぁ！！！」

オメガは両腕を無理矢理僕らへと向け、手の平に紅い光が集まっていく。

「「「「ブレイカー！！！」」」」

「バースト！！！」

「ボルテッカァァァァ！！！」

「ボるてっカァァァぁぁぁぁぁ！！！」

六人の一斉攻撃がオメガのハンドボルテッカと衝突する。
そして、次第に圧していい、ついにハンドボルテッカを押し退け本体に命中。大爆発と共にオメガを消し飛ばす。

「…本体コア、露出…捕まえ…た！」

シャマルが旅の鏡を使ってコアを捉えた。

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

旅の鏡の中でユーノとアルフの魔法陣がサンドイッチ状態で展開された。

「「転送！！」」

虹色の光があふれ、二人の長距離転送でコアが宇宙に向けて転送されていった。

アースラ…頼んだよ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～三人称ＳＩＤＥ～

「コアの転送、来ます！

「転送されながら生体部品を修復中！凄い速さです！」

「アルカンシェル、バレル展開！」

エイミィがコンソールを叩くとアースラの前に巨大な白い魔法陣が展開し、その中心に光が集まっていく。

「ファイアリングロックシステム、オープン！」

リンディの目の前に立体状のアルカンシェルの発射スイッチが現れた。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します！準備を！」

「了解！」

リンディがアルカンシェル発射用の鍵を差し込むとキューブが赤く変色した。

そして転送されたコアがアースラの前に現れる。

「が……ぐ…俺…様…は…」

再生したコアが醜悪な肉塊のようにうごめく。

「アルカンシェル…発射！」

リンディが鍵を回し、アルカンシェルが放たれる。

そしてコアは光に包まれ、爆発し消滅した。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

『というわけで現場の皆、お疲れ様でした！状況、無事に終了しました！』

エイミィさんの報告に皆ほっとする。

『この後まだ残骸の回収とか、市街地の修復とか色々あるんだけど…皆はアースラに戻って一休みしていって』

僕は一兎、戒と拳をぶつける。

「あ、あの…アリサちゃんとすずかちゃんは？」

なのはが思い出したように質問する。

『ああ、被害の酷い場所以外の結界は解除してるから、元いた場所に戻ってもらったよ。大丈夫』

「そうですか…よかったぁ」

どうやら僕の意識が無い間に巻き込まれていたらしいな。

「はやて！」

「はやてちゃん！」

はやて？

気絶したはやてがシグナムに抱き抱えられてる。

「とにかく落ち着いて！シャマル、容態は？」

「は…はい！」

シャマルは目を閉じ、はやてに触れる。

「……疲労で気絶してしまったみたいです…」

「無事なんだな!?」

「よかった…」

まぁ、一安心かな。

「ねぇ利文、ブラスター化ってかなり負担が掛かるんだよね?」

「そうだ!お前大丈夫なのかよ!?」

……さっきから我慢してたんだけど…もう無理かな…

「シャマルの治療があったとはいえ、中身はボロボロなんだ……ごめん、もう限界…」

僕は意識を手放した。

第４７話　夜と旅の終わり（後書き）

まずブラスターランスの肩装甲の裏側にある発射口ですが

右：▽△、左：△▽

三つの発射口が三角形にならび、このような形で配置されています

発射口は首に五つ、両胸に六つ、両肩に十二個あります

ボルテッカ・マルチブラストはフリーダム系のハイマット・フルバーストをイメージしてください

ブラスターボルテッカは、正式には超ボルテッカと表記されてますが、こっちの方が格好良いのでブラスターボルテッカにしました

戒のギガンティック・エッジはまんま巨大化したセイクリッドエッジです

ライジング・フォース・バースト、ハートレスブレイカーは砲撃扱いです

第４８話　修復？創造！（前書き）

……主人公なのに…

なんだか駄文になってしまいました

あと、今回後書きでお知らせがあります

第４８話　修復？創造！

～戒ＳＩＤＥ～

「夜天の書の破壊！？」

「どうして！？防御プログラムはもう破壊したはずじゃあ…」

なのはとフェイトがクロノに問い詰める。

「これは闇の書…夜天の書の管制プログラムからの進言だ」

クロノは静かに言った。

「管制プログラムって、あの銀髪の？」

「ああ」

クロノが頷く。

「防御プログラムは無事破壊できたけど、夜天の書本体がすぐにプログラムを再生しちゃうんだって。今度は、はやてちゃんも侵食される可能性が高い。夜天の書が存在する限り、どうしても危険は消えないんだ…」

ユーノの言葉に全員が俯いた。

セルに全部持っていってもらえたと思ったけど…そう甘くはないか…

［これぱかりは……無理っぽいね。僕には何もできない］

［どうしたもんかね…］

「だから闇の書は防御プログラムが消えている今の内に、自らを破壊するよう申し出た」

「そんな…」

「でも、それじゃシグナム達も…」

フェイトが立ち上がる。

「いや、私達は残る」

「シグナム？」

僕達の下にシグナム、シャマル、ザフィーラが歩み寄ってきた。

「防御プログラムと共に、我々守護騎士プログラムも本体から開放したそうだ」

「それで、リインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって…」

「お願い？」

シャマルの言葉になのはが首を傾げた。

「もしかして…僕らにやってくれって？」

「はい…」

やっぱり…

「待てよ！そいつだって被害者だろ？悪いのは改変した連中じゃねぇか！」

「そうだよ。私もそんな事したくない！」

「私も！」

「何か方法があるはずだよ！」

「我等も同じだ！だが、どうしようもないのだ！」

シグナムの叫び声に押し黙る。

彼女達もなんとかしたいんだ。

どうする？何か無いのか？

「まだ…終わりじゃない…今の主は…はやてなんだ」

「利文！？」

テックセットした利文が入ってきた。

隣にはヴィータに車椅子を押されたはやてがいて、利文の肩にはワイヤーでがんじがらめにされたリィンフォースが担がれている。

「君は何をやってるんだ！絶対安静だと言われただろう！」

「やかましい！今はこっちが先だ！」

ランサーを杖にして歩み寄る。

フラフラだけど大丈夫なのかなぁ？

「放せ！私はこれ以上主を傷つける訳にはいかない！」

「だったら生きろ！そんな事したら余計はやてが傷つくだろ！」

リィーンフォースをテーブルに置く。

「せや。破壊なんかせんでええ、私がちゃんと抑える。大丈夫や！こんなんせんでええ！」

「主はやて、良いのですよ」

身体を転がしてはやての方を向く。

「良い事ない！良い事なんか、何もあらへん！」

「随分と永い時を生きてきましたが、最期の最後で私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達も貴女の傍に居ます。何も心配はありません」

「心配とかそんな…」

「ですから、私は笑って逝けます」

「…っ！話聞かん子は嫌や！マスターは私や！話し聞いて！私がきっと何とかする！暴走なんかさせへんって約束したやんか！」

はやてが泣き叫ぶ。

「その約束は、もう立派に守っていただきました」

「リインフォース！」

「主の危険を払い、主を護るのが魔導の器の勤め…貴女を護る為の最も優れたやり方を、私に選ばせて下さい」

「どこが優れたやり方だ！」

利文がリィンフォースを殴る。

「最初っから諦めてるだけだろ！選択肢なんか無いじゃないか！」

「諦めたらあかんよ……ずっと悲しい思いしてきて、やっと…救われたんやないか…」

……しかし、なんだこの光景は？

［なあ…色々とだいなしじゃないか？］

［……考えたら負けだよ］

文章だからわかりにくいが、リィンフォースはずっとがんじがらめ

のままテーブルに横たわってるのだ。
これがまたシュールで…

「そうだよ！皆で考えようよ！」

「うん、私達でやろう」

「皆……ありがとう！」

さて…どうするかな…

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

まぁ…そんなこんなでリィンフォースを取り押さえたまま会議が始まった。
意外な事にクロノも参加してる。

［良いのか？その…］

［悲劇を二度と起こさせない。僕が望むのはそれだけだ。第一、父さんの仇はすでに取ってる］

仇はすでに…か。

たしかに仇は暴走した防御プログラムだし…まぁ、よくできたやつだな。

「さて、私一人では元に戻せへんし…根本から変えなあかんのかな？」

「元のプログラムそのものも無いし…」

「ねぇ、アンフォーギヴン・バリスタで…」

「無理だ。そんな時間を大きく戻すなんてできない」

それに時間を戻したらリィンフォースの記憶も消えちまうだろ。

「再構築ってのもなぁ…」

「家を壊さずに土台を作り直すようなもんだし…」

上手くやらないとリィンフォースにも悪影響が出るしな。

「内部にのみ直接介入する……そうだ！一兎、デンジャラス・ラビットだよ！」

「…そうだ、スペシャル・ショットで魔力的な介入をすれば、プロ

グラムだけ改変できる！」

フェイトの意見に戒が賛成する。

「たしかに可能かもしれないが、俺一人じゃ無理だ。家庭用のＰＣ一台で大企業の仕事を全部こなすようなもんだぞ」

介入は可能だけど、あんな複雑な工程を一人でなんて無理だ。

『じゃあ皆でやれば問題ないじゃん』

「はぁ？」

何言ってんだこいつは。

「言ってる意味がわからないんだが」

『だ～か～ら～、ここにいる全員を、一兎を中継にしてリィンフォースに介入させるの。ついでに私も外部端末と繋げれば、さらに処理能力うＰ！それなら彼女のプログラムも作り直せるよ……多分（ボソ）』

多分って……たしかに成功するかどうかはわからないし…

第一、ロストロギアを組み替えるなんて事自体非常識だしな。

「そんな事して大丈夫なんか？」

「俺は疲労意外はなかったけど…大丈夫だろう」

かなりきつそうだが…

「一兎君、本当にそれで助けられるの？」

「主であるはやてを送れれば、理論上はな」

「リィンフォース、これでもまだ消えるって言うか！？」

利文がリィンフォースに問い詰める。

「……本当に…可能のか？」

「修復できないから新しく作り直すんだ。お前の人格を維持したままな」

「助かるんや…リィンフォース、皆一緒にいられるんや。一緒に罪を償って、やり直そ？」

はやてがリィンフォースの頬を撫でる。

「主……私は…主と、騎士達と生きる事ができるのですか？」

リィンフォースの瞳に涙が浮かぶ。

「せや、皆一緒や」

はやてが笑顔で答える。

「わ…私は……あ…ああ…」

遂に泣き出してしまった。

これが彼女の本心か。

「よし！皆やるぞ！」

「「「おー！！」」」

「一兎、ありがとう！」

「礼はいらないさ。まだ成功してないし……あと、そろそろ放してやったらどうだ？」

「あ…」

いい加減にリィンフォースを解放してやった方が良いしな。

「あともう一つ」

「何？」

ワイヤーを解きながら俺の方を向く。

「利文、お前はお休みだ」

「え？ちょ！なんで！？」

「怪我人は休んでろって事だ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

……えっと…そんな訳でリィンフォースのプログラム再構築が始まった。

介入するのは、当然はやてとヴォルケンリッターの皆、一兎と戒、なのはとフェイト、クロノ。
外部からの支援は各自のデバイス、エイミィさん、プレシアさん、リンディさん、ユーノ、アルフだ。

シータは参加してるが、僕はお休みだ…

怪我人だからとはいえ、ろくに力になれないのは歯痒い。

全員が訓練室に集まる。

セットアップした一兎のマーチには大量のコードが取り付けられ、各自のデバイスや大型の機械に繋がっており、機械の前には支援組が待機している。

全員リィンフォースを中心に一列に並び、その時を待っている。

「始めるぞ」

一兎がデンジャラス・ラビットを展開、そして変型させる。

「全員に矢を撃ち込む。痛くても我慢してくれ」

そう言うと、はやてとヴォルケンリッターに矢を放った。

全員が痛みに顔を歪める。

突き刺さった矢の尻の部分からは光の糸が伸び、デンジャラス・ラビットと接続している。

「……これ結構辛いな…」

一兎も辛そうだ。

「続けて行くぞ」

そして戒、なのは、フェイト、クロノも矢が貫く。

『全員と接続成功。リィンフォースと接続するから、避けないでよ』

「わかってる……頼む」

「行くぞ！」

リィンフォースに矢が刺さる。

すると全員が時間が止まったように動かなくなった。

『介入成功！作業に入るね』

「わかりました。私達も始めましょう」

「「了解！」」

「始めましょうか…」

「おっし！」

プログラムの再構築が始まった。

長い。

当然だ。新しく夜天の書を作るような物だからね。

祈る事しかできない自分が腹立たしい。

時間はどんどん過ぎていく。

支援メンバーも疲労が見え始めた。

そして夜が明けた。

徹夜になってしまった。

リィンフォースから矢が消える。

「終わり…」

そして次々と皆から矢が消える。

「成功だ！」

全員が歓喜の声を上げる。

やった…

これで…

後で聞いた所、まずリィンフォースの人格、肉体意外の全てのプログラムを少しずつ破壊、同時にはやてとヴォルケンリッターが、新しいプログラム作成する事で、再生プログラムを誤魔化しながら作

業をしたらしい。

あの後、全員疲労で倒れ込んでしまった。
徹夜だったからね。

皆、お疲れ様。

第４８話　修復？創造！（後書き）

またもや一兎に頼る羽目になってしまいました…

あとお知らせですが

ＳｔｒｉｋｅｒＳで登場する敵対転生者の募集をします（二、三人位）

使い捨てのモブではなく主要敵キャラとして使わせていただくので、それなりに活躍は有る予定です。

ですが完全に敵キャラなので、死亡、狂化、外道化も有り得えます。味方になる可能性は無いです。

それでも良いよ、嫌いなキャラだからぶっ飛ばして欲しいとゆう方は是非お願いします

名前や容姿は能力元に依存します

性転換していても大丈夫です

年齢は自由です

例

名前：矢島英美（やじまひでみ）

年齢：２７歳

性別：女

容姿：【鉄のラインバレル】の矢島英明を女性にした感じ

身長：１６５ｃｍ

体重：普通

スタイル：スレンダー

能力

【鉄のラインバレル】のアパレシオンを鎧型デバイスとして所持

人物

自分の能力を活かす為、楽しそうとゆう理由で殺し屋になり、ターゲットをなぶり殺しにして快感を得る異常性癖者。

違法魔導師として指名手配され、ティーダ・ランスター殺害の犯人でもある。

ティアナに狙われるのを楽しんでおり、さらに原作キャラとの闘争を楽しむためにスカリエッティに協力している。

といった感じです

ちなみに彼女は今のとこ出す予定はありません

原作キャラとの絡みバッチコイ、変態、奇人大歓迎です

発表は本編で登場とゆう事になります
空白期である程度出せたらなと思ってます

募集終了も前書きでお知らせします

第４９話　説明しよう！（前書き）

今回短いです

敵転生者の応募ありがとうございます

募集はまだ続けてるので

女性転生者、イレギュラー、転生者の子孫どんと来いです

第４９話　説明しよう！

～利文ＳＩＤＥ～

十二月二十六日。
今日は皆で月村家にお邪魔してます。
そう、魔法についての暴露会ですよ。
…しかしでかい。
金持ちってすごいな。

「さ～て、洗いざらい吐いてもらおうじゃない」
「アリサちゃん、あんまり急かさないで…順番にね？」
そう言いながらも二人とも楽しそうだ。
「じゃあまずは僕となのは、ユーノの事から話すかな」
「ユーノ君？なんで？」
「ユーノ君、戻って良いよ」
「うん」

ユーノがフェレットモードから戻り、金髪の少年の姿になる。

「えと…はじめまして、ユーノ・スクライアです」

二人とも硬直している。

ザ・ワールド！時よ止まれ！

……実際は驚いてるだけだけど。

「「えええええ！？！？」」

フェレットが人間に変わったのだ。驚くのも無理は無い。

「ユーノ？え？」

「……」

「じゃあ説明するね。私達がユーノ君を拾った夜の事なんだけど……」

そして戒の家族、ジュエルシードの事、フェイトとの出会いが話された。

「リリーさんがねぇ…」

「じゃあフェイトちゃんと一兎君とは敵同士だったの？」

「そうだよ。なのはとも何度もぶつかったし」

「じゃあその辺りも説明して」

続けて一兎とフェイトの出会い、事件の最期が話された。

「……色々とすごいね」

「あんた達ねぇ…」

「そういえば利文君ともその時一度会ったよね」

「ほんま？」

「うん。偶然ジュエルシードを拾ってね」

あの時はすぐに逃げたけど。

「だいたいわかったわ。じゃあ次ははやてと諸星…利文の事を教えて」

僕らの番か。

「ほな、まず私の事からなんやけど……」

そして闇の書、ヴォルケンリッター、はやての病気、僕との戦いの事を話した。

「はやてちゃん…」

「あんたも苦労してたのね…」

「まあ病気も良くなるし、じきに歩けるようになるで」

闇の書の呪縛から解放されたんだ。
学校にも行けるようになる。

「そっか……うん、私も話そう」

すずかが何か決心したように呟く。

「実は…私の家は【夜の一族】と呼ばれる吸血鬼の血を引いているの」

すずかが夜の一族について話し出した。

全員が静かにすずかの言葉に耳を傾ける。

「……ごめんね。ずっと騙してて…」

すずかが俯く。

「それがどうしたのよ…」

最初に口を開いたのはアリサだ。

「たしかに。それがどうしたとしか言えないね」

「すずかちゃんはすずかちゃん。友達なのは変わらないよ」

「せや。すずかちゃんが何者であっても私らは友達や」

「皆…ありがとう」

皆の言葉にすずかが涙ぐむ。

「…一兎、私も話すよ」

「無理はするなよ」

「え？フェイトちゃん？」

「私も皆に黙ってた事があるんだ…」

そこからは原作知識通りだ。アリシアのクローンである事を話した。

しかしなのは達に知らされてなかったんだ。

一兎頑張ってたんだね。

「フェイトちゃん…」

「一兎君は知ってたんだよね？」

「まあな」

「一つ聞いて良いかな？」

戒が質問した。

「良いよ」

「そのアリシアって子はどうしたの？」

そういえばそうだ。
ずっと保存してる訳じゃないし。

「お墓作って埋葬したんだ。ミッドチルダに」

「いつまでもあんな所に入れとく訳にはいかないしな」

そっちは片付いたんだ。

「それじゃあ次はトシ君の番やな」

「そうだね」

僕も話さなきゃな。

「利文君…」

「やっぱり利文って母さんの言った通り…」

え？

「ああ、以前なのはとフェイトと戦った事あったでしょ？その時に装甲のかけらを見つけてね。プレシアさんが解析したんだ」

なるほど。

「あの…話しが見えないんだけど…」

「ああ、ごめん。じゃあ話すね」

「もう何が出ても驚かないわよ…」

そして僕の身体の事、何故はやての家で暮らしてるのかを話した。

「随分とＨｅａｖｙね…」

「だからドッチボールで私と互角だったんだ」

「そうだったんだ…」

皆の反応は思ったより薄い。

まあ魔法に吸血鬼にクローン人間。いい加減に耐性がつくよね。

［利文、なんかお前も大変だったんだな］

［改造人間か…色々あったんだね］

［正直、家族を犠牲にして能力を得たようなもんだからね］

能力を得た頃はあまり良い気分じゃなかったね。

「なんだかすごい暴露大会になってもうたな」

「そういえば皆の魔法使いの格好、見てみたいな。駄目かな？」

「少し位なら大丈夫じゃないかな」

「私は無理や」

「僕も本調子じゃないし」

すずかの希望で、僕とはやて以外がセットアップした。

「なのはちゃんは本当に魔法少女みたいだね。戒君は騎士みたいだし」

「一兎は近未来兵ってかんじね。で、フェイトは……なんだかすごい格好ね」

一番露出が多いし。

「俺ずっと気になってたんだが…フェイトのバリアジャケットのデザインは誰が考えたんだ？」

バルディッシュを作ったのはリニスだから…もしかして彼女が？

「これ？母さんが昔使ってたデザインなんだって」

…なんですと？

（魔法熟女ライジングプレシア♪）

うお！？

いまフェイトのバリアジャケットを着たプレシアさんを想像してし

まった！
しかも現在の年齢で。
色んな意味で危険だ。
想像しちゃいけなかった気がする。
［私、今すごいの想像しちゃったんたけど…］
［私もや…］
［俺も］
［僕も］
［同じく］
……今は着てないよね？

第４９話　説明しよう！（後書き）

次回からマテリアル編に入りますが

先に注意書きをします

ここではマテリアルと完全に敵対します

ですので、利文を略奪しようとする闇と奪われまいと必死になるはやてとか、一兎に積極的な雷刃に焦るフェイトとか

そういうのは一切ありません

マテリアル好きな方々には申し訳ありませんが、彼女達の出番は少ないです

理由はマテリアルが仲間になる小説が多いからってのが一番ですね

ですので徹底的に対立するのも珍しくて良いかなと思いまして

外道化する可能性もあるので読む方は注意してください

第５０話　闇、再び（前書き）

マテリアル編始まります

第５０話　闇、再び

～利文ＳＩＤＥ～

十二月二十八日。

シャマルの治療や僕自身の回復力もあってか体調もかなり良くなった。

今家には僕とはやて、リィンフォースがいる。

他の皆は取り調べやらでアースラだ。

そんで現在はやてのリハビリ中。

はやての手を取り歩く練習をしている。

「ん…力も上手く入らんし、難しいなぁ」

「大丈夫だよ。ゆっくりやろう」

「主、無理はなさらぬよう」

はやては懸命に足を上げようとする。

だがすぐにバランスを崩し僕に寄り掛かる。

「いや～難しいなぁ」

そう言いながら僕に抱き着く。

…抱き着かれるのは嬉しいけど、練習になってるのかなぁ？

「はやて、真面目にやってよ」

「やっとるよ。トシ君と腕組んでデートとかやってみたいもん♪」

「早くできるようになると良いね。僕も楽しみだよ」

「……お二人は本当に仲が良いのですね」

リィンフォースが車椅子を押してきた。

そしてはやてを抱き抱え座らせる。

「私の嫁やからな」

「それを言うなら婿ではないでしょうか？」

「ええんよ、嫁で♪」

…何も言うまい。

「そういえば一つお聞きしたい事があったのですが」

「なんや？トシ君との出会い？それとも今後の人生プラン？」

人生プランって…嬶天下フラグ？

「いえ…たしかにどちらも気になりますが。お聞きしたいのは騎士達の甲冑の事です」

「甲冑がどないしたん？」

「騎士達は…その…覚えていないようですが、実は先代の主が用意した甲冑と全く同じ形状なのです」

え？同じ？

「私は玩具屋で見た人形とかを資料にしたんやけど…地球の人やったん？」

「いいえ。管理世界の方でした」

「すごい偶然やな」

……まさか転生者？

絶対そうだ。じゃなきゃ同じになんかならない。

でも……可哀相な人だ。なまじ原作知識があるから、自分の命の危険を知ってしまってる。

「なんで覚えてなかったんだろ。騎士甲冑を見てもそんなそぶりはなかったし」

「……私には…わかりません」

？

「その人ってどんな人やったんや？」

「彼女も主と同じように騎士達を家族として迎え入れ……そして防

御プログラムの破壊を試みましたが失敗し…狂ってしまった」

「……」

「そんな…」

相当苦しんだんだろうな。
闇の書の主になってしまう。
転生者にとって、こんなの拷問でしかない。

「騎士達に身体を売らせ金儲けをし、自分の召喚獣とその配下を使い多くの人を殺め……そして闇の書が完成し、召喚獣と共に取り込まれ死にました」

「そうなんか…」

「助からないと知って…壊れてしまったんだ。心が」

彼女も犠牲者なんだ。
本当に闇の書の闇は…不幸の塊だ。

「申し訳ありません、暗い話しになってしまって」

「聞いた私が悪いんよ…」

「もう止めよう。悲劇は止めたんだ」

「せやな。今私達がやらなあかんのは償いや」

今でもたまに夢を見る。

初めて人を襲った夜の事を…
はやての為とはいえ罪を犯したんだ。
簡単に許される事じゃない。

僕もやれるだけの事をやろう。
償うためにも。

『はやて、利文ちょっと良いか？』

クロノ？

「どないしたん？もしかしてうちの子達がなんかやらかしたん？」

『実は海鳴市のあちこちから結界が感知されてね。調べるのを手伝ってほしい。ヴォルケンリッター達はすでに調査に向かってる』

結界ねぇ…

「わかった、すぐに行くよ」

『すまないな』

「ほな、リィンフォースも行くで」

「はい」

僕とはやて、リィンフォースはクロノに指示された場所へ向かった。

「結界……どうやらベルカ式のようですね。しかし…」

「まあ中に入ってみよう」

僕はテックセットし、はやてもリィンフォースとユニゾンする。

中はいたって普通の結界だった。

人っ子一人いない。

「あれ?誰かおるで」

視線の先に人影が見えた。

「本当だ…もしかしてあの人が張ったのかな?」

人影の下へと飛んでいく。

人影の姿がはっきりしてきた。

黒髪にマフラー。

なんだか少し色が違うような気がするが、こいつジョセフ!?

まだいたのか?

「お前、あの時の!」

「?何者だお前は……え?なんではやてが?まだA's は始まってないはずじゃ!」

なんだ?言ってる事がおかしい…

「なんで私の事を?」

『利文、彼はたしか』

「うん。蒐集した変態だ」

「変態!?」

はやてが僕の後ろに隠れる。

「てめぇ!俺の嫁に何してんだ!」

「私いつの間にか嫁にされとる!?」

い…痛いやつ…

「お前らどんな関係だ!」

「一言で言えば「夫婦や!!!」…自分の年齢わかって言ってる?」

「な……ば…馬鹿な…」

膝を着き震えだす。

こいつはやて狙いだったんだ…

「許さねぇ!ぶっ殺す!」

跳躍し飛び蹴りを放ってきた。

「波紋疾走！」

「ちっ、テックレーザー！」

肩から魔力弾を連射するが次々と弾かれる。

「危ない！」

バーニアを吹かし回避。

そしてはやてとの間に浮かび僕を睨む。

波紋…人体が溶ける描写があったから、外骨格である装甲は、多分まともに食らえば溶けてしまう。

なんとかして呼吸を乱れさせれないだろうか…

「てめぇは俺を怒らせた。本気で潰す！」

「さっきからなんや、この変態！」

「変態！？違う、俺は君を幸せにしようと…」

「やかましいわ！私が相手になったるで！」

はやてがシュベルトクロイツを突き付ける。

［『今こいつの呼吸が僅かに乱れたぞ』］

動揺してるのか。

よし。

［はやて、もっと言ってやって。動揺して力が弱くなってる］

［オッケー］

はやてがニヤリと笑う。

なんだか不安になってきた…

「トシ君と一緒にお風呂入ったで！」

「何！？」

介護としてね。

「しかも寝たで！」

「ぐはぁ！？」

変な意味じゃないからね。

「予定日は来年の秋や！」

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏ！！！」

「何言ってんの！？」

身に覚えが無いぞ！

だが効果はあったらしくうなだれてる。

チャンスだ。

ワイヤーを首に巻き付け引っ張る。

「まずい、波紋の呼吸を…」

させるか！

「ボルテッカァ！」

紅い光がジョセフの身体を包む。

「ギャァァァァァ！？」

ジョセフが地面に叩き付けられる。

そんなに高い所から落ちた訳じゃないから大丈夫だろう。

「そんな…俺が…っ！？身体が？うわぁぁぁぁ！」

ジョセフの身体が透けていき、足から砕けるように消えていった。

「…トシ君？」

「非殺傷設定だよ！」

どうなってるんだ?

『……恐らく、闇の書の残骸ではないでしょうか』

「闇の書の…残骸?」

「何それ」

『闇の書の防衛プログラムが消えずに残ったものが、闇の書に関わった者の記憶や魔力を利用して再生しようとしているのだと思われます』

げ…なんじゃそりゃ。

「しつこいやっちゃな」

「だから蒐集したあいつが現れたんだ」

て事は僕もいるのかな。

[利文、大丈夫?]

戒?

[大丈夫だよ。なんだか大変な事になってるみたいだ]

[闇の書の欠片か]

[知ってるの?]

［リィンフォースが生存してるから、もしかしてと思ってたけど。ＰＳＰでの展開になってる］

そっちか。やった事無いんだよなぁ。

［とにかく今は片っ端から潰していくしかない。偽物と間違わないように気おつけてね］

［了解］

さて、ひとまず皆と連絡してみるか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～クロノＳＩＤＥ～

リィンフォースからの報告で、結界内出現する人物達は闇の書の欠片だとわかった。

さらに質の悪い事に、闇の書に関わった人々の姿をしてる。
すでにヴィータからフェイトの偽物、フェイトからはザフィーラの偽物が報告されてる。

…相手にしにくいが仕方ない。

僕は近くの結界に侵入した。

さて、欠片は……ん？

見ると酒屋に奇妙な生き物が集まっている。
２m程の大きな黒い虫のような生き物だ。

散らばったアルコール飲料の空ビンに十数匹が群がっている。

あの虫どこかで見たような気が……思い出せないが、恐らくあれが欠片だな。
丁度良い、まとめて片付ける。

「スティンガースナイプ！」

発射した魔力弾が次々と虫を貫く。
そして僕に気付いた個体が、胴体中央の大きな眼で僕を見る。

だが気付くのが遅い。

全滅。虫達は消えていった。

まとまっていたのが仇となったな。
さて、次に…

！！！！

背後から羽を生やした虫が襲い掛かってきた。

な！？もう一匹？

回避は…間に合わない！？

「紫電一閃！」

虫が両断され、同時に消えていった。

そして長身の女性が剣を鞘に収める。

「ハラオウン執務官、無事か？」

「シグナムか。ありがとう、助かったよ」

「礼には及ばぬ。しかし今の生き物はなんだ？消えたからには闇の書の欠片なのだろうが…」

「君達が蒐集した生物じゃないのか？」

「いや。あんな生き物は見た事が無い」

見た事が無い？利文が蒐集したのか？

……っ！

「思い出した！あれは十一年前の闇の書の主が使役していた生物だ」

「前の主の？馬鹿な記憶に無いぞ」

「いや、たしかにあれだ。資料で見た」

「…ならば何故私が覚えていない？」

たしかに不思議だ。

守護騎士である彼女が知らないなんて…

「それは僕にもわからない。だがあれの母体が出現しない事を祈ろう」

映像で見た限りでは１００ｍを超えるような化け物だ。

正直あんなのを相手にしたくない。

第５０話　闇、再び（後書き）

十一年前の闇の書の主となった転生者の能力、予想つきましたか？

とある生物の召喚能力です

第５１話　剣と星光（前書き）

最初に言っておく！

以前お話したようにマテリアルとは完全敵対なので、三人娘好きな方々は注意してください

第５１話　剣と星光

～戒ＳＩＤＥ～

リィンフォースが生存してるから予想はしてたけど…やっぱり起きたか。
マテリアルの事、どうにかできないかな。

まぁ転生したばかりの頃は、彼女達もハーレムにって思ってたけど…今考えると馬鹿みたいだな。恥ずかしいったらありゃしない。
厨二病ってレベルじゃないよ…

うん、黒歴史決定。

まじめに考えると彼女達も闇の書から解放してあげたいし、何より味方になれば頼もしい。
将来スカリエッティに付く転生者は絶対にいる。
管理局アンチは少なくないからね。

彼女達も被害者なんだ。
話し合えばわかるはず。

「セイクリッドエッジ！」

「ああ！？」

雷の刃がシャマルを貫く。
勿論闇の書の欠片のシャマルだけど。
そしてシャマルが足元から崩れるように消えていく。
さてと、今ので三つ目か。次は…ん?
「欠片を破壊して廻るのは止めていただきたいですね」
僕の目の前に一人の少女が現れた。
茶髪のショートカット、黒いバリアジャケットに赤紫の杖。
なのはによく似ているが、色彩、雰囲気がまるで違う。
「ただの欠片…じゃなさそうだね」
「【理】のマテリアル、星光の殲滅者といいます。ああ、名乗らなくて結構ですよ、戒=キスク=木崎。欠片のモデル達の事は知っていますので」
「そうか。一応言っておくけど、投降してくれないかな?」
すると星光は小さくため息をついた。
「答えはわかっているのでしょう?投降する訳がありません。貴方こそ大人しく糧となっていただけませんか?」
手に持った杖を構える。

「お断りだよ」

封雷剣を構える。

「でしょうね」

星光が口元に僅かに笑みを浮かべる。

一歩間違えれば殺られる。

余計な事は考えるな。

「たあ！」

突撃し封雷剣を横薙ぎに奮う。

そして回避した星光に向けスタンエッジを放つ。

彼女はそれを防ぎながら離れる。

「パイロシューター」

十二発の魔力弾が放たれた。

接近してくる魔力弾を切り払いながら星光に接近する。

「ほう…なら、これでどうですか？」

「な！？」

切ろうとした魔力弾が弧を描き、斬撃を回避した。

とっさにシールドで防ぎ距離をとる。

二発ほど命中するが僕にダメージはない。
爆煙から脱出し星光を見ると、彼女の周囲に無数の魔力弾が浮かんでいる。
「シュート！」
魔力弾が高速で飛んでくる。
しかも不規則に軌道をずらしながだ。
飛行しながら避けようにも誘導性が高く避けられない。
避けられないなら！
まとわり付く魔力弾を切り伏せつつシールドで防ぐ。
強い。
どうする…なんとかして接近しなきゃ。
最後の魔力弾を切った瞬間。
「ブラストファイアー！」
ディバインバスターのような砲撃が、僕に向かって放たれる。
回避はできない。向かえうつ！
「セイクリッドエッジ！」
雷の刃が砲撃と衝突。
爆煙が立ち込める。

相殺できたか。

「どこを見てるのですか！」

背後から再び砲撃が襲い掛かる。

「っ！」

振り向き急いでシールドを張るが、防げたのは一瞬。
桃色の光が視界を被う。

「うわぁぁぁ！？」

全身に痛みが走り墜落。
近くのビルの屋上にたたき付けられる。

いつの間に…

『立てますか？』

「なんとかね」

封雷剣を杖代わりにして立ち上がる。

「集え、明星！全てを焼き消す焔となれ！」

上空では星光が目の前に魔法陣を展開。魔力を収束していく。

ちぃ！

封雷剣のカートリッジをロード、封雷剣を構え突きの体制をとる。

「ルシフェリオン…ブレイカー！！」

先程とは桁違いの砲撃が放たれた。

まだ遠い。

引き付けて…貫く！

「ライジング・フォース！！」

巨大な雷の突きが砲撃と衝突、そのまま刺し貫き桃色の魔力が四散していく。

「な！？」

無表情に戦っていた彼女の顔に驚きの表情が見える。

ライジング・フォースの射程じゃ彼女まで届かない。

だけど攻撃を相殺する事は成功だ。

「ライトニングストライク！」

星光に一筋の雷を落とす。

「この程度！」

真上からの落雷を障壁で受け流す。

「どうしました？もう終わりですか！」

「君がね！」

星光目掛けて全速力で突撃する。

「ライド・ザ・ライトニング！」

全身が雷に包まれ、最大戦速で彼女に体当たりする。

「く！？」

星光はシールドを前に展開して防ごうとする。

そして僕とぶつかり合い、纏った雷がシールドを削り次第に押していく。

「だあぁぁぁぁぁぁ！！！」

ついにシールドが砕け散り星光の身体を雷が襲う。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そのまま彼女を押して空中を翔ける。

青い雷がバリアジャケットを焦がしていく。

「でりやぁぁぁ！」

「ぐぅ！？」

ビルの壁に押し付けた。
押し付けた周囲が僅かに陥没し煙りが立ち上る。
そして星光の首に封雷剣を突き付ける。

「ここまでだ。これ以上の抵抗は無意味だよ。大人しく捕まってもらう」

「…消さないのですか？……欠片と…同じように」

「君は再現された欠片とは違う。君には心があるんだ、闇の書に躍らされるだけだよ」

「躍らされてる？」

星光が目を見開き僕を見る。

「そうだ、人々を苦しめる為に生まれたなんて悲し過ぎる。人として生きれるなら、君だって「馬鹿にしないでください」え？」

怒り。
明らかに彼女は怒っていた。

「人として？私は闇の書を復活させるために生まれました。それが私の命の意味、存在理由です」

「だけど！」

星光は左手で封雷剣を握る。

「貴方は人間として生まれ、人間として生きます。私は闇の書の構成体（マテリアル）として生まれ、生きます。貴方が人間を止めるというなら考えても良いですがね」

人間を止める？

「っ！？」

「そう…貴方が言ってるのはそれと同じ事です。これ以上私を侮辱しないでください」

「……」

「私の事を思ってくれるのなら最後まで戦ってください。私はマテリアルとして生き、そして死にます。それでも否定するのであれば、貴方が人間を止めるか私に殺されるかです」

彼女とって僕の説得は自分の存在の否定でしかない。

もし僕が【君は人間を止めるべきだ】と説得されたらどう思う？

馬鹿にされてるようにしか思えない。

……そうか。彼女も同じ気持ちなんだ。

味方に引き入れても生き恥を晒すようなもの。

彼女にとって一番の選択は？

「ごめん、戦いを続けよう。僕は自分の考えを君に押し付けてただけだ」

「…たしかに貴方の言い分はある意味正しいかもしれません。ですがその考えが絶対に正しいと思わないように。価値観とは様々ですからね」

星光が封雷剣から手を離す。

「勝負だ」

封雷剣を下ろす。

「望む所です」

お互いに睨み合い動かない。

「せい！」

僕が先に動き、封雷剣を振り下ろす。

「たあ！」

だがそれよりも早く星光が懐に潜り込み、体当たりをしてくる。

「うお！？」

先程のお返しのように僕を向かい側のビルにたたき付け、杖を腹に押し付ける。

「とどめです！」

零距離砲撃？
食らってまたるか！

「ブラスト…」

杖を思いっ切り蹴り上げ射線を強引に変える。

「ファイ……！？！？」

すると先端が真上に向き、砲撃が誰もいない上空に放たれた。

「ライトニングスフィア！」

僕と星光の間に発生した雷の球が彼女を押し退ける。

「チャージドライブ！」

雷の球を突き、円錐型に伸びた雷が星光を貫く。

そして彼女は落ちていった。

「見事…です…」

道路に倒れた星光の横に立つ。

「…本当は、投降してほしかったんだけどね」

「親しい者と…似ている…からですか？」

「そうだね」

だから…助けるとゆう言い訳で、仲間にしようとしていたのだろう。

「甘い……ですね…他の五人に…殺されますよ…」

彼女の身体が透けていく。

「ですが、充実した…一時…でした…」

「さようなら」

「御武運を」

星光は欠片と同じように足元から崩れるように消えていった。

消えていった彼女の顔はとても満足した明るい表情だった。

マテリアルはあと五人…

最低でもフェイトとはやてがいて……もしかして残りは僕達か？

嫌な予感がする。

第５１話　剣と星光（後書き）

以前話したように、マテリアルと完全敵対するのが珍しいからというのもありますが、星光の台詞も理由の一つです

勿論復活もしません

復活させる術が思い付きませんし

ストーリーの都合上、場合によっては性格が少し改悪してしまうかもしれません

本当、マテリアル好きの方々申し訳ありません

第５２話　星と凶弾（前書き）

今回レイジングハートのキャラが崩壊しています

ネタ的な意味で

あとなのはオンリーです

第５２話　星と凶弾

～なのはＳＩＤＥ～

ヴィータちゃんや戒君の姿の欠片と戦ったけど、やりにくいなぁ…
ヴィータちゃんも…なんだか怖い感じがしたし。

『昔の彼女達はあのような状態だったのでしょうね』

「今までの主さんに無理矢理働かされていたんだね…」

はやてちゃんとは違って…
うん、気を取り直して次に行こう。

別の結界に入り、飛びながら欠片を探す。

えっと……ここには…

『なのは』

クロノ君？

「どうしたの？」

『すまないが、黒い大きな虫のような生き物を見かけなかったか？』

虫？

「見かけなかったよ」

『…そうか』

「何かあっ『危険』っ！？」

下から何本もの魔力の矢が飛んできた。
私は身体をねじって回避する。
スカートの端っこを掠っただけで良かった。

『なのは？』

「ごめん、話しは後で！」

クロノ君の通信を切る。
今の矢…一兎君のに似ていた。

「あら～残念失敗」

道路の真ん中に一人の人影が見える。
赤い髪に紺色のバイザーと紺色のバリアジャケットを着て、右腕には大きなバリスタのような銀色の銃を持っている。

一兎…君？
違う。でも、ただの欠片でもない。

「貴方は…？」

すると一兎君みたいな男の子は小指を立てた左手を顎に当てて、身体をくねらせながら私を見る。

…なんだろ……まさか。

「何ジロジロ見てるのよ。私の美しさに魅了されちゃった？残念だけど私は女に興味は無いのよね」

「えぇぇぇぇ！？！？」

お…オカマさんだぁぁぁ！

これは絶対にフェイトちゃんに見せちゃいけない気がする…きっとショックで倒れちゃうよ。

…じゃなかった！

「答えてください！貴方は誰ですか？」

「あんたみたいなぶっ細工に名乗るのも癪だけど…まあ良いわ。私は【心】のマテリアル、凶弾の道化よ」

マテリアル？

「何ですか？その…マテリアルって」

「あんたみたいなお馬鹿さんでもわかるように言うと、私達マテリ

アルは闇の書の防衛プログラム…その構成体よ」

お馬鹿さんって…え、闇の書の？しかも私達？

じゃあこの辺りに出てる結界はあの人とその仲間がが。

「結界を消してくれませんか？」

「ハァ…顔だけでなく脳みそまで醜いのね。消す訳ないでしょドブス」

なんでこんなに罵倒されなきゃいけないの！？

私何かした？

『成る程…マスター、この汚物を塵一つ残さず消滅させてやりましょう』

「レイジングハート？」

もしかして…怒ってる？

「誰が汚物ですって！？」

『貴方です。聞こえませんでしたか？どうやら顔だけでなく耳まで悪いようですね』

「…このがらくた風情が！」

あの…一兎君と同じ顔なんじゃないのかな…

『マスターをここまで馬鹿にして、絶対に許しませんからね。小便

はすませましたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はＯＫ？』

「レイジングハートォ！？！？」

私のために怒ってくれるのは嬉しいけど、なんだか怖いの！？

とゆうか下品だよ！

「ふん！まとめて蜂の巣にしてあげるわぁ！！」

アンフォーギヴン・バリスタのような銃を私に向けて発砲してきた。

何本もの魔力矢が向かってくる。

私は左右に飛びながら回避、レイジングハートを向ける。

まずは様子見！

「アクセルシューター！」

六発の魔力弾を発射。

凶弾さんを追いかける。

一兎君と同じなら飛ぶ事は少ないはず。

凶弾さんは走りながら発砲し、アクセルシューターを迎撃。

さらに建物や電柱を三角跳びで移動しながら私に近づいてくる。

接近戦は不利…撃ち落とす！

『Ｂｕｓｔｅｒ　ｍｏｄｅ.』

跳ね回ってる所を狙う。

「ディバインバスター！」

空中なら避けられないはず。

すると彼は空中で身体をねじり、銃口を私に向ける。

「ジークムントバスター！」

青紫の砲撃がディバインバスターを打ち消す。

しかもそのまま私に向かってくる。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ　Ｐｏｗｅｒｅｄ.』

カートリッジを使って強化したプロテクションで防ぐ。

よかった、貫けてない。

「油断しないの！」

っ！？

銃口から飛び出た矢を剣のように振り下ろしてくる。

避けられない。

お願い、耐えて！

矢をプロテクションで受け止める。
破られはしなかったが近くのビルにたたき付けられる。

「キャァァァ！？」

壁が崩れ中に転がり込む。
崩れたコンクリートから埃が舞い上がり周囲に立ち込める。

『マスター？』

「大丈夫！」

一兎君と模擬戦とかやっておけばよかったかな。
対策とか立てられたかもしれないし。

すると私が入ってきた穴から凶弾さんが私を見る。
そして新しい百科事典を何冊も重ねたようなマガジンを差し込む。

「バイバーイ♪」

再び魔力矢が乱射された。

急いで横に跳び回避。
矢は柱等に刺さって、爆発し魔力弾を辺りに撒き散らす。

矢はまだ撃たれ止まらない。
爆音がうるさい位に響く。

どうしよう、入ってきた所からは出られない。

何処かに穴を開けて脱出しないと。

『マスター、建物が崩壊しています！』

「え？キャ！」

上から瓦礫が落ちてくる。

揺れも酷くて立ってるのが難しい。

もしかしてこれを狙っていたの？

駄目、このままだと生き埋めになっちゃう。

こうなったら…

私はレイジングハートを上に向ける。

落ちてくる瓦礫ごと天井を壊す！

「ディバイン…バスター！！」

真上に向かって砲撃を放つ。

天井を次々と壊していき、外まで続く道ができました。

やった！

開いた穴を目掛けて飛んでいく。

もう少しで出口だ。

「あんなの撃っちゃ自分の位置を教えるだけでしょ！」

出口の前に凶弾さんが現れた。

出口を塞がれちゃった？

「６８口径クレイジー・ラビット！」

右腕の銃がデンジャラス・ラビットのような銃に組み換わって、さらに銃が変型してクロスボウの型になった。

あれって…

そして光の矢が形成されていく。

「サヴァンアロー・スパイラルシュート♪」

先端がドリルみたいな矢が私に向かって放たれる。

あれは防いじゃ駄目。

貫通されちゃう。

無理矢理開けた穴だからそんなに広くない。

だけど矢はあまり大きくはない。

避けられるはず。

ううん、避けてみせる！

当たりそうになった瞬間、首や身体を反らす。

矢が頬を掠って胸のリボンをちぎり、スカートを傷付けて通りすぎる。

「うっそー！？」

凶弾さんが驚いてる。

正直自分でもびっくり。

今日の私はラッキーなんだ。

崩れていくビルから脱出してレイジングハートを構える。

「エクセリオンモード、ドライブ！」

レイジングハートがカートリッジをロードする。

『Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．』

レイジングハートの先端が槍みたいな形になって、エクセリオンモードに変型した。

「な…何よ！形がちょっと変わっただけじゃない！」

変わったのは形だけじゃないよ！

『Ａ．Ｃ．Ｓ．ｓｔａｎｄｂｙ．』

レイジングハートから六枚の光の羽が生える。

「アクセルチャージャー起動、ストライクフレーム！」

『Ｏｐｅｎ．』

先端に魔力刃が形成される。

「エクセリオンバスターA．C．S．…ドライブ！！」

羽を羽ばたかせ、凶弾さん目掛けて突進する。

「この！」

カチン

「ってさっきので弾切れ！？もう！」

凶弾さんの前にトラウマ・シェルのような障壁が展開される。

大丈夫、行ける！

先端の魔力刃と障壁がぶつかる。

負けない！絶対に！

少しずつ押していき、魔力刃が障壁を貫いた。

「ブレイク…！」

そして魔力刃の先端に魔力を収束させる。

「まさか零距「シュート！！」やっぱり！？」

全力全開！

「あぁぁぁぁぁぁ！？！？」

エクセリオンバスターが凶弾さんを飲み込む。

私にも爆発と余波が襲い掛かってきて、バリアジャケットがボロボロになっちゃった。

でも勝った。

『やりましたね』

「うん。ありがとう、レイジングハート」

『当然の事です』

私は倒れた凶弾さんに近づく。

「えと…まだやります？」

「……零距離砲撃なんかやって…よく言うわね…」

にゃははは…

「私は……もう消えるわ…その杖の望み通りにね…」

やっぱり…欠片と同じで…

「負けたんだし……馬鹿呼ばわりしたのは…撤回するわ…」

「あ、ありがとうございます…」

ブスの所は撤回しないんだ…

「ま、精々足掻きなさい…あんた達は…核には勝てないわ」

「核？」

「これ以上は…教えてあげない……フフ、じゃあね」

凶弾さんは足元から崩れるように消えていった。

『一段落つきましたね』

「うん、少し休んでから行こう」

流石に疲れちゃった。

『そうしましょう。……マスター』

「なぁに？」

『佐々木一兎に謝った方が良いでしょうか？その…あの会話の件で…』

……あ。

「だ、大丈夫だよ！レイジングハートは私が悪口言われてるのを言い返しただけなんだから」

『…一応謝っておきます』

「じゃあ、そうしようか」

それよりも私は一兎君が変わった趣味の人なのかが心配かな。

……なんだか聞くのが怖いなぁ。

第５２話　星と凶弾（後書き）

オカマにした事は後悔してません

レイジングハートの台詞もネタに走りました

二つだけですが

第５３話　銃と雷刃（前書き）

皆さんはボクッ娘は好きですか？

私は好きです

俺っ娘も好きです

第５３話　銃と雷刃

～一兎ＳＩＤＥ～

闇の書の欠片か…
リィンフォースが生存してたらやっぱこうなるか。
俺は屋根の上を跳び回れりながら、次の欠片を探してる。

『一兎君？』

「なのはか。どうしたんだ？」

珍しいな。

『レイジングハートがお話があるって』

……おいおい、なんでだよ？
俺の姿の欠片が何かしたか？

『佐々木一兎ですか？』

「どうしたんだ。何かあったのか？」

『実は……』

どうやら俺の姿をしたマテリアルと口喧嘩をしたらしい。

どんだけ口悪いんだ俺…

てか俺の？戒から星光の殲滅者と戦ったと聞いたけど…

嫌な予感がするな。

『あと一兎君、私も聞きたい事があるんだけど…』

「なんだ？」

『一兎君って女装趣味とか、男の子が好きとか無いよね？』

そぉい！？

「ちょっと待て！何故そうなる？俺はノーマルだ！！」

『その…マテリアルがオカマさんだったから…』

何それ怖い。

『見てみたかったなぁ…』

おい！？俺は見たくないぞ！

『じゃあ後で記録の映像を…「悪いその話しは後で」にゃ？』

視線の先、道路の真ん中には一人の少女がいた。

先端が濃紺の青い髪のツインテール、紺色のマントとバリアジャケット、そして青いバルディッシュのようなデバイス。

「こっちにもマテリアルが出たんだよ。切るぞ」

『気おつけてね！』

なのはとの通信を切る。

向こうも俺に気付いたようだ。

「さて…お前もマテリアルだな？」

「そう…僕は【力】のマテリアル…」

一回転して杖を上空に投げる。

「雷刃の襲…痛！」

投げた杖が頭を直撃した。

「くっそ～、せっかくカッコ良く決めようと練習したのに～」

「そいつはご苦労なこった」

練習してたのかこいつ…

「うう…僕は雷刃の襲撃者だ！さっきのは忘れろ、絶対だぞ！」

頭をさすりながら杖を拾う。

調子狂うな、こいつ。

『ねえ、さっきのよりもっと格好良いポーズあるよ』

「どんなの！？」

『まず親指で自分を指して……』

ツッコミきれねぇ…

そんなこんなでマーチの指導が終わった。

『はい、やってみて』

「オッケー！」

雷刃は左手にデバイスを持つと…

「僕、参上！！！」

電王のあれをやった。

そう【俺参上】のポーズを。

「カ……カッコイィィィィィ！！」

どうやら気に入ったようだ。

精神構造が似てるんだな、こいつら。

「気に入ったよ！君、僕の物にならないかい？」

『あ、それは嫌。一兎から離れるつもりはないから』

マーチ…

「何!?」

「そういう訳だ。悪いがマーチは渡さないし、闇の書も復活させない」

左手からマガジンを生み出し、デンジャラス・ラビットに差し込む。

「そうはいかない、僕は帰るんだ。あの温かな闇の中に……血と災いが渦巻く、永遠の夜に!君は死に闇の書の糧となり、そのデバイスは僕がもらう!」

杖に魔力刃が形成された。

「やってみろ!」

フルオートで発砲。魔力弾が次々と発射される。

「無駄さ!」

雷刃は飛び上がり避けた。

俺は無理に追いかけず、地面から発砲を続ける。

空中じゃあ絶対不利だ。

相手が苛立って下りてくるのを待つ。地上なら障害物も多いから、起動力を削げるはずだ。

だが雷刃はとんでもないスピードで旋回しながら飛び、弾をことごとく避ける。

「遅い遅い！雷刃衝！」

雷の魔力弾を撃ってきた。
フェイトの魔法に似て非常に速い。

俺は電柱や建物を盾にするように走り攻撃をかわす。

「ちょこまかと…じっとしてろ！」

苛立ってきたのか、俺目掛けて高度を下げながら飛んできた。

「俺の台詞だ！」

マガジンを入れ替えながら、できるだけ建物が密集している場所に移動する。
そしてまた発砲するが、全く当たらない。

狭けりゃ有利かと思ったが…見当違いじゃないか。

「光翼斬っ！」

回転する魔力刃を投げつけてきた。

「アスペルガーアロー！」

魔力矢を撃ち応戦する。

だが刃は矢を真っ二つにし俺に飛んでくる。

「危ね！」

ギリギリまで引き付けて跳躍。
刃は俺の背後にあった家に当たり、壊れた壁から煙りが上がる。

「こっちだ！」

「っ！？」

雷刃が瞬間移動じみた速度で俺の目の前に現れる。

「そら！」

振り下ろしてきた魔力刃をトラウマ・シェルで受け止める。

「まだまだ！」

横に振られた魔力刃がトラウマ・シェルを切り裂く。

「喰らえ！」

再び振り下ろされた魔力刃をデンジャラス・ラビットで防ごうとするが、銃口ごと左の弓状のパーツを切断された。

「！？！？！？」

今まで感じた事の無い激痛が襲い掛かり、意識を失いかけ墜落する。

「どうした、もう終わりかい！？ハハハ！強いぞ、凄いぞ、カッコイイ！！」

雷刃は高笑いしながら俺を見下ろす。

ヤバイ…意識がはっきりしない……

痛いなんてレベルじゃねぇよ。

『一兎、しっかり！』

「わかってるって……」

ふらつきながらも立ち上がる。

「このまま微塵切りにした後に輪切りにしてやる！怖いだろ！」

「逆だ馬鹿。微塵切りにした後にどうやって輪切りにするんだよ」

「え？あ！ち…ちょつと間違えただけだ！」

デンジャラス・ラビットをしまい、アンフォーギヴン・バリスタを展開する。

速いから防御力の高いやつを選んだんだが…

あ～くっそ、目眩がする。

「はん！その銃でも僕に当てる事は不可能さ！」

「撃つだけじゃないっての！」

銃口から飛び出した矢を剣のように奮う。

「ヘナチョコ！」

避けられ空振りする。

続けて切り付けようとするが、俺を嘲笑うように俺の周りを飛び回り回避する。

「次は僕の番だ！」

高速で俺を切り付け、離脱を繰り返す。

「僕は王となる！そう、君なんか初めから敵なんかじゃないんだ！」

バリアジャケットやアンフォーギヴン・バリスタの装甲に傷付けられていく。

切り傷から血が流れ、装甲が傷付くたびに激痛が走る。

「さあ！我が剣の前に…君は死ね！」

魔力刃がアンフォーギヴン・バリスタに突き刺さる。

「僕の勝利だ！」

金色の魔力刃が装甲に食い込み、内部機関を貫く。

激痛で今にも手放しそうな意識を必死につなぎ止め、雷刃の首を掴む。

「……やっぱお前嫌いだわ。フェイトと同じ顔と声で、切るだの死

ねだの…」

「まだやるのか!?しぶといやつ!」

「気付かねえのか?俺はお前を掴んでるんだぜ?ずっと翻弄されてたのに」

「それがどうした!銃ごと君を断てば良いだけじゃないか!」

「知るか!!」

雷刃に頭突きをし、体制が崩れたスキを狙って魔力刃を引き抜く。

「どりゃぁぁ!」

そしてアンフォーギヴン・バリスタで殴り飛ばします。
吹っ飛んだ雷刃は向かいのコンビニに突っ込んでいった。

『ダイナミック入店ってね』

そして店を破壊し雷刃が飛び出てきた。

「貴様ぁ!調子に乗るな!」

「調子に乗ってるのはお前だろ」

いい加減に終わらす。
俺だって負けられないんだ!

『最終リミッター解除』

…解除？

『Ｐ．Ｖ．Ｆ　Ｔｗｉｎ　Ａｒｍｓ　Ｏｐｅｎ．』

右腕のアンフォーギヴン・バリスタが修復され、左腕にはデンジャラス・ラビットが展開される。

「なんだそれ！欠片達のデータに無いぞ！」

念じるだけでマガジンが生み出され、リロードが終わる。

「データー通りにいかないのが人間だ」

どうやら俺も能力が完全になったな。

「ずるい、ずるいぞ！天破っ！雷神槌！」

サンダーレイジのような雷が降り注ぐ。

トラウマ・シェルで防ぎ跳躍。

右腕の矢を振り下ろし、雷刃を地面にたたき付ける。

「ぐ！？」

さらに追い撃ちで両腕のＰ．Ｖ．Ｆから魔力弾と魔力矢をフルオートで発砲する。

大量の魔力弾と魔力矢が弾膜となり雷刃に降り注ぐ。

「うわぁ！」

雷刃は逃げるように飛び立ち回避する。
俺は着地しリロード、雷刃に狙いを定める。

「フロイトバスター！」

砲撃を放つ。

「この…！ってぇ！？」

回避しきれず防ごうとするが、シールドを破壊し彼女に直撃する。

「敵じゃない…か。その台詞、そっくり返すぜ」

「くそ！くそ！くそ！僕は…僕はぁぁぁ！！！バルニフィカァァァス！！！」

爆煙からはい出てきた。
バリアジャケットはボロボロで、マントもちぎれている。

ケリを付けるか。

「砕け散れ！！」

杖…バルニフィカスがザンバーフォームのような形に変型。伸びた刀身が雷を纏う。

俺はアンフォーギヴン・バリスタを変型させる。さらにカートリッジをロード、内部の光の球体が回転し前方に青紫の魔法陣が展開す

る。

「雷刃ッ！滅殺ッッ！！極ッ光ォォォォッ斬ッッッ！！！」

「ハートレス・ブレイカァァァァ！！！」

振り下ろされた巨大な雷の魔力刃に全力の砲撃を放つ。

「でりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺の砲撃を断ち切らんと全力でたたき付けてくる。

重い……だけど勝つのは俺だ！

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

カートリッジを再びロード、さらに威力が増した砲撃が、ぶつかり合った部分から魔力刃を砕いていく。

「そんな……馬鹿な！」

照射しながら魔力刃を破壊していき、ついに雷刃本体に到達。

膨大な魔力に雷刃が包まれる。

「いやだ、いやだ……嘘だぁぁぁぁぁぁっ！」

誰かの家の屋根の上にボロボロになった雷刃が横たわる。

「終わりだな」

「闇は……何度でも…蘇る…」

「ここで終わらせるさ」

「終わらせる？……ならば、彼らを解放して…みろ」

「彼ら？」

「そうだね……格好良い…散り際の台詞を…教えてくれたら……教えてあげるよ」

最期までよくわからんな。

『あばよ！……ってのは？』

「良い…ね。じゃあ教えてあげよう。……彼らは防御プログラムの核……そう、闇の書の闇に捕われた者さ」

防御プログラムの核？

【王】のマテリアルじゃないのか？

「時間…か。フフフ……あばよ！……うん、格好良い」

そして雷刃は足元から消えていった。

「マーチ」

『何？』

「シャマル呼べ、色々とやばい」

P．V．Fをズタボロにされたからな。
正直今にも倒れそうだ。

闇に捕われた者か……考えるのは後だ。
今は休ませてくれ……

第５３話　銃と雷刃（後書き）

敵転生者の応募ありがとうございます

私のストーリーの都合上や使い方で、キャラの背景が変わってたりしてますが、皆さんのおかげでストーリーがだいぶ固まってきました

本当にありがとうございます！

第５４話　閃光と轟雷（前書き）

もう少しです

第５４話　閃光と轟雷

～フェイトＳＩＤＥ～

一兎が私の姿をしたマテリアルを倒したと連絡が来た。

私の姿……なんか、嫌だな。

でもこれで半分は倒した。

残りは三人…

『フェイト、でかい反応が四時の方角にある。多分マテリアルだ』

「ありがとうアルフ、行ってみるよ」

『気おつけてよ。話しを聞く限りじゃかなりの強敵だし』

「うん。行ってくるね」

早く倒せば他の欠片も消える。

急ごう。

いた。

「ほう……これは滑稽な獲物が見つかったわ」

「対象をフェイト・テスタロッサと認識……戦闘行動可能。攻撃開始の許可を」

はやてによく似た少女…でも騎士甲冑の色は黒く、銀髪。帽子も被っていない。

そしてダークブラウンの装甲に包まれ、手には長刀のような物を持つ人物…テッカマンのようだ。

多分、はやてと利文の姿のマテリアル……

二人か…多分一人じゃ無理だ。

時間を稼いで、援軍が来るのを待つしかない。

「待て虚空。我らは小烏を潰すのが先決だ。塵芥の相手をする時間など無い」

「…了解。目標の抹殺を最優先とします」

小烏？誰かを探してる？

まさか……はやて？

どっちにしろ私達には不利益な事だ。

逃がす訳にはいかない。

「貴女が何を企んでいるか知りませんが。行かせません」

「黙れ塵芥。貴様の相手はこいつだ」
彼女が指を鳴らした。
……？
上！？
急いでその場から離れる。
その直後、私のいた場所に赤い剣が振り下ろされた。
あと少し気付くのが遅かったら…
「ちっ……避けやがって…」
黒と赤の騎士甲冑に銀髪、そして血のように赤い剣を担いだ少年がいた。
…戒？
そうか、最期の一人…戒の姿のマテリアル。
「轟雷、しくじるでないぞ…」
「わーってるって」
「ふん。ゆくぞ」
二人はそのまま飛び立って行ってしまった。

できれば逃がしたくなかったけど、私一人じゃ三人の相手をする自信は無い。

今は目の前の敵を確実に倒さなきゃ。

一人だけでも倒せば戦況は変わるかもしれない。

「あの二人と貴方が残りのマテリアルですね」

「そ。俺ぁ【偽】のマテリアル、轟雷の狩人」

担いだ剣を私に突き付ける。

「で、短冊切りとなます切り……どっちが好みだ？」

「…何が言いたいの？」

「はは、好きなように切り刻んでやるってんだよ。それとも三枚おろしが良いか？」

成る程…

戒とは違って酷く残虐な性格のようだ。

「残念ですが、私は切り刻まれるつもりはありません」

負けられないから。

「あっそ。じゃあ俺が考えといてやるよ」

そう言って彼は私を無視して剣を弄び始めた。

どうやら私はナメられているらしい。
好都合だ。油断している内に倒す。
後ろに下がり、バルディッシュを向ける。
『Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ．』
私の周囲に環状の魔法陣が浮かぶ。
「ファイア！」
八発の魔力弾、プラズマランサーを放つ。
だが彼は僅かに身体を反らして避けた。
最小限の動きで…
でも、まだ終わりじゃない！
「ターン！」
プラズマランサーが轟雷の背後で回転し方向転換、そして再度向かっていく。
そして私も轟雷に接近する。
「強閃剣！」
雷を纏った剣…グリードセバーのような斬撃で魔力弾を打ち消す。
『Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ．』

バルディッシュを変型させ、魔力刃を展開。
横薙ぎに振りかぶる。

「おっと」

轟雷は身体をのけ反らせ回避する。

「ハッ！」

続けて斜めから振り上げる。

だが剣に阻まれる。

「終わりか？」

まだだ！もっと速く！

「やぁ！」

更に速度をあげ高速で突進。
すれ違うように切り付ける。

何度も何度も。

だが何度やっても、彼にのらりくらりと避けられる。

振り下ろしては身を翻し、突いては受け流され、薙ぎ払っては飛び跳ねて避ける。

まるで私を嘲笑うかのように。

「あ～はいはい。速い速い…で？」

いや…嘲笑うなんてものじゃない。

私を完全に馬鹿にしている。

どうしよう…

戒と同じなら少なくともスピード以外は私より上。

中距離で攻めても決定打に欠ける。

でも近接の方が相手は強い。

攻撃も全部見切られている。

……よし。なら、見切れない程の速度で！

『Ｓｏｎｉｃ　Ｆｏｒｍ．』

マントが消失し右手に装甲が追加され、手足からは光の羽が生える。

「おいおい…次はストリップショーか？」

元々一撃でも喰らえばやられる可能性があったんだ。

ならばもっと速く。

ソニックフォームで！

向こうからはまだ攻撃を仕掛けてきてはいない。

でも何時攻めてくるかはわからない。

確実に避けて当てる！

「バルディッシュ！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ．Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．』

先程とは比べものにならない程のスピードで突っ込む。

そしてバルディッシュを振るう。

「うお！？」

避けられた。

でも今までと違い下半身のコートを切断した。

いける！

私のスピードに完全に対応しきれていない。

今がチャンス！

「ハァァァ！！」

「ちっ！」

また何度も切り掛かる。

すれ違う度に騎士甲冑に切り傷が増え、髪をかする。

見えてきた。

「そこ！」

「調子に乗るなぁぁ！」

すれ違いざまに轟雷が剣を振る。
その瞬間、脇腹に痛みが走る。

切られた？

「目が慣れてきたぞ……へへっ！」

傷は浅い……でも…
まさかもう目が慣れるなんて…
なんてでたらめなの。

『Ｂａｒｒｉｅｒ　ｊａｃｋｅｔ，Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　ｆｏｒｍ』

バルディッシュが危険だと判断したのだろう、ライトニングフォームに切り替えマントを羽織る。

「どうしたどうした！来ないなら俺から行くぞぉ！瞬刃！」

剣が振られ、雷の魔力弾が放たれる。

痛みを堪えながら回避。

「ヒャハハハハハ！！！」

切り掛かってきた剣をバルディッシュで受け止める。
だが轟雷は私の頭を掴むと膝蹴りを繰り出す。

「が…？」

鈍い痛みと吐き気が襲う。
危うく意識を失いかける。

「弱い魂だなぁ！」

続けて振り下ろした剣をなんとかディフェンサーで防ぐ。
そしてその反動を利用して離れる。

「ずっと一人だった！ぬくもりや優しさを恐れている！裏切られるかもしれないからとビクビクしながら…なぁ！？」

っ！？

突っ込んできた轟雷の剣を受け止めるが、勢いを止められずビルの壁に押し付けられる。

「死にぞこないの偽物の母親、道具の犬っころ……上っ面だけの友情のお友達…実らない恋。そう、お前は始めから一人なんだ」

嫌…

「そんなやつらはほっとけ。あいつらの為に頑張るなんて無意味なんだ。死ねば楽になれるぜ…一人ぼっちでもなぁ」

私は一人？

……違う。

母さんは私の母さんだ！アルフも道具じゃない！
皆…大切な人だ。

なのはも、はやても、アリサも、すずかも、戒も、利文、クロノ、ユーノ、エイミィ…皆、上っ面の友情なんかじゃない！

一兎も必ず振り向かせてみせる！

一人になるのは怖い。
でも…私から皆を裏切る方がもっと怖い。

「お前の言葉は聞かない…お前の言う事は全部嘘だ！」

そうだ、私は一人じゃない！

「ジャケットパージ！」

「うお！？」

バリアジャケットの魔力を解放し轟雷を吹き飛ばす。

「バルディッシュ！」

『Ｚａｎｂｅｒ　ｆｏｒｍ．』

バルディッシュをザンバーフォームに変型させる。

「しゃらくさい！死にやがれ！！」

戒の顔で…許さない！

カートリッジをロード。

回転して衝撃波を放つ。

「ふん！」

轟雷は飛び上がり回避。

空中で突くような構えをする。

「牙突・爆雷ィィィ！！」

膨大な魔力と雷を纏った巨大な突きを繰り出してくる。

「撃ち抜け！雷神！」

『Ｊｅｔ　Ｚａｍｂｅｒ．』

切っ先から伸びた巨大な雷の刃を振り下ろす。

二つの雷がぶつかり合う。

「やぁぁぁぁぁぁ！！！」

ジェットザンバーが牙突を切り裂いていく。

「馬鹿な！こんな奴に！？」

「私の友達の顔で…二度と目の前に現れるな！消え去れ！！！」

振り下ろす手に力を込め、一気に両断する。
そして伸びた刃が下にある民間を道路ごと切り裂いた。

「ギェェェェェ！？！？」

轟雷が真っ二つになり消滅する。

やった…勝った。

『サー』

「何？」

『お強くなりましたね。心も』

「ありがとう」

皆のおかげだ。

私は…一人ぼっちじゃない。

友達がいる。

家族がいる。
好きな人がいる。
大切な人が沢山いるんだ。
皆のためなら、もっと強くなれる。
「行こう。あの二人の目的が気になる」
『Ｙｅｓ，ｓｉｒ．』
もう少しだ。
頑張ろう。

第５４話　閃光と轟雷（後書き）

王「フハハハハ！！！どうだ、我は一話以上登場したぞ！これが王たる威厳だ！」

虚空「……（パチパチパチ）」

雷刃「ねぇ王様が高笑いしてるよ。虚空の頭に立ちながら」

凶弾「ほっときなさい」

轟雷「俺…有無も言わさず消された…」

星光「仕方ありませんよ。あそこまで悪役全開でしたし。私なんかフラストファイアーを一回直撃させただけなんですから」

雷刃「で、なんで僕達が後書きに？」

星光「作者曰くマテリアル達が勿体ないから後書きでラジオもどきを私達にやらせるようですよ」

凶弾「あら。じゃああたし達に出番があるのね♪」

轟雷「後書きだけだがな」

星光「とゆう訳で質問等がありましたら、読んで欲しいマテリアルを表記して感想にお願いします。勿論王や虚空も読みます、読ませます。ええ、無理矢理にでも」

雷刃「これからもよろしくね！」

第５５話　夜天と闇、二本の槍（前書き）

闇統べる王は【闇】と書いてます
ちょっとわかりにくいかもしれません

第５５話　夜天と闇、二本の槍

～はやてＳＩＤＥ～

「でやぁぁぁぁ！」

トシ君が闇の書の欠片のクロノ君を突き刺す。

「ぐ……父さんの…か……かた…き…貴様…だけは…」

欠片のクロノ君が消えていく。

最期まで必死にトシ君につかみ掛かっていた。

「トシ君…」

「うん…」

欠片のクロノ君はずっと父さんの仇やって言ってた。

私達が憎いはずなのに…

それなのに…

『申し訳ありません』

「リィンフォース、君のせいじゃないよ」

「せや、リィンフォースはなんも悪くあらへんよ」

そう、悪くはない…

『すまない、僕の欠片が迷惑をかけたようだ』

クロノ君？

「あ、えと…その…」

「ご、ごめ『気にしなくて良い』え？」

『君達には何の恨みも無い。父さんを殺したのは闇の書の闇だ』

「クロノ…」

闇の書の闇…

『マテリアルの話しではそれがまだ生きてるらしい。だから頼みたい……管理局員としても、僕個人としても。今度こそ破壊するために！』

……うん。

せや、もう悲劇は懲り懲りや。

皆との人生はこれからや。

「勿論！やろう！」

「せや！二度と悪さできへんようにしたる！」

『頼む』

クロノ君との通信が切れる。

「さて、チャッチャと片付けますか！」

「マテリアルでも欠片でもどんと来～い！」

今の私なら負ける気がせぇへんで！

『……本当に来たぞ』

え？

『主、砲撃です！』

「はやて！」

トシ君が私を掴んでその場から離れる。
その直後に紅い砲撃が私のいた所に降り注ぐ。

「大丈夫？」

「うん、ありがとう」

あ、危なかったわ…

上を見ると二人の人影が見える。

私？違う。
帽子を被っとらんし、騎士甲冑の色も違う。

そして何よりあの緑の瞳。
なにもかもを見下したような…そんな瞳。

一目見ただけでわかる。
あの子は嫌いや。
一番嫌いなタイプや。

もう一人はテッカマン…トシ君と同じ姿や。
色は違うけど。

「奇襲失敗。目標は健在」

機械のような、全く心のこもっとらん冷たい声…
見た目が似ているだけあって、えらく気味が悪い。

「構わぬ。手足の一本程度しか期待しておらぬわ」

そう言いながら口元を吊り上げて笑う。

「見つけたぞ小烏。しかも飼い犬もいるとはな」

「…マテリアルか。しかも二人」

「ふん…我が名を聞ける事を光栄に思え。我は【王】のマテリアル、闇統べる王なるぞ！」

「【従】のマテリアル、虚空の槍騎士…」

続けてもう一人のマテリアルが名乗る。

「はやて、行ける？」

「当たり前や！リィンフォース」

『はい。やりましょう』

「塵芥が、消えよ！やれ！」

「攻撃開始。ファントムスマッシュ」

虚空が飛び上がり右足に魔力を込めた跳び蹴りをしてくる。

「ゲシュペンストキック！」

トシ君も同じように跳び蹴りを繰り出す。
そしてお互いの足がぶつかり合った。

「どわぁ！？」

トシ君が押し負け、民家に落ちる。

「そぅら、エニシリアルダガー！」

「ベルクレーザー」

闇と虚空がトシ君の落ちた民家目掛けて大量の魔力弾を撃つ。

「させへん！」

『刃以て、血に染めよ』

「穿て、ブラッティダガー！」

血色の短剣を魔力弾に向けて放つ。

魔力弾に着弾し爆裂、周囲の魔力弾をさらに巻き込む。

せやけど何発かは逃してしもうた。

『利文！？』

すると民家から飛び出したワイヤーにくくり付けられたランサーが振り回され、民家を薙ぎ払い魔力弾を防ぐ。

「クラッシュイントルード！」

そして崩れた民家から紅い光を纏ったトシ君が飛び出した。

「ブレイクイントルード」

同じように紅い光に包まれた虚空がトシ君と空中で飛び回りながら、何度もぶつかり合う。

「よそ見とは余裕だな。ドゥームブリンガー！」

放射状に魔力弾が放たれる。

避けるのは難しい。

ほんなら離れて被弾数を減らす！

障壁を展開しなが後退、当たったのは二発だけ。

大丈夫、貫かれてへん。

「クラウ・ソラス！」

闇へと砲撃を放つ。
せやけど避けようとも防ごうともせん。

何かが砲撃の前に投げこまれ、代わりに命中する。

「うわぁ！？」

トシ君！？
トシ君を盾にしたんか！？

しかも首からワイヤーのような物が伸びてる。
そしてその先には虚空の腕に繋がっている。

「ははは！どうした？もう力尽きたか？」

「卑怯者！」

「戯れ事を！やれ！」

「……！」

虚空がトシ君を投げつけてきた。
まるで鎖に繋がれた鉄球のように。

受け止める？無理や、下手すると押し潰されてまう。

「踊れ踊れ！」

さらに闇が魔力弾を撃ってきた。

次々と放たれる魔力弾を回避、防ぎながら投げつけられるトシ君を避ける。

せやけど魔力弾はトシ君も巻き込むように撃っとる。

今はまだ耐えとるけど…

『なんて事を…！』

「何が王や。卑怯者……卑怯者！」

「ククク…実に愉快だ！泣け、喚け、絶望しろ！！」

杖を私に向け、砲撃を撃ってきた。

間一髪で避けたが、横からトシ君が飛んでくる。

「ああ！？」

とっさに障壁で防ぐが勢いで跳ね飛ばされる。

なんとか停止して体制を直す。

『ご無事ですか？』

「うん。せやけど、時間をかけるほどトシ君が…」

トシ君の装甲はあちこちにひびが入り、そこから血が流れとる。

「こっちもまだ耐えるか。楽しみがいがあって実に良い」

「攻撃を再開します」

また私に向けて投げつけてきた。

その瞬間、トシ君が止まった。

「いい加減にしろ！」

トシ君の腕からワイヤーが伸び、虚空の首に同じように絡まる。

そして思いっ切り引っ張って殴り飛ばした。

「！？！？」

「何？うお！？」

しかも吹っ飛んで闇に命中した。

「この！」

首に絡まったワイヤーを引きちぎり、闇にもワイヤーを飛ばす。

「な！？」

「おかえしだぁぁぁ！」

そして二人を振り回し、地面にたたき付ける。

「はやて！」

「うん！」

トシ君と並ぶ。

「うぉぉぉ！」

「轟け、破壊の咆哮！」

おかえしや。

容赦せん！

「「ボルテッカ！！！」」

二本の砲撃がマテリアル二人組に向けて放たれる。

「虚空！」

「！！！」

直撃。

大爆発が起きる。

勝った？

『よし！』

『いえ、まだです！』

煙りが晴れると、そこには虚空が両腕を広げ仁王立ちしていた。

盾になっとったんか？

「ダメージ、７０％オーバー。これ以上の戦闘行動は不可能。消滅も時間の問題です」

「ふむ…仕方あるまい。防げただけ良しとするか。せめて散るのならば、一匹は巻き添いにしろ」

な…何言っとるんや？

「了解。ボルベルク・ファイナルブレイク」

虚空が物凄い速さて飛び出し、トシ君に抱き着く。

「お前！まさか…はやて、離れろ！こいつ自爆する気だ！」

やっぱり。

「せやけど！」

『主！』

「僕は大丈夫だ、早く！」

「っ！」

わかった。信じとるで。

できる限り離れる。

『Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ.』

トシ君はブラスター化による装甲の変化を利用して虚空から離れ、投げ飛ばした。

「ボルベルク」

「ボルテッカァァァ！」

投げ飛ばされ落ちていく虚空に向かって、首と胸からボルテッカが放たれる。

桁違いの爆発が起き、爆風で吹き飛ばされそうになる。

目を開けると、数十メートルはあるクレーターができてた。

トシ君も無事や。

「はやて、リィンフォース、大丈夫?」

「うん」

『無事です』

そういえば闇は?

「おのれ塵芥が…！」

いた。
残念やけど、向こうも無事みたいや。
「飼い犬一匹始末できぬとは、なんとゆう体たらくだ」
「お前、仲間を自爆させて…」
「いい加減にせい！さっきから何様のつもりや！」
「ふん…使えぬ塵芥を何と言おうと我の自由だ。替えなどまた作れば良い！」
頭おかしいんとちゃうか？
……絶対に許さへん。
ほんまに頭にきたで！
「我が闇は永遠よ！」
「永遠なんてあらへん。私が終わらす！」
同時に魔法陣を展開する。
「散れ！エクスカリバー！！」
『響け終焉の笛』
「ラグナロク！！」

お互いの砲撃が衝突する。

負けへん。絶対に！

膨大な魔力がせめぎ合う。

撃ち破れへん…なら！

大爆発と共に砲撃が相殺される。

「小烏風情が！」

まだ終わりやない！

「トシ君！」

「おぉぉぉぉ！」

爆煙の中からトシ君がランサーを構えて突進する。

「何！？ぐふ！？！？」

ランサーが突き刺さる。

「ボルテッカランサー！」

「うぉぉぉぉぉぉ！？！？！？」

突き刺さった先端が開き、砲撃が放たれる

そして腹部からちぎれ飛び、墜落する。

終わりや。

「はやて」

「うん。私達の勝ちや！」

ハイタッチをする。

『はやて、利文、大丈夫？』

フェイトちゃん？

「大丈夫や、今マテリアルを二人倒した所や」

『本当？私もさっき倒した所だよ』

「じゃあこれで全部倒したんだ！やった！」

「後は核だけや！」

もう少しや。

っ！？

辺りに新しい結界に被われる。

「何これ？」

『皆、聞こえる？海鳴全域に結界が発生してる！しかも中心から目茶苦茶な魔力が観測されてるよ！』

エイミィさんから、焦ったように通信が来る。

「ハ……ハハ…ハハハハハハ！！！」

まだ消えとらんかったんか？

「何がおかしい！」

「貴様らは終わりだ！欠片達と、我らとの戦いによって四散した魔力で、復活したのだ！」

「まさか…」

全部仕組まれとったんか？

「喰われろ！無限の闇に！クハハハ……ハハハハハハ！！！」

消えた。

なんや？もの凄く嫌な予感がする。

「中心に急ごう！」

「う、うん！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

結界の中心。
すでに皆が集合していた。

「ねぇ…あれって」

「あれが……核！」

そこには前回と同じような黒い淀みがあった。

そして淀みが崩れていく。

「ちょっと待てや」

「嘘…」

一兎と戒が唖然とする。

当然だ。

中から出てきたやつが、とんでもないやつだったのだ。

乳白色の甲殻に包まれた１００ｍを超える巨体。
頭の周りにパラボラ状に配置されたクロー。
腹部にうごめく無数の卵。
そして頭から伸びる巨大な角。

地球の守護者を追い込み、地球のマナを著しく消耗させるような技でようやく倒した怪物。

マザーレギオンがいたのだ。

第５５話　夜天と闇、二本の槍（後書き）

星光「……」

凶弾「うわ…」

雷刃「王様最低～」

轟雷「俺より酷くね？」

闇「だまれ！仕方ないだろ！う……虚空ぅぅ！」

虚空「……（頭を撫でる）」

凶弾「凄い忠誠心ね」

轟雷「まあ、元があれだからな」

星光「あ、そういえば、先代の闇の書の主である転生者の能力は、【ガメラ２】のマザーレギオンの召喚能力でした」

雷刃「何人か正確した人もいたよね」

星光「ええ、わかってくれた方々がいて嬉しいと言ってましたね」

凶弾「所でお便りは？」

星光「一つだけ質問が来ていますね。名指しはありませんが。王、いつまでも虚空に泣きついていないで働いてください」

闇「ええい、貸せ！……舟漕ぎ氏からの質問だ。
《あ、今更だけどマイトガインやジョセフはどうなったんだろ？直人は自殺してても不思議じゃないけど……》
なのモブ転生者共か」

雷刃「とりあえず虚空に膝枕されながら読むの止めようよ。固そうだし」

闇「羨ましいか？だが渡さんぞ！」

凶弾「そんな事言ってないでしょ…」

闇「まあ質問の答えだ。一応全員生存だ。勿論王蛇とルーシー以外はな」

轟雷「あの二人は死んだしな」

闇「直人とマイトガインは地球出身だ。直人は学校を辞めて実家に帰り、マイトガインは海鳴外の人物だからな、二人共諦めて帰ったのだ。ジョセフは管理世界出身で、魔力が回復した後に帰った……といった所か」

雷刃「ジョセフは墓穴掘りまくってたね」

凶弾「あんたもやりそうね」

轟雷「ありえる」

雷刃「何を！」

星光「はい、ありがとうございました。ではまた次回お会いしましょう」

虚空「…お知らせ」

星光「おっと、忘れてました。敵転生者募集ですが、次回のマテリアル編最終回までとさせていただきます。最後のご応募お待ちしております」

闇「あともう一つ。Ｓｔｒｉｋｅｒｓで追加する味方なんだが、転生者一名と転生者の子孫一名を追加する」

轟雷「それも募集するのか？」

闇「すでに決まっておるわ。ただ、転生者の子孫の方は応募してくれた敵転生者から選ばせてもらった。あくまで能力だけだがな」

全員「はい？」

星光「なんともまぁ……あ、発表は本編にてですが、応募してくれた方ありがとうございます。背景は全然違いますが、味方として使わさせていただきますので活躍には期待してください。勿論味方は嫌だとゆう方は感想にお願いします」

虚空「また次回。お便りも待っています」

凶弾「虚空、邪魔なら退かして良いのよ」

虚空「♪（ナデナデ）」

凶弾「一生やってなさい…」

第５６話　暗い夜、新たな日差し（前書き）

マテリアル編完結です

募集を今回をもって終了とさせていただきます

沢山のご応募ありがとうございました！

第５６話　暗い夜、新たな日差し

～利文ＳＩＤＥ～

「最悪だ…」

「クロノ君、知ってるの？」

「資料でしか見た事しかないが、前回の闇の書の主が使役していた召喚獣だ…」

…本当に転生者だったんだ。

「おい！あたしはあんなの知らねぇぞ！」

「私もです」

「同じく」

「…リィンフォース？」

シグナムがはやて…いや、はやてとユニゾンしているリィンフォースに問いかける。

騎士甲冑の件といい、あまりにも奇妙だ。

「説明、してくれる？」

『…主の願いでした。守護騎士達の記憶を消してほしいと…』

「そして、我らの記憶を操作したのか…」

『また守護騎士達を家族として受け入れる主が現れても、また裏切られると思わせたくないと……いえ、ただ逃げていただけなのかもしれません…守護騎士達への罪の意識から』

転生者として最悪とも言える状況になって……

彼女の真意は誰にもわからないか…

「動き出した！」

フェイトの声で我に帰る。

『痛イ』

『暗イ』

『寒イ』

『苦シイ』

『助ケテ』

『誰カ』

老若男女、様々な人の声が響く。

どれもが悲しそうで痛々しい声だ。

「お、おい。あの声…」

「…間違いない。今までの主達だ…」

主達？

「もしかして雷刃の言ってた【闇に囚われた者】って……すっげえ嫌な予感がするんだが…」

『まさか…歴代の主の意識を取り込んだままなのか？』

「それって、ずっと闇の書の中に閉じ込められとったって事なん？」

『恐らく……魔力的なデータに変換され、拘束され続けていたのでしょう…』

「助け出せないの？」

『不可能です。肉体はすでに滅んでいるはずですから…』

吐き気がしてきた…

死ぬ事も許されず、暗い闇に…気が狂いそうだ。

『僕ヲ』

『『『俺ヲ』』』

『『私ヲ』』

『死ナセテ』

『モウ嫌ダ』

『殺セ…』

『『『『殺シテクレェェェェェェェェ！！！』』』』

悲痛な叫びと共にレギオンの角が開き、青白い光が収束していく。

「っ！？全員回避！急げ！」

マイクロ波シェルが一直線に放たれた。
青白い光が次々と建物を破壊し、アスファルトが吹き飛ぶ。

「……！？」

「なんとゆう威力…」

「町が…」

射線上にあったもの全てが破壊しつくされた。

一撃で死ぬ。いや、掻き消される。死体すら残らない。

『ガアアアアアアアアアア！！！』

苦痛に満ちた叫び声と共に、腹部のエッグチャンバーから次々とソルジャーレギオンが生み出される。
その数は百は超えているだろう。

『二班に分かれて大型と小型を撃破。特に大型の砲撃には注意してください！』

「「「「了解！」」」」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

迫り来るソルジャーレギオンを切る。
脚を切り落とし、横薙ぎに切る。

たしかに弱いが、いかんせん数が多い。
数の暴力とはよく言ったもんだ。

対小型班はヴォルケンリッターを中心にした近接組とクロノ。
実際あんな馬鹿でかいやつを切ろうとしたらデバイスが折れるような気がする。

「紫電一閃！」

シグナムの斬撃でレギオンが真っ二つになる。

「縛れ！鋼の軛！」

地面から突き出た鋼の軛が数匹のレギオンを突き刺していく。

「畜生、こいつら一体何匹いるんだよ！？切りがねえ！」

ヴィータがグラーフアイゼンで叩き潰す。

「一匹一匹はたいした事はないけど…数が！」

フェイトは飛び回るレギオンを避けながらバルディッシュで切り伏せる。

確実に数を減らせているし、先程から増えてはいない。
次の孵化まで時間がかかるのだろう。
とにかく早く片付けなければじり貧だ。
また生み出されたらこっちが持たない。

「でゃあ！」

レギオンの目に封雷剣を突き刺す。
傷口から酸素を吹き出しながら倒れる。

！！！

やば、囲まれた！？

「スナイプショット！」

一発の魔力弾が僕の周りのレギオンを薙ぎ払う。

「クロノ、助かった！」

「周りをよく見ろ！全員、お互いの死角をフォローしながら戦うんだ！囲まれるぞ！」

「テスタロッサ、背中を預けるぞ！」

「はい！」

「ザフィーラ！」

「応！」

「戒、援護射撃は任せろ」

「頼りにしてるよ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

「ディバインバスター！」

「「ボルテッカ！」」

「フロイトバスター！」

四つの砲撃がマザーレギオン目掛けて放たれた。
だが干渉クローから発生したバリアが砲撃を四散させる。

全然通用しない…

上半身はバリア、下半身は建物が邪魔、放つマイクロ波シェルは桁違いの威力。
まさに要塞だ。

俺となのは、はやてに利文、そしてユーノでマザーレギオンと戦ってる。

正直人数が少なく、かなりきついが、俺達で倒す必要は無い。
向こうがソルジャーレギオンを全滅させる時間を稼げば良いのだ。

とにかくこれ以上生ませないようにするのが今の仕事。

ギャオスやイリスが相手だったら食われる可能性があったからまだましだ。

満員電車とか中身吸われるなんてトラウマもんだったし。

しかし強い。

流石ガメラ史上最強とも言われる怪獣だ。

下半身に当たっても固い甲殻にまともにダメージを与えられてないし、振り回される脚で近づけない。

「この！」

利文が脚の間をくぐり抜け、後ろを取った。

すげえ。

まさか避けきるなんて。

流石ブラスターテッカマン。

「紫電一閃！」

魔力を付属させたランサーが振り下ろされる。

「折れたぁ！？」

甲殻に刃が食い込むが、途中で止まり折れてしまった。

「うわ！？」

後ろ脚で叩き落とされる。

「トシ君！」

そして後ろ脚が持ち上がり、利文を踏み潰そうとする。

「させない！」

ユーノのチェーンバインドが後ろ脚に絡み付く。

脚の動きが鈍る。

「この！」

「アクセルシューター！」

「ブリューナク！」

魔力弾やら矢を撃つが、またもバリアに阻まれる。

だがそのスキに利文は脱出に成功したようだ。

「ごめん、助かったよ」

「気にしないで」

「だけどどうしよう…私達の攻撃が全然通用しない……」

「バリア所か本体にも通用せえへんなんて…なんちゅう固さや」

「とにかくバリアを発生させてるあの爪をどうにかしないと。多分、関節はそんなに頑丈じゃないはずだ」

「だけどバリアを張ってない時位しか機会は無いよな…」

「狙うとしたら砲撃のチャージ中かな」

どの道簡単じゃない。

『嫌ァァァァァァ！！』

耳をつんざくような悲鳴をあげ、角が開き赤い光の触手、レギオンビュートが飛び出してきた。

振り回したレギオンビュートは、ビルをやすやすと切断し俺達に迫ってきた。

「皆、集まって！」

全員がユーノの周りに集まる。

そして緑色の半球状のバリアに包まれる。

「頼む、耐えて！」

レギオンビュートはでたらめに振り回されて攻撃範囲が広い。

下手に動く方が危険だ。

『苦シイ…苦シイ！』

建物を貫き、電柱を切り倒しバリアに叩き付けられる。

正確に俺達を狙ってる訳じゃないが、周囲は目茶苦茶だ。

切断されたビルの破片が散乱し、道路にはえぐれ、電柱はまとめて薙ぎ倒されてる。

「も…持たない？」

まじかよ？

「ユーノ、一、二の三でバリアを消して。消えた瞬間にスピードのある僕と一兎が全員を射程外に逃がす」

「…わかった」

「決まりだ。なのはとはやては利文に掴まれ。ユーノは俺だ」

「うん」

「トシ君」

「任せて」

利文が二人を抱える。

「ユーノ」

「行くよ…一、二の…三！」

バリアが消え利文が飛び出す。

俺もユーノを掴んで駆け出す。

一気に走りレギオンビュートの射程から抜け出す。

「ここまで来れば…」

「大丈夫じゃなさそうなんだけど！」

後ろを振り向くと、レギオンがマイクロ波シェルの発射体制に入っていた。

まずい！

そう思った瞬間、レギオンの背後に金色の光が見えた。

『Ｊｅｔ　ｚａｍｂｅｒ．』

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

突如現れた巨大な金色の魔力刃が、左側の干渉クローをまとめて削ぎ落とした。

「「「「フェイト（ちゃん）！」」」」

「皆、向こうは終わったよ！」

ソルジャーレギオンは片付いたのか。

『Ｒｉｓｉｎｇ　Ｆｏｒｃｅ．』

上空へ伸びた雷の切っ先が右側の干渉クローを貫く。

「後はこいつだけだ！」

「戒君！」

「戒！」

「これでバリアは張れない…行くよレイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

なのはが飛び上がる。

「全力全開！スターライト…ブレイカー！！！」

桃色の砲撃がレギオン目掛けて放たれる。

レギオンも迎え撃つようにマイクロ波シェルを発射した。

二つの砲撃が衝突したが、次第になのはが押され始める。

「まだだ、こいつも喰らえ！」

『Ｈｅａｒｔｌｅｓｓ　Ｂｒｅａｋｅｒ．』

さらに青紫の砲撃が加わり、一気にマイクロ波シェルを押し退ける。

直撃。

角は無残にも潰れ、上半身のあちこちにひびが入り、焦げている。

『ウガァァァァァ！！』

エッグチャンバーがうごめきだし、またもソルジャーレギオンを生み出し始めた。

「これ以上増やさん！」

シグナムはボーゲンフォルムとなったレヴァンティンを構える。

「翔けよ！隼！」

『Ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ．』

シュトルムファルケンがエッグチャンバーに直撃。

爆炎が卵を焼き尽くす。

だが何匹かは逃れ、飛び出してきた。

「シータ、ターゲットロック！」

『目標、ソルジャーレギオン』

「ボルテッカ・マルチブラスト！」

全身の発射口から放たれたボルテッカが、ソルジャーレギオンを撃ち抜いていく。
角も潰され、エッグチャンバーも破壊、ソルジャーレギオンは全滅。
レギオンを追い詰めていく。

「全員退け！」

ヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶる。

「轟天爆砕！ギガントシュラーク！！」

巨大化したギガントシュラークが、レギオンに振り下ろされる。
初めは耐えようとしたが、すぐに叩き潰された。

「どうだ！」

だが地響きと共にヴィータの背後にレギオンが現れた。
潰される直前に地面に潜ったのだ。
しかも目が赤く輝き、完全に逆上している。

『！！！！！！』

もはや声にならないような叫びを上げ、潰れた頭から三本のレギオンビュートが伸びる。
ダメージのせいで出せる本数が減ってしまったのだろう。

「チェーンバインド！」

ユーノが放った大量のチェーンバインがドレギオンビュートを縛り

上げる。
だが赤く光る触手は、しだいにバインドを切断しようと食い込み出す。

「長くは持たない！早く！」

「充分だ！ザフィーラ、僕らで止めるぞ！」

「承知！鋼の軛！でやぁぁぁ！！」

地面から生えた鋼の軛が、レギオンの脚とレギオヲビュートを貫く。

「闇の書…決着をつける！凍てつけ！！」

『Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ．』

そして周囲の建物ごとレギオンは凍りついていく。

今だに目は赤く光り、僕達を睨む。

『ア……アア…ヤット…』

静かな声。
悲しそうな、それでいて嬉しそうな声だ。

「……皆、最後は私にやらせてくれへん？」

「はやてちゃ「任せよう」…うん」

「一兎」

「ああ」

皆が離れる。
だが僕ははやての隣にいた。

「はやて。僕もやるよ」

「せやけど…」

「はやて」

『我が主…』

「ありがとう……最後のしあげや」

僕ははやてとは反対の方向に立つ。
そしてブラスターボルテッカの発射体制に入る。

「ごめんなさい…助けられへんで……ごめんなさい、私だけ生き残って…」

はやての瞳に涙が浮かぶ。

防御プログラムごと破壊…いや、殺すしか手段がなかった。
彼らを闇の書から解放する手段は…

はやて一人に辛い思いをさせない。
彼女の苦しみを少しでも背負ってあげたい。

「響け……終焉の…笛…」

「……ブラスター」

はやての目の前に魔法陣が展開。
僕も全身のボルテッカ発射口に魔力を込める。

『コレデ……眠レル…』

……お休み…なさい。

「っ！ラグナロクゥ！！！」

「ボルテッカ！！！」

二つの砲撃がレギオンを包む。

『アリガトウ』

第５６話　暗い夜、新たな日差し（後書き）

轟雷「終わったな」

星光「はい。次回からは空白期ですね」

凶弾「しかしこの部屋狭いわね」

星光「仕方ありませんよ。部屋がソルジャーレギオンで埋めつくされてるんですから」

轟雷「はぁ……ってお前ら何やってんだ！？」

雷刃「何って。虚空にレギオンを料理してもらうんだよ」

闇「これだけあるのだ。当分は食い物に困らんぞ」

星光「筋肉がありませんから、食べる部分なんかありませんよ」

轟雷「第一珪素生物なんか食える訳無いだろ」

闇「な…食えないのか！？」

雷刃「そんなー！？」

虚空「……ｏｒｚ」

凶弾「とにかく邪魔だからさっさと片付けましょ。そうだわ！昨日通販で買ったルナメモリを試しましょ♪」

轟雷「おい馬鹿止めろ」

雷刃「洒落にならないよ。キャラ的に」

凶弾「嫌いじゃないわ！」

闇「馬鹿は無視して…敵転生者募集感謝するぞ。どうだ！王たる我が直々に礼を言ってや…」

星光「募集、本当にありがとうございます。空白期で敵視点での話で発表します。これからも頑張りますので、よろしくお願いします」

闇「貴様！我の邪魔をするとは何事か！」

星光「お礼になってないじゃないですか」

闇「言ってるではないか！」

雷刃「う～ん…どっか食べれる部分は無いかな？」

轟雷「いや、珪素だから無理だって言ってるだろ…」

凶弾「やっぱ使っちゃう！『ルナ！』」

虚空「また次回、お会いしましょう」

第57話　変態は成敗！（前書き）

今回はギャグ回です

第57話　変態は成敗！

～利文ＳＩＤＥ～

あれから数ヶ月経った。

僕達は原作通りアースラメンバーのおかげで保護監察となり、管理局への従事をして罪を償う事になった。

はやてが闇の書の完成を望んだのが少し不安だったけど、一兎と戒が病院の屋上での出来事を記録していたのだ。

やはり子供が自分の死に怯える姿は説得力があったのだろう。

今までの闇の書の被害者や遺族達もはやてを被害者として認識してくれた。

だが僕とヴォルケンリッター達は違う。僕も蒐集時に人を襲ったのだ。

一応死者を出していない事やはやての状況から、僕はあまり責められる事はなかった。

しかしヴォルケンリッターやリィンフォースの消滅を望む声が多かった。

今回は死者を出さないよう細心の注意を払ったけど、今までは違う。

同じ遺族でもあるリンディさんの必死の説得で、はやても保護監察を受ける事で終わらせた…

さて、今は四月。
そして今日から僕達は四年生だ。勿論はやても復帰してくる。
で、朝起きたら隣にはやてが寝ていた。
「はやて、また僕の所に潜り込んで…ほら、起きて」
「おはよう…」
「おはよ」
はやてが起き上がる。
「昨晩は凄かったなぁ♪」
「だから何もしてないでしょ。何回目だろ、このやり取り…」
はやては歩けるようになってから、僕の部屋に忍び込む事が多くなった。
「むう…私はいつでもＯＫなのに」
「大人になるまで待ちなさい」
「は～い。……今日から同じ学校やな」

「そうだね。同じクラスになれると良いね」

「せやな。勿論皆とも♪」

はやては本当に嬉しそうだ。
ずっと行きたかったんだろうな。

「はやて…おはよう」

「…ん。おはよう」

はやてに軽くキスをする。

朝の挨拶に…

「利文、主はそこに……」

リィンフォースが入ってきた。

「……!?!?」

だが顔を真っ赤にして、すぐに出ていってしまった。

なんか転んだような音がしたんだけど…

「リィンフォースも可愛ええな。顔真っ赤やったで…トシ君も」

「そりゃ恥ずかしいに決まってるでしょ!見られるのは流石にね…」

きっとまたシャマルにからかわれるんだろうな。

さて、この学校は毎年クラス変えがある。
そう考えると、なのはに戒、すずか、アリサ、一兎は三年間同じクラスってのは運が良いのかもしれない。
で、今年の振り分けなんだが……

「よかった、一兎と同じクラスで」

「あとすずかも…か」

「そうだね。皆一緒じゃないのは残念だったけど」

今日は始業式だけなので学校は早く終わり、皆で翠屋でお茶をしている。

「すずかと違うクラスなんて初めてね」

「そうだね」

「一兎ともだよ」

「トシ君と同じクラスでよかった。それになのはちゃん達とも同じクラスやし」

「うん、本当によかった。それに全員バラバラって訳じゃないし、一人だけって訳でも無い」

まあテンプレの全員同じにはなれず、僕とはやて、戒、なのは、アリサが同じクラスで、一兎、フェイト、すずかが隣のクラスになった。

僕らの新しい学校生活が始まる。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

新学期が始まった。

で…今は学校の帰り道なんだけど、僕の目の前でとんでもない事が

起きてる。

「えっと…ごめん（キリッ」

「あ……」

まあクラスメートの少年がフェイトを押し倒してる。
しかもちゃっかり手を胸に置いて。

「何しとんじゃこらぁぁぁ！」

一兎がその少年に背負い投げをする。

「あべし！」

「フェイト、大丈夫か！？」

一兎がフェイトの肩を掴む。

「う、うん。大丈夫。怪我とかは無いから…」

「フェイトちゃん、本当に大丈夫？」

なのはもフェイトに近づく。

事故のあらましはこうだ。

僕、一兎、なのは、フェイトで学校から帰ってる途中、前を歩いていたフェイトが曲がり角で誰かとぶつかって押し倒されたのだ。

「大丈夫だよ」

「そっちも生きてる？…織斑」

そう…そのクラスメートの名前は織斑一夏。
あの織斑一夏だ。
絶対転生者だよ。

どうりでこんなラッキースケベな事故がおきる訳だ。

「本当に悪い。ごめんな（キリッ」

そう言って立ち上がった瞬間、織斑の真後ろ…先程まで頭のあった場所に紫の雷が落ちた。

「……え？」

織斑は恐る恐る後ろを振り向く。
そこにはアスファルトが黒焦げになっていた。

［フェイトちゃん…今のって…］

［間違いねえ］

［母さん…］

［やって良いのかな？］

てゆうかよく察知したね、娘の危機を…

するとフェイトの携帯電話が鳴り出した。

「母さんだ。もしもし？」

『フェイト、無事！？今すごく嫌な予感がしたんだけど！ゴフッ！？』

周りにも聞こえるような声で叫んでる。

「母さん！？大丈夫だから！うん、一兎が助けてくれたし…じゃあ、すぐ帰るよ！」

電話を切る。

「プレシアさん、大丈夫なのか？」

「ごめん、今のでちょっと…」

「そうだね、急いだ方が良いね」

「織斑、じゃあね。天気が崩れそうだから気おつけて」

「は？え？」

こうして僕らは急いで帰った。

次の日の昼休み。

廊下で皆と待ち合わせしていざ屋上に向かおうとした所、織斑が話しかけてきた。

「なあ、君！昨日はごめん！」

「事故だったし…気にしてないよ」

「そうか…じゃあな」

そう言って立ち去ろうとした瞬間、走ってる男子生徒が織斑にぶつかる。

「うわ！？」

「悪い！」

そして織斑ははやてに向かって倒れる。

「はやて！」

ぶつかって尻餅をついたはやてを利文が受け止める。

「大丈夫や。ありが……」

えっと……またも凄い光景になっている。

倒れた織斑が尻餅をついたはやてのめくれたスカートの中…その…
…下半身に顔面を埋めてるんだ。

「い…嫌ぁぁぁぁ！」

はやてが悲鳴を上げる。

前世が女性だからわかるけど…これは酷い。

「死ねぇぇぇぇ！！！」

はやてが叫んだ瞬間、利文がドロップキックで織斑を蹴り飛ばす。

吹っ飛んだ織斑は、二回バウンドして廊下を転がり壁にたたき付けられた。

マジギレだね。

「織斑君、生きてる…かな？」

なんか痙攣してるな。

「オリ主は…自分から……攻撃しては…あいつらを…返り討ちにして……ガク」

……

「大丈夫じゃない？よく聞こえなかったけど、何か呟いてたし」

「ざまあみろって思った」

「ごめん、私も…」

昨日の件、少しは怒ってるんだ。

「ねえ、あの二人をどうにかできない？」

「空気がピンク色に見えるんだけど…」

アリサが指差した先には利文とはやてがイチャついてた。
多分周りが見えてないんだ。

「お～い、学校では自重しなよ」

すると利文の顔が真っ赤になり、羞恥心のあまりに倒れた。

ボン！って音が聞こえた気がする…

「トシ君！？しっかり！」

はやてが利文を揺らしてる。

知らないっと。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

さて放課後。俺と戒、利文は織斑を呼び出した。
一応利文は保護監察中だからリンディさんには俺達と模擬戦だと話してある。

「よしよし…ここで俺が返り討ちにして、真のオリ主に（ボソボソ）」

……聞こえなかった事にしてぇ。

「織斑一夏。君は何が目的なんだ？」

利文がテッククリスタルを握りしめる。

「目的？俺は原作に興味は無い。ただ単に昨日の事を謝りに来ただけだ（キリッ」

いやいや…さっきオリ主って…

「だったらはやてに近づくな！あんな事して…本気で怒ってるんだからな！」

昨日もフェイトを押し倒してたし。

「仕方ないだろ、特性なんだ。勝手にあんな目に会うしフラグも建てちまう。俺だって困ってるんだよ」

とか言いながらニヤついてる。

「だったらなおさら近づくな！」

「クラスメートなんだから仕方ないだろ。全く…俺はお前達と争いたくない。だからもう帰って良いか？（キリッ」

いちいち気に障るような言い方だな。

「無性に腹が立つ！勝負だ！僕が勝ったらはやてに二度と近づくな！」

「フェイトにもな」

「あとなのはとアリサとすずかにも」

「俺は平和に生きたいだけなのに…しょうがない。相手になる！（キリッ……あとはこいつを倒して全員にフラグを建てるだけ…フヒヒ（ボソッ）」

頭が痛くなってきたな。

「テックセッター！」

「白式、セットアップ！」

利文はテッカマンに変身し、織斑は白式をまとった。

しかしＩＳって格好良いな。

特にあの固定されてない翼が。

『Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ．』

待てや。しょっぱなからフラスター化かよ…

「ま…まさかブラスター化！？」

「手加減無用！」

相当キレてるな。

「でやぁ！」

「うおぉぉ！」

テッククランサーと雪片弐型がぶつかり合う。

「利文勝てると思う？」

織斑を蹴り飛ばしテッククレーザーを乱射、次々と命中する。

「負ける訳ないだろ」

どう考えてもな。

「クラッシュイントルード！」

紅い光をまとい高速の体当たりをする。

速いな…

てか一方的すぎだろ。

「うおぉぉぁぁぁぁぁ！！！」

ブラスターボルテッカの発射体制に入る。

ちなみに織斑は発射前の余波が直撃してズタボロだ。

たしかブレードだと余波だけでラダム獣が消滅してたな。

「ブラスタァァァボルテッカァァァァ！！！」

「ギャァァァァァァ！？！？」

「ふぅ…少しすっきりした」

「や…やり過ぎじゃないかな？」

「俺は充分だと思うが」

さて、このボロ雑巾を起こすか。

「おい、起きろ」

織斑の頬を叩いて起こす。

「う…ん……はっ！」

起きたな。

「さて、約束通りはやてには近づかないでね。君のラッキースケベに巻き込ませたくないから」

「だから、俺は原作には興味が無いんだ…自分から近づく訳ないだろ。俺は平和に生きたいんだ」

…まだ白を切るか。

よし。

「じゃあ魔力なんかいらないな」

「え？」

「原作に興味が無い、平和に生きたい。なら魔力なんか無い方が良いだろ？俺がリンカーコアをいじって使えなくしてやるよ」

「は？ちょ！」

「そうだね。それなら管理局にも見つからないし争いにも巻き込まれない。よかったね」

利文が意地悪そうに言う。

「待った！一応自分の身を守れるようになりたいし、何があるかわからないしさ！」

「…本音は？」

「介入できなくなるから困る……はっ！」

ナイス戒。

「やっぱりね。さっきっから独り言、聞こえてるよ」

「いや…その…」

織斑が尻込みする。

「フラグメーカーとラッキースケベを利用する気満々だね」

「……で？はやてのスカートの中に顔を突っ込んだ感想は？」

「ついでにフェイトの胸を触った感想もだ」

「最っ高！」

笑顔で答えやがった。

「「天誅！」」

「うぎゃぁぁぁぁぁ！？」

俺と利文のアッパーで殴り飛ばした。

第57話　変態は成敗！（後書き）

凶弾「女の敵ね」

雷刃「だね」

星光「凶弾が言うと違和感がありますが…まあ同感ですね」

闇「時に凶弾よ。貴様は何時までドーパントの姿でいるのだ？」

轟雷「前回メモリを使ってそのままだったな」

凶弾「実は元に戻れないのよ…」

闇「ほう…（ニヤリ）虚空、メモリブレイク！」

虚空「了解。ボルベルク」

凶弾「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！？」

雷刃「うわぁ…痛そう」

星光「でも元に戻りましたね」

轟雷「一応織斑一夏はモブだから今後出番は無いぞ」

闇「ではまた次回会おう！さらばだ！」

第５８話　仲間と敵（前書き）

新しい転生者が登場します

第５８話　仲間と敵

～利文ＳＩＤＥ～

さて僕達六人は武装隊の訓練校の訓練を受ける事になってる。
まあ短期プログラムだけどね。
こっちでの学校もあるし。

とにかく僕ら…特に僕とはやて、なのはは事務に関する講義が大変だった。
なんせ字がわからないからね。

フェイトはこの世界出身だし、戒は元々管理局入するから、母親から教わってたらしい。
ちなみに一兎は嘱託魔導師試験の時に勉強していたんだって。

そんな感じで、文化の違いに四苦八苦しながら、僕達は順調訓練をこなしていった。

「なんで僕らはこんな所にいるんだっけ？」

僕と一兎、戒は地上本部のとある部屋にいる。
目の前にはコーヒーの入ったコップとクッキーが置かれてる。

「ここの局員に呼ばれたからだよ」

そう、僕達三人は何故か地上本部の魔導師に呼ばれてきたのだ。

「俺達三人を呼んだって事は…転生者だな」

だよね…
一体全体なんなんだ？

「お待たせ」

一人の女性が入ってきた。

セミロングの黒髪に黒目。
二十代前半位の若い女性だ。

「貴女は？」

「私？私はエリカ・ヒノ。よろしくね♪」

……？
どっかで聞いたような…

「あ！」

戒が立ち上がった。

「知り合い？」

「じゃないけど、わかったよ。貴女、仮面ライダーオーズの火野映司でしょ！」

「正解！」

そう言って彼女は座った。

「改めて自己紹介するわ。私はエリカ・ヒノ。オーズの能力を持った転生者よ。階級は一等陸尉。年齢は二十三、現在彼氏募集中。ブイ♪」

そう言ってブイサインをする。

「「「はあ…」」」

ノリが軽いな…

「えっと…諸星利文。テッカマンランスです…」

「戒＝キスク＝木崎です。カイ＝キスクの能力です」

「佐々木一兎。名前通り、佐々木一兎の能力だ。で、俺達を呼び出してなんなんですか？」

「いやあ、Ａ-ｓ終わったでしょ？これからＳｔｒｉｋｅｒＳまでの間に色々とやんなきゃいけないからさ。仲間が欲しくて」

彼女はクッキーをかじりながら話し出した。

「管理局も色々変えなきゃいけないし…スカ博士もどうにかしないとやばいしさ」

たしかに、Ｓｔｒｉｋｅｒｓはかなりめんどな事件だ。
仲間はいた方が良いかもしれない。

［どう思う？］

［嘘じゃないだろうけど信用するにはまだだな］

［ちょっと聞いてみようか］

僕は少し質問をした。

「具体的には僕らに何をしてほしいんですか？」

「まあ…まずはレジアスおじさんの説得かな」

レジアス・ゲイズか…ってあれ？

「叔父さんって…知り合いなんですか？」

「そだよん。私のお母さんの従姉弟なんだよ……で、ぶっちゃけ、どう思ってる？レジアス・ゲイズを」

実際僕はあまり嫌いじゃない。

「僕は止めたいと思います。彼は根は悪人じゃなさそうだし」

「僕も」

「俺はいまいち好きじゃないですね。なんか過激派っぽい所が…止めるって意見は賛成です」

一兎はあまり好ましく思ってないか。

「私も説得する材料探してんのよね。あと証拠」

「証拠ですか」

「証拠が無いと、支援していた事を知ってたのは不自然じゃない。だから証拠を掴んでから説得しようと思ってんだけど…なんか無い？なんか人造人間とかそうゆうの？特に子供の」

……心当たりがありまくりだ。

「知って、どうするんですか？」

「子供が酷い目にあってるってわかれば、少しは目が覚めるかなって。おじさんは人々を守る力を欲するあまりに暴走しちゃったんだ。説得できるはずだよ」

なるほどね…

［僕は彼女を信じても良いと思うよ］

戒？

たしかに。

［そうだね］

［まあ、嘘じゃなさそうだしな］

よし。意見はまとまった。

「エリカさん。僕達強力します」

「ちょうど説得に使えそうなやつもいるしな」

「本当!?助かるわ～。で、その人は?」

「僕です」

「こいつ」

「利文」

二人が僕を指差す。

「……なんかあったの?」

「簡単に説明すると、三歳の時、家族を殺され無理矢理生物兵器に改造されました」

エリカさんは目を白黒させてる。

「理想的な説得材料なだけあって……ごめんね。変な事思い出させちゃって」

「大丈夫ですよ」

今でも時々夢を見る。
父さんと母さん、兄さんが射殺された日の事を。

「そうね……固い話しはこの位で。良い話しが一つ。おじさんは原作ほどはやてを嫌ってないよ」

「そうなんですか……よかった」

「やっぱり、僕達が見せた映像ですか？」

あの屋上でのか。
あれのおかげで、今までの被害者や遺族への説得ができたし。

「そうだよ。やっぱり、子供が生きたいって叫びはきいたみたい」

「そうですか」

はやてが完成を望む事で、一時期は原作以上に悪い状況になるんざゃないかとヒヤヒヤしたんだよな。

「まっ、また連絡するわ。ゼスト隊壊滅の前にはどうにかしたいし……これからよろしくね、少年達♪」

「よろしくお願いします」

「頑張りましょう」

「俺達もやれるだけの事はやるんで」

レジアスが味方になれば、かなり助かる。

よし、やるぞ！

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～？？？ＳＩＤＥ～

金属の床。コードやパイプにまみれた壁。

この研究所はいかにもマッドサイエンティストがいそうな場所だ。

「ジェイル」

私はここの主に話しかけた。

「ん？ああ、君か。【救出】は終わったのかい？」

紫の長髪、金色の瞳。
ジェイル・スカリエッティが振り向いた。

「勿論だ。ただ、未完成だったため衰弱が激しい。君の治療と調整が必要だ」

「わかった。すぐに行こう」

「助かる」

「我々の仲間になるんだ。助けるに決まってるだろう？」

「そうだな……ところで研究は順調か？」

「君が契約でくれたやつは、コクピットにガジェットを組みこむ事で運用ができる。だが、武装はまだだし…人工知能の調整も必要だ。【彼】から作ったやつも戦力として期待できそうだ。ただ、能力は高いがコストがね…戦闘機人よりかは量産に向いてるんだが……どちらも順調と言えるかは微妙な所だ」

微妙と言ってはいるが、実は充分すぎるほど進んでいる。

やはりこの男は天才だ。
客相手の研究と私達の戦力の開発を同時に行ってる。

たしか、原作では戦力はナンバーズにガジェット、ゼストにルーテシア位だったが…

最近はかなりの戦力を得た。
転生者にも充分に対応できる。

それに、私達には野望がある。
それを実現させるために…
人ではない者が人を支配する。

「そういえば、どうやらもう一人いたらしい…彼の同郷が。今は管理局にいるがな」

「ほう？」

「だが、愚かにも人間に夢中でね……裏切られた所引き込む事にしたらしい」

「上手くいくのかい？」

「あの子を自由にしたのは彼だ。自信はあるようだ」

私は無理だと思うがな。
恐らく私と同じ転生者だ。
今日救出した者は説得できそうだが…

「それともサンプルとして連れて来るか？」

「データは、彼一人で充分さ」

「そうか」

「なに、その子は来るさ。人間に失望してね」

思い上がった人間め…貴様らは支配する側ではなくなる。

我々、人ならざる者と造られた者が支配する。

私は自らの白い翼を撫で、ジェイルと共に歩き出した。

第５８話　仲間と敵（後書き）

雷刃「ねえ、？？？って誰？」

轟雷「作者が元々出す予定だった敵転生者だ」

星光「彼と募集した転生者四人の、合計五人がスカリエッティ側になります」

凶弾「原作だと愉快犯じみた部分があったのに、なんかガチで世界征服狙ってない？」

雷刃「その方がカッコイイと思うよ」

闇「そういう問題か？」

星光「新しく仲間になったオーズもどうなる事やら…」

轟雷「年齢的にアウトな気が…」

闇「ところで、我らが成人した場合どんな容姿になる」

星光「オリジナルと同じじゃないでしょうか。多分雷刃が一番大きいのでは？」

雷刃「じゃあ王様が一番小さいんだ。身長も胸も」

闇「な…！？」

星光「大丈夫ですよ。身長以外は充分ありますし」

闇「おのれ小烏！貴様のせいで我まで！虚空、我の身体を引き延ばせ！ついでに胸も揉め！」

虚空「了解（バキィ！）」

闇「ふべら！？」

雷刃「痛そ…」

凶弾「王様倒れちゃったわね」

星光「どうやらここまでみたいですね」

轟雷「また次回」

第５９話　夏休み（前書き）

いつの間にかＰＶ４００００００、ユニーク４０００００超え

皆さんありがとうございます！

第５９話　夏休み

～一兎ＳＩＤＥ～

夏休みだ！

って事で、俺らは海に来ている。

いつもの八人とその家族、それにハラオウン家にユーノだ。

かなりの大所帯だな…

「皆で来れて良かったね。リンディさん達なんか無理矢理休暇を取ったようなもんだし」

「全くだ。姉さんも受験の一休みに来てくれたしな」

「そういえば利文は？」

「あっちではやてに泳ぎを教えてるぞ」

指を差した先にははやての手を引く利文の姿が見える。

大人達も泳いだり楽しそうだ。

「とりあえずお母さんが昼間っからビール飲むのは止めて欲しいな…」

「リンディさんにも絡んでるし、相変わらずフリーダムだな」

「息子として恥ずかしいよ…」

苦労してんな。

「戒、一兎、こっちに来なさいよ！」

「ビーチバレーやろう！」

アリサとすずかが呼んでる。

そこにはフェイトになのは、クロノにエイミィさん、ユーノ、ヴィータがいる。

ちょうど五対五になるな。

「行こうか」

「だな」

夏休みなんだ。

楽しむぞ！

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

風呂上がり、僕達は全員ホテルのレジャー施設に集まった。

ちなみにこのホテル、月村家とバニングス家が丸ごと借りたらしく、今日の客は僕らだけらしい。

……どんだけ～。

「全員集まった所で、敗者は勝者に絶対服従。手加減無用のガチンコ卓球タッグマッチを始めるわ」

「プレシア、なんなのそれ？」

リンディさんが恐る恐る質問する。

「発案者はアルフとエイミィなんだけど。ようするに五点先取りの卓球のタッグマッチをやって、勝った方が負けた方になんでも命令できるってので良かったかしら？」

「そうそう。あ、でも常識はずれな命令は駄目ですよ♪」

エイミィさんが目茶苦茶楽しそうなんだけど…

「ペアはくじ引きで決めるわ。当然アルフとエイミィも入ってるから」

「「え？」」

「文句ある？」

「「無イデス！」」

一睨みで…怖っ！

「母さん審判やるって言ってたけど、ルール大丈夫？」

「ルールブックは暗記済みよ……さて、始めましょう」

どこからともなく箱を取り出して二枚の紙を引いた。

「第一試合、Ａチームは…ヴィータと戒ね」

「一番手か」

「ベルカ二人組だ負ける理由が無いぜ！」

「二人共頑張ってや」

二人が卓球台に歩き出す。

「Bチームは…クロノとアリサね」

これは珍しいな。

「大丈夫なの？」

「これでも鍛えてるんだ。簡単には負けないよ」

「アリサちゃん、クロノ君頑張って」

「準備は良いわね？始め！」

で、結局どうなったかというと…

「戒、邪魔すんな！」

「それはこっちの台詞だよ！」

「チームワークが目茶苦茶ね！」

「スキだらけだな」

ヴィータと戒がお互いの足を引っ張り合ったせいで、クロノ、アリサチームの勝ちだ。

「「お前のせいだからな！」」

「息ぴったりじゃないか」

「「うるさい！」」

試合だとどうして上手くいかなかったんだろ。

「さて…命令だが、君に任せるよ。僕はこういうのが思い浮かばない」

「そう？じゃあ…」

アリサは少し考えると…

「そうね、二人でア○ーン体操してもらおうかしら♪」

ちよ！

「な…あんなのやる訳「ベルカの騎士だろ？」シグナム！？…ちくしょー！やってやるよ！」

二人でステージに上がり、音楽に合わせて踊りだした。

戒は結構ノリノリだったが、ヴィーは顔を真っ赤にしてたね。

はやてが写真を撮りまくってたから、後でからかわれるな。

「第二試合にしましょ。Aチームは一兎とエイミィね」

「やっぱり私もやらなきゃ駄目ですか？」

「サンダーレイジとどっちが良い？」

「やります」

「エイミィ、そんな都合の良い話しは無い。勝てば良いんだ」

「うう…」

発案者だからって逃がす訳ないよ。

「Bチームはすずかと利文」

お、僕か。

「待てや！無理だろこれ！」

まあ人外コンビだし。

「一兎君、諦めよう…」

「……絶望が俺のゴールか」

負け決定って感じかな。

「手加減…する？」

「まさか。勝負の世界は厳しいんだよ」

「ま、いっか」

そこから試合にすらならなず一方的に終わった。

「こんなゲーム考えなけりゃ良かった…」

「恨むぜ、エイミィさん」

エイミィさんは自業自得だね。

「利文君、私やってみたい事があるんだけど」

「良いよ」

なんだろ?

「駄目だよ。私は七つも年上なんだよ（棒読み）」

「そんなの関係無い！俺は、エイミィさんが…（棒読み）」

「一兎君…（棒読み）」

なんで二人に恋愛ごっこをさせてるんだろ？
しかもフェイトとクロノから黒いオーラが見えるし…

「なんでこんな事させたの？」

「フェイトちゃんに発破をかけようかなと思って」

なるほどね。

「エイミィ、後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

「フェイ……ア、アハハハ…」

「一兎、君もだ」

「もう、何も恐くない」

……良いのかなぁ？

「何人か脱落したけど続けましょ。次は桃子さん、シャマルチームとリンディ、リィンフォースチームの試合ね」

普通の試合になりそうだな。

「リィンフォースもシャマルも頑張って」

「お母さん、頑張って！」

「リンディさんも！」

「よろしくお願いしますね、シャマルさん」

「こちらこそ」

「私達も頑張りましょ」

「はい」

四人共気合い充分か。

「では、始め！」

試合は結構白熱した。

結果は五対四で桃子さん、シャマルチームの勝ち。

「楽しかったわ♪」

「ええ、こういったゲームも良いものです」

満足げな二人の顔はすぐに引き攣った。

なんせ命令の内容が、アイドルの歌を振り付け付きで歌うといったものだったのだ。

鬼畜だねシャマルは。

取り敢えず二人は恥ずかしがりながらも、なんとか歌いぬいた。

勿論はやてはまた写真を撮ってたけど。

あとヴィータ。笑いこけてるけど、君も同じなんだよ。

「クロノがいなくてよかったわ…」

「……（呆然）」

「しっかりしろ、リィンフォース！傷は浅いぞ！」

シグナムの呼びかけにも応じない…

相当恥ずかしかったんだね。

「さて、次は…リリーとユーノ、士郎さんと美香ね」

ちなみに美香さんは一兎のお姉さんの事だ。

「フッフッフ…負けないわよ」

「ああ、俺もだ」

なんだか盛り上がってるな…二人だけ。

試合はというと…

「オーバーSをナメるな！」

「なんのぉ！」

なんだこの超次元卓球は？

ハイレベル過ぎてわからない。

てかユーノと美香さんが無視されてる。

いや、ついていけないだけか…

結局決着はつかずお開きとなった。

何時間やってんだか…

そんなこんなで夜。

男子部屋でＵＮＯをやってる。

参加者は僕に戒、一兎、ユーノ、クロノ、恭也さんだ。

「スキップ」

「一兎！ちょ、待った！」

あと一枚なのに！

「じゃあ…これ。そんでＵＮＯ！」

ユーノが緑のドローツーを出した。

しかもリーチかよ。

「残念」

戒が赤のドローツーを出す。

「俺も持ってるんだな。クロノは？」

恭也さんが青のドローツーを出す。

「ありますよ」

さらにクロノが赤のドローツーを出す。

「利文…南無」

一兎がとどめに黄色のドローツーを出した。

無理だ…返せない…

「最悪…」

十枚って…

「あ、上がり」

ユーノが黄色の五を出して、ゲームは終わった。

待て待て。さっき引いたの、高得点のカードばかりだぞ。

「利文、何点だった?」

「百超えてた…」

「マイナスだな」

完全敗北だ。

トントン

ん？

「どうぞ」

「遊びに来たよ！」

女の子達が入って来た。

夜はまだ長そうだ。

第５９話　夏休み（後書き）

星光「今回は夏休み回だったので、私達も海に来ました」

闇「我の水着姿を見られぬ事を後悔するが良い！」

轟雷「黒ビキニかよ。一番ちんちくりんなくせに…」

闇「エクスカリバー！！！」

轟雷「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

雷刃「あ～あ…」

凶弾「あら？そういえば虚空は？」

星光「さっきから見当たりませんね…」

闇「虚空ならばダイオウイカを狩りに行ったぞ」

凶弾「ダイオウイカ？」

雷刃「楽しみだね。世界最大のイカでしょ？」

闇「王たる我が食すのに相応しいな」

凶弾「下味いわよ」

雷刃「え？」

星光「ダイオウイカは塩化アンモニウムを大量に含むので、食用に適さないんですよ。食べれない訳じゃありませんが、美味しくありませんよ」

闇「馬鹿な…」

星光「残しちゃ駄目ですよ。せっかく虚空が採ってくれたのですから」

雷刃「で、でも、まだ虚空が見つけられたとは…」

轟雷「虚空なら、あっちで１０m位のイカを引きずってるが」

闇「……」

凶弾「頑張って食べなさい」

雷刃「下味い…」

闇「ひ、退かぬ媚びぬ省みぬ！（涙目）」

虚空「危険危険危険危険危険危険」

轟雷「お前は食べなくて良いんだよ」

星光「では、また次回」

第６０話　襲撃者達（前書き）

どうぞ！

第６０話　襲撃者達

～利文ＳＩＤＥ～

小学五年…この時期、ある事件が起きる。
そう、なのはが撃墜される事件だ。

直接の原因がなのはの疲労の蓄積によるものである為、戒が無理をしないように見張る事で防ごうとしてるが、何が起きるかはわからない。

今の所は心配なさそうなんだけど…

そしてとある冬の日。

僕とヴィータ、戒、なのはは、エリカさんの小隊と、とある世界に来てる。

ロストロギアの調査の為だ。

「なんだか…凄い人数ですね」

なのはが隣を歩くエリカさんに話し掛ける。

ちなみにエリカさんはタトバコンボだ。
普通のオーズと違い、戦隊ものの女性メンバーみたいなスカートが付き、左腰にはカートリッジが取り付けられてる。

「この辺りに傀儡兵らしき兵器が確認されたらしいの。警戒して損は無いわ」

傀儡兵か…

たしかプレシアさんも持ってたな。
一兎が言うには、全部時の庭園ごと押収されちゃったらしいけど。

[そんな事より大丈夫なの？なのはの事。誘った私が言うのもあれだけど、多分今日よ]

[僕が見張っておいたんで、大丈夫だと思います。ちゃんと無理してなさそうですし]

[そう…まあ警戒しておきましょ]

[[はい！]]

そして僕達は雪の中を進む。

視界が悪いが見えない訳じゃない。

途中で二班に分かれて調査を始めた。

そうして調査は終了。
結局何も見つからなかった。

帰還中に合流。
向こうも収穫は無かったらしい。

「とんだむだ足だったな。まあ全員無事だから良いんだけどよ」

「そうだね。帰ろっか」

ん？何か忘れてるような…

……あ。
襲撃されたのって帰還中だった！

［戒、エリカさん、そろそろ気おつけて。たしか襲撃は帰還中だったから］

［うん。わかってるよ］

［……ああ、すっかり忘れてた。時期は覚えていたけど、詳しい事は忘れてたわ］

流石に二十年以上前だから、忘れてる部分も有るんだね。

僕も何かメモとか残しといた方が良いかな?

［ねえ記録とかできないかな?］

［『一応可能だ。こんど録音でもするか』］

それはありがたい。

［僕らもやっておこうか］

［『そうですね』］

［あ、今度私にも教えてね］

［わかりま…っ!?］

突如奇妙な感覚に襲われる。

なんだ?どっかで感じた事がある…

「利文?」

思い出した!

テッカマン同士の精神感応!

改造された時と、僕より後に改造された他のテッカマン達が完成した時にやったんだ。

でもあの時とは少し違う。

感じ方も少し違うし、第一送られてくる感覚が殺気だ。
しかも…三つ！
こいつら…敵か！
「利文？なんか額が光ってないか…どうしたんだよ。おい！」
ヴィータが僕を揺らす。
「皆、敵だ！来る！」
「何ですって！？」
上を見上げる。
「「「Ｓｈｙａａａａａａａ！！！」」」
雄叫びと共に三つの影が襲い掛かってきた。
「散開！」
僕達のいた場所に三本の槍が突き刺さり、何者かが降り立った。
「なんだよ…あれ…」
「何、何？」
そいつらは三人共同じ姿をしていた。
二本の触覚が生え、赤紫のバイザーのような目をした白い頭。ダー

クブルーの装甲に包まれた身体と尻尾。赤紫の長い槍。
異星人テッカマン。ダブルホーン。
なんで？まさか僕が脱走した後に作られたのか？
だけど…何かおかしい…
制御できてないのか、流れて来る感応波が止まらない。
それに…
「利文君、これって君と同じテッカマンじゃないの？」
「多分！」
「多分って…」
［あれ異星人テッカマンでしょ。君が改造された時にはいなかったの？］
［いません。それに、感応波が少し違う］
［具体的には？］
［テッカマンが白なら、こいつらは乳白色って感じです］
［［……同じようなもんじゃん！］］
そうは言われても…
「！！！」

上空から黒い何かがいくつも落ちてきた。
十体は超えてる。

「まだ来るの！？」

落ちてきた黒い者はゆっくりと立ち上がった。

５ｍはある黒い鎧を着た猫背の巨人。
そして手には巨大な剣が握られてる。

［今度はアヴ・カムゥ！？］

［どう考えても転生者の仕業だよね］

［しかも首のコクピットのとこ…ガジェットがくっついてるわね］

パイロットの代わりか…

「Ｋｉｅｅｅｅｅ！」

考える時間はくれないか！

「利文君、戒君、なのはちゃんはテッカマンを！残りはあのでかいのをやるわ！」

「「「「了解！」」」」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～エリカＳＩＤＥ～

ガジェットじゃなくて、もっと厄介な奴が出て来たわね。

「隊長！攻撃が通用しません！」

ＡＭＦね…

ガジェットがくっついてるから予想通りだけど。

「ヴィータちゃん！ＡＭＦ貫ける？」

「おう！アイゼンでぶん殴りゃ良いだけだ！それにこいつら、動きがど素人以下だ！」

うん。アームドデバイスなら直接攻撃で通用するはず。

アヴ・カムゥ達は近づいて剣を振り回すしか能が無いらしい。

よし！

『ライオン！トラ！チーター！ラッタラッター！ラットッラーッター！』

ラトラータコンボに変身。アヴ・カムゥ目掛けて走る。

その内の一体が私目掛けて剣を振り下ろす。

だが当たらない。

反応も鈍い。

振り下ろされた剣を駆け登り、首の裏まで走る。

「この！」

トラクローをガジェットに突き刺す。

そして引き裂き離脱する。

ガジェットが爆散し、アヴ・カムゥが倒れる。

ビンゴ！やっぱりパイロットの代わりになってた！

「首の機械が弱点よ！ＡＭＦが有るからミッド式のロックとエリーは錯乱に！ベルカ式のヴィータちゃんとガントは私と直接攻撃に！」

「「「了解！」」」

「おっしゃあ！」

左の腰のカートリッジのボタンを押す。

すると空のカートリッジが排出され、三枚のセルメダルが用意され

る。

さらにメダジャリバーを起動させ、セルメダルを入れる。

「足を潰す！全員飛んで！」

『トリプル！スキャニングチャージ！』

オーズバッシュ！

「せいやぁぁぁ！」

メダジャリバーを薙ぎ払いアヴ・カムゥの足を切り落とす。

「今よ！」

「どりゃぁぁぁ！」

振り下ろされたグラーフアイゼンが、ガジェットを叩き潰す。

それだけじゃない。

倒れたアヴ・カムウのガジェットにエリーの避けた剣が叩きつけられる。

同士討ちも簡単、本当に馬鹿だ。

数は多いけど、なんとかなる！

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

一体の両肩が展開して、ボルテッカが発射される。

僕達は散開して避ける。

「シュート！」

なのはがアクセルシューターで反撃するが、ランサーで切り伏せられる。

「テックレーザー！」

「スタンエッジ！」

僕と戒も撃つが、テッカマン達は薄い虫の羽のような翼を展開し、スピードを上げて回避する。

「うわ！？」

一体が腕から触手のような物を伸ばし、戒を捕らえる。
さらにもう一体がランサーを構えて戒を串刺しにしようと突っ込む。

「させるか！」

「駄目！」

触手を切断しテックレーザーを撃つ。
もう一体はなのはの魔力弾が直撃する。

「戒君、大丈夫？」

「助かったよ」

「こいつら、殺気しか感じ無い…どうなっている？」

さっきっから感応波が止まらない。
しかも殺気以外の感情を一切感じる事ができない。

「利文君…この人達、本当にテッカマンなの？」

「精神感応ができてるから、テッカマンだと思うんだけど…殺気以外感じ無い、まるで兵器みたいなんだ。他のテッカマンはこんなんじゃなかったのに」

「つまり、話し合いはできそうに無いと…」

テッカマン達は僕らを囲むように跳び回る。

「そうみたいだ！」

そしてボルテッカを撃って来た。

僕達は上空に避ける。

テッカマン達は僕達を追いかけて来る。

「この！」

戒が封雷剣を振り下ろす。

一体がそれを受け止めた。

「接近戦じゃなのはは不利だ！僕らが引き付けて、なのはは援護を！」

「うん！」

「わかった！」

僕は一体にワイヤーをくくり付ける。

そのままもう一体に投げつけた。

そいつは避けてボルテッカを撃った。

ならばこっちも！

「ボルテッカ！」

紅い光が衝突する。

「ディバイン…バスター！」

そのスキになのはが砲撃を放つ。

「Ｇｙａａａａａａ！？」

直撃。

そして墜落する。

「利文！」

セイクリッドエッジを放ち一体を貫く。

「！？！？」

「ゲシュペンストキック！」

そいつをさっきの落ちたテッカマン目掛けて蹴り飛ばす。

立ち上がろうとした所に命中。

「Ｇｕ……」

一体が逃げて行く。

「逃がさない！レイジングハート！」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

「ディバインバスター！！！」

桜色の砲撃が逃げようとしたテッカマンを襲う。

「Ｇ…ｇａａａａａａａ！？」

ディバインバスターがテッカマンを飲み込む。

「戒！」

「応！」

残りの二体を狙う。

一体は飛び上がってランサーを構え突っ込んで来た。

「ライド・ザ・ライトニング！」

雷を纏った体当たりがラワサーを砕き、そのままテッカマンに直撃する。

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

「ボルテッカァァァァァァ！！！」

僕は最後の一体にボルテッカを放つ。

『Ｖｏｌ…ｔｅｋｋａａａａ！』

相手も撃って来た。

だがカートリッジで強化された僕のボルテッカに打ち消され、最後の一体もボルテッカに包まれていった。

「終わった？」

「そうじゃないかな？」

「感応波も止まってる。大丈夫だ」

三体のテッカマンが倒れてる。

［おい！そっちは大丈夫か！？］

［ヴィータちゃん！大丈夫。今終わったよ］

［そっちは？］

［全員無事よ］

良かった。

ん？

「A……aa…aaaaaaa！？！？」

突如苦しみ出し、紅い結晶となって砕け散った。

「な…」

「え？」

「まじ？」

どうして？

非殺傷設定だぞ。

しかもあの砕け方、スパロボの演出じゃ…

どうなっている？

［どうしたの？］

［テッカマン達が砕け散ったんです］

［…実はこっちもな。あの黒い連中、鎧だけ残して溶けちまったんだ］

なんだって？

［証拠隠滅かしら？取り敢えず残ったやつは回収しましょ。何かわかるかもしれないわ］

［こっちも槍が残ってますから持って行きますね］

戒がランサーを拾う。

……ガジェット付きのアヴ・カムゥ…そして異質なテッカマン。

スカリエッティ側の転生者が関係してるのは間違いない。

［面倒な事になりそうだね］

［うん。転生者も何人かいるんだ。一兎にも話しとかなきゃ］

［ゼスト隊の事も近いのに…不安だわ］

僕は砕け散ったテッカマンの欠片を拾う。

最後に感じたのは死への恐怖でも僕達への憎しみでも無い。

これでわかった。

彼らに心は無い。

まるで機械のように。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～？？？ＳＩＤＥ～

「全滅か…」

「まあ大胆予想通りさ。だがデータは取れた。成果は十分さ」

たしかに…

アヴ・カムゥは改良の必要があるが、テッカマン達はコストと生産の安定さえできれば…
おそらく一体でＡランク相当はあるな。

「それはそうとジェイル。あの男を引き入れる事にした」

「何故だい？彼は人間だろ？」

「本人曰く、闘争に生きれるのならば人の身など惜しくは無いらしい」

「ほう…つまり私が手を加えても良いと？」

「そういう事だ」

しかしとんだ戦闘狂だな。
原作キャラ達と戦いたいが為に…既に人の心を失っているとは…
実に面白い。

フフフフ…

第６０話　襲撃者達（後書き）

雷刃「ねえ、今回出て来た異星人テッカマンとアヴ・カムゥって何？」

闇「虚空、星光」

虚空「了解。異星人テッカマン…名前通り、地球以外の星の知的生命体がテッカマン化したものです。今回登場したダブルホーンは、テッカマンブレード？第一話にて登場しております」

星光「アヴ・カムゥはうたわれるものに登場する人型兵器です。今回登場したのは一般機ですね。ぶっちゃけロボットではなく生体兵器に近いんですがね。ちなみに原作では溶けませんよ」

凶弾「スカ博士の改造のせいね」

轟雷「そういやうたわれるものは作者が初めて見たエ○ゲが原作のアニメだ。あれの原作を知った時は驚いたんだと」

凶弾「ちなみにＰＳＰ版をプレイしたんだって」

雷刃「ふ～ん。あ、舟漕ぎさんからの質問で、
《虚空にも中の人がいるの？》
だって。虚空？」

轟雷「そういや見た事無いな」

虚空「中の人などいない」

闇「嘘をつくな。中身は深緑の髪に紅目だ。だが基本的にテッカマン形態だから、後書きではそっちをイメージしろ」

星光「といった感じです。さて、次回はいよいよ敵転生者の発表です」

凶弾「じゃあまた次回会いましょうね♪」

第６１話　闇にうごめく者達（前書き）

今回は敵転生者発表です

第６１話　闇にうごめく者達

～クイントＳＩＤＥ～

「ハア…ハア…ハア…」

どうして…こうなったのかしら…

戦闘機人のプラントと思われる施設に調査に来た。

そこで待っていたのはＡＭＦを使うカプセル型のロボットと黒い傀儡兵の大群、そして三人の少女と二人の男だ。

正直、まともな戦いにならなかった。

私達は分断され、さらにＡＭＦにより不利な状況に陥り…そして何より、二人の男が強すぎた。

片方はカタナのようなデバイスで次々と隊員達を切り殺していった。

笑みを浮かべながら…

そしてもう一人は私の目の前にいる。

緑の丸みを帯びた鎧に包まれ、手には大きな戦斧を持った男。

強い…

左腕は切り落とされ、出血で目眩もする。

「フフフ…なかなかできるようだが、ワシには勝つには力不足だな…」

男の鎧にはいくつか傷がついてる。

私がつけたのだが、いまひとつ効果は無い。

「クイントさん、逃げて下さい！」

部下が男に飛び掛かる。

「駄目！」

「雑魚がぁ！」

振り下ろした戦斧で真っ二つにされてしまった。

「貴様ぁぁぁぁ！」

カートリッジをロードし殴り掛かる。

男は戦斧を盾にするが、私は柄をへし折り顔面を殴る。

「うお！？」

リボルバーナックルが顔の装甲にめり込む。

が、男は戦斧を投げ捨て私の首と右腕を掴み、そのまま私の右腕を引きちぎった。

「あぁぁぁぁ！？！？」

肩から先がちぎれ激痛が走る。

そして私は投げ捨てられた。

立ち上がる事もできない…

ここまで…なの？

「素晴らしいぞご婦人。まさかワシの装甲をここまで…」

顔を抑えながら近づいてくる。

「だがここまでだ。ワシは敵を嬲り殺しにする趣味も、婦人に乱暴を働く趣味も無い。とどめは一気に刺してやろう」

「ハァ…ハァ…見逃して…くれないかしら？」

「できぬ相談だな…」

でしょうね…

まさかあの占い師の子の言う通りになるなんて…

「さらばだ！」

男の両胸が光りだす。

…ゲンヤさん、ごめんなさい。

ギンガ、スバル、強く生きて…

「ボルテッカァァァァァ！！！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～エリカＳＩＤＥ～

遅かった…

ゼスト隊壊滅。

生存者無し。

尻尾を掴んだと思ったらこれだ。

おじさんは私をゼスト隊に関わらないようにしていたし、今回の件も止めようとしていた。

あの子達は関われないのは当たり前だし…

悔しんでも仕方ない。
おじさんの説得に成功しただけましだ。
あの日、私は利文君を連れて、おじさんの家へ向かった。
幸いオーリスもいたし説得も簡単だった。
やはり彼の人生はショックだったんだろう。
三歳で両親と兄を目の前で殺され、自分は兵器に改造された…
この世界でもそんな事が起こりかねない…すでに起きてるかもしれない。
なんだかんだ言っても、正義に生きただけあって私の言葉を聞いてくれた。
やれ俺は馬鹿だの辞めるだの言い出し、止める方が大変だった。
もう一度平和の為に頑張ってほしい。
おじさんの力が必要だと。
そうしておじさんと私達転生者の協力関係を無事、築く事ができた。
このまま原作組とも協力できれば良いんだけど…

さて、私は今とある施設に侵入している。

一人で。

一人の方が楽だし、今回は転生者との戦いを想定しているからね。

そういう訳で、私はスカリエッティが使ってると思われる研究所に来たのだ。

しかし妙ね。

さっきから警報の類いも警備も見当たらない。

ん？広い空間に出たわね。

っ！？

何？このでかい生体ポッドは！？

それに中身も凄い。

うずくまっているが、多分５０ｍ以上…

筋肉が剥き出しになった巨人が眠ってる。

っ？誰か来た！

私は近くの機材に隠れる。

「やはり裏切ったか、レジアス・ゲイズ」

「だが予想通りだアックス」

「……」

「まあ、新しいスポンサーを探せば良いじゃないかディー。…どうだい、オーマ。気分は？」

中年の男、銀髪に白い翼を持つ男、侍のような格好をした男、そしてスカリエッティが入って来た。

なるほど、アックスと呼ばれた中年男性はテッカマンアックス、翼人はディー。
どちらもこの前のテッカマンとアヴ・カムゥに関係する。

しかしあの侍は誰だろう…
わっかんないわね。

「大丈夫だよドクター。ちょっと暇だけど」

「ああ、よかった。少し位なら出る事ができる」

「本当？」

「勿論さ」

あの怪物を外に出す？
あの巨人も転生者かしら…

「待たれよ。その前に鼠を始末せねばなるまい…」

あの侍、気付いた？

「雷泥も気付いてたか…出てこい！」

ちっ。

仕方ないか。

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ！ガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

ガタキリバコンボに変身して出る。

「ほう…」

「なるほど…」

ディーと雷泥と呼ばれた男は、私の姿に反応した。

オーズを知ってるわね。

「君は誰かな？どうやら友好的には見えないが…」

「私はあんた達の敵よ」

二十人位に分身する。

きなりきついけど、出し惜しみはできない。

「面白い…某が相手になろう…」

雷泥が刀に手を添える。

こんなに人数がいたなんて想定外ね。
分身を囮に脱出させてもらうわ。

『スキャニングチャージ！』

分身…ブレンチシェイド達が跳び上がりガタキリバキックを繰り出す。

「「「「「「「「「「セイヤー！！！」」」」」」」」」」

今のうち！

私は一目散に駆け出す。

「逃がさないよ」

え？

オーマと呼ばれた巨人の口から光線が薙ぎ払われ、一撃で全滅した。

嘘…

「愚鈍！」

っ！？

雷泥のやつ、いつの間に！？

「シャ！」

刀が振られる。

カマキリソードで防ぐが食い込む。

まずい！

後ろに跳び離脱。

あのままだと、腕ごと切られてた…

「テックセッター！」

テッカマンまで…

四面楚歌ってか八方塞がりね…

「死んじゃえ」

やばい！

ポッドからはい出たオーマに捕まる。

「ぐ…あぁぁぁぁ！」

私を握り潰し始めた。

まずいまずいまずい！

「この…離しなさい！」

緑の雷を放ち攻撃。

「うわ！」

驚いたのか私を離す。

「終焉（フィニッシュ）！」

だが着地した私の目の前に、雷泥が現れる。

「次元斬一刀流奥義！流星突！」

刀から伸びた魔力が、私の胸を貫いた。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ディーＳＩＤＥ～

魔力刃の射出？いや、収束砲撃か。
刀身と同じ大きさまで圧縮したとは…恐ろしい程の貫通力だな。

「ぐ…」

オーズの変身が解除され、黒髪の女性が現れる。

「おじいちゃん、ごめん」

「気にするでない。雷泥が仕留めたのだ」

「……」

ジェイルがしゃがみ、オーズを見下ろす。

「ゲホ…何よ？」

「いやぁ…何故が惹かれてね…ん？」

彼女の身体から紫のメダルが飛び出る。

「コアメダルが？なんで？」

「メダル？」

「ジェイル！」

アックスが叫んだ瞬間、コアメダルがジェイルの身体の中に入った。

「っ！？」

苦しみ出すジェイル。

「ドクター！？」

「ジェイル！」

「なんと…」

まさか…

「……大丈夫…だ…」

ふらつきながらも立ち上がる。

コアメダルが自らの意思で主を選んだのか？
それとも、無限の欲望たる彼の本質に惹かれたか…

「フフフ…わかる…理解できる！これがメダルの力か！」

ジェイルがオーズドライバーを奪い、自身の腰に装着する。

「嘘…私の…」

彼女も呆然としてる。

転生の際に得た能力が奪われた…非常識すぎるな。

「素晴らしい…素晴らしい！」

ジェイルの身体から三枚のメダルが飛び出る。
彼はそれを掴むと、右から一枚ずつ入れていった。

「変身！」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プットッティラ～ノザウル～ス！』

仮面ライダーオーズ、プトティラコンボに変身した。

「まさか…」

「カッコイイ…」

「おお…」

「あ……ああ…」

ジェイルは腕を床に突っ込み、メダガブリューを取り出す。

「今まで他者に力を…力を持つ物を作る事しか頭になかったが……
自分が力を得るのがこんなに素晴らしい事とは！雷泥が人の身体を
捨てたくなる気持ちがよくわかるよ！」

「おい、落ち着け」

「興奮が冷めないね！ハハハハハ！」

聞く耳持たずか…

腰のカートリッジらしきデバイスを操作し、セルメダルを取り出す。

カートリッジからセルメダルを作るのか…

『バクン！ゴックン！』

セルメダルを食わせ、バズーカモードにした。

「最期に言いたい事はあるかな？」

「…地獄に堕ちろ」

彼女の言葉を聞いたジェイルは引き金を引いた。

「皆、ごめん…」

『プットッティラ～ノヒッサ～ツ！』

紫の砲撃が放たれ、彼女の命を奪う。

第６１話　闇にうごめく者達（後書き）

星光「じゃあ簡単な紹介をしましょうか。まずは虚空」

虚空「了解。まずはギャラリー氏の応募の【テッカマンブレード】のテッカマンアックス。応募内容やストーリーの都合上、転生者ではなくイレギュラーキャラとさせていただきました」

凶弾「次はカズティク・ベイさんの応募の【風の谷のナウシカ】より、巨神兵オーマ。中身は子供ね」

雷刃「あと、もけぴろさん応募の【仮面ライダー龍騎】の仮面ライダーライアだよ。転生者が男ばっかだから女性にさせてもらいました。あと、本格的な参加はもっと後だよ」

星光「クイントの言ってた占い師ですね」

轟雷「ラストは托塔天王さん応募の【トライガン・マキシマム】から、雷泥・ザ・ブレードだ。こいつは今後人外化する予定だ」

闇「そして作者が出した【うたわれるもの】のディーだな」

星光「敵はこんな感じですね。あとドクタープトティラ」

エリカ「……」

闇「ご苦労だったな」

エリカ「初登場で二十代…やっぱリタイアするか…よりによってこ

んな…」

凶弾「ちなみに後書きにも出番ないわよ」

雷刃「僕も仮面ライダーになってみたいな…」

エリカ「えと…短い間でしたが、私はお別れです。敵として登場するオーズをお楽しみに！」

轟雷「Ｓｔｒｉｋｅｒｓの前に味方と一緒にまとめを書くから。じゃ、またな」

第６２話　それぞれの道（前書き）

今回短いです

第６２話　それぞれの道

～利文ＳＩＤＥ～

悪い事は続く。

ゼスト隊壊滅。エリカさんの死…。

葬儀には沢山の人が来ていた。
なのははずっと泣いており、はやてとフェイトが付き添っていた。

彼女には色々とお世話になった。
僕達が管理局入りしてから色々と根回ししてくれてたらしい。

最後に、スカリエッティが関係してる施設に調査に行くって言ってたな。
彼女を殺したのは、多分ナンバーズが転生者のどちらかだ。
異星人テッカマンやアヴ・カムゥに負けるような人じゃないしね。

「まさか…エリカが…」

「レジアスさんのせいじゃないですよ」

葬儀の後、僕はレジアスさんの部屋に案内された。

「だがエリカを殺したのはスカリエッティの……俺が協力なんかしなければ…」

頭を抱えて俯く。

相当まいってるね。
親戚だったし…

だけど悲しんではいられない。

「ならば、立ち止まらず戦いましょう。エリカさんの仇を取る為に」

「……そうだな。罪を償う為にも…もう一度立ち上がらねば！」

「そうです！仇を取りましょう！」

負けられない。

「すまない…」

僕達には彼の力が必要だ。
ＳｔｒｉｋｅｒＳ、機動六課で僕達が所属するのは正直難しかった。
原作でもかなりギリギリだったし、反対する者も多かった。
特にレジアスさんなんかその代表格だし。だけど今は違う。レジアスさんの協力を得られればかなり楽になるはず。
戦力を集中させて迎え撃たなければならない。

敵となった転生者は少なくないはず。
それにガジェットより厄介なテッカマンにアヴ・カムゥ…
僕達も味方になれる転生者を探さなきゃ…
そして何より、僕達自身も強くならなきゃいけない。

戦いは、始まったばかりだ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

俺達は中学に上がった。
まあ中学からは男女別になるから、フェイト達五人とは離れちまったけどな。

さて、俺達の局員生活は順調だ。

俺は陸戦魔導師、救助隊として働いてる。
物を破壊する事に有効な対物弾やら、内観還元力場の危険地帯への防御力は便利だ。

フェイトは勿論執務官だ。
なのはの負傷が無かったっはいえ、一度は落ちてしまったが、無事に二回目で合格した。

なのはと戒は教導隊入りをした。
戒はリリーさんに大反対されてたな。だけど必死の説得で納得してくれたけど。
あいつは俺達の中じゃ年上だしな（前世を含めると）。訓練校の時も色々世話になったし。
それで教えるってのに興味を持ったらしい。

はやてと利文は捜査官だ。
二人でゲンヤさんとこで研修したり頑張ってる。

そういえば最近二人は周囲を気にせずいちゃついてるな。
前は恥ずかしがってたのに…慣れたか、諦めたか…

レジアスさんとも順調だ。

初めは苦手だったが、話してみるとかなりの熱血漢で良い人だった。
リンディさん達とも交流ができてきたし、多分このままいけば機動六課設立に関わってくるだろう。

高ランク、レアスキルアレルギーも治ってるみたいだしな。

ん？そういや空港火災っていつだっけ？
…今度二人に聞くか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～？？？ＳＩＤＥ～

私の占いは当たる。

貰った力が仮面ライダーライアだったからだろう。
私は占い師として働き、細々と生活をしていた。

そんなある日、私の元に一組の親子が表れた。
クイント・ナカジマ、その娘のギンガとスバル…原作キャラ達だった。

私は占った。
娘達の局員入りを、そしてクイントの危険を。

そしてニュースでゼスト隊の壊滅を聞いた。
占い通り…いや原作通りになってしまった。

そして今、私はもう一つの危険が近づいてる人物といる。

ティーダ・ランスター。

三つ年上の彼との出会いは…そう、彼が同僚と私の店に来たのがきっかけだ。

そして、私は彼と恋に落ちた。
妹であるティアナも私に懐いてくれてる。

だが幸せはそう長くは続かなかった。
彼の死を見てしまったのだ。

私は運命を変えようとした。
だが、一人の転生者を阻まれ彼は帰らぬ人となってしまった。

私は理性を失う程激怒した。
前世でもここまで怒った事はなかった。

原作を壊させない。

私には知った事じゃない。
ティーダは…私の……

私はその転生者を殺した。
だが、運の悪い所にその光景を見られてしまった。
幸い仮面ライダーに変身していたため、顔が見られる事はなかったが…

「エビルダイバー…私はどうしたら良いの？」

『……』

話す訳が無いか…

暇つぶしに占いをする。

……っ！？

なんて事…

ティア…

第６２話　それぞれの道（後書き）

轟雷「おい、もうライア出たぞ」

星光「……（視線をそらす）」

凶弾「なんか、ナカジマ姉妹にアックス、ティアナにライアフラグが立ったわね」

闇「我にフラグを建てようなど百年早いわ！」

雷刃「そういえば中学生になったね。……（二人と見比べる）勝った！」

闇「っ！？塵芥めぇ！虚空、ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＥ！この牛を征伐せねば！」

轟雷「だったら揉んでもらえ」

闇「その手があったか！よし、来るのだ虚空！」

虚空「れれれれれれ冷静に！？！？！？！？」

雷刃「引きずって行っちゃった…」

星光「虚空がオーバーヒートしない事を祈りましょう」

凶弾「あんたも余計な事を言ったわね」

轟雷「うっせ」

雷刃「あ、ボルベルクが暴発した」

凶弾、轟雷「……」

星光「えっと、また次…何ファイナルブラストやろうとしてるんですか！？」

第６３話　人の恋路を（以外略）（前書き）

利文達は二年生になりました

第６３話　人の恋路を（以外略）

～利文ＳＩＤＥ～

なんの変哲もないいつもの夕方。

今日は仕事も無く、はやてとリィンフォース、シグナム、ザフィーラだけ。

他の皆は仕事で遅くなるらしい。

「リィン、お味噌汁注いどいて」

「はい」

「皆、ご飯はいつも通りで良いかな？」

「ええで」

「私は大盛りで頼む」

「この箸は誰のだったか…」

「あ、それ僕の」

皆で夕飯の支度だ。

最近は食事の時間もバラバラになりがち。でもこうやって揃っての夕食は嬉しい。

しかし日本は平和だ。

学校も殺伐とした仕事を忘れさせてくれる。

そういえば去年、フェイトがエリオを保護した。

少々荒れていたが、特に何も無く、無事に終わったらしい。

何かしら転生者が関わると思ったんだけど…

まあ何事も無かったから良いかな。

後はキャロ、スバル、ティアナだ。

普通に行けばこのまま味方になるけど…やっぱり不安は残る。

空港火災も防げないかな…

でも詳しい日時を覚えてる訳じゃないし、スカリエッティが関わってるかもしれないし…後手に回るしかないか。

そんなこんなで夕食の準備ができた。

「ほな、いただきま『♪♪♪』ん？」

突如携帯電話が鳴る。

「ごめん、僕のだ」

立ち上がり画面を見る。

クロノ？普通に通信してくれば良いのに。

「もしもし？」

『利文か？すまないが今時間あるか？』

「これから夕食なんだけど」

タイミング悪過ぎるよ。

『そうか、すまなかった。夕食後で良いんだが、後で君とはやてに話し…相談がある。良いかな？』

僕とはやてに？珍しいな…

「良いよ。じゃあ後で連絡するね」

『ああ、頼む。じゃあまた後で』

電話が切れる。

「誰でした？」

「クロノだよ。なんか僕とはやてに相談があるらしい」

再び席に着く。

「クロノ君が私達に？なんやろ」

「ハラオウンの事だ。仕事だろう」

たしかに。

「後で連絡してってさ。じゃあ食べよう」

「いただきます」

面倒事じゃないと良いんだけど…

そして夕食が終わり、はやては僕の部屋に来た。

「で、何の用かな？」

「事件でもあったんか？」

『いや…その…』

なんだか様子が変だな。

『笑わないでくれるか？』

「うん、わかった」

笑う？なんなんだかな…

『実は…デートのやり方を教えてほしい』

「「へ？」」

デート？

「クロノ君、それって…誰と？」

『……エイミィとだ』

ああ…そうか。

「へぇ～」

「で、どっちからなの？」

『先週僕が告は…って何を言わせるんだ！』

ほうほう、クロノからか。

『と、とにかく。今度の日曜に出掛ける事になったのだが、恥ずかしながらこういった知識も無くて困っているんだ』

「それで僕らに相談をって訳か、デートについて」

『……そういう事だ。何か無いか？』

う～ん…

「私らは…図書館とか」

車椅子を押してよく行ったなぁ。

『図書館…か。流石にこの歳では…』

「あと空中散歩かな」

「あ～、昔よくやったわ」

『なんだそれは？』

「僕がはやてを抱えて飛ぶんだ。空から見る夜景は最高だよ」

「すっごくロマンチックやで」

『な…何をやってたんだ君達は！！！』

うお！？み、耳が！？

『人に見られたらどうするんだ！良いか、今後はそんな事はするんじゃないぞ！』

「う～、クロノ君のケチ」

『エターナルコフィン…』

「「ごめんなさい！もうしません！」」

あれは洒落にならんぞ…

「で、でも、私達を参考にしてもクロノ君らしくないで」

「そうだよ。絶対エイミィさんも誰かの入れ知恵だって気付くよ」

『そ…そうか…』

「下手にあれこれやるより、クロノらしくやれば良いよ」

『僕らしく…か。わかった。自分で考えてみるよ。ありがとう』

「頑張ってな」

「じゃあね」

『ああ。じゃあ』

通信が切れる。

まさかこの時期にはもう交際が始まってたのか…
えっと、たしか結婚したのが…一、二年後だっけな。
そう考えるともうすぐなんだな。

「…トシ君、皆呼ぶで」

「いや、覗いちゃ悪いでしょ」

「私はデート見られてもかまわへんで」

…そうでした。

「それに気になるやろ？しかも誰にも言うなって言っとらんし♪」

今狸の尻尾が見えたような…

「ＯＫ、もう何も言わないよ。たしかに僕も気になる」

「せやろ？邪魔はせんし、見守るだけや」

……ま、良いか。

「……っちゅう訳で、今度の日曜はクロノ君とエイミィさんのデートを覗…ゲフン。成功するか見守りに行こうかと思うんやけど」

「エイミィとクロノが…」

「へぇ～、面白そう」

次の日の放課後、いつもの八人で翠屋にいる。

「決まりだね」

「あ、俺仕事だ」

「私も。補習を見に行かなきゃいけないんだった」

「私も用事が…」

一兎、なのは、すずかは欠席か…

「なあなあ、二人のゴールインはどんなんやと思う?」

結婚は確実だし…

「私はデキ婚に一票や」

「何故に?」

いきなりぶっ飛んでるな。

「クロノ君が暴走するかな?って。あ、トシ君も暴走してええんや

で♪」

「……いつか、ね」

最近理性が危ういからなぁ…い、いかん。

「俺はエイミィさんから切り出すってので。なんだかんだで年上だしな」

でも告白はクロノからだったんだよな…

「僕はリンディさんが後押しして結婚するんじゃないかなって思う」

そこまでヘタレじゃないでしょ…

「私は流石にクロノがプロポーズすると思うよ。普通に」

「あたしも」

「私も」

普通にね…

「じゃあ私は、すでにクロノ君がプロポーズしてるに」

「ふむふむ…トシ君は？」

う～ん…そうだね。

「じゃあ僕もなのはと同じ、すでにプロポーズ済みで。なんか告白

も、付き合ってくださいじゃなくて、結婚を前提とした、とか言ってそう」

「だよね～」

「まあ、日曜を楽しみにしよか」

本当に楽しんでるね、はやては。

そして日曜。

僕とはやて、戒、フェイト、アリサ、さらにリンディさんが参加した。

「リンディさんも来たんですか」

「当然！息子と未来の娘の大切な逢い引きですもの。しっかり見守らなきゃ」

「あ、クロノ来たよ。エイミィも一緒」

マンションから二人が出て来た。

あ、エイミィさんから腕を組んだね。
クロノのやつ慌ててるな。

「新鮮だな、あんなクロノ」

「トシ君、私らも」

「どうぞ」

「エイミィはいつも通りかな」

「ほら、追いかけるわよ」

とりあえずバラバラになって追いかける。

クロノが計画したであろうデートプランは、何と言うか…雑誌の紹介をそのままやってるようだった。

「この店、デートスポットとして有名なのよね…」

「買い物に映画、そして喫茶店…」

「クロノらしいけど…」

「はやて、今度この店行ってみようか」

「ええな」

「二人共、そういうのは今度にしなさい」

さて、これ以上は止めにしておきますか。

え？何故かって？

エイミィさんがクロノを引っ張ってどっか行っちゃったんだ。
なんだかんだで結局はって感じだね。
きっと将来尻に敷かれるな。

ちなみに何処に行ったかは知らないよ。本当だ。
あの後二人がどうなったかは皆さんのご想像にお任せしましょう。

まあ、あれからクロノが参考書の類い以外の本も読むようになったとだけは言っておこう。

それと、予想はまだわからない。
まあそう遠くはないから、待ちますか。

「トシ君、エイミィさんからダブルデートに誘われたんやけど」

「スケジュール合うかな？」

第６３話　人の恋路を（以外略）（後書き）

轟雷「何故今回はクロ×エイの話しなんだ？」

星光「なんでも、クロノとエイミィの結婚について描写が少ない、二次創作でも少ないから書いたらしいですよ」

凶弾「なるほどねん」

雷刃「そういえばずっと疑問だったんだけど、なんでプレシア助けてアリシアは助けないの？」

闇「リニスも無視しているではないか」

星光「作者曰く、能力的に不可能、そういった展開があまりないからだそうです」

雷刃「僕達が消えたのも似たような理由だしね」

凶弾「そういえば作者は、【アリシアを生き返らせてやるから、フェイトも娘として愛してやれ】みたいなのも苦手なんだって。皆さんはどうかしら？」

轟雷「仮に生き返らせられても、説得が思い付かねぇ…」

闇「考えるのが面倒になってきたな……まあ良い、そろそろ終いだ」

虚空「また次回」

第６４話　とある博士の日記（前書き）

今回短かったので、後半におまけのネタを追加しました

第６４話　とある博士の日記

〇月☆日

今日から研究記録とは別に、日記を書いてみる事にした。
こういった代物も面白そうだからね。
そういえばゼスト・グランガンツの蘇生に成功。レリックウェポンの試作品としてもひとまずは完成だ。
だが雷泥君の改造には、まだデータだ足りない。
完成しても寿命が短ければ意味が無い。
人斬りを楽しむ時間がなくなるからと言ってたね。
雷泥君の改造には、もう少し時間がかかるかな。

〇月∴日

最近身体を動かすのが楽しい。
やはり鍛えるというのは自信にもなるし、良い事だと思う。
ナンバーズの訓練も、ゴダードが面倒を見てくれてるので順調だ。

〇月△日

私も戦闘訓練に参加しているが、どうもまだオーズの力を使いこなせないでいる。
焦らなくて良い、じっくりと行くさ。
しかし身体に馴染むなぁ。

●月□日

どうも身体の調子がおかしい。
数日前から食事の味がわからなくなってきた。
まあ食事は栄養補給の為だから、味に興味は無いんだがね。
しかし調べても何の異常も見られないのだが…

●月%日

ディーが言うには、私はグリードと呼ばれる生物に変化していってるらしい。
味覚を失ったのもその影響だそうだ。
満たされる事のない欲望…私に相応しいかもしれない。
完全に変化する日が楽しみだなぁ。

●月→日

アヴ・カムゥの制御ガジェットの火器管理システムが完成した。
これでアヴ・カムゥにも火器が積めるようになった。
雷泥君がビームライフルを希望するとか言ってたな…

∀月♪日

今日はクアットロが私の部屋を尋ねて来た。
なんでも自分専用のアヴ・カムゥが欲しいとの事だ。
たしかに彼女はナンバーズの中では最も戦闘力が低い。
まあ電子戦や情報処理が彼女の専門だからね。
だがいざという時の為に自分の身を守るのには必要かもしれない。
それに娘が欲しがっている物を与えるのも親の勤めだ。
一体位なら問題無いな。
後はクアットロの希望を聞いて、カスタマイズをするだけだ。

∀月☆日

今度はトーレか。
どうやらゴダードに一向に勝てないのが悔しいらしい。
経験が違いすぎるから仕方ないのだがね。
だが彼女は何を思ったのか、自分をテッカマンにして欲しいと言い出した。
流石にこれは難しい。
たしかに私の作ったコピーテッカマンは戦闘力はガジェットを上回る。
戦闘機人の彼女がテッカマン化すれば大きな戦力になるだろう。
だが問題は頭だ。
あまりにも狂暴性が高く、破壊工作や直接戦闘にしか使えない。
ゴダード曰く、【殺意の塊】、【文字通り生物兵器】だそうだ。
彼らから発する精神感応波は非常に不愉快だとも言ってたな。
下手に改造すれば、彼女の精神にどんな影響を与えるかわかったもんじゃない。

だがあんなに必死なトーレも見た事が無い…
よし、頑張ってみるか。
娘の為に！

▽月∴日

とりあえずトーレのテッカマン化も、雷泥君と同じように試作品を作成してからにしよう。
何か手頃な素材か無いものかな…

▽月△日

ついに五感の大半に異常が見られるようになった。
それなのに、何故か日常生活に支障はない。
妙に味気無い感じだ。
そういえば、痛みを感じるか試しに身体をおもいっきり引っ掻いてみたら、メダルがこぼれ落ちた。
完全なグリード化ももうじきだ。

▽月□日

ディーが素体となる人間を連れて来た。
名前はたしか、クルツ・ウェーバーだったか…
まあそんな事はどうでも良いか。

とりあえず改造を始めるとしよう。
数の子ハーレムとか呟いていたような気が…
数の子って魚の卵じゃあなかったかな？
食べた事は無いけど。
なんだか腹が立ったから麻酔無しで改造した。

々月☆日

テッカマン化は大失敗。
自我の欠片もないあれでは、ただの戦闘マシーンだ。
とりあえず模擬戦の相手に利用して処分するか…
トーレのテッカマン化の道は長そうだ。

々月%日

新しいコピーテッカマンが三体完成した。
その内の一体は指揮官型で、精神的にも落ち着いている。
小隊長として利用できるだろう。
生産も安定してきたし、こんど新作の三体の稼動実験が終わったら、
本格的に量産に入るか。
さて、データ収集の為の実戦投入はいつにしようかな。

々月♪日

今度レリックの回収に空港を襲撃する事になった。
これは好都合！
是非ともコピーテッカマン達の初陣に利用させてもらおう。
回収はチンクとゴダードに任せ、テッカマン達は囮だ。
フフフ……さて、どうなるかな？

おまけ

ＴＨＥ　ＧＥＡＲＳ　ＯＦ　ＤＥＳＴＩＮＹでヴィヴィオ参戦とゆう事で思い付いたネタ。

本編とは一切関係の無い、ただのネタです。

【ヴィヴィオの両親は？】

ケース１
利文が父親の場合

利文×はやて

はやて「ヴィヴィオ、お姉ちゃんかお兄ちゃん欲しくない？今なら間に合うで」

ヴィヴィオ「欲しい…かも…」

はやて「よっしゃ！トシ君！」

利文「色々とアウトでしょ！」

利文×なのは

はやて「トシ君の裏切り者！なのはちゃんの泥棒猫！」

なのは「誤解だよはやてちゃん！」

利文「何やってんだ未来の僕！」

利文×フェイト

はやて「フェ～イ～ト～ちゃ～ん～？」

フェイト「一兎じゃないなんて…」

ケース2
一兎が父親の場合

一兎×はやて

フェイト「酷い！こうなったら私が利文を奪うもん！利文、私の方がはやてよりスタイル良いよ！テスタロッサ家に婿に来ない？」

利文「……（呆然）」

一兎×なのは

一兎「訳わからん…」

フェイト「ナノハノウラギリモノー！」

なのは「フェイトちゃん落ち着いて！」

一兎×フェイト

フェイト「いいいいい一兎と！？！？や、やった…未来の私（ボソボソ）ＧＪ」

一兎「むう…俺がねぇ…（赤面）」

ケース３
戒が父親の場合

戒×はやて

利文「ブラスタァァァァボルテッカァァァァァァ！！！」

戒「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？」

戒×なのは

一同「ふーん」

戒「あれ？」

戒×フェイト

一兎「やっぱりオリ主（笑）か…」

戒「違う！」

利文「外見は合ってるのにね。金髪家族」

第６４話　とある博士の日記（後書き）

闇「なんだ、今回はえらくちゃちではないか」

星光「閑話的な回ですから」

凶弾「そろそろ空港火災ね」

雷刃「新しいテッカマンも出るしね」

轟雷「雑魚だがな」

虚空「当然、完成した三体は異星人テッカマンのデスクロー、レッドアイ、デュークです」

雷刃「ねえ、ずっと疑問だったんだけど、デスクローとレッドアイって名前逆じゃないかな？どう見ても鞭と鉤爪じゃ逆でしょ」

凶弾「知らないわよ」

星光「いっそ逆で扱いますかね…」

闇「まあ良い。次回は空港火災になりそうだな」

轟雷「多分な」

凶弾「テッカマントーレとかビームライフル持ちアヴ・カムゥとか、どんどん敵さんパワーアップしてるわね…」

轟雷「レリックウェポン化雷泥も洒落にならんぞ」

闇「そこをどうにかするのが主人公だ。まあ、せいぜい我を楽しませるのだな」

雷刃「そんな事より王様。虚空に膝枕されながらテレビ見るの止めようよ。見てるこっちの首が痛いよ」

闇「ならば見るな」

星光「むしろだらし無いので止めてください」

虚空「だが断る」

凶弾「じゃあまた次回ねん」

第６５話　空港火災（前編）（前書き）

暑いですね

空港火災発生

新しいテッカマン達の実力は？

第６５話　空港火災（前編）

～ゴダードＳＩＤＥ～

空港には人間だった頃の事を思い出がある。

「どうしたアックス。顔色が悪いぞ」

隣でサンドイッチをかじる眼帯をつけた少女が話しかけてくる。
ジェイルの造った戦闘機人、ナンバーズの一人、チンクだ。

「何、少し昔を思い出していただけだ」

「昔…か」

「ああ」

彼女も察したのかこれ以上は何も言わなかった。
しかし私服なだけに、外から見れば子連れだな。

「さて、そろそろ時間だ」

「あいつらがどれだけ引き付けられるかが問題だな」

コピーテッカマン達が暴れている間にレリックを回収する。
実に単純だ。

「しかし、あいつらはどうも苦手だ。あの感応波、どうにかならんのか？」

「私に聞くな。それに感応波を感知できるのはテッカマンだけなのだろう？私には関係無い」

「トーレはテッカマンになるとか言ってたぞ」

「知らんし興味無い」

そっぽを向いて再びサンドイッチに手をのばす。

その瞬間。

爆音と共に人々の悲鳴が鳴り響く。

「始まったか…」

立ち上がりクリスタルを取り出す。

「行くとしよう」

チンクも立ち上がる。

まあ、ワシらの仕事が終わるまではもってもらわねばな。

さて、レリックを探すか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「２０３、４０５、東側に展開してください！」

「魔力障壁はって燃料タンクの防御を！早く！」

空港火災…ただの火災じゃない。何者かが空港を襲撃した結果、火災が発生したらしい。

「主、駄目です。まるっきり人手が足りません」

リィンフォースが後方から戻ってきた。

「せやけど、支援が来るまで私達でなんとかせなあかん」

「それだけじゃないよ。この火災を起こした連中がわかった」

「え？一体誰なんや？」

「テッカマン達だ。感応波をキャッチしたんだ。多分三体。内一体

は空港上空にいる…」

そう、その一体が一際強い感応波を放ってる。

「僕はそいつを追う。はやては皆にも知らせておいて」

「わかった。気おつけてな」

ここの指揮ははやてに任せて急ごう。

「テックセッター！」

クリスタルを取り出しテックセットする。

「さっきっから殺せだのなんだの…そこを動くなよ！」

バーニアを吹かし飛び立つ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

俺はフェイトと一緒に空港に突入した。

「酷い…」

「なんだよ…これ」

辺りを被う火の海、火災で焼け落ちた壁、そしてバラバラに切り刻まれた死体。

「この人達を殺したのって」

「間違いない。襲撃者だな」

この火災、原作だと襲撃者なんかいなかったはず。
転生者か？

『フェイトちゃん、一兎君聞こえとる？』

「はやて？」

『襲撃者が誰がわかったわ。テッカマンや』

「それって…」

「以前利文達を襲った連中だな」

異星人テッカマンがいるのか。
この人達もそいつらに…

『トシ君が感じた感応波は三体。その内の一体は今トシ君が向かっとる』

「あと最低でも二体…」

「ありがとうはやて。一兎、二手に分かれよう。生存者の人達が危ない」

「おう」

フェイトと分かれ奥へと走る。

内観還元力場のおかげで熱くはないが…良い気分じゃ無いな。

それにちらほらと死体が見える。

まるで地獄だな…

『一兎、生体反応！その壁の向こう！』

「おし！フロイトバスター！」

壁をぶち抜き中に入る。

「管理局です！」

「ここです！」

見ると紫色のバリアがあり、その中に何人かの人が取り残されている。

「もう大丈夫です」

トラウマ・シェルを展開。バリアをさらに被う。

「あ、あの…魔導師の女の子が、バリアを張って…それから、妹を探しに行くってあの中に…」

女性が指差した方角はすでに炎で塞がれている。

魔導師の女の子…まさか。

「その子の特徴は？」

「長い髪に紫のリボンの十二、三歳位の女の子です」

やっぱりギンガか。

［フェイト、生存者を発見した。あと女の子がもう一人いる］

［女の子？ちょうど今、保護した所だよ］

［紫のリボンをつけた女の子なんだが…］

［うん。その子だ］

よし。無事らしいな。

［…今の……ごめん、まだ生存者がいたみたい。そっちを見てから、この子を連れて脱出する］

［わかった。俺もこの人達を転送したら散策を再開する。テッカマンも見つかってないしな］

［うん。じゃあ］

念話が切れる。

「女の子は保護されましたよ」

「よかった…」

女性は安堵の声をあげる。

「皆さんを転送します。マーチ」

『おＫ』

転送を開始した。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～フェイトＳＩＤＥ～

私は女の子を抱えて走る。

「ごめんね。もう少しだけ待ってて」

「大丈夫です。私も声が聞こえましたから」

私は少し微笑むと、飛行魔法で反対側の通路に向かって飛ぶ。

近い。

「ヒィィィィ！？」

通路の奥から若い男性が走って来た。

「管理局です！大丈夫ですか！？」

「た、助け……アガ！？」

走って来た男性の口から鉤爪が生えた。

違う。誰かが後ろから刺したんだ。

「っ！？」

私はとっさに女の子に見せないように顔を隠す。

そして背後にいた何者かが男性の肩を掴み、頭を引っこ抜いた。

なんて事を…

「Ｗｒｙｙｙｙｙ！！」

そいつは歓喜の雄叫びをあげながら男性の死体を投げ捨てる。

『サー。おそらく…』

「うん。テッカマンだ…」

以前なのは達を襲ったのとは全く違う。

深緑の装甲に包まれ、肩と頭が繋がったようなシルエット、そして右腕から伸びる長い鉤爪。

そいつは私達を次の獲物と認識したのだろう。嬉しそうに瞳を歪める。

『Ｈｅａａａ！』

鉤爪を突き刺そうと襲い掛かってくる。

「くっ！」

「キャ！？」

少女を抱えながら回避。広い場所に出る。

「Ｋｕｅａａａａ！」

私達のいた場所に突き刺さった鉤爪を抜き、追いかけて来た。

「バルディッシュ！」

『Ｐｌａｓｍａ　ｌａｎｃｅｒ．』

魔力弾を連射する。

だがデッカマンは避けようとせず、額の装甲を展開させる。

まさか…

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

やっぱり！

額から紅い砲撃…ボルテッカが放たれ、プラズマランサーを掻き消す。

私は飛び回りながら回避。

建物に穴が空く。

「あの、私を置いて…」

「駄目。あいつはきっと貴女を狙う。しっかり掴まってて」

あのテッカマンは一般市民を狙っていた。

下手に彼女を一人にすれば危険だ。

「Ｕｅａ…」

私の方が速いけど、しつこい…

魔力弾で牽制しながら距離を保つ。

テッカマンは鉤爪で切り払いながら飛んでくる。

接近戦はまずい。

この子を抱えたままは危険だ。

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

「また！？」

再び放たれたボルテッカを避ける。

「Ｓｈｙａ！」

その瞬間、私の目の前にテッカマンが現れる。

今のは囮！？

「Ｋｉｅｅｅｅ！」

振り下ろされた鉤爪をバルディッシュで受け止めるが、抑えきれずに吹き飛ばされる。

「うう…」

壁に衝突する前に体制を直す。

「大丈夫？」

「前！」

顔を上げると、テッカマンが鉤爪を突き立てて迫って来る。

ま、間に合わな…

「Ｕｅａ！？」

横から銃声と共に大量の魔力弾と矢がテッカマンを撃ち抜く。

今の…

「フェイト！」

「一兎！」

助かった…

「てめぇ！」

一兎の両腕のＰ．Ｖ．Ｆが発砲し弾膜が次々とテッカマンの装甲を破壊していく。

「Ｖ…Ｖｏｌｔ…」

ボルテッカを撃とうと額の装甲を展開する。

「させない！」

『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ．』

プラズマスマッシャーを開いた額に向けて撃つ。

「Ｇｕｇｅｕｅａａａａａ！？」

発射口が爆発し頭が目茶苦茶になる。

「うおぉぉぉぉ！」

テッカマンが頭を抑えて悶絶しているスキに、一兎がアンフォーギヴン・バリスタから伸びた矢を突き刺し壁に叩き付ける。

「ぶち抜けぇぇ！」

そのまま持ち上げ零距離射撃を何発も撃ち込む。

「Ｇｙａａａａａａａａ！？！？」

突き刺さった矢が一斉に爆発。

テッカマンが紅い結晶となって砕け散った。

「ハァ、ハァ……フェイト、大丈夫か？」

「うん。ありがとう、一兎！」

私は一兎の所に降り立つ。

「君も大丈夫か？」

「は、はい…」

「ごめんね、怖い目に合わせて…」

「い、いえ。大丈夫です」

口ではこう言っているが、やっぱり多少はショックを受けてるようだ。

「ここもすぐに崩壊する早く脱出しよう」

先程の戦闘であちこちが崩れている。

「そうだな。上を行こう」

二人で飛び立つ。

「スバル…」

スバル…多分妹の名前だろう。

心配なんだね。

「大丈夫。妹さんもきっと無事だよ」

「ああ。救出に来たのは俺達だけじゃないからな」

「…はい！」

なのはか戒が保護してくれてると良いけど…

第６５話　空港火災（前編）（後書き）

雷刃「なんかさ、フェイト弱くない？」

轟雷「ギンガを抱えながら戦ってんだ。仕方ないだろ」

虚空「今回の敵は異星人テッカマン、レッドアイでした」

凶弾「しかし暑いわね」

星光「夏ですからね」

雷刃「アイスもう一個食べよっと」

星光「駄目です。王みたいにお腹壊しますよ」

闇「う、うるさ…ぐぉぉぉぉ…」

轟雷「自業自得だ」

雷刃「それはちょっと嫌かも……皆も熱中症とか気おつけてね。バイバイ！」

第６６話　空港火災（後編）（前書き）

空港火災決着

第６６話　空港火災（後編）

～なのはＳＩＤＥ～

空港が何者かに襲撃され大火災を起こした。

私達はレジアス中将の依頼で現場に急行。そこで目にしたのは、空までも赤く染めるほどの炎に包まれた空港だった。

私とフェイトちゃん、戒君、一兎君は生存者の救出に向かった。

外からはわからなかったが、中も酷い事になっている。

火災だけじゃない。おそらく襲撃者に殺害されたであろう人々の遺体が散乱している。

はやてちゃんが言うには、襲撃者はテッカマンが三体だそうだ。

多分四年前に私達を襲った奴の仲間かもしれない。

私は戒君と分かれて生存者を探す事にした。

大丈夫、私一人でも勝てる。

「……レイジングハート」

『はい、聞こえました。……発見、八時の方角、距離３０ｍ』

女の子の声が聞こえた気がしたけど、気のせいじゃなかった。

声の方へと急ぐ。

いた。

ショートカットの女の子が。

っ！？銅像が倒れる？

駄目、間に合って！

すんでの所で銅像にバインドを架けて止める。

「よかった……間に合った。助けにきたよ！」

危なかった…

あと少しでも遅かったらと思うとぞっとする。

私は彼女の前に降り立つ。

「よく頑張ったね。偉いよ」

そう言いながら彼女の頭を撫でる。

「う…ううう…」

すると安心したのか泣き出した。

「もう大丈夫だからね。安全な場所まで、一直線だから！」

立ち上がりレイジングハートを構える。

『上方の安全を確認』

少女にバリアを架け、魔法陣を展開する。

『ファイアリングロック解除します』

「一撃で地上まで貫くよ」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

レイジングハートがカートリッジをロードする。

『Ｂｕｓｔｅｒ　ｓｅｔ．』

全部…一気に！

「ディバイン…」

レイジングハートの先端に魔力が集中していく。

「バスタァァァァ！」

ディバインバスターが一撃で天井を全て撃ち抜く。

よし。

「行こう。掴まって」

少女はゆっくりと頷き、私は彼女を抱き抱えて飛び立つ。

その瞬間。

『危険！』

「っ！？」

私の目の前を紅い砲撃が通り過ぎる。

「キャァァ」

少女が私にしがみつく。

今の…まさか。

「Ｈｅｈａｈａｈａ！」

砲撃が放たれた場所から何者かが飛び出してきた。

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

その人物の右肩が光り、砲撃が放たれる。

やっぱり！

旋回しながら回避。距離をおきながら敵を見る。

緑のコートのようなものを羽織り、額からは一本の触覚が生えてる。
以前戦ったテッカマンより小柄で華奢だ。声も高いし、女性なのかな？

「う…ああ…」

少女はすっかり怯えてしまっている。

「大丈夫。私が守るから」

頭を撫でながらレイジングハートを構える。

武器は無いのかな…
相手の攻め手がボルテッカ以外わからないけど、やるしかない。

『Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ.』

「シュート！」

アクセルシューターを撃ちながら飛び回る。

「Ｓｈｙａ！」

右腕の腕輪が解け縄のようになる。
そしてそれで周りの瓦礫を掴み投げ付けて魔力弾を叩き落とす。

さらに鞭のように振ってきた。

なるほど。だけど！

私は左右に避けながらレイジンを向ける。

「シュート！」

再びアクセルシューターを発射。

テッカマンは避けようと飛び立つが逃がさない。

飛び回るテッカマンを魔力弾が追いかける。

「……！Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

回避を諦め撃ち落とそうとボルテッカを放つ。

そうはいかない。

魔力弾を操作しボルテッカを回避。テッカマン目掛けて加速させる。

「Ｕｇｅａ！？」

命中。

まだまだ！

「シュート！」

さらに追撃。次々と魔力弾が直撃する。

「Ｋｙａａａ！？」

テッカマンは墜落。

いける！

「すごい…」

「よし、とど…」

倒れたテッカマンにレイジングハートを向けた瞬間、誰かがホールに入って来た。

「管理局か？助けてくれ！」

中年の男性がこっちに走って来る。

テッカマンに気付いていないようだ。

「危険です、離れて！」

「…！」

制止しようとしたが、すでに遅く、テッカマンは腕の鞭を伸ばし、男性を捕らえて引き寄せる。

「ヒィィ！？」

「Ｋｉｈｉｈｉ…」

テッカマンは男性の首をつかみ私を睨む。

人質…！

私は降りると少女を離す。

「離れてて。っ！？」

「お姉さん！」

私の首に鞭が絡みつく。

「ああ！？」

そのまま私を壁に叩き付ける。

「Ｈｉｈａｈａｈａ！」

先程の仕返しのように私を振り回す。

「あう！？」

床に衝突する。

「う…うわぁぁぁぁ！」

私を嬲るのに夢中になったスキを付いて男性が逃げ出した。

だけどテッカマンは気付いている。

「止め「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」」

ボルテッカが男性に直撃。

足だけを残して消滅する。

「い…嫌……」

「Ａｈａｈａｈａ！Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

次は私に向けて放って来た。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

「く……あああああ！？」

とっさにバリアを張るが防ぎきれずに爆風に吹き飛ばされる。

「お姉さん！」

少女が私の下に走って来る。

まずい。

「Ｖｏｌ…」

再び右肩に光りが集まる。

まとめて消し飛ばすつもり！？

私は少女を庇うように抱きしめる。

「ヴェイパースラスト！」

「Ｋｙａａａａａａ！？」

すると青い斬撃が、テッカマンの右腕を肩ごと切り落とした。
腕は紅い結晶となって砕け散り、切り口からは青い血が吹き出る。

今の…

「戒君！」

テッカマンが飛びのくと、そこには戒君がいた。

「なのは、大丈夫？」

「なんとか…」

レイジングハートで身体を支えて立ち上がる。

「こいつ…覚悟しろ！」

戒君が封雷剣を突き付ける。

「Ｕ…ｕａａａａａａ！」

左腕から鞭を飛ばしてきた。
戒君はそれを切り払いながら走る。

「だあぁぁぁぁ！」

封雷剣を振り下ろし左腕も切り落とす。

「Ｈｉ…ｈｉｉｉｉｉ！？」

テッカマンは敗北を悟り、飛び上がって逃げ出した。

「なのは！」

「了解！」

レイジングハートをテッカマンに向け、カートリッジをロードする。

『Ｄｉｖｉｎｅ…』

「バスタァァァァァァァ！！」

ディバインバスターがテッカマンを飲み込む。

「Ｕｅａａａａａａａａａ！？！？」

テッカマンは跡形も無く消えた。

「ハア…ハア…」

「なのは、大丈夫？」

「うん。ありがとう」

「気にしないで。君も大丈夫？」

「う、うん……お姉さん、お兄さんありがとう…」

「私は全然駄目だよ。やられちゃいそうになるし…」

「ううん。お姉さんのおかげだよ」

「…ありがとう」

私は、この子一人しか助けられなかった…

「なのは飛べる？」

「うん。でも、この子お願いできないかな？」

「わかった。さ、行こう」

戒君が少女を抱き抱えて飛び上がり、私も二人を追いかける。

途中で少女と目が合い、彼女は私に微笑む。

その笑顔に私は少し救われた気がする。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

僕は敵テッカマンを追いかけ、空港の上空ど真ん中に来た。

いた。

白い装甲に包まれた人魚のようなテッカマン。

やっぱりデュークか。

「Ｋｕａａａａ…」

僕に気付きランサーを召喚する。

僕もランサーを構える。

「さっきっからうるさいな。悪いけどここで終わりだ…はっ！」

ランサーを振り下ろす。

テッカマンはそれを受け止めたが、僕は力づくで押し退く。

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

両胸が光り、ボルテッカを放って来た。

「ボルテッカ！」

僕もボルテッカで応戦する。

衝突したボルテッカが爆発し、辺りを紅く染め上げる。

「まだまだ！テックレーザー！」

続けてテックレーザーを撃つが、テッカマンはランサーを回転させて防ぐ。

「てや！」

ワイヤーをランサーに巻き付け引っ張る。

「うおぉぉぉぉ！」

「！Ａａａａａ！」

敵はランサーを奪われまいと握りしめ、こちらに飛んでくる。

「Ｓｈａａａａａａａ！」

「だあぁぁぁぁ！」

お互いの拳がぶつかり合う。

左手の装甲が軋む。

だが力を緩めずバーニアを吹かす。

「はあぁぁぁぁ！」

その勢いで殴り飛ばした。

「Ｕｏｏｏｏｏ！？…Ｖｏｌｔｅｋｋａ！！」

殴り飛ばされながらボルテッカで反撃してきた。。

「うわ！？」

間一髪で回避、肩をかする。

「Ｋｉｅｅｅｅｅｅ！」

ランサーを横薙ぎに振るってくる。
僕はランサーで受け止めるが、テッカマンはその勢いを利用して人魚のような下半身を叩き付ける。

「うお！？」

「Ｓｈｙａ！」

ランサーで串刺しにしようと突いてきた。
ギリギリで避けるが、脇腹を切る。

「この！」

お互いにランサーを振るい何度もぶつかり合う。

「この…」

鍔ぜり合いになり、僕が若干押している。

「Ｇ……ａ？」

なんだ?感応波が消えた?そうか、皆が倒したんだ。

「さて、残りはお前だけだ。観念しろ!」

「O…ａａａａａ!」

味方が全滅したのでやけくそになったのか、ランサーを構えて突っ込んで来た。

やれやれ、指揮官型のくせに…
いや、こいつらに元々冷静さなんかないか。

「一気に終わらせる!」

敵の突きを受け流し、蹴り飛ばす。

「でやあぁぁぁぁ!」

そして一気に接近し、腹部にランサーを突き刺す。

「Ｕｇｅａ!?」

そのまま身体を引きちぎるようにランサーを振り上げ、上半身だけを真っ二つにする。

「……!?!?」

するとテッカマンは紅い結晶となって砕け散った。

「終わったね…」

よし。

「はやて、テッカマンは全滅。もう大丈夫だ」

『了解。避難も完了したから、消火するで！』

するといくつもの光弾が空港のあちこちに降り注ぎ、空港を凍らせていく。

アーテム・デス・アイセスか…本当凄い。

ん？今テッカマンの気配があったような…

「マーチ？」

『俺に感応波は感知できんぞ』

そうだった。

まあ気のせいかな。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ゴダードＳＩＤＥ～

「任務完了だな……どうしたアックス」

「なに、あのまがい物達を相手にした連中をな…」

まさかランスが出て来るとはな。

「で、その連中はどうだ？」

「まだまだだな。あの程度の輩を無傷で倒せんようでは、未熟だ」

「悪かったな」

…そういえばこいつも似たようなもんか。

「これは失礼」

「ふん！」

そっぽを向いてしまったか。

まだまだ小娘だな。

『チンク、アックス、レリックは回収したか？』

ディーか。

「問題は無い。これから帰還する」

『そうか。テッカマン達のデータもとれた。ジェイルも待ってる』

「了解だ」

さて、あの坊やも実力をつけてきた。それにあの四人…面白くなって来たわ。

第６６話　空港火災（後編）（後書き）

闇「…これで異星人テッカマンは全部か？」

虚空「はい」

凶弾「これから量産に入るし、やばいわね」

轟雷「そういやヤミーはどうすんだ？」

星光「初期はサイボーグヤミーとか考えていたらしいのですが、それを出したら本当に勝ち目が無くなるので止めたそうです」

雷刃「ただでさえ敵の方が数とか能力とか凄いしね」

凶弾「追加の味方大丈夫なのかしら？」

星光「……多分」

闇「まあ良い。また次回会おうぞ！」

第67話　…無い！（前書き）

下ネタが多いので注意

第67話　…無い！

～利文ＳＩＤＥ～

空港火災、はやての決意。この春は色々あったなあ…

正直六課設立にあたって、僕達が参加できるか凄く怪しかったけど、反対代表のレジアスさんが味方になってくれたおかげで何とかなりそうだ。
原作でもかなり危うい立場だったしね。

…味方を探さなきゃなあ……

世間…日本では夏休みに入ったが、僕達は管理局の仕事が立て込み、夏休みなんて存在しない状況だ。

そんなある日、僕は任務でロストロギアを一つ回収した。
そして現在ユーノに調べてもらってる。

「ユーノ、どうかな？」

「うん、やっぱりたいしたことないね。正直、悪戯用って感じだし」

ユーノの手には黄色い宝石がいくつも埋まった四角錐の置物のような物が抱えられてる。

先日回収したロストロギアだ。

「で、どんなやつなの？」

「ああ、これは「お～い、二人共いる？」戒？一兎？」

戒と一兎が部屋に入ってきた。

「ユーノが来てるって聞いたんだ。久しぶりだね」

「久しぶり。最近忙しいからね」

「ロストロギアの鑑定か。で、これどんなやつなんだ？」

一兎が指で突く。

「これはね…あれ？」

急にロストロギアが光り出した。

「おい、まさか…」

「「発動した！？」」

「うわっ！？」

そして部屋がまばゆい光りに包まれた。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

「うわぁ…」

「凄いわね…」

「…一兎」

「……」

「あ、ありえへん」

現在僕達は月村家にお邪魔している。

さて、どうして女性陣が妙な反応しているのかと言うと…

「……これ邪魔だね」

「お母さんそっくり…」

「俺は相変わらずか…」

僕達三人は……女性になっています。

どうやらあのロストロギアは性別を一時的に変える物らしい。

「まあ、二三日で元に戻るんだし…ね？」

なのはが僕達を慰める。

それでもなぁ…

「だけど魔法って凄いね。こんな物まで作れるなんて」

「非常識にもほどがあるわね」

すずかとアリサが僕達を観察する。

まあ僕達がどんな姿かと言うと。

一兎は…まあ普通かな？身長とか色々。

髪は背中位までのロングヘアーの女性だ。

利文は…一番の特徴は胸だ。三人の中で一番でかい。

それどころかシグナムを超えてるよ多分。

髪型は変わらず、顔立ちが女性になってる位かな。
僕はお母さんそっくりだ。金髪のショートカット、凹凸に乏しい身体。
やっぱ親子かな。

［どうなんだ？久しぶりの女性の身体は？］

［前世は…一兎が一番近いかな？まあなんだか変な感じだけど］

［しっかし、シグナムの言う通りこれ邪魔だな…］

［［それだけでかけりゃね］］

しかし凄いな…

「ユーノ君はどうなったの？」

あの場にいたユーノも当然女性になってる。
でも…

「見た目は全然変わってなかったな…」

「…なんだかわかる気がする」

始めはユーノだけなんともなかったかと思ったし。

「せやけど、トシ君凄いなあ…すずかちゃん以上や」

「少し悔しいかも」

「あんまり見ないでよ…」

利文が胸を隠すように腕を組む。

…特盛。

「しかし、俺達が男の時とは逆だな」

「「「「「え？」」」」」

……は？

「い、一兎！それは！」

何爆弾投下してんの！

「一兎君……もしかして…下のなんか？」

「……」

一兎が目を逸らす。

なんて無責任な。

「うわぁぁぁぁ！」

利文が頭抱えてうずくまる。

……ごめん。どうフォローすれば良いかわからない…

「ト…トシ君？大丈夫やって。私身体小さいからきっと調度ええよ。それに愛があれば乗り越えられるはずや！」

「はやて……ごめんよぉぉぉぉ！」

利文がはやてに泣きつく。

「一兎」

「……俺より少し位だ。おそろしくしょぼい訳じゃないさ」

「お前黙れ！」

「あべし！？」

利文の投げたクッションが直撃。

一兎ってこんなキャラだっけ？

「とりあえず元に戻ったら私らの愛を…」

「はやてちゃん、フェイトちゃんが茹蛸みたいだからその辺にしておいた方が…」

見るとフェイトが真っ赤だ。

「まあこの話しは後で……所でトシ君、頼みが有るんやけど…」

「僕に出来る事なら」

……まさか。

「ほんま？じゃあ……胸揉ませて」

「……え？」

やっぱり。

「は、はやて、それはちょっと…そういう事したら戻れないとか、そんなのもあるじゃん？ね？」

利文が少しづつ後ずさる。

「その時は私もロストロギアで男になるから安心してや」

はやてが両手を怪しく動かす。

「戒、行くぞ」

「そうだね」

「え！？二人共助けて！」

「はやての頼みなんだから聞いてあげなよ。じゃあね」

僕達は部屋を出る。

「終わったら呼ぶで」

「了解」

「ま、待って！」

「すずかちゃん！」

「は～い♪」

「うえ！？」

最後に見たのは、すずかに羽交い締めにされた利文の姿だ。

そして一兎がドアを閉める。

「戒」

「もち」

僕達はドアに耳を当てる。

こんな面白そうな状況を無視する訳にはいかないからね。

「さって、覚悟してもらうで」

「はやて…止め…ひゃあ！？」

「男のくせにこんな立派なものを…悔しいわね」

「利文君、私にも触らせて」

「あ…だ、駄目ぇ！」

「もう我慢できへん。ちょっと吸わせてもらうで」

「絶対嫌ぁぁぁぁ！」

これは想像以上だ。

［戒君、一兎君、終わったよ］

なのはに呼ばれて部屋に入る。

そこには満足げな五人と半裸で呆然としてる人物がいた。

利文、生きろ。

「さて、次は二人やな」

「「はい？」」

僕達も？

「待って、僕のなんか全然無いんだし楽しくないよ！」

「俺なんか何の特徴も無い凡だぞ！」

二人で後ずさる。

まさか僕達まで？

「私は一兎の興味あるかな？」

フェイトが頬を赤らめながら近づく。

「第一、二人だけ何もやらない訳無いよ」

すずかが笑顔でドアの前に立ちはだかる。

「で、その後はお着替えタイムよ」

アリサが服を引っ張り出す。

「逃げるぞ！」

「わか「トシ君！」うわ！」

首にワイヤーが巻き付く。

いつの間にテックセットしたんだ！？

「逃ガスカ」

完全にキレてる。

「ほんじゃ、堪能させてもらうで♪」

「「ひいいいいいい!?」」

その後僕達三人は、色々と失い着せ替え人形にされたのは言うまでも無かった。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「酷い目にあったよ…」

「ちゃんと元に戻ったんやらかええやん」

あれから二日後、僕達は無事に男に戻れた。

TSなんてもう勘弁だ。

「それはそうとはやて、この前はよくもやってくれたね」

「仕返ししても良いんやで」

そう言いながら抱き着いてきた。

「じゃあ仕返ししちゃおうかな」

そのままはやてをベットに押し倒す。

色々とやばいな。

理性なんか何処へ行ったのやら。

「ちゃんと優しくしてや？」

「プレッシャーかけないでよ。ただでさえ緊張してるんだ」

「ほんまや」

はやてが僕の胸に耳を傾ける。

心臓が爆発しそうってのはこんな感じか。

「はやて…」

「トシ君…」

そして二人の顔が近づき…

「利文、この前借りた資料…」

リィンフォースが入ってきた。

今僕達の状況は？

僕がはやてを押し倒すような形だ。

「……ブフッ」

リィンフォースは真っ赤になって倒れてしまった。

「なんでいつもこうなるんやろ…」

「さあ？」

第67話　…無い！（後書き）

星光「ＴＳですか」

轟雷「ＴＳだな」

雷刃「一回やってみたいかも…」

凶弾「まあ私の美しさが損なわなければ良いけど」

闇「貴様は黙れ」

雷刃「ねえ、その……もしかして三人もあれなの？オ、オリジナルと同じで…」

轟雷「比べた事ねえし」

凶弾「なんで私がそんな事しなきゃならないのよ」

虚空「……」

星光「ま、全くあなた達は……王、どうしましたか？」

闇「いや、虚空以外のを見た事無いから、どうなのかと思……あ」

星光「王？まさか…」

凶弾「……」

轟雷「まじかよ…」

雷刃「だから最近…」

闇「虚空！（真っ赤）」

虚空「了解」

凶弾「王様掴んで飛んでっちゃったわね」

星光「雷刃、追いかけなさい！詳しく聞かなければ！」

雷刃「え？あ、うん！」

轟雷「……帰ろ。じゃあまたな」

第６８話　ミッドへ（前書き）

なかなか進まない…

第６８話　ミッドへ

～利文ＳＩＤＥ～

「どや？」

「おお…」

「フム…」

「でっけぇ」

「うわぁ♪」

「ここが…」

「……」

僕達の目の前に一軒の家がある。

そう、僕達はミッドに引っ越した。そしてこの家は僕達の新しい家だ。

「立派な家ですね」

「しかし、よく一括払いで買えたものだ…」

「あたしらの給料は安くねーんだし。全員で出したんだ、楽勝だろ」

「それでも、ここまで立派な一戸建てを買っちゃうなんて」

「本当、高い買い物だったね。でも、七人で住める家だったらこの位は無いと」

「それに将来的にはもっと家族が増えるし♪最低でも二人以上の予定で」

そう言いながらはやてが腕を組む。

「じゃあ入ろっか」

「スルーした！？」

そりゃねぇ。

「そういう事は後でね」

「主も自重してください」

「むう…まあ、しゃあないか。じゃあ早速今夜…」

ちょ！

「住宅街のど真ん中で何をやってるのですか？」

後ろから女性の声が聞こえる。

振り向くと背の高い、いかにもキャリアウーマンといった表現が合う女性がいた。

「あら」

「オーリスさん」

「ゲイズ三佐」

「こんにちは」

「どうも。引っ越してきたと聞いたので挨拶にと思ったのですが…まったく、こんな真昼間から何をやってるのですか」

ありゃ…説教始めちゃったよ。

「じゃあ私達はお先に」

「失礼します」

「おやつまでに終わると良いな」

「では」

「……耐えろ」

次々と家に入って行ってしまった。

「ちょ、皆？」

「置いてかないでよ！」

「逃がしませんよ」

物凄い形相で僕とはやての頭を掴む。

「「ヒィ！？」」

ちょ、怖！

「まあ二人が若いし仲が良いのもわかりますよ。ですがそれなりに地位のあるのですから、節度をですね…」

……長引きそうだな…

「いいですか。私はあなた達が羨ましい訳ではありませんよ。そりゃいい歳して浮いた話しも無くて最近父さんが本気で心配して……余計なお世話よ。第一、私に釣り合うような男性が少な過ぎるんですよ。私は三佐ですよ！釣り合うのが一回り以上年上ばかりじゃないの！一応その辺も理解しているのか、そういった方々からのお見合いの話しは出てきませんが…でも私だって焦ってるんですよ。一緒に出掛けたり、私の手料理を食べてもらったりとか、すっごく憧れてるんですから。…言っときますけど、年齢＝いない歴じゃありませんからね！本当ですよ！うう…」

そんな事聞いてないよ…

「あの…オーリスさん？」

「今ならこの言葉の意味がよくわかります…リア充爆発しろ！」

「壊れた？」

色々と危ないって。

「今日から私はしっとマスクレディーとなり、全次元世界のアベックを滅ぼしてくれる！！」

「「止めんかい！」」

よりによってしっとマスクになるな！

「世界中の嫉妬を私にわけてください！」

嫉妬玉！？

あれから彼女を落ち着かせるのに小一時間かかったのは言うまでもない。

この人、こんなキャラだっけ？

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

最近の俺達は…まあ順調かもしれない。

中学を卒業し、ミッドに住むようになった。

なんかマンションを借りる話しが出た時、フェイトと同じ部屋とかいう話しがあったな。

信用されてんのか、ヘタレだと思われてんだか…

確かに一人暮らしが不安なのはわかるがな。

まあ同じマンションに住む事にはなったんだが、周りの反応が微妙だった気が…気のせいか。

そういやキャロもフェイトが無事保護した。

どうやらもう一人保護を申し出た転生者らしいやつがいたらしい。

まあそいつは色々と変な噂のあるやつだったおかげで、後からでもフェイトが保護できた。

そいつ？ロリコンって噂があったんだよ。

まあそんなこんなで今の所は原作通りだな。

だが最近テッカマン、アヴ・カムゥ、ガシェットの活動が活発になっている。

特にテッカマンなんか増えてるしさ。ＡＭＦが無いから戦いやすいが、正直うるさい。

利文なんか、あんまり多いと感応波で狂いそうだとか言ってたな。

そういう訳で、俺達も仲間になってくれる転生者を探してるが、な

かなか上手くいかない。
原作に興味が無い。
今の職場に満足している。
他の部隊にも戦力が必要だ。
スカと敵対するが、原作キャラが嫌い。
つまり、六課に来る気が無いやつらだな。
勿論自分から利文に申し出て来るやつもいた。
だが、そいつらはあまり信用できない。
ようするにオリ主は自分だ！ってやつらばかりなんだ。
やれ自分を前衛部隊長にしろ、エリオを外して自分を代わりに、むしろ俺達三人が邪魔とか…
しかもそういった輩は能力に頼り切って弱い。
この前直死の魔眼持ちがいたが、戒に秒殺されてたな…
ナンバーズを助けると言ってる奴も困る。
原作では更正したメンバーの方が多いが、転生者の影響でどう変わってるかわからない。
下手に手加減されちゃ危険だ。
原作以上に強くなってる可能性もあるしな。

はぁ…

そういや俺は今第四陸士訓練校に来ている。
ついでにエリオも一緒にな。
俺が行くって話したら、見学に行きたいって言い出したんだ。

「うわぁ…広い！」

「あんまりはしゃぐなよ」

はしゃぐエリオを注意しながら、外の訓練所へ向かう。

ここに来たのは仕事半分私用半分だ。

今年卒業する訓練生から、使えそうな新人のピックアップに来た。

そしてもう半分の私用が、スバルとティアナの様子見だ。

「人が沢山いますね」

エリオが手すりから身を乗り出す。

「将来の局員達だ。皆頑張ってるんだぜ。あと危ないからあんまり乗り出すな」

「はーい」

さて二人は……いた。
ん？なんか少年が一人近づいていくな。
何やら話しをしているが…相手にされてねぇな。
あいつは…

手元の端末を操作する。

ジルグ・アルヴァトロス……高魔力、デバイス持ちか…
能力元がわからないが、多分転生者だな。
評価は…態度も悪く、魔力以外はてんで駄目か。

画面を閉じる。

向こうでは相手にされず、しょげてる少年が見えた。

はあ…

「どうしたんですか？」

「仕事でちょっとな」

転生者以外でメンバーを探した方が良いかな。

ん？

ふと見ると、スバルが俺を指差しティアナに話しかけてる。
そういや俺、救助隊の制服姿だったな。

ティアナはスバルの頭を叩き、そのまま頭を掴んで下げさせる。

多分、【失礼でしょ！】とか言ってるんだろうな。

面白いコンビだ。

そういや仕事の途中だったな。

「エリオ、まだ見てるか？」

「あ、一緒に行きます」

「そうか」

俺はエリオの手を引き歩き出した。

第６８話　ミッドへ（後書き）

闇「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＥ！」

虚空「脱出不可能」

凶弾「四人掛かりでバインドやったしね」

轟雷「雷刃、お疲れさん」

雷刃「ゼェ、ゼェ…僕一人で…なんで…手伝ってくれないの？」

星光「私達では追いつきませんし。さて、洗いざらい吐いてもらいましょうか」

闇「だ、誰が話すか！」

虚空「黙秘」

星光「ルシフェリオン…」

虚空「先月襲われました」

闇「虚空！？」

凶弾「やっぱり王様からね…」

雷刃「知ってるよ。こういうのを肉食系っていうんだよね」

轟雷「誘うじゃなくて襲うってのがな…」

闇「これで満足か！そろそろ離さぬか！」

星光「まだ聞きたい事は沢山あるので、まだ駄目です」

闇「塵芥めぇ！」

雷刃「興味津々なのはわかるけど、程々にしとかないと王様泣いちゃうよ」

凶弾「いい加減可哀相になってきたから、この辺で終わりにしましょ。次回は新しい仲間の紹介になるわ。じゃあねん♪」

第６９話　部下二人（前書き）

新しい仲間です

誤字修正しました

第６９話　部下二人

～？？？ＳＩＤＥ～

私の名前はミエリ・ハッター。所謂転生者だ。

転生者は神によって与えられた能力によって外見等が決定する。

私の場合は、得た能力とは関係無いんだけどね…

なんせ私の能力は【プレデター】の能力なのだ。

そう、あの蛍光色の血を流し、姿を消す戦闘狩猟生物だ。

身体能力を可能な限り維持しつつ、人間として生まれるように調整したら魔力がかなり減ってしまったけど…

装備をデバイスとして所持しているが、クリーナーの装備である地雷や溶解液、スラッシャーウィップは無い。

ちょっと残念だ。

特に地雷。

しかしネットガンやナックルダスター等一通りの武装はあるし、何より高い身体能力と赤外線を見る事ができるのだ。

十分かな。

一応私は原作に関わるのはすっごく興味がある。

だけどかなり危険だし、スカ側についた転生者のせいで、異星人テ

ッカマンとかアヴ・カムゥとか正直やばい。

まあ、現在新暦七十四年、Ｓｔｒｉｋｅｒｓの一年前で私は十二歳。管理局が潰れても、まだ人生をやり直せるし、あのオリ主の三人が勝てばなお良いし。

お父さんも管理局員だから、実は勝つ方が嬉しいんだけど…

やっぱり私は訓練校を卒業し、一局員としてＳｔｒｉｋｅｒｓを乗り切ろう。

そう思ってた時期がありました。

「……」

「……何故に？」

訓練校の卒業間近。私は一人の人物に呼び出された。

教導隊の制服を着た金髪の青年。

戒＝キスク＝木崎教導官。

そう、あのオリ主三人組の一人だ。

「で…オリ主の貴方が訓練生である私に何か用ですか？」

そう言いながらお茶を啜る。

まあ、予想はついてるけど…

うーん、砂糖入れればよかったかな？

「オリ主って…」

彼は頭をかきながらティーカップに手を伸ばす。

そして一口飲むとそれを置き、話しを始めた。

「単刀直入に言おう。君を機動六課にスカウトに来たんだ」

……やっぱり。

「……なんで私なんでしょうか？木崎教導官」

「君の成績を見たけど、首席じゃないか。それに転生者でしょ？」

「…私より優秀な人だっていますよね？それに六課に入りたい転生者は沢山いるでしょう？」

全員がって訳ではないが、少ないはずがない。

「たしかにいたけど、まともな人がいないんだ」

「俺がオリ主だとか？」

「そう。僕達やエリオを外せとか……しかも能力に頼ってまともに鍛えてなくて…戦力外な連中ばかりなんだ」

鍛える…か。

たしかに能力だけじゃ駄目だ。訓練校で思い知らされたなぁ。

私達転生者が神から貰った能力は、あくまで武器のようなものだ。

いくら強い武器を持っても、使いこなせなきゃ意味が無いのと同じ。

「たしかに、そういった転生者も見た事あります」

「……で、どうかな?是非来て欲しいんだけど」

「……」

どうするかな…

すっごく魅力的だし、評価されてるのは嬉しい。

原作か……

「本当に私なんかで良いんですか?」

「是非とも」

むう…

機動六課に入れば結果によって最高にも最低にもなる。

勝てば将来への大きな力となり、負ければ最悪死だ。

私はどうする？

負けてもやり直せる？

そんなの最初から諦めてるようなものだ。

あんなマッドサイエンティストを放置しておけば、何をやらかすかわかったもんじゃない。

ならば…！

「そのお話…引き受けます」

やってやろうじゃないの。

「よかった！じゃあ詳しい辞令とかは後で。卒業まであと少しだから頑張ってね」

「あ、はい…」

つまり卒業したらそのまま配属されるのか。

ん？まてよ…

「あの、私はどこに配属されるんですか？」

「ああ、僕と利文の小隊に配属予定だよ」

利文…たしかテッカマンの彼か。

「利文が隊長で僕が副隊長。あともう一人はまだ決まってないんだけどね」

つまり分隊が三つあるんだ。

「……それ大丈夫なんですか？リミッターとか色々」

人数が増えれば当然反対派も凄い事になるはず。
ただでさえ原作でもギリギリだったんだ。さらに人数を増やすなんて…

「ああ、大丈夫だよ。レジアス中将味方だし」

「まじ？」

「まじ。だから中将の直属部隊って事になってるんだ」

あの人が味方か……まあ私は嫌いじゃないから良いけど。

「色々と頼もしいですね」

「まあね。…じゃあ僕ははやてに報告に行かなきゃいけないから、この辺で」

そう言って立ち上がる。

「じゃあよろしくお願いしますね…副隊長」

「よろしく」

軽く握手をする。

原作介入。

いや、原作から離れているかもしれないし…
よし！気合い入れて行きますか！

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

今日僕はある人物の家に招待されてる。

デューク・バタフライ三佐。
デューク…つまり公爵。武装錬金のパピヨンか。

「いやぁ、まさか本当に来てくれるとはね」

そう言いながら笑顔で手を差し出す。

「ど、どうも…」

僕は彼の手を軽く握る。

「さあ座りなさい。話しを始めよう」

とりあえず椅子に腰掛ける。

「ときに、君は機動六課のメンバーを探してるようじゃないか」

「はい。でも上手くいかなくて…」

昨日戒が一人見つけたけど。

「苦労しているようだね。それに原作より蝶まずい状況だ。ＡＭＦ付きのアヴ・カムゥにテッカマン軍団…」

「間違いなく転生者ですね」

「そうだな。全く…困ったもんだ。若い頃、武藤カズキの転生者を逮捕した事があるが…暴走した転生者程面倒なやつは無い」

いたんだ、武藤カズキ…

「あの…三佐は、原作開始の結構前に…」

「生まれたのは三十年前だ。だから二十年前の闇の書事件も知ってるぞ」

「やっぱり」

彼はコーヒーを一気に飲み干した。

「シグナムに襲われてな。蝶怖かった。全力全開で逃げたのは初めてだ」

「……なんか…すいません」

「何、事情は理解しているつもりだ。それより本題に入ろう」

こんな話しをする為に呼ぶ訳がない。

「話しとは？」

「俺の息子を六課に推薦したくてね」

すると、手元の端末を操作すると、黒い長髪の少年が画面に映し出された。

息子ときたか。

「ご子息を？」

「俺の家系の先天性魔法…一応レアスキル扱いの、ニアデス・ハピネスはＡＭＦの影響を受けない。アヴ・カムゥやガジェットに対して非常に効果的だ。多少はデメリットもあるがな。そして親である俺が言うのもなんだが、性格も悪くない。…まあ、少々変わり者だがな」

「……」

ＡＭＦの影響を受けないか。

「どうだろうか？原作介入という自分の夢を息子にやらせてるように思ってもかまわない。だが、一人の管理局員としても息子を評価しているし、スカリエッティを止めたい気持ちに偽りは無い」

……なるほどね。

「そう簡単に信用しますか？」

「わかってる。俺が敵の可能性も考えるだろう。だが信じてくれとしか言えない。なんならパラベラムの佐々木一兎に俺の記憶を見せてもかまわないぞ」

そこまでか…

デンジャラス・ラビットの能力の応用で、記憶から嘘を見破る事は可能だ。

「……わかりました。貴方を信じましょう」

「感謝する…」

バタフライ三佐は少し頭を下げた。

「息子さんは、僕の小隊に入る事になりますね」

「三つ目の分隊か…」

「はい。すでにもう一人、転生者がいますが」

「そうか……息子を遠慮無く使ってくれ。親として危険な事はして欲しくないが、自分から管理局に入ると言い出したんだ。甘えさせはしたくない。息子も理解してるはずだ」

「はい。ところで、息子さんの名前は？」

「バロン・バタフライだ。親が公爵だから、息子は男爵ってね」

笑いながら答えた。

「はあ…」

安易すぎやしないか？

「まあ、お互い頑張ろう。打倒スカリエッティだ」

「ええ」

これで部隊の人数は揃った。

ＳｔｒｉｋｅｒＳが始まる。

第６９話　部下二人（後書き）

轟雷「プレデターにパピヨンかよ」

星光「ちなみにパピヨンは、変態前の変態さんが敵として応募したものを味方とさせていただきました」

凶弾「だけど転生者の息子なのよね」

雷刃「だけどさ、大丈夫なの？敵の方が強い能力じゃない」

闇「巨大生体兵器に殺人鬼、テッカマン軍団に神（？）と仮面ライダー二人か…」

虚空「さらにガジェット付きアヴ・カムゥ…無理ゲー」

星光「主人公とは不利になるものですよ。さて次回はＳｔｒｉｋｅｒＳでの追加キャラの設定を書きます。そこでミエリやバロンの容姿や敵の能力等を詳しく書きますので。ではまた次回お会いしましょう」

設定（ＳｔｒｉｋｅｒＳ）（前書き）

今回は設定です

設定（ＳｔｒｉｋｅｒＳ）

諸星　利文

身長：１８０ｃｍ

体重：７３ｋｇ

魔導師ランク：近代ベルカ式、空戦Ｓ（ブラスター化時はＳＳ）

階級：一等空尉

コールサイン：ブラスター０１

一応主人公。
最近ブラスター化の反動に気付き出し、自重している。
実はテッカマンの襲撃により立場が危うい時期があったりと苦労してきた。
声変わりした頃から実年齢より上に思われるのが悩み。（はやて曰くダンディーボイス、ヴィータ曰く老け声）

佐々木一兎

身長：１７４ｃｍ

体重：６７ｋｇ

魔導師ランク：ミッド式、陸戦Ｓ＋

階級：一等陸尉

コールサイン：バレット０１

一応意識はしているが、相変わらずの鈍感でフェイトの気持ちに気付かない。
前世では喫煙していたので、今回は煙草を吸わないように努力している。

戒＝キスク＝木崎

身長：１７８ｃｍ

体重：６９ｋｇ

魔導師ランク：空戦Ｓ＋

階級：

コールサイン：ブラスター０２

かなり落ち着き、なのは、アリサ、すずかとの関係も良い友人になっている。
オリ主とかにはすでに興味も無く、純粋に平和の為に戦い、人生を楽しむ事にしている。

はやて、なのは、フェイト
利文達との特訓で原作より強め。

スバル、ティア
だいたい原作通り。
訓練校時代は男性転生者によく言い寄られて苦労した。

キャロ、エリオ
利文達三人と面識がある以外は原作通り。

ミエリ・ハッター

容姿：肩より下位の長い黒髪、銀眼

年齢：１３歳

身長：１５１ｃｍ

体重：血で汚れて読めない

スタイル：ペタンコの平げ…

身体能力：高い

魔力：Ａ＋

魔力光：青緑

魔導師ランク：近代ベルカ式、陸戦Ｂ

階級：二等陸士

コールサイン：ブラスター０３

能力：プレデターの能力と武装
赤外線を見る能力を得ている

特性
超戦闘狂、狂暴化
調整で削除済み

デバイス
複数の非人格搭載型を使用する。

左腕コンピューターガントレット
光化学迷彩制御、自爆装置、ナックルダスターが装備されている。
勿論迷彩は水が弱点。

ヘルメット
索敵、視覚補助、照準、記憶媒体としての機能を持つ。

リストブレイド
実体刃以外に魔力刃も展開できる。
ポンプアクション式のカートリッジが取り付けられており、装填数は2発。

スピア
両刃式の槍。
魔力刃は展開できない。

レイザー・ディスク
ＡＶＰの六枚刃の物。

実体刃と魔力刃の使い分けができ、魔力で操作が可能。

ネット・ランチャー
右手首に装備。
魔力の網を発射する。

シェルダー・プラズマキャノン
左肩に装備。
ミエリの武装で破壊力は一番高い。

バリアジャケット
ＡＶＰのスカー・プレデターの鎧姿。髪を金属製の輪でまとめ、ドレットヘアーもどきにしている。

能力調整
特性削除、人間として生まれる

真面目で訓練校も首席で卒業している。
自分の体型は気に入っている。
大家族で、兄二人、姉と妹と弟が一人ずついる。
前世はアメリカ人。
リミッターはまだ解除されてない。

バロン・バタフライ

容姿：蝶野攻爵をロングヘアーにしたもの。

年齢：１７歳

身長：１７７ｃｍ

体重：６９ｋｇ

身体能力：普通

魔力：Ｂ

魔力光：黒

魔導師ランク：ミッド式、総合Ａ－

階級：一等陸士

コールサイン：ブラスター０４

能力

ニアデス・ハピネス

一種の魔力変換素質で、魔力を黒色火薬に変換し操作する能力。

破壊力も高く、変換してしまえばＡＭＦの影響も受けないが、通常の魔力運用が難しくなってしまう。

デバイス

パピヨンマスク
蝶型の覆面。（橙色）
待機形態は小型の核鉄。
通常魔力運用が苦手なバタフライ家に代々使用される補助型デバイス。
性格はクールで完全なツッコミ役。

バリアジャケット
そのまま舞踏会に駆け付けられそうな素敵な一張羅。

転生者ではなく、転生者の子孫なため特性は無い。
元のパピヨンに近く、頭も良いが変人扱いされる事も多い。
わずかだが、バタフライ家を蝶々の妖精と呼ぶ人もいる。

機動六課

ライトニング分隊が無く、代わりに一兎が隊長、フェイトが副隊長のバレット分隊が存在。
分隊はスターズ、バレット、ブラスターの三つ。
後見人は変わらないが、レジアス中将直属の部隊になっている。

スカ勢

ゴダード

容姿：テッカマンブレードのゴダードが老けたような外見。体格も筋肉質。

年齢：６０歳

身長：１６５ｃｍ

体重：６８ｋｇ

身体能力：テッカマンなので高い

魔力：Ｂ＋

魔力光：紅

魔導師ランク：推定オーバーＳ

転生者ではなく、利文と同じ世界出身のテッカマン。
元々は軍人で、国の命令、国防の為にテッカマンアックスとなった。
しかし外国への侵略目的や利文のような無理矢理改造された人がいる事を知り離反。一部の研究者と共に暴動を起こして利文を逃がした。そして自身も転移で脱出し、路頭に迷っていた所スカリエッティに出会う。

人類に対して深い憎しみを抱いており、スカリエッティと共に人外の世界を創るために行動している。
テッカマンなので魔力変換素質：フェルミオンを持つ。

オーマ

容姿：巨神兵の姿（人間擬態時はムスカを幼くしたもの）

外見年齢：１０歳前後

身長：５１ｍ（人間擬態時は１３５ｃｍ）

体重：測定不能

身体能力：高いなんてレベルじゃない

魔力：ＳＳ－

魔力光：薄黄色

能力：巨神兵の能力

巨神兵として誕生し、魔法で人間の姿へと擬態する。
口からはプロトンビーム、額からは拡散レーザー、さらに飛行能力を持つ。

特性
短命

デバイス
無し

能力調整
無し

前世が幼かったため、精神的に子供。
さらに転生させた神がいい加減だったので調整もせずに転生。巨神兵として生まれ、不完全な状態で衰弱していた所をディー、ゴダードに救出される。
原作知識が劇場版しか無いためスカリエッティ達の事を知ら無いが、命の恩人かつ彼らの目指す世界に惹かれ協力する。
普段は生体ポッドの中で生活しており、ナンバーズを姉のように思っている。
リミッターは無い。

雷泥・ザ・ブレード

容姿：トライガンの雷泥そのもの

年齢：３３歳

身長：１８３ｃｍ

体重：７１ｋｇ

身体能力：高い

魔力：Ｓ（改造前はＡ＋）

魔力光：黄土色

魔導師ランク：推定近代ベルカ式、陸戦オーバーＳ

能力：雷泥・ザ・ブレードの装備

特性

殺人鬼化、人外に勝てない

調整で削除

デバイス

ムラマサブレード

日本刀型の非人格搭載型デバイス。

柄がカートリッジになっている。

ローラーブーツ

車輪の部分が球体になっており、改造により壁を垂直に走る事も可能。

バリアジャケット

雷泥の和服

能力調整
特性の削除

元々は賞金稼ぎで、特性が能力の削除が魔力低下の大きな原因でそれを補う為に気が狂う程鍛え続けた結果、戦いと自身の力に魅力され、ついには殺人鬼として指名手配される事になった。
スカリエッティに付いたのは原作キャラと戦ってみたい、更なる力を得る為で彼らの目的には興味は無い。
すでにレリックウェポン化している。
実はリミッター無し。

手塚美雪

容姿：黒髪のショートカット、黒眼

年齢：２４歳

身長：１６３ｃｍ

体重：本人曰く普通

スタイル：普通

身体能力：普通

魔力：Ａ－

魔力光：赤紫

魔導師ランク：推定陸戦ＡＡＡ

能力：仮面ライダーライアの能力

仮面ライダーへの変身以外に的中率９０％以上の占いができる。

特性

自己犠牲

デバイス

カードデッキ

非人格搭載型でＶバックルやライダーの鎧が内蔵されてる。

バリアジャケット

仮面ライダーライアの姿だが、正確にはデバイスの一部。

能力調整

契約モンスターのエサや契約破棄の削除、ミラーワーモンスターの外での活動制限削除。

幼い頃からミッドで占い師として働いており、ティーダと出会い恋人となりティアナとも面識がある。

占いで何かを知り、現在行方不明となっている。

エビルダイバー

調整によりおとなしくなっている。

好物は生魚。

ディー

容姿：ディーそのもの

外見年齢：二十代半ばから後半

身長：１７６ｃｍ（変身時は６ｍ）

体重：６６ｋｇ

身体能力：高い

魔力：Ｓ＋

魔力光：黒紫

魔導師ランク：推定ミッド式、総合オーバーＳ

能力：ディーの能力

オンカミヤリュー（翼人）の身体、ウィツァルネミテアへの変身、アヴ・カムゥの製造

特性
歪んだ愛情、戦争主義
調整で削除済み

デバイス
無し

バリアジャケット
ディーの着物

能力調整
特性の削除

元々管理局アンチの転生者で、管理局製の身体で生まれる。
人外の世界にも興味があり、本気で管理局を潰す気でいる。
利文達はオリ主気取りと思い見下している。
リミッターは全て解除済み。

スカリエッティ

完全にグリード化しており、戦闘力は原作より遥かに上。

ナンバーズ

トーレ以外は原作通りだが、戦闘力はゴダードの協力で上昇している。
トーレはまだテッカマン化していない。

ゼスト、ルーテシア、アギト

原作通り。

異星人テッカマン

管理局ではフェイクテッカマンスピア、クロー、ウィップ、マーメイドと呼ばれている。
局員曰くＡＭＦが無いため、ガジェットよりかは戦いやすいと言われてる。

アヴ・カムゥ

でかい、固いとガジェットより厄介。
管理局ではガジェット付きと呼ばれてる。

設定（ＳｔｒｉｋｅｒＳ）（後書き）

雷刃「今回設定って事は次回からＳｔｒｉｋｅｒＳ？」

轟雷「まあ、そうなるわな」

星光「……なんだか勝てるかどうか怪しいんですが」

闇「第一巨神兵なんかどうやって戦うのだ？ヴォルテール一匹でどうこうできるのか？」

凶弾「雷泥なんかレリックウェポン化してやたらと強くなってるし」

虚空「どう足掻いても絶望」

星光「止めてください、縁起の悪い…」

轟雷「まあ頑張ってくれや」

雷刃「今回はこの辺で。次回からＳｔｒｉｋｅｒＳになるからよろしくね！」

第７０話　高く空へ（前書き）

ＳｔｒｉｋｅｒＳ開始

第７０話　高く空へ

～利文ＳＩＤＥ～

僕は今ヘリに乗りながらはやて、フェイトとある試験を見ている。

そう、スバルとティアナのＢランク試験だ。

「おおっ。早速始めてるなぁ。リインもちゃんと試験官しとる」

「元々しっかり者だし、はやてより適任かもね」

「酷い！フェイトちゃん、私にもできるよね！？」

「……はやて、ドア全開だと危ないよ。モニターで見られるんだから、中に入って？」

「え？もしかして肯定？」

「はいはい。ほら閉めるよ」

ボタンを押しドアを閉じる、はやてを座らせる。

「ううー相変わらずドＳやなぁトシ君は…」

「あはは……で、この二人がはやての見つけた娘達だね？」

僕達の目の前にモニターが映し出される。

「うん。二人とも、なかなか伸びしろがありそうな娘たちやね」

「それで…今日の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜きかな？」

「直接の判断はなのはに任せてるけどね」

「部隊に入ったら…なのはちゃんの直属の部下で、なのはちゃんと戒君の教え子になるんやからな」

そうして二人の試験が始まった。

二人はビルの中のターゲットを次々と破壊していく。

「ん…良いコンビだね」

「そうだね」

「せやけど難関はまだまだ続くよ。これが出ると受験者の大半が脱落するっていう最終関門」

「中距離型の大型のオートスフィアか…」

「今の二人だと防御も回避も難しいね」

「さて、この二人はどうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所

や」

その後も順調に攻略していく。
さらにはデバイスを囮にして、さらにスバルに幻術をかけて接近。
そして挟み撃ちで全機撃墜した。

「なるほど、たしかにこれは伸びしろがありそうだね」

「せやろ？」

「残るは最終関門。さて、どうなる事やら…」

事件の類いはある程度記録しといたけど、この試験内容とかは覚えてなかったからなぁ…

「あれ？」

「なんや？」

「サーチャーに流れ弾が当たったかな？」

急にモニターが映らなくなった。

「なのは？リィン？」

『トラブルみたいですね』

『一応様子を見に行くよ』

『お願いします』

「じゃあここはなのはちゃんに任せよ」

しばらくすると他のサーチャーからティアナを見つけた。

「お。出てきた」

「うん。あれ？だけど…」

「一人？」

しかも道のど真ん中を走って。

するとスフィアからの射撃がティアナを襲う。

「直撃？」

「違う。彼女は無事だ」

ティアナはそのまま射撃を避けながら走る。

「高速回避？いや、ちゃうな…」

「あの娘、ティアナは囮」

「って事は…」

そしてついに命中。するとティアナの姿が消える。
さらに二人現れた。

「フェイクシルエットかぁ」

「で、そのスキに…」

スバルはウイングロードを展開。
一気に駆け抜け、ビルに突入しスフィアに殴る。
そしてカートリッジロードしバリアを掴んで引きちぎる。

「うわっ」

「でも、まだ終わって無い」

スバルはスフィアの射撃をバック転しながら避け距離をとる。

『ディバイン…バスタァァァ!!』

そして魔力スフィアを形成し、殴り付けるように砲撃を放った。

「ディバイン…」

「バスター?」

「…あの娘、なのはと戒が助けた娘だよ。あの空港火災で」

「ああ、なるほど」

砲撃はスフィアを貫きビルの壁に穴を開けた。

射程距離は短いみたいだね。

その後スバルはティアナをおぶりながら走り出した。
残り時間十六秒。
最後のターゲットを破壊し一気に加速した。

…なんか嫌な予感。

立ち上がりドアを開ける。

案の定彼女はスピードの出しすぎで止まれない。

「これって…」

「ぶつかる…ね」

だが衝突する瞬間、桜色の光が辺りを包む。
そして光が治まると、魔力の網と道路から生えた柔らかい柱に二人は抑えられていた。

「二人共、危険行為で減点ですね」

リィンフォースが降りてきた。

「頑張るのは良いですが、怪我をしては元もこうも無いですよ」

「「す、すみません…」」

二人はリィンフォースに叱られしょんぼりする。

「あはは。まあまあ…」

なのはも降りてきた。

「ちょっとびっくりしたけど、無事でよかった。とりあえず試験は終了ね、お疲れ様」

すると魔力の網と柱が消え、二人がゆっくりと降ろされた。

「リィンフォースさんもお疲れ様」

「お疲れ様です」

リィンフォースが軽く頭をお辞儀し、なのははバリアジャケットを解除する。

「まあ、細かい事は後回しにして。ランスター二頭陸士」

「あ、はい」

てティアナは一瞬肩をびくつかせ返事をする。

「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで」

「治療なら私がやりましょう」

リインフォースがティアナの前に座る

「あ、えっと……すみません…」

ティアナは申し訳なさそうにつぶやく。

「……なのは…さん？」

「うん？」

「あ、いえ…高町教導官！一等空尉！」

スバルの声になのはが振り返ると、途端にスバルは慌てて訂正した。

「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから。四年ぶりかな？背伸びたね、スバル」

なのははスバルの側に歩み寄る。

「あの時は怖い思いをさせてごめんね。私のせいで…」

「いえ、そんな事ありません！あの時、なのはさんがいなかったら、私は…」

スバルは空港火災の事を思い出したのか言葉に詰まる。

「また会えて嬉しいよ」

「…私もです！」

なのはの言葉に嬉しそうにスバルは答えた。

「さて、なのはちゃん的に二人はどうやろ？」

「合格かな」

「ほぼ確実にね」

ドアを閉めて席につく。

「あれから四年なんだね」

「あの事件以来、トシ君大変やったからなぁ」

「あっちこちにテッカマン狩りに連れてかれて、あまつさえ同類扱いされたしね」

「でも、リンディさんやレジアス中将が庇ってくれて、なんとかなったよね」

テッカマンやアヴ・カムゥ、ガジェット達。特にテッカマンはほぼ無差別に人を襲うからなぁ…

「まあその話しは置いといて…これからあの二人とお話しせなあかんな」

はやては嬉しそうに俯いた。

さて試験場近くの本局施設に来ている。
はやてとフェイトは二人と話し中。僕はと言うと…

「はあ…魔力が高いからっていい気になって…結局駄目だとは…」

「やっぱりいるもんだね……転生者以外でも（ボソ）」

他の試験場で試験官をしていた戒と話している。

「うん。毎回いるんだよ…高魔力だから、親族に高官がいるからって人がさ」

「大変だね」

「まあ慣れたけど…っと。なのは！」

戒が手を振り出す。
振り向くとなのはがこっちに歩いて来た。

「なのは。これから皆の所に？」

「うん。戒君は？」

「今は休憩時間だけど、これからもう一組見ないといけないんだ」

「そっか…」

「っと、僕も行くんだった。じゃあね」

「試験官頑張ってね」

「またね」

戒と別れてはやて達の所へ向かう。

いたいた。

ティアナが僕達に気付き釣られてはやて達がこちらを向く。

なんか一瞬スバルの顔が曇ったような気がしたけど…気のせいかな?

「取り込み中、かな?」

「平気やよ」

「そっか」

確認をとってから、なのははフェイトの隣に腰を下ろし、僕はソファーの後ろに立つ。そしてなのはは二人をじっと見つめて口を開いた。

「とりあえず、試験の結果ね」

「「はい」」

二人揃って姿勢を正す。

「二人とも、技術はほぼ問題なし。でも、危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています」

流石に最後のあれはやり過ぎかもね。

「パートナーの安全や試験のルールを護れない魔導師に、他の人の安全を護るなんて、できないよね？」

「「……はい」」

「だから、残念ながら試験は不合格」

二人が俯く。

まあ、当然といっちゃあ当然だね。

「……なんだけど」

「「え？」」

「二人の魔力値、能力を考えると、半年後まで今のままで居るほうが危険かも。というのが、私と試験官の考え」

リィンフォースが頷く。

「だから、これ」

そういって高町空尉が机の上に置いたのは、二人分の封筒と書類。

「特別講習に参加する為の申請書と、私の推薦状。これを持って、

本局の武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目には再試験を受けられるから。来週から、本局の厳しい先輩達にもまれて、安全とルールを確りと学んでこよう。そしたらBランクなんて、きっと楽勝だよ。ね？」

「「ありがとうございます！」」

二人揃って頭を下げる。

「合格までは試験に集中したいやろし、私への返事はその後ってことにしとこか」

「「すみません、恐れ入ります！」」

さらに立ち上がって敬礼した。

息合いすぎだね…

面白い位に。

そして僕達はなのは、リィンフォースと別れ、フェイトの車で移動中だ。

この後クロノと会議があるからね。

「あの二人、来るかなあ？」

「来るよ。全体」

「私もそう思う」

「ふふ……そういえばトシ君のとこの二人は？」

「手続きもすませたし、後は職場で…かな」

「そっか。……所でトシ君」

「何？」

「車の免許、何時になったらとるんや？」

「……来週試験なんで」

実は一回落ちてるんだよなぁ…

第７０話　高く空へ（後書き）

轟雷「ＳｔｒｉｋｅｒＳ始まったな」

雷刃「それに合わせて僕達も大人に！」

凶弾「…変身状態の虚空と王様の身長差が凄いわね」

星光「たしかランスが２４０位でしたから…身長差は９０ｃｍ位ですね」

雷刃「王様ちっさ～い」

闇「やかましい！」

凶弾「そういえばリィンフォース？は？影も形も無いんだけど…」

星光「作者曰く【生まれる理由が見当たらなかった】からしいですよ」

虚空「初代のほぼ完全な状態での生存」

轟雷「たしかに。それに二人いるとこんがらがる」

星光「ですからＳｔｒｉｋｅｒＳで？のポジションには初代が代わりにって事になりますね」

闇「なるほどな。ではまた次回だ。さらば！」

第７１話　集結、機動六課（前書き）

機動六課始動

第７１話　集結、機動六課

～バロンＳＩＤＥ～

俺は父上の推薦で機動六課という部隊に配属される事になった。

聞いた時は驚いたよ。

なんせ【歩くロストロギア】八神はやて二等陸佐が作り上げた部隊。

メンバーも凄まじい。

【エース・オブ・エース】高町なのは、【金色の閃光】フェイト・テスタロッサ、【オリジナルテッカマン】諸星利文、【二代目雷帝】戒＝キスク＝木崎、【疾走する弾丸】佐々木一兎…

…なんだこれは？

世界征服でもするのか？

しかもバックにはレジアス・ゲイズ中将、聖王教会、ハラオウン家ときたもんだ。

蝶ヤバイ…

それ以上に俺が気になるのは、昔父上をこてんぱんに打ち負かし、本気で逃げ出した相手…元闇の書の守護騎士、シグナムのいる部隊に俺を行かせるとは…

相変わらず父上の考えは理解できんな。

しかしこの部隊、蝶有名な教導官が二人もいる。

こんなにおいしい話しは無い。
俺がさらなる高みへ昇る為に、父上を超える為に。

さて、俺は宿舎の自室に来た。
たしか二人部屋だからルームメイトがいるんだっけな。

「失礼」

部屋に入るとすでに誰かがいるのか、俺のでない荷物が開けられていた。

「あ、すみません。散らかしてしまって」

そこにいたのは赤い髪をした少年だった。
むしろ子供だな…

「構わないよ。君が俺のルームメイトかな？」

「はい。エリオ・モンディアル三等陸士です」

少年…エリオ君は背筋を伸ばし敬礼した。
そこまで畏まらなくても良いのに。

「バロン・バタフライ一等陸士だ。よろしく」

俺は手を差し出した。

「は、はい。よろしくお願いします！」

恐る恐る握手して来た。

「そこまで畏まらなくて良いよ。部屋では普通に接してくれ」

「ですけど…」

「君がもたないぞ。それに、ここは家でもある。な？」

「……はい！よろしくお願いします、バロンさん！」

それが俺と小さな騎士の出会いだった。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

私は今、宿舎で荷物の整理をしている。

ついでにデバイスも広げてみた。

…多いわね。

やっぱり一人じゃ整備しきれないかな。

シャーリーに頼む？

…まあ、勝手に改造なんかしないよね…本当に。

「まっ、なんとかなるでしょう」

なんとなくヘルメットを被る。

レーザーサイトＯＮ。

三角形に並んだ赤い点が部屋中を駆け巡る。

「し、失礼します！」

誰かが部屋に入って来た。

「はい？」

思わずそっちを向く。

すると照準が調度部屋に入って来た少女の額に当たる。

「……」

「……ヒッ…ヒヤァァァ！？」

「キュル！？」

少女は驚いて出て行ってしまった。
白い小さな竜を掴んで。

「ち、ちょっと待ってよ！」

なんか誤解してるよ！悪いのは私だけどね！
ひとまず少女を追いかけた。

「ごめんね。驚かせちゃって」

「い、いえ。私もごめんなさい…」

なんとか少女…キャロを捕まえる事ができた。
ヘルメットが怖いらしく、必死に逃げられたけど…

「えっと…キャロちゃんとフリードだっけ？」

「あ、はい」

「ルームメイトのミエリ・ハッターよ。よろしくね」

「よろしく…お願いします…」

まさかこの子と同じ部屋になるとは…まあ良いか。
同じ前線メンバーだし。

しかし妙に静かだ。

……き、気まずい…

「わ、私竜なんて初めて見るなぁ。触って良い？」

「あ、どうぞ。フリード」

「キュル」

とりあえず持ち上げてみる。

以外と軽いわね。
まあ飛ぶ生き物だし、当然か。

「あの…」

「ああ、ごめん。都会育ちだからさ。こういった動物が珍しくてつい」

「そうですか…」

「じゃあ、これからよろしくね。キャロ、フリード」

「はい！よろしくお願いします！」

「キュル！」

キャロとルームメイトか…面白くなりそうね。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「いやぁ、ようやくこの部屋も隊長室らしくなったね」

「せやな」

はやてが新品の椅子に座り、嬉しそうに机を撫で回す。

「唯一の不満は、トシ君の机が別の部屋っちゅう事だけやな」

「仕方ないよ。僕は一応分隊長だし」

「むう…この位は我慢せなあかんか」

するとブザーが鳴った。

「はい。どうぞ」

「「「「失礼します」」」」

「あっ。お着替え終了やな」

入ってきたのは、一兎、戒、なのは、フェイトの四人。四人とも陸士部隊の制服を着ている。

「皆でおんなじ制服姿は中学校の時以来やね。まあ、なのはちゃんと戒君は跳んだり跳ねたりしやすい教導隊制服でいる時間の方が多くなるかも知れへんけど」

「たしかに」

「まあ、事務仕事や公式の場ではこっちってことで」

「さて、それでは！」

「っと、僕もだった」

フェイトの呼び掛けで、僕達ははやてに向かって敬礼する。

「本日只今より、高町なのは一等空尉」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官」

「佐々木一兎一等陸尉」

「戒＝キスク＝木崎一等空尉」

「四名とも、機動六課へ出向となります！」

「同じく、諸星利文一等空尉。機動六課へ配属となります！」

「どうぞよろしくお願いします！」

「はい。よろしくお願いします」

形式上だけど、やる事はやらないとね。

するとまたブザーが鳴る。

「どうぞ」

「失礼します。あっ……高町一等空尉、フェイト・テスタロッサ執務官！それに戒＝キスク＝木崎一等空尉に佐々木一兎一等陸尉！ご無沙汰しています！」

眼鏡の少年が入り、四人の顔を見て驚いて敬礼する。

「えーっと…」

「グリフィス…だよな？」

一兎が頭をかきながら聞く。

「はい。グリフィス・ロウランです！」

「うわ～、久しぶり！っていうかすごい！すごい成長してる！」

「うん！前見たときはこんなちっちゃかったのに」

「前って四年前だろ」

「それだけあれば成長しても当然でしょ」

「そうそう」

「そ、その節はいろいろとお世話になりました」

「グリフィスもここの部隊員なの？」

「私の副官で、交代部隊の責任者や」

「運営関係とかもやってくれてるんだよ」

「お母さん、レティ提督はお元気？」

「はい。お陰さまで……あ、報告してもよろしいでしょうか？」

話がそれていることに気づいたのか、あわてて正す。

「どうぞ」

はやてが軽く頷く。

「フォワードをはじめ、機動六課部隊員とスタッフ、全員揃いました。今はロビーに集合、待機させています」

「ほな、皆行こうか。部隊の皆にご挨拶や」

「「うん」」

「こういうの面倒なんだよな…」

「そんな事言わないでさ…そうだ。利文、後で少しお願いがあるんだけど」

「そうだった。利文君に用事があるの忘れてたよ」

なのはまで？

「え？別に良いけど…」

一体なんだろ…

そしてはやての紹介や挨拶。勿論、僕達隊長陣からの挨拶もあった。

やっぱり挨拶の途中、スバルは僕を見ていた。

少なくとも好感的じゃない視線で。

第７１話　集結、機動六課（後書き）

闇「で、次が新人の訓練という訳か」

轟雷「話しの仕分けが目茶苦茶だな」

雷刃「まあ良いんじゃないかな。区切りはついてるんだし」

星光「さて、人数が増えたので、訓練もどうなる事やら…」

凶弾「どうにでもなるでしょ」

虚空「ついに始まった新人達の訓練。六人の前に立ちはだかるのは、そして戒となのはのお願いとは？次回、転生者はリリカルなかませ犬。第７２話、磨かれる翼。テイク・オフ」

雷刃「…虚空？」

虚空「……」

凶弾「疲れちゃった？」

虚空「……（コクコク）」

星光「お疲れ様です」

闇「無茶しおって…」

轟雷「じゃ、またな」

第７２話　磨かれる翼（前書き）

結局分割してしまった…

第７２話　磨かれる翼

～ミエリＳＩＤＥ～

挨拶の後、私達はなのは隊長について行った。

「そう言えばお互いの自己紹介はもうすんだ？」

不意になのは隊長が振り向いて尋ねてきた。

「名前、経験、スキルの確認はしましたよ」

バロンが即座に答える。

「部隊分けとコールサインもです」

続けてティアナも答えた。

「そう、じゃあ訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「「「「「はい！」」」」」

「了解」

そして私達は訓練服に着替え海辺の方へと急いだ。

そこにはなのは隊長ともう二人、金髪の青年と眼鏡をかけたロングヘアーの少女がいた。

戒隊長とシャーリーか。

そして私達に預けたデバイスが返される。

私だけ多いので別のケースで渡されたのは仕方ないかな。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入ってるから、ちょっとだけ大切に使ってね。　それと、メカニックのシャーリーから一言」

シャーリーが私達の前に立つ。

「えー、機動六課メカニックデザイナー兼通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。皆はシャーリーって言うんで、そう呼んでね！皆のデバイスを造ったり調整したりするために、時たま訓練を見させてもらいます。あ、それとデバイスについての相談があったら遠慮せずに言ってね」

「「「「「「はい」」」」」」

「ミエリもインテリジェントにしたかったら、遠慮なく私に「処理速度が速い方が良いので」…そう……」

なんか露骨にがっかりしてるなあ。

「ま、まあ訓練を始めようか」

「あ、はい…」

「ここで、ですか？」

ティアナが疑問に思うのも無理は無い。何も無いのだから。

「シャーリー」

戒隊長が指を鳴らす。

「は～い」

するとシャーリーの周りにパネルが浮かび上がる。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさんと戒さん完全監修の陸戦シミュレーター。…ステージセット」

するといくつものビルが現れ、あっという間に市街地に変わった。

「「うわぁ」」

「ああ」

「凄い…」

「なるほどね」

「高そ…」

私達は訓練場へと移動した。

さて…初訓練。どうなる事やら。

『じゃあさっそくターゲットを出して行こうか。まずは軽く十二体から』

地面に魔法陣が描かれる。

『僕達の仕事はロストロギアの保守管理。そのために僕達が戦うことになる内の一つ』

出てきたのは青紫のカプセルのような機械だ。

『自立行動型の魔導機械。近づくと攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ』

『では、第一回模擬訓練、ミッション目的は逃走するターゲット十二体を破壊、または捕縛、十五分以内』

「一人あたり二体か…」

バロンが呟く。

原作では何体だったか覚えてないけど、少ないって訳はないか。

『じゃあ、ミッション…』

『『スタート！』』

隊長二人の声が重なると同時にガジェット達は一斉に逃げ出した。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

スバルはガジェットを追いかけ衝撃波を撃つが避けられ、前に回り込んだエリオが攻撃を避けながら斬撃波を放つが、これも避けられる。

以外と速いからね。

それにフワフワと動きも捉らえにくいし。

『この！』

ミエリが腰にぶら下げてた円盤、レイザー・ディスクを取り出すと、縁から何枚もの刃が飛び出た。
魔力刃だと消えるから実体刃か。
『いけ！』
ディスクは回転しながらガジェットを追いかける。
ガジェットは避けたが、ディスクは弧を描き再び襲い掛かる。
だがかすっただけだ。
『チビっ子、威力強化をお願い』
『はい！ケリュケイオン！』
『シュート！』
ティアナが魔力弾を連射するが、ＡＭＦに掻き消される。
『バリア！？』
『違います。多分、フィールド系！』
『魔力が消された？』
四人共驚いてる。
ミエリとバロンは知ってるのか反応が薄い。
「そう。ガジェットドローンには、ちょっと厄介な性質があるの。

攻撃魔力をかき消す、アンチマギリングフィールド。通称ＡＭＦ。
普通の射撃は通じないよ？」

スバルがウイングロードを伸ばし追いかける。

『スバル！馬鹿、危ない！』

「それに、ＡＭＦを全開にされると…」

ウイングロードが途中で途切れた。

『ふえ！？』

『何をやってる！』

投げ出されたスバルをバロンが捕まえた。
正確に言うと足を掴んでるだけだけど。

「飛翔や足場作り、移動系魔法の運用も困難になる。スバル、大丈夫？」

『は、はい。じゃなくて。バロンさん、下ろしてください！』

『そうだな。そら』

バロンが手を離す。

『え？あ？あた！？』

真っ逆さまに落ちた。

まあ地面からたいして距離はなかったけどね。

『もっと優しく下ろしてくださいよ！』

『一人で突撃した罰だ』

この二人。時間制限あるの忘れてない？

「まあこれは訓練だから、疑似的に再現しただけなんだけどね」

「対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、すばやく考えて、すばやく動いてみて」

さあ…どう動くかな？

「なのはさん、戒さん。利文さんからですよ」

「繋げて」

「了解♪」

僕達の前に画面が映し出される。

『戒、なのは。本当にやるの？』

「勿論。それに、スバルの事も気になるでしょ？」

「だから手筈通りに頼むよ」

『…了解。なんかえげつないなぁ…』

そう言いながら通信が切れる。

「スバル、戦えるかな？」

「彼女がどう思っているかがいまいちわからないからね。それに小隊が違えども、部下と上司の仲が悪いのは良くないしね。少しでも利文の事を知るきっかけになってくれれば良いんだけど…」

「うん…」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～バロンＳＩＤＥ～

どうやらティアナ君とキャロ君が何か思い付いたらしい。

時間も無くなってきたし、そろそろ片をつけるか。

［三人共、ガェットが逃げないように、先行して足止めできるかな

？］

［何かすんの？］

［時間稼ぎ。頼むわよ］

［［ＯＫ！］］

［はい！］

さて、俺も準備するか。

「キャロ、バロンさん。来るわよ」

数は…八体か。向こうで減らしてくれたようだ。

「任せろ」

「行きます。フリード、ブラストフレア！」

「キュルー！」

小さな白竜の口に炎が集まる。

「ファイア！」

火炎弾が瓦礫に直撃。辺りが炎に包まれ、ガジェットのセンサーを麻痺させる。

「火に油ではなく、火薬を注がせてもらう！」

魔力を黒色火薬に変換し、黒い蝶の形になる。

「行け！ニアデス・ハピネス！」

三つの蝶はガジェット目掛けて飛んで行き、先程の炎に引火して大爆発を起こす。

どうだ？

四体が爆発から逃れた。

「私がやります！我が求めるは戒めるモノ、捕らえるモノ。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚【アルケミックチェーン】！！」

魔法陣から伸びた鎖が二体捕らえた。

無機物召喚…器用な事ができるな。

そして残りはティアナ君の多重弾殻射撃で一掃。

……待て。これってＡＡレベルだぞ。

…凄いじゃないか……

［ナ～イス！ナイスだよティア！］

スバル君、はしゃぎ過ぎだって…

「うるさい！！！」

さて、これでひとまず終了か。

「隊蝶、終わりましたよ。隊蝶？」

「通信…つながりませんね…」

どうなっている？

「僕の方もつながりません」

「私も」

「同じく」

全員か…

「こっちが全員って事は、向こうにトラブルがあったみたいね。とりあえず行きましょ」

ティアナ君が立ち上がる。

不良品でもつかまされたか？

集まって歩き出した。

「通信機、壊れちゃったんですかね？」

「ここも新しいから、簡単に壊れるはずがないと思うけど…」

「こういう場合は不良品じゃないの？じゃなきゃこんな事にならないわよ」

……待てよ。何かおかしい。

「……隊蝶は何故念話をしてこない」

「「「「「…あ」」」」」

嫌な予感がする…何が起きてるんだ？

「パッピー。周囲をサーチしろ。今すぐ！」

『そのダサイ愛称止めろ！……って、七時の方角から高魔力反応！』

「スバル！チビっ子二人を！」

「うん！」

スバル君がキャロ君、エリオ君を担いで離脱。

俺とティアナ君、エミリ君も離れる。

「ボルテッカァァァ！」

俺達のいた場所に紅い砲撃が通りすぎる。

「い、今の…」

砲撃が飛んで来た方向を見る。

すると何者かがビルの壁に垂直に立っている。

赤紫のバイザーのような目をした白い頭。身体はダークブルーの装甲に包まれ、手には赤紫の長い槍が握られている。

「フェイクテッカマン…」

スバル君が目を見開き呟く。

「たしかスピアとかいうやつだったな。ティアナ君、あれもダミーだと思うか？」

「わかりません。ですが…」

テッカマンは槍を構える。

「友好的でないのは確実です！」

そして俺達目掛けて飛び出した。

第７２話　磨かれる翼（後書き）

凶弾「ミエリの出番少なくない？」

星光「ガジェット相手に魔力のネットランチャーもシェルダーキャノンもあんまり意味無いじゃないですか」

凶弾「次のテッカマン戦でどうでるかよね」

轟雷「俺としてはスバルの反応が楽しみだがな。リンディ茶美味え」

闇「…甘。こんな物飲めるか！」

雷刃「王様落ち着いて。そんでこれ読んで」

闇「何々……我にこれを読めと？」

星光「前回虚空が頑張ったのですから。私達もいずれ読みますよ」

闇「く…！ええい、やってやるわ！！」

轟雷「パチパチ」

闇「突如現れたテッカマン。通信も繋がらず孤立する新人達。次回、転生者はリリカルなかませ犬第７３話　破壊の騎士。テイク・オフ」

雷刃「本当に読んだ…」

闇「う…うわぁぁぁぁぁ！虚空ぅぅぅ！」

虚空「素晴らしかったです」

星光「という訳で、次は雷刃ですよ」

雷刃「え!?僕!?」

凶弾「次回もサービス、サービス♪」

轟雷「あんたは黙れ」

第７３話　破壊の騎士（前書き）

行きます

第７３話　破壊の騎士

～スバルＳＩＤＥ～

私は、赤い色が怖い。

火災の炎の色、倒れた人の血の色、そして…

私の目の前で命を奪った光の色。

空港火災から救出されてからしばらくは、赤い物を見る度に怖くなってヒステリーを起こしていた。

訓練校に入る前には治ったけど。

今ではトマトも食べられるしね。

Ｂランク試験の日、私は機動六課にスカウトされた。

夢みたいだ。

あのなのはさんの部下になれて、あまつさえ直に教えてもらえるなんて…

でも一人だけ嫌な人がいた。

諸星利文一等空尉。

私にはオリジナルとフェイクの違いなんかわからない。

テッカマンはテッカマン。

私は…彼が苦手だ。

そして今、私達の目の前にもっと嫌なのがいる。

アレは嫌だ…怖い…

逃げる？駄目だ。また人が死んじゃう…

嫌だ嫌だ嫌だ！

「うわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ティアナＳＩＤＥ～

訳がわからない。
なんであんなのがここにいるの？
考えるのは後ね。現にあいつは攻撃してきたのだから。
訓練用のダミーか本物かはわからないけど、もし本物ならマズい！
「うわあぁぁぁぁぁ！！！」
スバルが叫びながらウイングロードを展開しテッカマンに突っ込む。
「スバル！？何やってんの！」
一人で行かせるのはまずい。
「あの馬鹿…！」
「私が行く。バリアジャケット展開！」
ミエリが左腕のガントレットを操作し、鎧のようなバリアシャケットを纏う。
着けている仮面も相まって、不気味というかなんというか…
「一人じゃ危ないよ！」
そして再度ガントレットを操作し姿を消した。
これがミエリの幻術…
自分の姿を消す事しかできないって言ってたけど、凄いじゃない…

「俺も行く。ティアナ君、二人を頼む」

「了解」

バロンさんは軽く頷くと六角形のカードのようなを取り出した。

「パッピー、セットアップ！」

『その愛称は癪だが緊急事態だ。行くぞ！』

セットアップし、蝶の仮面を着け……非常に個性的なバリアジャケット姿に黒い蝶の羽を生やして飛んで行った。

……なんなの、あれ？

「……」

「妖精さんだ…」

「「え！？」」

今の感想は、とりあえずキャロが子供だからだと信じたい。

「さ、さてと…」

二人が私の方に振り向く。

「今の状況…考えられるパターンは二つ。なのはさんが用意した秘密の訓練用ダミー。もしくは本物による襲撃ね」

前者だと嬉しいんだけど。でも楽観的に考えるのは良く無い。

「ティアナさん！」

キャロが何かに気付き指差す。
見ると遠くから煙りが上ってるのがわかる。

たしかあの方角は…まさか！

さらに桜色の砲撃も見えた。

最悪…

「どうやら後者だったみたいね…」

どうする？
向こうで戦闘がある上に念話まで通じ無い事から、私達に救援が来る可能性は低い。
むしろ状況が悪いのかもしれない。

私達六人でどうにかしないといけないのだ。

「ティアナさん…」

キャロが不安そうな顔をする。

しっかりしなさいティアナ。私は年上なのよ。

…よし。

「二人共。状況からして、私達であのテッカマンをどうにかしないといけない。今は一体だけだけど、増援が来る可能性も高いわ」

「「はい」」

「隊長達の元へ向かうのに、戦力を分散させるのも危険。だから私達六人で倒す…速攻でね」

「僕達だけで…」

「ＡＭＦが無い分ガジェットより楽よ。それに六対一…いいえ、七対一よ。勝てる」

「「……」」

二人と一匹はは顔を見合わせる。

「…やりましょう！私で！」

「キュル！」

「スバルさん達も心配です。急ぎましょう！」

いきなりの実戦か。

何故だろう…負ける気がしない。

アンカーガンにカートリッジを入れる。

「エリオ。キャロをちゃんと守るのよ。接近されたらおしまいなん

だから」

「はい！」

うん。良い返事だ。

「さて…あんたの好きにはさせないんだから」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

何やってんのよ。一人で突っ込むなんて…

ズームで見た先ではスバルがテッカマンと戦っている。

いや、弄ばれてると言った方が正しいかもしれない。

テッカマンは飛ばずにウイングロードに立ち、スバルのパンチをいとも簡単に避けてる。

お、バロンが着いたわね。

スバルが蹴り飛ばされた瞬間に蝶を飛ばすが、槍で薙ぎ払い破壊する。

よし、私もやりますか。

シェルダーキャノンをチャージしながら後ろに回り込む。

そして建物の屋上から後頭部に照準を合わせる。

［スバル、離れて！］

［うん！］

スバルがバックステップで離れる。

今だ！

シェルダーキャノンから爆発性の魔力弾を発射する。

だが魔力弾を発射した瞬間、テッカマンはこちらを向き飛び上がって魔力弾を回避した。

気付かれた？

「させるか！」

バロンが羽から火薬を鞭のように伸ばす。

巻き付け爆導索にするためだ。

「っ！ボルテッカ！」

すぐさま振り向きボルテッカを放つ。
そして火薬の鞭に迫る。

「ちっ！」

バロンが火薬を羽からちぎり高度を上げ、鞭のように伸びた火薬はボルテッカで爆発した。

あのまま繋がっていたら引火してたわね…

私はそのスキに隣の建物に跳び移る。

「うおぉぉぉ！」

スバルがウイングロードを展開し後ろから殴り掛かる。
だがテッカマンは槍の石突きの部分でリボルバーナックルを受け止め、左腕から伸ばした触手でスバルを捕まえてさっき私がいた場所に投げる。

ちょ！？
どっか飛んでっちゃうって！

私はスバルに体当たりするように飛び付き受け止める。

「大丈夫？」

「ありがとう、ミエリ」

そうしてる間に、テッカマンは再度両肩を展開させ、その間の首の

あたりに魔力が集まる。

だがテッカマンはそれを中断し飛びのき、その場にオレンジ色の魔力弾と火炎弾、黒い蝶が通りすぎる。

「ティア！それにキャロとエリオも！」

「六課が襲撃されてる！こいつを早く倒して隊長達と合流するわよ！」

なんで！？

まさかスカ側の転生者のせい？育つ前に叩くって？

冗談じゃない！

「でもティア、こいつ凄く強いよ！」

たしかにこいつは変に強い。

私達が弱いのか、こいつが特別強いのか…

「でも今は七対一よ！」

「だな。俺に考えがある。近接三人は時間を稼いでくれ！」

［ただし射撃魔法の類いは使わないでくれ］

「「はい！」」

「了解！」

火薬で罠でも張るのかな？
まあ良い。ここで決める！

私とスバル、エリオはテッカマンに駆け出す。

「そりゃぁぁぁ！」

「だあぁぁぁ！」

私はリストブレードを展開し、スバルと挟み打ちにするように飛び掛かる。

「！！！」

テッカマンは槍でリストブレードを、左手でリボルバーナックルを受け止める。

流石生物兵器。馬鹿力ね…

「たあ！」

続けてエリオが上空からストラーダを振り上げ突っ込む。

「フン！」

テッカマンはスバルをエリオ目掛けて投げ、同時に私を蹴り飛ばす。

何回投げ飛ばされてるのよ…

「このっ！」

起き上がりながらスピアを取り出し、テッカマンに投擲し、それと同時にエリオも突撃。
スピアは弾かれたが、続けて繰り出された斬撃で槍が切断される。

「うりゃぁぁぁぁ！！」

さらにスバルが懐に潜り込み殴る。

「！？！？」

スバルの拳が胸部装甲に減り込み、そのまま殴り飛ばして地面に叩き付ける。

「今よ！全員離れて！」

ティアナの合図に私達はテッカマンから離れる。
するとテッカマンの周囲に黒い蝶が大量に現れた。

「お前が三人の相手をしている間に、ブーストをかけた幻術で隠しながら配置させてもらった…」

「とどめよ。キャロ、チビ竜！」

「はい！フリード、ブラストフレア…ファイア！」

「キュル！」

フリードの火炎弾が放たれ黒色火炎の蝶に引火する。

「マーチ！」

『Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ．』

そして大爆発がテッカマンを飲みこんだ。

…今、何て？

「やった？」

「気を抜かないでスバル」

辺りに煙りが立ち込める。

「ストーップ！皆ここまで！」

「「「「「え？」」」」」

どこからともなくバリアジャケット姿のなのは隊長が現れ、私達を制止した。

「利文！生きてる！？」

戒副隊長まで現れた。

…これって……もしかして…

「な…なのはさん。もしかして…」

「さっきのテッカマン…利文隊蝶？」

「訓練用のダミーを被せてたんだけど…」

私達は一斉に爆煙へと視線を移す。

「ゲホ、ゴホ…今のは本気で焦ったよ…」

煙りの中からベージュ色の装甲に包まれたテッカマンランスが現れた。

先程の爆発のせいか所々が焦げている。

「生きてた…大丈夫？」

「大丈夫。まさかここまでね…」

「あの…どうしてこんな手のこんだ事を？向こうで戦闘があるように見せ掛けて…」

ティアナが手を上げて質問する。

「緊急事態での対処とか、敵テッカマンとの模擬戦。あと現時点での戦力分析だよ」

「はあ…」

「まあ予想以上だったね。じゃあ解散だ」

「あ、スバルは残ってね」

「あ、はい…」

スバルは少ししょげたような顔で頷いた。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

皆が戻り僕達三人が残る。

「すみません。勝手に突っ込んじゃって…」

「まあ、それもあるけど……スバル、怖いのかな？」

「……はい」

怖いか…

「実戦だったら死んでいたかもしれないよ。だから、もう少し落ち着いてみよう？スバルは一人じゃないんだから」

「はい。気をつけます…」

「それと、利文の事も」

「……すみません」

さらにしょんぼりとしてしまった。

「苦手なのはわかった。でも、これから一緒に戦う仲間なんだ。今すぐとは言わないから、信頼しても良いんじゃないかな？」

「そう…ですね。もう少し利文隊長と話してみます」

「うん。そうやってお互いを理解していってみよう。じゃあお話はここまで。皆の所に戻って良いよ」

「失礼しました」

スバルは敬礼をして走り去った。

「……相当重症だな」

「足が竦んで動けないって訳じゃないから、まだ良いかな」

「まあね。突貫するのはどうにかなりそうだけど、利文が苦手なのはなぁ…」

「それは二人次第って事になるね…」

やれやれだ…

第７３話　破壊の騎士（後書き）

星「結局爆発ですか」

轟雷「ニアデス・ハピネスに囲まれるなんてまじ勘弁」

凶弾「装甲の薄い雷刃だったら死んでたわね」

雷刃「当たらなければどうという事はない！ねえねえ、本当に僕がやるの？今までやってなかったのに」

星「やります」

闇「やれ」

虚空「次は凶弾です」

凶弾「まじ？」

雷刃「ぐぅぅぅ。えっと…訓練を続けるフォアードメンバーと出会うパートナー。そしてついに初出動の時。次回、転生者はリリカルなかませ犬、第７４話　初陣。テイク・オフ」

轟雷「お前さ。真面目にやった方が格好良いって」

雷刃「え？そう？ふふん、やっと僕の格好良さに気付いたか！」

闇「……阿保が…」

星「言うだけ無駄です。ではまた次回」

第７４話　初陣（前書き）

フォーゼは変身のエフェクトが素晴らしい

今後の二号ライダーや強化フォームに期待です

第７４話　初陣

～バロンＳＩＤＥ～

さて、俺達が配属されて二週間が経った。
俺達はずっと訓練漬けで、今の所は出動は無し。

まさかここまでやるとは思っても見なかったな…

そうそう、この前スバル君が暴走したのは、彼女はテッカマンにトラウマがあるからだそうだ。
なんでも彼女は四年前の空港の事件に居合わせてたらしい。

なるほどね…
道理で利文隊蝶への態度もおかしかった訳か。

まあ隊蝶達の注意もあってか、あれからスバル君も落ち着き、昨日のテッカマンとの戦闘訓練でも暴走する事はなかった。

最近は隣の部屋のヴァイス陸曹やグリフィス准陸尉ともよく話すようになった。
特にグリフィス准陸尉は、俺の先祖代々伝わるバリアジャケットのデザインの素晴らしさを理解してくれる実に良い上司だ。
スバル君とキャロ君もモチーフである妖精に気付いてくれたのに、何故エリオ君とヴァイス陸曹はこの美しさを理解できないのか…

そういえば彼らに言われて気付いたが…この部隊、女性の比率が圧倒的に多い。
まあ部隊蝶が女性で身内中心に集めたからかもしれないが…

「よし、それじゃあ全員整列！」

「「「「「「はい！」」」」」」

訓練時間はまだ残っているが、戒副隊蝶に呼ばれ並ぶ。

上空では戒副隊蝶となのは隊蝶が浮かんでいる。

しかしなのは隊蝶の格好はどうにかならないのか？
年齢的に有り得ないだろ。色々見えそうだし…

だが俺は何も言わない。
何故か背筋に悪寒が走るからだ。

「じゃあ、本日の早朝訓練のラスト一本。皆、まだ頑張れる？」

「「「「「はい！」」」」」

「勿論です」

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ。レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ．』

なのは隊蝶の足元に魔法陣が浮かび周りに魔力弾が飛び交う。

「僕達の攻撃を五分間回避しきるか、攻撃を僕かなのはのどちらかにクリーンヒットさせたら終了。ただし、誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだ」

笑顔でさらりと言わんでくれ…

「このボロボロの状態で、なのはさん達の攻撃を五分間、回避する自信ある？」

「ない！」

「同じくです」

「できる方がおかしい」

「戦力を集中させて一撃入れる方が楽だな」

「あの、戒副隊長をブラスター隊の二人に任せても良いですか？」

ほう…

「何か策があるのか？」

「はい」

「よし、乗った」

「ちょ！？二人でやるの？」

「ミエリ君は何か案があるのかい？」

「無いです」

「ならば黙って従いたまえ」

「ラジャー」

「行くよエリオ！」

「はい、スバルさん！」

準備万端。さて…

「準備はＯＫか」

「それじゃあ、レディー…ゴー！」

なのは隊蝶の掛け声と共に魔力弾が発射され、俺達は散開する。

「行け！」

副隊蝶目掛け、蝶を二つ飛ばす。

当然避けられた。当てるつもりは無かったからね。

続けて背後から魔力の網が飛んでくる。

『若！』

「ちっ」

「こいつも喰らえ！」

俺は網と挟み打ちになるようにまた蝶を二つ放つ。
副隊蝶は網を真っ二つにし、振り向きながら剣を振るって魔力弾で蝶を迎撃する。

「はっ！」

透明なのでよくわからないが、どうやらミエリ君が接近戦を仕掛けたらしい。
副隊蝶がそれを受け止め、押し出すように離れる。
俺は離れた瞬間を狙い、両隣から挟むように蝶を飛ばし、さらにミエリ君の照準が副隊蝶の胸を捉え魔力弾が発射される。

「そら！」

魔力を込めた剣で一回転。
全部まとめて切り伏せる。

「「まだまだ！」」

ミエリ君はさらに魔力刃を展開したディスクを投げ、俺も四方八方から蝶を飛ばす。

攻撃する余裕を与えない。
とにかく時間を稼ぐんだ。

次々と蝶は切り伏せられ、ディスクも弾かれる。

ちっ…向こうはまだか？

視線を移すと、キャロ君にブーストを掛けられたエリオ君が隊蝶目掛け突撃する。

そしてなのは隊蝶と衝突。
エリオ君が跳ね飛ばされる。

外したか？

「なのは。やられたね」

「お見事。ミッションコンプリート」

おお！

「本当ですか！？」

「ほら、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで通ったよ」

よく見ると鎖骨の辺りに傷がついている。

「エリオ、よくやった！」

「うわあ！」

「じゃあ今朝はここまで。一旦集合しよう」

「「「「「「「はい！」」」」」」」

お、終わった…

訓練が終わり集合した。

「キュル？」

「フリード、どうしたの？」

フリードの様子が変だ。

ん？

「なんか…焦げ臭いような…」

「本当だ」

どこからだ？近いが…

「あ、スバル。あんたのローラー！」

「え？」

ああ、これか…

なんか煙り吹いてるし。

「あ、うわやば！」

慌ててローラーを脱ぐ。

「オーバーヒートだな」

「ティアナのアンカーガンも厳しい？」

「はい、騙し騙しです…」

そういえば二人は自前だったなぁ…

「そろそろ実戦用に切り替えじゃないか？」

「そうだね。四人には新デバイスが必要かな」

「新…」

「デバイス？」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリSIDE～

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを浴びてから、ロビーに集合しようか」

「「「「はい！」」」」

「あの、俺達もですか？」

「私達は実戦用のありますし…」

ぶっちゃけ行っても意味が無い。

「一応二人にも話しがあるんだって。この前預かった時に少しいじったらしいから」

なんですと？

「だから二人もロビーにね」

一体何をしてくれたんだか…

すると前から一台の車が来た。

「ん？あの車って…」

ティアナが気付と車が私達の前に停まった。

そして窓と天井が消え一組の男女が姿を現した。

「八神部隊長、利文隊長！」

「すご～い！これって、利文隊長の車だったんですか？」

「…これ、フェイトちゃんの車じゃない？」

「だよね…」

「「「「「え？」」」」」

まじ？

「そうなんよ。トシ君、免許取ってから車買う時間が無くて、フェイトちゃんの車を借りる事になってもうてな…」

「一応言っとくけど、お金が無い訳じゃないからね」

なんか引くわ～。

「それは置いといて。で、皆訓練はどないや？」

「あ～っと…」

「頑張ってます」

「六人共良い感じに慣れてきてるよ」

「いつ出動になっても大丈夫だな」

「そっか。それは頼もしいな」
むう…なんか照れるわね。
「二人はどこかにお出かけ？」
「ちょっとデー「六番ポートまでだよ」ちっ。教会本部でカリムと会談なんよ。夕方には戻るで」
「はやてちゃん、仕事中は自重しなよ…」
「相変わらずだね…」
「あはは。ほんならな～♪」
そう言いながら車は走り去り、私達は敬礼しながら見送った。
「…あの、八神部隊長と利文隊長のご関係って…」
ティアナが恐る恐る口を開く。
「察しの通りだよ」
「なんの前触れも無く入籍しましたとか言いそうだよね…」
リア充爆発しろ。
こちとら前世も含めて年齢＝彼氏いない歴で、絶賛更新中なんだから。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

さて。僕らはデバイスを四人に渡し、それぞれにリミッターがかかっている事、いつの間にやらミエリのガントレットに全ての装備を連動させてたり、バロンのパピヨンにリミッターがついてさらにフルドライブまで追加してる事を話した。
勿論僕達にもリミッターがある事もね。

そんな事を話していると、いきなり警報が鳴り響き出し、赤いランプが点灯する。

「このアラートって…」

「一級警戒態勢!?」

ついに来たか…

「グリフィス!」

するとモニターにグリフィスが映る。

『はい、教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、戒副隊長、グリフィス君？こちらはやて』

「一兎とフェイトも聞こえてる？」

『ああ』

『はやて、状況は？』

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は、山岳リニアレールで移動中』

「移動中って…まさか、リニアレールが！？」

いや、絶対そうだ。

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで、リニアレールのコントロールが奪われてる。リニアレール車内のガジェットは、最低でも三十体。大型や飛行型の未確認のタイプ、それにガジェット付きやテッカマンが出てるかも知れへん』

「利文君、感応波は？」

『ごめん、距離が遠くてわからない』

やっぱ無理か…

『いきなりハードは初出動や、四人共、いける？』

「いつでも」

「私も！」

『すぐにでもな』

『任せて』

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、バロン君にミエリ。皆もええか？』

「「「「「「はい！」」」」」」

『よし。いいお返事や、シフトはＡ３、グリフィス君は隊舎での指揮、リインフォースは戦闘管制。なのはちゃんと戒君、あとフェイトちゃんと一兎君も現場指揮』

「了解」

「うん」

『わかった』

『一兎、行こう』

『ほんなら、機動六課フォワード部隊…出動！』

「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」

『『了解！』』

『ところではやて。なんだか皆の為にボコられなきゃいけない気がするんだけど…』

『…は？』

最後に変な言葉を残して通信が切れた。

…こんな時にかませ犬を発症しないでよ。

「戒君。なんだか利文君の至近距離ボルテッカを無傷で耐えた後、スターライトブレイカーでぶっ飛ばさなきゃいけない気がするんだけど…」

「絶対気のせいだ」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～雷泥ＳＩＤＥ～

「……ディー」

「何だ？」

「あの女は使えるのか？たしかに某らと同じ転生者。だがいまいち信用できん」

言っている事もだ。

管理局が負けるからこちらに付く…。しかも占いの結果でだ。

「彼女の能力からして確率は高い」

「特撮はあまり知らぬ。まあおぬしを信じるとしよう…」

「保身の為に付く。下手なナンバーズ狙いや、本心かどうかわからない管理局アンチよりかは信用できる」

…むう。

まあ良い。あの程度ならば、いつでも処分出来る。

裏切るのであれば切れば良いだけだ。

しかし六課に付いた転生者の調査、及びレリックの確保か…

レリックの確保は難しいと言っておったが、たしか原作でも向こうに奪われた気が…。いかん、すっかり忘れているな。

某も早く手合わせ願いたい所だな。

第７４話　初陣（後書き）

星「出動までですか」

雷刃「あ、でも次回はちゃんとあるんだし。原作と同じじゃん」

轟雷「凶弾、さっさとやれ」

凶弾「はいはい。ついに初出動した機動六課。襲い掛かるのは原作以上の敵達。そして新人の前に立ちはだかる一つの影。次回、転生者はリリカルなかませ犬、第７５話　三つの光。テイク・オフ。……で、どうだった？私の次回予告！」

星「夕飯は近所の中華料理店の出前にしましょう」

闇「むう…迷うな。そうだ、我は天津飯にし、虚空がラーメンにするのだ。我と半分こにするぞ」

虚空「了解」

雷刃「あ、いいなぁ…」

星「じゃあ私が付き合いますよ」

雷刃「本当！？ありがと～！」

轟雷「俺は麻婆豆腐定食にするか…」

凶弾「……無視すんなやゴラァァァ！！！」

第７５話　三つの光（前書き）

台風やばいです

第７５話　三つの光

～一兎ＳＩＤＥ～

俺達はヴァイスの運転するヘリに乗り込み現場へ向かった。

「四人は新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね。バロン君とミエリも」

なのはが新人達の緊張を解そうとしたのか声をかける。

「はい」

「頑張ります」

「問題ありませんよ」

「は、はい」

たしか年上三人は前にいた部隊でも出動経験があるとか聞いたな。って事は残りの三人は本当に初出動って訳か。

「エリオとキャロも大丈夫？」

フェイトが二人に声をかける。

やっぱり心配なんだな。

「はい！」

「…はい」

やっぱキャロは元気が無いな。

「キャロ」

俺はキャロの頭を撫でる。

「不安なのはわかる。だけどお前は一人じゃない。それに、キャロの力は皆を守る為にあるんだ。自分に自信を持て」

「…はい！」

「その意気だ。フリードもいけるな？」

「キュル！」

よしよし。

［一兎、ありがとう。本当なら私が言ってあげるべきだったんだけど…］

［なに、気にするな］

『ガジェット反応、空から？それにテッカマンまで！？』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

ちっ…やっぱり来たか。

「数は？」

『こちらで確認できただけでも、テッカマンだけで十体は超えています！』

面倒だな…

「私とフェイトちゃん、あと戒君とバロン君が出るよ」

「流石にあの数を二、三人で抑えるのは難しいからね。こっちは一兎とリィンフォースに任せる。バロンも頼むよ」

「任された」

「了解です」

「わかりました。ヴァイス陸曹、メインハッチを」

「うっす。了解です、曹長！」

『Ｍａｉｎ　ｈａｔｃｈ　ｏｐｅｎ.』

リィンフォースの合図で後部のメインハッチが開き、風が一気に流れこんでくる。

「じゃあ、ちょっと出てくるけど、皆も頑張ってズバッとやっつけちゃおう！」

「「「「「はい！」」」」」

するとフェイトはキャロの頬を撫でる。

「大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから」

「はい！」

「エリオもお願いね？」

「はい！」

「うん。じゃあ行ってくるね」

フェイトはなのはと一緒にメインハッチへ向かう。

「スターズ０１、高町なのは」

「バレット０２、フェイト・テスタロッサ」

「「行きます！」」

二人は同時に飛び降りた。

大丈夫なのか？あれ…

「…副隊蝶。俺もああやって飛び降りながらセットアップしなきゃいけないのでしょうか？」

「まあ…自由って事で。とにかく行くよ」

「了解」

二人がデバイスを起動させ、バリアジャケット姿になる。

…しかし凄まじい格好だな。

俺にはできんぞ。

「ブラスター０２、戒＝キスク＝木崎」

「ブラスター０４、バロン・バタフライ」

「「出る！」」

二人がなのはとフェイトを追うように飛び立って行った。

「じゃあ説明を始めるぞ。リィンフォース」

「はい。任務は二つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊する事。

そして、レリックを安全に確保する事です」

リィンフォースの手元にモニターが表示されてリニアレールが映し出される。

「スターズとバレットで、ガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かう。ミエリはスターズと行動してくれ。それとスターズの指揮はティアナに任せる」

「「はい」」

「レリックはここ。七両目の重要貨物室。先に到達した方がレリックを確保してください」

「「「「「はい！」」」」」

「私も現場に降りつ管制を勤めます」

リィンフォースも騎士甲冑姿になる。

さて、そろそろ時間か。

「よーし新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ！」

「俺を忘れるな」

「っと。こりゃ失礼。あ、あと一兎さんはヘリの中でＰ．Ｖ．Ｆを展開しないでくださいよ。あれ目茶苦茶重いんすから」

「わかってるって」

「うっし。じゃあ準備は良いか！？まずはスターズとミエリ！」

「「「はい！」」」

まずはスバルとティアナがハッチに立つ。

「スターズ０３、スバル・ナカジマ」

「スターズ０４、ティアナ・ランスター」

「「行きます！」」

二人はフェイト達のように飛び降りながらセットアップした。

まあ…なんだ。人それぞれだし。良いんじゃないか？

「私は飛び降りながらやる程神経図太くないから…」

ミエリが左腕のガントレットを操作すると、武装や仮面が展開されバリアジャケット…というより鎧のような姿になった。

そういやＡＶＰのプレデターは結構重装甲だったな…

「ブラスター０３、ミエリ・ハッター。出ま～す」

スピアを取り出しながらミエリも飛び降りた。

「…あ～。次、バレット。頼んますよ！」

じゃあ行くか。

俺に続くようにエリオとキャロも立ち上がる。

さて…ん？

見るとキャロが僅かに奮えている。

たしかに、ここから飛び降りるのは怖いわな。

「三人一緒に行くか？」

「「え？」」

「ほら、行くぞ！」

そう言ってキャロを中心に手を握る。

本当なら俺が真ん中が良いのかもしれないが、それだとマーチを持てないからな。

「一兎さん……はい！」

「行きましょう！」

二人の顔に笑顔が戻る。

「バレット０１、佐々木一兎」

「バレット０３、エリオ・モンディアル」

「バレット０４、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「キュク～」

「行くぞ！」

「「行きます！」」

俺達は一斉に飛び降りた。

「マーチ！」

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「「セットアップ！！！」」」

『『『Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ.　ｓｅｔ　ｕｐ.』』』

そしてバリアジャケット姿になりリニアレールに降り立つ。

「６８口径デンジャラス・ラビット」

それと同時にＰ・Ｖ・Ｆを展開。

左手で対物弾のマガジンを生み出し装填する。

魔力弾と違ってＡＭＦの影響を受けないから楽なんだよな。

「あれ？」

「このバリアジャケット…」

二人が自分達のバリアジャケットを見て驚く。

「二人のはフェイトのを参考にしてるんだ」

「わあ…」

「フェイトさんの…」

「二人共、感激するのは後だ。来るぞ！」

リニアレールの天井を突き破り、ガジェットが二体飛び出して来た。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

「だりゃぁぁぁぁ！」

ガジェットに飛び掛かり、動力部にスピアを突き刺す。

串刺しになったガジェットから飛びのくと同時に爆散した。

これで四つ目。

「ミエリ！マッハキャリバー凄いよ！」

向こうでガジェットを殴り潰したスバルが嬉しそうに叫ぶ。

「後でいくらでも聞くから！」

嬉しいのはわかるけど、そういうのは後にしてほしいわ…

「ミエリ、後ろ！」

っ！

その場から飛びのく。

すると私のいた場所にレーザーが通りすぎた。

「危ないでしょ！」

スピアを投擲し破壊する。

「大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。ありがと」

スピアを広い爆発でついた煤を落とす。

やっぱ赤外線見えるのは便利だわ。

熱で動力部とか丸わかりだもん。

「スバル！ミエリ！」

別の場所にいたティアナが合流した。

「ティア！」

「どう？止まりそう？」

「ケーブルを破壊しても効果無し。リィンフォース曹長が車両の停止に向かったわ。私達はレリックの回収に急ぐわよ」

「オッケー！」

「ラジャー」

私達は第七車両に向かって走る。
途中で何体かガジェットと遭遇したが、私達の敵じゃない。

たしか向こうはでかいやつがいたんだっけ？
まあ一兎隊長もいるし、余裕でしょ。

そしてついに…

「どりゃぁぁぁぁぁ！」

スバルが扉をぶち破り、第七車両に突入した。

「さてさて…レリックはどこか……え？」

思わず足が止まる。

何故なら、そこに誰かがいたのだ。

黒いショートカットの女性だ。

「だ、誰ですか！？」

「この状況からして…敵じゃないかな？」

多分転生者だ。

スカリエッティ側か、もしくはこの初出動に関わって原作介入しようとしているやつか、はたまた別の勢力か…

「…思ったより早く来たわね。それに…」

その女性はティアナに視線を移す。

「……嘘…どうして…こんな所に？」

ティアナの様子がおかしい。

驚いてるというか、困惑しているというか…

「ティア？」

「まさか…知り合い？」

「……ええ。兄さんの…恋人よ」

まじですか？

「六年ぶりの再開じゃない。元気にしていた？」

「美雪さん……ずっと…兄さんが亡くなってから、どこにいたんですか？」

「色々な所を…ね」

そう言って僅かに微笑む。

「あの、ここは危険な場所なんです！なんでこんな所に？」

「想像しなさいよ。なんで私がここにいるか」

「え？えっと…。ミエリ、どう思う？」

その位自分で考えなさいよ…

でも、時間が惜しいから突っ込むのは止めよ。

「敵じゃない？ガジェットを連れてレリックを奪いに来た」

「でも、ティアの「正解」え？」

「どうして…ですか？」

ティアナの眼に涙が浮かぶ。

六年ぶりに会った人は敵でした…か。

こういうの、私は嫌いね。

「一声で言うなら、管理局とか潰れちゃうから、潰す組織に入ったって感じかしら」

絶対に潰せる自信があるのかしら？

よくわからないけど、スカリエッティ側の転生者に決定ね。

「ティアナ、わかってるよね？」

「え？ティア？」

「勿論よ。手塚美雪…貴女を逮捕します」

正直、辛いでしょうね。

でも、逃がす訳にはいかないし。

「ティア、一度しか言わないわ。こっちに来なさい。私はティアと戦いたくないの」

「私もです。だから…投降してください…」

「……馬鹿な娘。なら、捕まえてみなさい！」

彼女は上着からピンク色っぽい手の平サイズの箱を取り出し前に突き出す。

すると腰に銀色のバックルが四角く窪んだベルトが巻き付く。

「変身！」

右手を突き出し箱をベルトに差し込む。

そしていくつもの影が重なり、左腕にエイのような盾を持つ鎧姿に変わった。

変身？もしかして仮面ライダー？

「さて、三人共。私を止めてみなさい！」

第７５話　三つの光（後書き）

闇「ええい！風がうるさい！」

星光「台風が来ているんですから。仕方ないですよ」

凶弾「こんな日は家に引きこもってるのが一番ね」

虚空「お茶の用意ができました」

闇「む。ようやく来たか」

雷刃「いただきま～す」

星光「ついでにお茶請けも欲しいですね」

雷刃「あれ？そういえば轟雷は？」

凶弾「昼頃ブック○フに行くとか言ったっきり見てないわね」

闇「…まさか」

轟雷「開けてくれ！やばい！飛ぶ！」

虚空「……どうします？」

星光「無視です。自業自得ですよ」

凶弾「そうしましょ。あ、次回予告なんだけど、なんだか予告と上

手くいかないから止めるそうよ」

雷刃「じゃあ今回はこの辺で。またね～」

第７６話　竜魂召喚（前書き）

主人公は、かませ犬症候群絶賛発症中

第７６話　竜魂召喚

～戒ＳＩＤＥ～

「Ｖｏｌｔｅ…Ｇｙａａａａａａ！？！？」

ボルテッカを撃とうとしたクローの額に封雷剣を突き刺し、そのまま下へ振り下ろし身体を両断する。

『数が多いですね』

「本当、やっかいだよ」

数だけでなくガジェットとの連携もできてる。
いや、正確に言うと…ガジェットがテッカマンを援護していると言った方が正しい。
さらに中にはガジェットに乗るやつまでいて…

「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」

「くっ！」

ガジェットの光線とスピアのボルテッカを避ける。
そしてすれ違いざまにガジェットを真っ二つにする。

「Ｋｉｅａ！」

爆発するガジェットからスピアが離脱し、ランサーを構えて突進し

てくる。

「バロン！」

「了解！」

僕の合図で背後から黒い蝶が直撃しバラバラに吹き飛ぶ。

「よし…っ！後ろだ！」

「え？うお！？」

バロンの背後からマーメイドがランサーを振り下ろすが、寸での所で避ける。

「セイクリッドエッジ！」

雷の剣を放ちテッカマンの頭を貫く。

「Ｇｅｕ！？」

そして紅い結晶となって砕け散った。

「もっと周囲を見るんだ」

「すみません！」

さらにガジェットとテッカマン達が近づいて来る。

きりがないな…

なのはとフェイトの方を見る。
なのははディバインバスターでまとめてぶち抜き、フェイトも次々とガジェットを切り裂いていく。

「「「Ｖｏｌｔｅｋｋａ！」」」

「くっ！」

「ちぃ！」

ボルテッカを散開して避ける。
ウィップが二体、マーメイド一体。ちなみにウィップはガジェットに乗っている。

「援護は任せたよ！」

「ご期待に答えましょう！」

僕は封雷剣を構え、バロンは蝶を生み出す。

そして奴らに向かって飛び出した。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

転生者が相手か…

［いい？相手の実力がわからない以上、可能な限り時間を稼ぐわよ。一兎隊長が来れば確実だし］

［オッケー！］

［任せといて！］

私達三人で勝てるかわからないけど、時間稼ぎならできる。
向こうは一兎隊長がいるんだから、すぐに来るはず。

「あ、そうそう。援軍が来るまで時間を稼ぐなんて事はさせないわ」

「っ！？」

「私達三人じゃ相手にならないと？」

「フフフ……誰が三対一って言ったかしら？」

彼女が指を鳴らすと、私達の背後に天井を突き破って一体の巨人が現れた。

黒い鎧に顔にはスコープのついたバイザーが。室内戦用なのか、剣は持たず両腕にチェーンソーが装備されてる。

「ガジェット付き!?」

振り向いてスピアを構える。

「正式名称はアヴ・カムゥよ。向こう側には大型ガジェット一体とアヴ・カムゥが二体いるわ」

御丁寧に色々教えてくれちゃって…
余裕なのかな?

「美雪さん、どういうつもりですか?自分の戦力を教えるなんて」

「あら?腰を抜かしちゃうかと思ったけど…残念ね。戦力を教えるなんて失敗失敗」

なんなの、この人?

「な…ふざけないでください!」

「別に良いじゃないスバル。この人が間抜けなおかげで情報が入ったんだし」

「そういう事。二人共、あのデカブツは私に任せて」

「……わかったわ。スバル、行くわよ」

「ティア!?ミエリ一人じゃきついよ!」

「私は大丈夫。あんな図体だけの奴に負けないから！」

「ちょ！ミエリ！？ああんもう、気をつけてよ！」

「任せんしゃい！」

私はアヴ…アヴなんちゃらに向かって走り出した。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

「「……」」

「ざけんなよ…」

俺達の目の前には球体の大型ガジェットと二体のアヴ・カムゥが道を塞いでいる。

しかもこのアヴ・カムゥ、一体は両手がモーニングスターの先端の

ようなトゲ鉄球がついており、もう一体は両肩にレールガンを装備している。

本来なら大型だけのはずなんだがな…

仕方ねえな。

ガジェットがベルト状のアームを伸ばし襲い掛かる。

俺達は散開し避け、天井に着地する。

そして一体のアヴ・カムゥが天井を突き破りはい出て来て、俺にレールガンを向ける。

俺が狙いか。

「エリオ、キャロ！デカブツ二体は俺がやる。大型を頼む。ＡＭＦも強力だろうから気をつけろ！」

「「はい！」」

可能なら速攻で潰して、俺も二人の援護に行かなきゃな。

両肩から放たれる弾丸をトラウマ・シェルで受け流しデンジャラス・ラビットを向け発砲する。

だが下から突き出た鉄球つきの腕に阻まれる。

もう一体のやつか。

だがそいつはすぐに腕を引っ込めてしまった。

…まさか。

嫌な予感は当たるもんだ。
俺の背後を突き破りはい出て来た。

挟み打ちか…面倒だな。

鉄球のやつが腕を振り回し殴り掛かってくる。
それをしゃがんで回避し銃口を向けるが、後ろからもう一体が両手を組んで叩き付けてきたのを回避する。
そして脆い関節を狙うが、俺が引き金を引く前に鉄球が横から迫る。
跳躍し回避しながらフルオートで乱射する。
だが装甲を凹ましただけで、たいしたダメージにはなっていない。

６８口径じゃ難しいか…
だけど狙い撃ちする暇もねえし、コクピットのガジェットを狙うにしても、こう狭いと後ろに回り込むのも難しい。

アンフォーギヴン・バリスタに変えるか？
いや、それよりＡＭＦを抜く程の魔力弾やアスペルガーアローでゴリ押しした方が早い。

すぐさまマガジンを入れ替えレバーを引く。
背後からもう一体が踏み付けるが飛びのき鉄球つきの股下に潜り込む。そしてデンジャラス・ラビットを変型させ、光の矢を真上に向ける。

「くたばれ！」

『Ａｓｐｅｒｇｅｒ　ａｒｒｏｗ.』

股下から魔力矢を発射。頭まで一直線に貫く。

アヴ・カムゥは糸が切れた人形のように崩れ落ちる。

よし、あと一体！

『一兎！エリオが！』

「何！？」

エリオが投げ飛ばされてる。

まずい、気絶しているのか？

「エリオ君！！」

キャロがエリオを追いかけるように飛び出す。

［何やってんだ！すぐ行く！］

［大丈夫です！発生源から遠くなれば、ＡＭＦも弱まります。だから…一兎さんが言ってくれたように、私が護ります！］

竜魂召喚か？

ええい！

［やってやれ！］

［はい！］

だがそんなキャロをアヴ・カムゥのレールガンが狙う。

「させるか！」

アヴ・カムゥの脛をデンジャラス・ラビットで殴り、前向きに倒す。
そしてマガジンを対物に入れ替え、丸首筋に飛び乗りガジェットに銃口を押し付ける。

「くたばれ！」

何発もの弾丸がガジェットに食い込み爆散する。

よし、二人は？

振り向くといつもの何倍もの大きさに巨大化したフリードがこっちに飛んで来るのが見える。

成功したか。よかった…

「二人共、大丈夫か？」

「はい！成功しました！」

「すみません。心配かけちゃって…」

「まあ良いさ。さっさと片付けるぞ」

三人が魔導師と戦闘になったって連絡があったからな。
おそらく転生者。急がなきゃな。

天井から大型ガジェットがはい出てくる。

「はい！フリード、ブラストレイ！」

フリードの口元に魔力が収束し大きな火球になる。

「ファイア！」

今までとは比べものにならないような火炎放射がガジェットを包む。

だがこいつは耐えた。

仕方ねえ。

「エリオ！俺があのアームを破壊する。そのスキに本体を！」

「了解です！キャロ、ブーストを」

「うん。我が請うは青銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を…」

『Ｅｎｃｈａｎｔｅｄ　Ｆｉｅｌｄ　Ｉｎｖａｌｉｄ．』

よし、俺も。

「１２０口径アンフオーギヴン・バリスタ！」

Ｐ．Ｖ．Ｆを入れ替え新たにマガジンをセットしながら、ガジェット目掛け走り出す。

あいつは俺に気付きアームを伸ばす。

俺は迫る二本のアームを避け、一本を矢で切り裂きもう一本に三発撃ち込み破壊する。

「今だ！」

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

『Ｂｏｏｓｔ　Ｕｐ.　Ｓｔｒｉｋｅ　Ｐｏｗｅｒ.』

「行くよ、エリオ君！」

「了解、キャロ！」

エリオがフリードから飛び降りる。

「たあああああっ！」

「ツインブースト、スラッシャードストライク！！！」

キャロの放ったストラーダに魔力が付属される。

『Ｅｍｐｆａｎｇ.』

ガジェットはエリオに標的を変えケーブルを伸ばす。

「させねえっての！」

フルオートで発砲、全て撃ち抜いた。

そうしてる間にエリオは着地し、ストラーダを構える。

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ.』

「一閃必中！」

そのまま突撃し、ガジェットに突き刺す。そして上へ振り上げ両断。
ガジェットは爆散した。

ふう…

「やった！」

「気を抜くのはまだ早い。スターズの連中がこの先、第七車両で戦闘している」

「「え？」」

「ガジェットやデカブツ以外にも厄介者がいたらしい。キャロはこのままフリードと周囲を警戒、エリオは俺とスターズの援護に向かう」

「「はい！」」

「よし。連戦で悪いが行くぞ、エリオ」

「大丈夫です」

俺達は三人の元へと走り出した。

第７６話　竜魂召喚（後書き）

雷刃「結局また分けるの？アニメでは一話だけだったのに」

星光「仕方ありませんよ。人数が増えてますし。敵も味方も」

轟雷「次回はミエリＶＳアヴ・カムゥとスバ、ティアＶＳライアか」

凶弾「そのまま初出動の話は終了っと…」

闇「というか轟雷、生きてたのか」

轟雷「もう台風の日に外出しません。まじで怖かった」

星光「まあ最近気温が不安定ですが、皆さん体調管理には気をつけてください」

虚空「また次回」

第７７話　貴女は何処に（前書き）

ようやく初出動完結です

第７７話　貴女は何処に

～ミエリＳＩＤＥ～

あのデカブツもガジェットに制御されてるだけ。
迷彩で隠れながら背中に回り込み、首のガジェットを壊して一丁あがり。

そう考えていた時期もありました。

「何で私の居場所がわかるの～！？」

こいつは常に私を見てチェーンソーを振り回してくる。

何故にｗｈｙ？

とにかく私はチェーンソーを避けながらシェルダーキャノンを撃つが、ＡＭＦと強固な装甲に阻まれ通用しない。

まずい…

私は火力はあまり高くない。普通のガジェットならスピアで物理的に破壊すれば良いしね。
正直、私はテッカマン相手の方が強い。

隠れて攻撃すれば良いんだし。

振り下ろされた両腕のチェーンソーを避ける
すると私のいた場所がズタズタにされた。
私も仕返しのようにレイザーディスクを投げるが、胸部装甲に突き刺さったまま抜けなくなってしまった。

……うわぁ。

今思うと、こいつのスコープは対幻術装備なのかもしれない。
多分対ティアナ用に連れて来たんだなぁ…
転生者ならティアナの事は知ってるはずだし。

…てかこいつ、スバルにやらせた方が良かったんじゃない？
何やってんだろ私…

いや、もう過ぎた事だし考えるのは止めよう。
自分で言い出したんだし、今は私がやらなきゃ。

振り回すチェーンソーを避けて距離をとり、スピアを構え直しあいつと対峙する。

さて…どうしたもんかしらね。
まず遠距離は論外。
レイザーディスクは刺さってるしシェルダーキャノンは通用しない。
素直に後ろに回り込んでガジェット本体を破壊した方が良いわね。

薙ぎ払い、叩き付けられる回転する刃を避け対策を考える。
先程髪を掠って少し切れてしまったか気にしない。

というかいい加減逃げ回るのはイライラしてきたし。

正面から殴り合うのはありえない。体格差がありすぎる。
後ろに回り込む為には…足を潰すか何かで動きを止めるしかないわね。
ネットランチャーも通用しないし。

攻撃を避けつつ辺りを見渡す。

周りにあるのはダミーらしきコンテナばかり。
私は近くのコンテナを背に追い詰められる。

やばい！？

あいつは右腕を突き刺すように突き出してくる。

「こんの！」

済んでの所で飛びのき回避する。
そして直ぐさま立ち上がり見ると、右腕がコンテナに引っ掛かったらしくもがいている。

チャンス！

私は駆け出し右腕に飛び乗る。そして一気に駆け上がり出した。

「！！！」

こいつは私を振り落とそうと左腕で切り掛かってくる。
私は飛び跳ね回避し、スピアをチェーンソーの刃の連結部に投擲す

る。
見事チェーンソーに刺さり繋がった刃が弾け飛ぶ。
折れたりしないよね？
まあそれは後回し。
「とどめ！カートリッジロード！」
カートリッジをロードしてリストブレードの切れ味を底上げ。
二枚の刃が青緑に輝きだす。
そして首筋のガジェットの上に着地、リストブレードを突き刺しそのまま切り裂く。
二枚の刃で一直線についた傷口からバチバチと電気が漏れる。
直ぐさまそこから離れるとガジェットが爆散し、俯せに倒れた。
あ……レイザーディスク…
って、そんな事考えてる場合じゃなかった！すぐに二人の援護に行かないと。
あの転生者の実力はわからないけど、年齢からして強い可能性は高い。
倒すのに時間が掛かっちゃったし。
急がなきゃ。
～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ティアナＳＩＤＥ～

美雪さん……どうして…

いや、余計な事は考えないで。
今の美雪さんは敵。私は管理局員として仕事をするだけ…
そうだ、私が止めなきゃいけない。これ以上罪を重ねさせちゃ駄目だ。

よし、大丈夫。

『Ｔｗｏ　Ｈａｎｄ　Ｍｏｄｅ．』

クロスミラージュを両手に持ち構え直す。

武器らしい物は持ってない。左腕のは多分盾だ。
スバルと同じような格闘型？

［スバル。横から回り込んで同時攻撃。相手の出方がわからないから深追いはしないで］

［オッケー］

よし…まずは牽制しつつ分析。できるだけ時間を稼ぐ。

「スバル！」

「うおぉぉぉ！」

スバルが駆け出し、それと同時にシュートバレットを撃つ

『Ａｂｓｏｒｂ　Ｇｒｉｐ』

そしてスバルは壁伝いに走りながら回り込み、私の魔力弾は一直線に飛んでいく。

「フン…」

魔力弾は盾で薙ぎ払われた。

だが続けて頭上からスバルが飛び掛かる。

「どりゃぁぁぁ！」

「ぐっ！」

振り下ろしたリボルバーナックルを盾で受け止める。

［離れて！］

［了解！］

腕を軸にして飛びのき、その表示に盾を腕ごと跳ね退ける。

「う！」

「この！」

ガードが間に合わないと判断したのか、その場から離れコンテナの上まで跳ぶ。

「まだまだ…これからよ」

すると彼女はベルトのバックルからカードを一枚引き出し、盾の中央をスライドさせてカードを入れた。

『ＣＯＰＹ　ＶＥＮＴ．』

その瞬間、クロスミラージュから影のようなものが浮かび上がり、美雪さんの手に握られる。

「な…！？」

「え！？」

彼女の右手にはクロスミラージュがあった。

どうして？二丁ともあるのに？

「クロスファイア…」

っ！

徐に銃口を私達に向け、周囲に魔力スフィアが浮かぶ。
その数十は超えている。

「スバル、回避！」

「うわ！？」

「シュート！」

誘導弾が一斉に襲い掛かって来る。
私達はバラバラに散り物陰に隠れる。

「クロスミラージュ、どうなってるの？」

『私に異常は見られません。なんらかの手段で複製を作成したと考えられます』

複製（コピー）か…
こんな瞬間的に？

［ティア、どうすんの？］

［今考えてる！］

さっきのクロスファイアは誘導性はいまひとつだった。
つまり美雪さんは相手の武器を使うけど、完全には使いこなせてないのかもしれない。
いや、ただ単に誘導制御が苦手なだけかもしれない。

「隠れてないで出てきたら？いつまでたっても終わらないわよ」

じりじりと私達に近づいてくる。

［ティア、私が先行するから、援護をお願い］

［馬鹿！弾膜の中を突っ込む気！？］

［大丈夫だよ。ティアが全部落としてくれるし］

［そういう事ね…］

責任重大じゃない。

それにあのカードが一枚だけとは限らないし…

だけどこのまま逃げ回ってる訳にはいかない。

それに付け入るスキはあるかもしれない。

武器を複製するまでの時間に決める！

［…わかった。たしかに手が塞がってるならカードは使えないし］

［でしょ？］

スバルが軽く頷くと飛び出した。

私も一緒に飛び出し、クロスミラージュを構える。

全弾撃ち落とす！

スバルには一発も当てない！

そこに立つ彼女は左手でクロスミラージュを撃ちながら、すでに取り出したカードを盾に入れた。

『ＣＯＰＹ　ＶＥＮＴ．』

やば…！

「スバル！まずい、すぐに離れて！」

読み違えた。

まずはクロスミラージュで様子見するかと思ったのに、すぐにカードを使う準備をしていたなんて…

「え？ぐあ！？」

リボルバーナックルをコピーしてスバルを殴り飛ばした。

「スバル！」

そして倒れたスバルにクロスミラージュを突き付ける。

させない！

「だあああああ！」

魔力弾を乱射しながら走る。

とにかくスバルから離れさせなきゃ。

「駄目じゃない…」

標的を私に変え、盾を構えて突っ込んでくる。

そしてナックルスピナーが回転し、魔力が加速する。

は…早っ！

「あああ！？」

殴り飛ばされ壁に叩き付けられる。

「ティア！」

「シュート」

私を助けようとしたスバルに向けて魔力弾を連射。

さらにバインドをかける。

「テ…ティア…」

まずいまずいまずい…

「ティア、最終通告よ。こっちに来なさい。命の無駄遣いはティーダも望まないわ」

「…犯罪者になる方が望まないわ。美雪さんこそ投降してください。これこそ兄さんの望みじゃない」

「愚問ね。わざわざ潰れる管理局にいるなんて…」

「そんな事ありえない！」

「そうかしらね。これ以上時間を掛けるつもりは無いわ」

バックルからカードを引き表を私に向ける。
バックルと同じエイのような模様が描かれたカードだ。

「終わりよ」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ.』

カードを盾に入れる鎧と同じ色のエイが壁を突き破って入ってきた。

「ハッ！」

彼女はそれに飛び乗り、そのまま波乗りのように体当たりをしてくる。

避けられない…

そう思った瞬間、何かに引っ張られ避けることができた。

「ティアナ、大丈夫？」

「ミエリ？」

姿を現したのはミエリだった。

「ミエリ！勝ったんだ！」

「あんな図体だけの木偶の坊に負けはしないわ」

凄い……でもこれで状況はましになったわ。

「…嫌ね。この人数を相手にするのは面倒だし」

『ＳＷＩＮＧ　ＶＥＮＴ．』

またカードを入れると、今度は鞭のような物を取り出した。

「これをいただいて帰らせてもらうわ」

そして鞭を伸ばし黒い箱を取った。

レリック！？

「ミエリ。レリックを取られた！」

「ちょ！この！」

ミエリが右腕の刃を展開し走り出す。

だが鞭に腕を掴まれ投げ飛ばされてしまった。

「残念。じゃあさようなら」

「待って！」

先程のエイが開けた穴から逃げようとする。

「待てと言われて待つ人はいないわよ。さようなら」

駄目だ、逃がしちゃ…

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ.』

「あら？」

誰かが凄い速さで通り過ぎた。
違う。レリックを奪ったんだ。

「エリオ！」

「レリックは回収しました！大丈夫ですか？」

「ナイスタイミング！」

って事は…

「この！坊や、それを渡しなさ…っ！」

エリオから奪い返そうとするが、その目の前を魔力弾が通過する。

「そこまでだ。武装を解除し投降しろ」

一兎隊長がボウガンのような巨大な銃を構える。

「あらあら……」

「美雪さん。終わりです」

「…悪いけど、まだ捕まる訳にはいかないの」

そう言うと、壁の穴から飛び下りた。

「待て！…ちっ。ロングアーチ、追跡！」

『はい！……っ！連続転移…目標ロスト！』

「…くそ！」

銃で壁を殴った。

殴られた場所が凹む。

「まあレリックが無事なだけましか。よくやったな、エリオ」

「エリオ、グッジョブ！」

ミエリがエリオを撫でる。

「は、はい！」

顔を赤らめて敬礼する。

エリオに助けられたわね…

……はぁ…

「ティア、大丈夫？」

「大丈夫よ。スバルは？あんた撃たれたじゃない」

「うん、怪我とかは無いよ。非殺傷設定だったみたい」

非殺傷設定？

クロスミラージュがそうだったからかしら？

訳がわからない。
美雪さんがなんで…

そうしてるうちにレールも停止した。

「おし、全員無事だな。向こうもテッカマンとガジェットは全滅させたみたいだし、こっちも回収できたしな。外でキャロとフリードが待ってるからな。帰るぞ！」

「「「「はい！」」」」

こうして私達の初出動は終わった。

美雪さん…次に会う時は必ず止めてみせる。
私はこれ以上、罪を重ねてほしくない。

もっと強くならなきゃ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～オーマＳＩＤＥ～

今日は少し外に出れたので、人間の姿に擬態してドクターといっしょにガジェット達からの映像を見た。

『と、いう訳で…ごめんなさい。やっぱり無理だったわ』

「まあ彼らのデータがとれただけ良しとしよう」

『じゃあ戻るわね』

通信が切れる。

「なんだ、全然駄目じゃん。使えない人間だね」

「あまこの位なら良いじゃないか。しかしもう一人のオリジナルテッカマンが出てなかったのは残念だね」

そう言いながらモニターをまじまじと見つめる。

「楽しそうだね」

「ああ。あの四人には是非ともこちらに来て欲しいね。今度アプローチしてみるか」

「駄目だったら？」

「そうなったら持ち帰れば良いさ」

ふうん…

「じゃあさ……こいつ潰して良い？」

僕はモニターに映る赤い髪の男の子を指差す。

「プロジェクトFだっけ？一つあれば十分だよね？」

「そんなに気に入らないのかい？」

「うん。こいつ嫌い」

正義の味方…そんな目が嫌いだ。
多分僕は人間だとかくだらない事を言うんだ。
そして僕の事も人間だって言うんだろうな。

綺麗事。

そんな言葉が似合いそうなやつだ。

「ふむ……出来れば両方欲しかったのだがね」

「全部消し飛ばす訳じゃないんだから良いで……ゴホ！ゲホ！」

外にいすぎたかな？気分が悪い。

「そろそろ戻りたまえ。無理はよくない」

「うん」

今度は僕も出よう。

あいつ、敵のままでいてくれると良いなぁ…

第77話　貴女は何処に（後書き）

凶弾「以外と長引いたわね」

星光「ホテル・アグスタも長引きそうです」

轟雷「だがその前に出張だな」

雷刃「こっちも長引きそうだね」

闇「まあ我にはどうでも良い事だがな。虚空、今晩の夕食は何だ？」

虚空「鍋の予定です」

雷刃「あ、僕キムチ鍋が良い！」

闇「何！？あんな辛い物が食えるか！」

雷刃「うわ！王様ってお子様だね～」

闇「塵芥め！我は大人だ！なんせ…」

凶弾「はいはいそこまで。あ、私は豆乳鍋が良いわね」

雷刃「ああ！ずるい！」

轟雷「俺は何でもかまわねえぞ」

虚空「……くじ引きで決めましょう」

星光「じゃあ今回はここまでにしましょうか。ではまた次回お会いしましょう」

第７８話　出張任務ｉｎ海鳴（前書き）

サウンドステージに入ります

第７８話　出張任務ｉｎ海鳴

～利文ＳＩＤＥ～

朝。

僕は眠い目を擦りながら起き上がる。
そして隣に寝ているはやての頭を撫でベットから出る。

…部隊長権限で一緒の部屋にするなんてね。
でもやっぱり役職の違いか、寝る時間もバラバラになる事が多い。
現に昨晩もはやては騎士カリムと遅くまで話していたらしいし、着替えずにシャツのまんまだ。
この前制服のまま寝て皺くちゃにしちゃって、アイナさんに目茶苦茶怒られてたな…

取りあえずシャワー浴び着替える。
そしてコーヒーを用意しながら今日の予定を確認する。

そういえば仮面ライダーライアの女性転生者がこの前の件で現れたらしい。
僕？絶賛かませ犬症候群を発症中だったよ。

まあとにかく彼女はティアナの知り合いだったらしい。
いや…もっと親しい仲だったみたいだ。
彼女の兄、ティーダ・ランスターの恋人だったそうだ。

しかし何者かわかっていても情報が少ない。

二十四歳、職業占い師。六年前のティーダ・ランスター殉職の直後に失踪。
ティアナ曰く、管理局を崩壊させる組織…おそらくスカリエッティ達に保身の為に仲間になった。
それだけだ。

崩壊か…
なんだか嫌な予感がするな。
……考えても仕方ない。他にも転生者はいるはず。
後手に回るしかないが、なんとかするしかないな。

「…おはよ……ファ…」

はやてが起きたようだ。

「おはようはやて。ほら、早くシャワー浴びなよ」

「……エッチ…」

「こら…そういう意味じゃないよ。仕事があるんだから」

「冗談なのに～。あ、私もコーヒーお願い。砂糖一つで」

「ん？いつもは二つなのに」

「今日はそういう気分なんや」

そう言いながらバスルームに入って行った。

そういう気分ね…

はやての分も用意するため、コップをもう一つ出した。

「あ、忘れるとこやった」

はやてがドカから頭だけ出てきた。

「朝ごはん終わったら、隊長達を部隊長室に呼んどいて。話しがあるんや」

「話し？」

「そ。後でのお楽しみや♪」

…何だろ？

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～バロンＳＩＤＥ～

「「派遣任務…ですか？」」
スバル君とミエリ君の声が重なる。
「しかも異世界に？」
「うん。決定事項」
「緊急出動が無ければ……まあ二時間後に出発だ」
「随分と急な話しですね」
なのは隊蝶と戒副隊蝶の朝一番の話しがこれとは…
「僕達もさっき聞いたんだ。だから今日は訓練は無しだ」
「準備ができたら屋上ヘリポートに集合。わかった？」
「「「「はい！」」」」
ん？待てよ…
「あの、その異世界って何処なんですか？」
俺の質問に二人は顔を見合わせ微笑む。
「私達の故郷」
「第９７管理外世界、地球だ」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

地球か……懐かしいなぁ…
まあ前世は日本人じゃないけど。
ああ…行ってみたかったなぁ、アキハバラ。

まあそんなこんなで屋上のヘリポート。
向こうには前戦メンバー全員と部隊長とシャマル先生で行くらしい。
ちなみにシグナム隊長とリィンフォース曹長は、交換部隊があるのでお留守番。
ザフィーラ？ああ、そんな犬がいたような気が…

「第９７管理外世界文化レベルＢ…」

キャロがモニタを見ながら呟く。

「魔法文化無し、次元移動手段無し…って、魔法文化無いのか！？」

バロンが魔法文化が無いことに驚く。

魔法無しでもやってけるのよね～

「無いよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

そういやナカジマ家の御先祖は地球人だったわね。

「…何故にそんな世界から、隊蝶達みたいなオーバーSランクが…突然変異か？」

「んなミュータントみたいに言ったら失礼でしょ」

「まあ近いかもしれねえな」

一兎隊長が乗り出して来た。

「す、すみません」

「いいって。あっちじゃ、魔力無しが普通だし」

「でも不思議ですね。こんなに沢山出るなんて」

ティアの意見ももっともだ。

「でも、純粋に地球の人は一兎となのは、はやての三人だけだよ」

一兎隊長の隣からフェイト隊長も顔を出す。

「そうなんですか？じゃあ戒さんや利文さんは、私みたいに先祖が？」

「戒はハーフだ。母親がミッド出身でな」

「で、利文は別の管理外…というか、未確認世界出身なんだ。育ちは地球なんだけど…」

未確認世界か…

「そうなんですか…」

「地球に戸籍もあるし、本人は生まれた世界に帰るつもりも無いらしいがな」

「はあ…」

完全にこっちの人だなぁ。

「そういえば美雪さ……地球に縁のある人から聞いたんですけど、向こうの人って生で魚を食べるって本当ですか？」

まだ微妙に引きずってるわね。

大丈夫かしら？

「な…生魚!?大丈夫なのか？」

バロンが驚いてる。

サシミやスシの事ね。

私も初めて見た時はかなり怖かったわ。

「刺身の事か。食べるぞ」

「私も初めて見た時は少しビックリしたけど、結構美味しいよ」

「「はあ…」」

「私、食べてみたいです！」

「僕も！」

大食い二名が目を輝かせながら手を上げる。

「あんた達ね……私達は仕事で行くのよ。わかってるの？」

「そうそう。そういうのは後回しよ。仕事が終わってからか、個人で旅行に来た時にしなよ」

「俺は遠慮させてもらう…」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

さてさて。付きました地球に！

眼下には湖に森、コテージとキャンプ場のような場所が見える。

「「「「「うわ～」」」」」

「ふむ…」

「ここが、なのはさん達の、故郷…」

「そうだよ。ミッドと殆ど変わらないでしょ？」

「空は青いし、太陽も一つだし」

「山と水と。自然のにおいもそっくりです！」

「いや…その辺りはあんま変わんないでしょ…」

皆変わってないという事に驚いてる。

地球を何だと思ってるんだこの子達は？

「というか、ここは具体的にはどこでしょう？なんか、湖畔のコテージって感じですが…」

「現地の住人が持つ別荘だ。俺達、捜査員待機所としての使用を許諾してもらってね」

「現地の方…」

すると何処からともなくエンジン音が鳴り響く。

来たね…

「自動車？こっちの世界にもあるのか…」

「バロン、君はこの世界を何だと思ってるんだ？」

「いや…あまりにも普通でしたので…」

「あんまし変わらないんだよね。母さんもこっちに来た時、普通すぎて拍子抜けだったらしいし」

そうこうしているうちに車から一人の女性が出て来た。

「皆～！久しぶり！」

車から出て来たのはアリサだった。

「アリサちゃん！」

「アリサッ！」

なのはとフェイトがアリサの下に駆け出す。

「なによも～。ご無沙汰だったじゃない？」

「にゃははっ。ごめんごめん」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから」

大学か…

前世でも行く前に死んじゃったから、行った事無いんだよな。

「っと…戒、一兎、利文も久しぶり！」

「うん。久しぶり」

「よっ」

「本当、久しぶりだね」

僕達もアリサ達の所に行く。

「そういえば利文。あんた私達に連絡せず、勝手に籍入れてたしてないでしょうね？」

「部隊の事たとかあって、まだ先になるよ。それに連絡するに決まってるでしょ」

「それもそうね。…で、例の二人は？」

アリサはちらりとフェイトと一兎を見る。

「それがね～」

「相変わらず」

「進展無しなの」

「うう…」

「ん？何の話しだ？」

「……納得だわ」

アリサがこめかみを抑えながら呟く。

「あ…あの、こちらの女性は？」

バロンがおいてけぼりになってるメンバーを代表して質問する。

「紹介するね。私達の友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「「「「「「よろしくお願いします」」」」」」

「うん。元気でよろしい」

「じゃあそろそろ仕事にするぞ」

一兎の声に全員に緊張が走る。

「さて。じゃあ改めて、今回の任務を簡単に説明するよ」

「「「「「「「「「「はいっ！」」」」」」」」」」

なのはがモニターを起動する。

「捜索地域は……ここ。海鳴市の市内全域。反応があったのは、ここととここと、ここ」

「移動してますね？」

「誰かが持っているんでしょうか？」

「誰かが持って移動しているか、独立して動いているのかは、判らないけど。対象ロスト・ロギアの危険性は、今のところ確認されてない」

「仮にレリックだったとしても、この世界には魔力保有者が滅多にいないから。暴走の危険は、かなり薄いけどね」

「まあ可能性がゼロって訳じゃないからな」

「そうだね。レリックでもそうでなくても、相手はロスト・ロギア。何が起こるか判らない上、場所も市街地。油断しないように」

「「「「はい！」」」」

「「了解！」」

「ヴィータ副隊長達とは後で合流するから。各員私服に着替えて、先行して出発だ」

「「「「「はい！」」」」」

「よし。皆揃っとるようやな」

はやてがどこからともなく現れた。

「はやて…いつの間に…」

「いや、やっぱ号令は私がかけなきゃ。せっかく来たんやし」

「あはは…。よーし皆、部隊長のありがたいお言葉だ。心して聞くように（棒読み）」

「うお…もっと心を込めて言ってほしいわ。…んん！ほな、機動六課出張任務…ロストロギア探索。任務開始や！」

「「「「「了解！！！」」」」」

第７８話　出張任務ｉｎ海鳴（後書き）

雷刃「宇宙キタ――――（ ゜∀ ゜）――――！！！」

闇「あの阿保は何をやってるのだ？」

星光「今回はフォーゼを見ながら書いてたので…。どうやらはまってしまったようです。今朝は新しいフォームが電気でしたし」

轟雷「あの恐ろしくダサい仮面ライダーか」

凶弾「でもストーリーは良いんじゃない？学園モノって面白いし」

闇「それよりあの阿保を黙らせろ。うるさくてかなわん」

虚空「了解（雷刃を投げ飛ばす）」

雷刃「あ～れ～」

闇「これで静かになったな」

星光「じゃあ、早く昼食の準備をしましょう」

雷刃「宇宙パワーを得た僕に不可能は無い！」

轟雷「もう戻って来たぞ…」

星光「無視しましょ。王が相手してくれるでしょうし」

凶弾「じゃあ次回もよろしくね♪」

第７９話　故郷と仕事（前書き）

出張先が故郷っての、現実であったら面白いですね

第７９話　故郷と仕事

～利文ＳＩＤＥ～

スターズは徒歩、僕達ブラスターとバレットは車で移動しながらサーチャーの設置を行っている。

「設置完了。さ、次のポイントに向かおう」

「「了解」」

バロン、ミエリと共に車に乗り込み次の場所に出発する。
ちなみに戒は空から探索をしている。

「しかし、本当にミッドと変わりませんね。あ、今の店はなんですか？」

「今のは和食レストランだね。日本料理専門の店だ」

「この国の料理か…」

バロンは日本の町並みに興味津々で、先程からずっと窓の景色に見入ってる。

そういえばミエリはどうなんだろ？
前世が日本人じゃないとはいえ、リリなのを知ってるって事は日本に来た事があるのかな？

［そういえばミエリ。君は日本は初めて？］

［初めてですね。前世は日本に来る前に死んじゃいましたし］

［じゃあ日本語わかる？］

［勉強はしたんですけどね…。完全に忘れてます。さっきから看板に書いてある文字が全くわかりませんよ］

［僕も忘れそうになっちゃう時があるんだよね…］

特に漢字なんか。

海外生活…てか異世界生活長いからなぁ…

やばいね。

「っと。そろそろ目的地だ」

そうこうしている内に、次の設置場所に到着した。

「了解」

「さっさと片付けましょう」

さってと。お仕事お仕事。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

さて。俺はフェイト、エリオ、キャロの四人で車に乗りつつサーチャーの設置をしている。
ついでにフリードはシャマルに預けてる。
流石に町中に竜を連れて行く訳にはいかないからな。

しかしなんか良い気がしない。
フェイト達といるのが嫌な訳でもなく、車酔いした訳でもない。

フェイトに運転させてしまってるのが男としてどうかと思う。

そりゃあ俺は免許無いけどさ…

畜生。絶対免許取ってやる。
救助隊って出動が不規則だからな。時間作るの難しいんだよ。
前世では大学一年の夏休みで取ったのに。

「一兎、どうしたの？酔っちゃった？」

「いや、悪いなって思って。フェイトばっかり運転させてさ」

「別に良いよ。一兎免許持ってないし。それに私運転好きだもん」

「男としてのプライドってか、意地ってか…」

そう言われてもなあ…

「そういえば初めてですね。四人で一緒にお仕事するのって」

「そういえばそうですね」

言われてみると確かに。

「まあ二人の訓練はなのはと戒が中心だしな。それにフェイトが空戦だから前回の時も別々だし」

「うん。だけど、こうやってエリオやキャロと一緒にいられるのは嬉しいかな」

「だな。……しかしこう見ると完全に子連れの親子みたいだな」

「親…子ですか？」

「あくまでみたい…だがな」

「でも、素敵だと思います！」

「うん。フェイトさんがお母さんで、一兎さんがお父さん…」

そういや二人ともかなり複雑な家庭環境だったな。

普通の家族に憧れて当然だ。

「…悪くないな。二人の父親でも」

「「え？」」

「俺は二人のお父さんでもかまわねえぜ。…いや、むしろ大歓迎だな。まあ、エリオとキャロが望むのならな」

後ろを振り向く。
そしてエリオもキャロも少し考えるように顔を見合わせ、照れ臭そうに口を開いた。

「え…えっと…」

「じ、じゃあ…」

「「お、お父さん！」」

「おう！」

思わず笑みがこぼれる。

父親ねぇ…
なんか小恥ずかしいな。
だけど嫌じゃない。

ん？そういやフェイトに何も言わずに話しをしちゃったな。

「あ～フェイト？その…何だ。あんまり深く考えなくても…」

「もももしかしてプ、プロポーズ？いいいや、落ち着いてフェ

イト・テスタロッサ。一兎の鈍感さから無意識って可能性もあるし（ブツブツ）」

あ…あれ？

「で、でも…もしかしたらかもしれないし……ああ、どうしよう。お嫁さんってのも憧れるけど母さんの事も考えると、やっぱりお婿さん？（ブツブツ）」

「フェ…フェイトさん？」

なんだ？さっきからブツブツと。

よく聞こえないが、やっぱ迷惑だったか？

「エリオとキャロがいるから、順番的に三人目は男の子かな？でも一兎が女の子が良いって言うならそれでも私はかまわないし。あ、エイミィやクロノみたいに双子ってのも良いかも…」

エイミィ？クロノ？何を言ってるんだ？

なんか意識が上の空だし…

…って！

「フェイト！信号赤だぞ！止まれ！！！」

前を見ると赤信号になってる。

フェイトを揺さ振り必死に意識を戻させる。

「え？あれ？あっ！！！」

急ブレーキでなんとか停車。
その衝撃で車内が揺れる。
あっぶねぇぇぇぇ…
「二人共、大丈夫か！？」
「は…はい…」
「シートベルトしてたので…」
ほ…
「ご…ごめん。ボーっとしてた…」
「いや、俺も変な事言って悪い」
「へ、変な事って…。むしろ嬉しいんだけど…（ボソ）」
いや、しかし事故らないで良かった。
洒落にならないしな。
「まあ事故にならなかったから良しとしようぜ」
「うん。二人もごめんね」
「あ、大丈夫です」
「私もです」

そして信号が変わりまた車が動き出す。

『ロングアーチからスターズ、バレット、ブラスターへ』

すると、ロングアーチのシャマルから通信が入った。

『さっき教会本部から新情報が来ました。問題のロストロギアの所有者が判明。運搬中に紛失したとのことで、事件性は無いそうです』

『本体の性質も逃走のみで攻撃性はなし。ただし、大変に高価な物なので出来れば無傷で捕らえて欲しいとのこと。まあ、気ぃ抜かずにしっかりやろ』

「「了解」」

「「はい！」」

さてと…

「じゃあそろそろ戻るか。設置も一通りやったし」

「そうだね」

［もしもし、フェイトちゃん？一兎君？］

なのは？

［どうしたの？］

［もしかして向かえに来て欲しいのか？こっちは終わったから行けるぞ］

［その事なんだけど、翠屋でお願いできないかな？］

翠屋？

［たしかに、こっちに来たなら少し顔を出すのも良いかも］

［さっき電話が来たんだ。だから…ね］

［うん。良いよ］

って事は……待てよ。

［おい、流石に三人乗る程スペース無いぞ］

［あ…］

［そっか…。じゃあ私達は歩きで帰るよ］

［利文呼べば良いだろ。俺が連絡しておく］

［あ、そっか。じゃあお願いね］

［あいよ］

［じゃあ今から行くね］

なのはとの念話が切れる。

「スターズの皆を迎えになのはの実家まで行く事になったから」

「なのはさんの実家…」

「そ。喫茶店だ」

「なのはさん実家って喫茶店だったんですか」

「そうだよ。じゃあ行こっか」

そうして車を走らせる。

さて、俺も利文に連絡するか。

まあそんなこんなで翠屋。

何故か先に到着していた利文達と合流。

高町夫妻の若さに仰天しつつコーヒーや紅茶で一休み。

いや、しかし美味い。

「しかし、なのは隊蝶のご両親若すぎだろ…。親子より兄妹にしか

見えんぞ」

「私のお父さんとは大違いだよ」

「ゲンヤさんが普通なだけでしょ」

「うちも普通よ。まあ私は兄弟に見えるのは鑑別だけど」

「え～。私は格好良い方が良いけど」

「老いる美しさってのもあるのよ」

「…あんた、本当に十三？」

…向こうもあの若さに混乱しているな。
なのははなのはで久しぶりの家族との会話を楽しんでる。

ちなみに俺の両親は普通だ。

俺もミッドに戻る前に会っとくかな。
そんくらいの時間は貰えるだろ。

そういや去年、姉さんが会社の合コンで彼氏できたとか言ってたが、どうなったんだか…

……よし、はやてに頼んで時間を貰うか。
フェイトや戒も家に顔を出したいだろうし。

「ところで利文隊長。奢ってくれるんですよね」

「え!?利文隊長奢ってくれるんですか?」

「もしかして全員に?」

「当然です。私とバロンだけじゃ不公平ですから」

「むう……じゃあシュークリームでも買って行くか。士郎さん、シュークリームを十六個」

本当に買うんかい。

第79話　故郷と仕事（後書き）

虚空「突撃、翠屋」

凶弾「まで。って事は次回は温銭湯ね」

轟雷「銭湯か…」

星光「銭湯…」

雷刃「僕も行きたい！」

凶弾「じゃあ行く？」

星光「そうですね。私達も行きますか。あ、あと虚空はちゃんと変身解除してくだいよ」

虚空「だが断る」

轟雷「脱げよ。見苦しい」

虚空「だが断る」

星光「仕方ありません。ぶっ壊してひん剥きましょう」

虚空「離脱」

雷刃「逃げた！」

轟雷「逃げるな！その皮、剥ぎ取ってやる！」

凶弾「物騒ねぇ…」

闇「ではまた次回。……待て、今回我の出番はこれだけか！？」

第８０話　湯煙の先へ（前書き）

湯煙の先にある楽園…人それを桃源郷と言う

第８０話　湯煙の先へ

～バロンＳＩＤＥ～

さて、利文隊蝶に奢ってもらった俺達はコテージへと戻って来た。
しかしなのは隊蝶の実家のシュークリームか…。食後が楽しみだ。
そんでコテージに到着した俺達が目にしたのは、バーベキューセットを出し、鉄板の前で料理をしている部隊蝶だった。

「八神部隊長！？」

「部隊長自ら鉄板焼きを！？」

「そんなの、私達がやります！」

「そうですよ。そういうのは俺達の仕事です！」

食事の用意を部隊長自ら行っているなんて…
本来、部下である俺達がやらねばならない事だ。

「ん？あぁ、でもな、待ち時間あったし。お料理は元々趣味なんよ？」

そう言いながら、慣れた手つきで料理をしている。

むう…お言葉に甘えるべきか？

「はやて隊長の料理はギガウマだぞ！ありがたくいただけ！」

いや、ギガって…

まあ良い。ありがたくいただくとしよう。

「あ、はやて。シャマルはやってないよね？」

利文隊蝶が部隊蝶に耳打ちする。

「大丈夫や。材料切り位やし」

シャマル先生って料理下手なのか？

とてもそうには見えないが…

「シャマル先生…もしかして…」

どうやらスバル君も同じ考えらしい。

「違うもん！シャマル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

確定。

シャマル先生は料理が下手なんだ。

「そう歎くな。俺だって下手だぞ」

「一兎が下手ならシャマルはもっと酷いぞ」

「むしろアレを料理と呼んで良いのか…」

一兎隊蝶がフォローするが、ヴィータ副隊蝶と利文隊蝶がぶち壊す。

「うわぁぁぁん！皆がイジメるぅぅぅ！」

容赦無いなぁ…

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

食事も終わり、後片付けも終わった。

しかしスバルとエリオは食べるなぁ…

逆にバロンはもっと食べなきゃ。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか」

一段落ついた所ではやてが入浴を提案する。

「「「「はいっ！」」」」

ティアナ、スバル、キャロ、ミエリがいち早く反応した。
やっぱり女の子だね。

ちなみにここには風呂は無いし、湖で水浴びするにはまだ肌寒い。
よって近所のスーパー銭湯に行く事になった。

「さて。機動六課一同。着替えを準備して、銭湯準備！これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー…」

「セントウ…？」

「戦闘…なんだか危ない雰囲気が……」

フォワード達が首を傾げる。

「戦闘じゃなくて銭湯」

「所謂公衆浴場だな」

「はあ…なるほど」

そんで到着。

「はーい、いらっしゃいませー！海鳴スパラクーアツーへようこそ……団体様ですか？」

店員が僕達の人数に驚いたのか、一瞬止まる。

「え～と…大人十四人に…」

はやてが僕達の人数を数え出す。

「子供二人です」

続けてフェイトが店員に言う。

「あれ？ミエリは大人料金なんですか？」

「ああ。ミエリは十三才だよね」

「そうですよ」

「ここは中学生以上は大人料金だから、ミエリも大人料金なんだ」

「チューガクセー？」

「私位の年齢の子が行く学校の学生じゃない？」

「なるほど…」

ティアナも納得したらしい。

「あの、ヴィータ副隊長は…」

「あたしは大人だ」

子供料金で入れば安いのに…

どう見ても子供なんだから問題無いでしょ。

「広いお風呂だって。楽しみだね？エリオ君」

「あ、うん。そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

「えっ？エリオ君は？」

「えっ！？ぼ、僕は、その、一応、男の子だし…」

一緒に入りたいキャロを説き伏せようど必死だね。

助けはいらなさそうだな。

「うん……あ、でもほらっ。あれ見て？」

キャロが指差した先には、入浴施設の利用規定。

そこには【女湯への男児入浴は、１１歳以下のお子様のみでお願いします】と書かれていた。

エリオは十歳。この利用規定によれば、女湯への入浴は可能なのだ。

さあどうするエリオ君？

「やっぱり、スバルさんやティアナさんとか、隊長達とかアリサさ

ん達もいるし！」

そう言いながら近くにいた僕に視線を送る。

［頑張れエリオ］

［ええ～！？助けてくださいよ！］

この位乗り越えられなきゃ。

生き残れないよ。

「別に私は構わないけど？」

「てゆーか、前から、頭洗ってあげようかとか言ってるじゃない」

ティアナとスバルも気にしてないらしい。

十才の子供とはいえ気にしなさすぎな気がするけど…

「私も見られて困るほど無いし」

さらにミエリが追い撃ちをかける。

何が無いかはあえて言わない。

「そんな事させるかぁぁぁ！」

すると後ろの方からバロンがエリオの頭をつかみ男湯へと引きずって行く。

「そんな羨ましい思いを君一人にさせてたまるか！」

「バロンさん！助けてくれたのは嬉しいんですけど、痛いです！」

ドナドナが聞こえたような。

まあエリオは無事に男湯に行けたみたいだから良いか。

「じゃあ僕達も行こ」

「おう」

「だね」

僕と一兎、利文はバロンとエリオを追うように脱衣所へ向かった。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

素晴らしい。

私の目の前には天国が広がっている。

しっかしうちの部隊は皆スタイル良いわね。

他に客もいなさそうだし、たっぷりと堪能させていただきましょ。

え？私？

フフフ…平原ですよ。文句あっか？

「うりゃ～！」

「部隊長！？やめてください！」

「なかなかええもん持っとるやないか。育てがいがあるわ～」

部隊長がティアナの胸を揉み出した。

これが噂の…

まあティアナも困ってるようだし、助け舟を出してあげましょ。

「駄目ですよ部隊長。ティアナの胸を育てるのはスバルなんですから」

「そうですよ！」

スバルがティアナに抱き着く。

「む。なら仕方あらへんな」

「納得しないでください！それとスバルも離れなさい！」

ティアナの肘が頭に直撃した。

あら痛そ。

「ほんならミエリのを…」

手を怪しく動かしながら部隊長が近づいてくる。

「私は現状に満足しているので結構です」

「え～」

「貧乳はステータスですよ部隊長」

「ヴィータとキャロがおるやない」

「私はロリではなく貧乳キャラでいたいので。そういった人材も必要ですよ」

「そう言われたら反論できへんな」

「…私はどうツッコミを入れれば良いのかしら……」

「【なんでやねん】は？」

「アホっぽいから却下」

そろそろツッコんでほしかったんだけどなぁ…

「さて、冗談は置いといて本題なんやけど…」

「「本題？」」

一体なんだろ？

「な～に。ちょっと皆とお話でもって思ってな」

「お話…ですか」

「ん～。でも何話せば良いんだろ…」

「女の子らしく恋ばなでもする？」

「おっ！ええな。なんでも相談に乗るで！」

これが男がいる余裕ってやつですか？

ええい、こちとら年齢＝彼氏いない歴更新中で、三十年超えてるのよ。勿論前世を含めてだけど。

「そうは言われましても…」

「ねぇ？」

「相手がいませんし」

「ほんならバロン君についてはどうや？年も近いし」

意地の悪そうな笑みを浮かべながらにじり寄ってきた。

「よし！まずはミエリから！」

「私！？」

「言い出しっぺなんやから当然やろ」

おのれ！
こんなんだったら黙っとけば良かった。

「えっと…私は年の差が二つまでなんで、射程外ですね。四つも上ですし」

「じゃあエリオも？」

「勿論です。ついでにキャロもいますし」

将来が楽しみな子ではあるけどね。

「まあ、四つも上ならわからんでもないわな。次、スバル！」

「私ですか？えっと…」

少し困惑したような顔をしてから口を開いた。

「ギン姉…姉と同い年なんで、そういうふうにはちょっと…」

「異性っていうよりお兄さんみたいに見てまうんか？」

「はい。ですから恋愛対象に考えた事は無いですね」

「私も。兄弟と同い年って思うとね…」

ちょっと無理かな。

「私は一人っ子やったからよくわからへんけど……まあ、そんなもんなんやな。最後、ティアナ！」

「私は恋愛事とか考える余裕はありませんし」

うわ、ずるい。

「残念やけど、それはなしや。ほれ、キリキリ吐きぃ」

「ううー。まあ、無しですね。同僚としては好きですけど、異性としては無理です。特にあの美的感覚は」

うわ！バッサリ。

でもあのバリアジャケットはありえないわね。

先祖代々とか言ってたけど。

「ほほう…。皆バロン君は対象外やと」

「「「はい」」」

哀れバロン。

少なくともこの部隊では君に春が来る予定は無いようだ。

「アハハハ。いやぁおもろかったわ。ん？」

すると部隊長は湯舟の外にある看板に視線を移す。

「どうしたんですか？」

「というより何て書いてあるんですか？」

「この先に露天風呂があるらいんや」

「露天風呂？そんなのあるんですか」

「ティア、ミエリ、行ってみようよ！」

「露天風呂は混浴やで」

「「えっ」」

「あら残念」

混浴に行く勇気は無いし。

「フフフ…。ええ事思い付いた」

もしもし？なんだか悪人みたいな顔ですよ？

「フェイトちゃん覚悟しぃや！ワハハハハハ！」

立ち上がり、腰に手をあてて高笑いしている。

「……ねえ、私達の部隊長なんだよね？」

「頭が痛くなって来たわ…」

「そんな事よりまる見えですよ～」

部隊長もなかなかナイスバディでした。

第８０話　湯煙の先へ（後書き）

轟雷「……おい」

凶弾「何かしら？」

轟雷「何故俺達が出てる。普通は女湯に行くだろ」

凶弾「私じゃ不服なの？」

轟雷「当たり前だ。何が楽しくてオカマと風呂に入なきゃいけないんだ」

凶弾「掘るわよ」

轟雷「落ち着け。俺が悪かった」

凶弾「ふん。どうせ次回が向こうよ。今回は私の美しい肢体を…」

轟雷「そんな事より虚空。お前まじで脱げ。見苦しい」

虚空「だが断る」

凶弾「私を無視しないでよ！」

虚空「次回は塀の向こうの女湯です。お楽しみに」

第８１話　銃弾と混浴（前書き）

混浴って男のロマンですよね

第８１話　銃弾と混浴

～戒ＳＩＤＥ～

「「「う…美しい」」」

何が美しいのかはあえて言わないが、僕達三人がバロンに負けたとだけ言っておく。

「ごめんよはやてごめんよはやてごめんよはやて」

…そして利文が湯舟に沈んで呟いてるが、そっとしておいてあげよう。

本当に気にしてるんだね。

「…エリオ、頭洗ってやるから来い」

「え…あの…じゃあ、お願いします…」

エリオは小恥ずかしくも嬉しそうに頷いた。

一兎なりの現実逃避なのかはわからないがエリオが嬉しそうだから良いか。

平和だ…

さて、そろそろ利文を起こすか。

溺れちゃ困るし。

「しかし地球の風呂は、一種のリゾートですね！」

「そうだね。あと、そろそろ前隠して。利文のダメージがヤバいから」

「はい？」

まあこれ以上男湯を映しても面白くないから、この辺にしておこう。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

私達は部隊長に付いて行き、フェイト副隊長の所まで来た。

勿論、面白そうだからだ。

「フェイトちゃ～ん。実はここ、露天風呂が混浴なんよ」

部隊長がニヤニヤしながらフェイト副隊長にもたれ掛かる。

悪戯っぽいとかいうレベルじゃない。なんか企んでいる顔だ。

「本当ならトシ君とネットリとした時間を過ごしたいんやけど…」

「ネ…ネットリ!?」

ゆっくりじゃないんかい。

「今回はフェイトちゃんに譲ってあげるわ。一兎君も呼んどいてあげるから、二人で楽しんでき♪」

「ええ!?」

一気に顔が真っ赤になる。

「フェイトちゃん、まだだったんだ…」

「相変わらずね、あんた達…」

すずかさんとアリサさんも呆れたような顔をする。

話しが見えてきたぞ。

「さあ!その二つのスイカで一兎君を魅了してくるんや!」

「ススイカ!?ってはやて、止め…!」

部隊長がその大きなアレを揉み出した。

でかいくて特盛。

素晴らしい。

「そうね。既成事実さえあればこっちのもんだし。フェイト、行きなさいよ」

「で…でも…」

恥じらう姿もなかなか…

「あの、既成事実ってなんですか？」

「ねぇねぇ、なんなのティア～♪」

キャロと一緒にスバルがニヤニヤしながら質問してきた。

「あんたは絶対わかって言ってるでしょ！」

「痛い痛い！ギブギブ！」

ティアナがスバルにぐりぐり攻撃をする。

仕方ない。キャロには私から話すか。

「貴女はまだ早いから知らなくて良いのよ。もう少し大人になってからね」

「ううう…残念です……」

むしろずっと純粋なままでいてほしいわ。

「うりうり～♪入浴プレイも乙なもんやで～」

「はうぅぅ…／／／」

経験者は語る。

ちっ！！！

リア充め！

「濡れた髪！ほてった肌！そして二人はめくるめく官能の世界へ…」

「かかか官能！？」

いかん。

フェイト副隊長がオーバーヒートしかけてる。

［男がいる人って、皆ああなのかしら？］

［お姉ちゃんに彼氏がいた時はあんなんじゃなかったような…］

［八神部隊長、幸せそうだね］

［そうですね～］

まあ幸せなのは確かだけど、八神はやてってあんなキャラだっけ？

「はやてちゃん。フェイトちゃんも真っ赤だし、一応公共の場所だからさ…」

なのは隊長が止めに入った。

副隊長もいい加減に爆発しそうだしね。

「え～。せっかくフェイトちゃんに大人の階段を駆け足で昇らせてあげようと思っとったのに～」

ブーブーと口を尖らせながら文句を言い出した。

私達しかいないとはいえ、そろそろ自重しろって事ね。

するとなのは隊長は部隊長の頭をわしづかみにする。

「キャロみたいな子供もいるんだし…ね？私の言ってる事、間違ってるかな？」

まるで天使のような…ごめんなさい。

迫力というか、威圧感のある素敵な笑顔で部隊長の頭を握りだした。

「痛い痛い痛い！なのはちゃん止めて！私が悪かったから！中身出てまうって！」

「もう…。駄目だよ？」

部隊長の頭から手を離す。

「色々と出るかと思ったわ…。で、結局行く？」

頭をさすりながらフェイト副隊長の方を振り向く。

「えっと…」

するとちらりとキャロを見た。

「キャロ、一緒に行こっか？混浴ならエリオも来てくれると思うよ」

「はい！行きます！」

満悦の笑顔で答えた。

うん。なんだ…

「「「ヘタレね（やな）」」」

まさかキャロを連れて行くとは…

せっかくのチャンスなのに。勿体ない。

「じゃあ行ってくるね。はやて、一兎とエリオをお願いね」

「行ってきま～す♪」

そうして二人は露天風呂の方へ歩いていった。

「多分、今回も空回りね」

「早く告白しちゃえば良いのに…」

「あ、でも去年【付き合って】って言ったら、【買い物の荷物持ちくらいかまわないぞ】って言われたらしいよ」

「ありえんわ…」

いや、今時そんなベタな鈍感いるの？
…あ、いたんだっけ。

しかし一兎隊長は何者？わざとなの？

「一兎隊長ってそんな人だったんだ…」

「絵に描いたような鈍感だったなんて、意外ね…」

「覗きます？」

「キャロとエリオがおるからなんも無いやろ。覗いても無意味や。
私達は私達で温泉を楽しも」

「そうですね」

面白い展開に期待できないなら覗いても仕方ないしね。

「あ、トシ君に連絡しとかんと」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

俺とエリオは露天風呂に来た。
利文のやつに薦められ来たのだが……

一体全体どうなってるんだ？

目の前の湯舟には手を振るフェイトとキャロがいた。

「……え？」

「…すまん。間違えた」

エリオを掴み後ろを向く。

「ここ、混浴ですよ！」

「だだだたから、大丈夫だよ！」

…なるほど、読めたぞ！
キャロがエリオと入りたいからこっちに誘ったのか。ついでにバレット隊で集まってとか言い出したんだ。
フェイトも断れず仕方なくってやつだな。

やっぱ俺いない方が良いか？
フェイトだって見ず知らずではなくとも男の前で肌をさらすのは嫌だろう。

エリオ？子供だから大丈夫なんだろ。

「俺は戻るよ。流石にまずい」

「え！？一人にしないでください！むしろ僕も一緒に！」

エリオも必死だ。

「…そうだな。やっぱ戻るわ」

エリオを連れて行こうとする。

「一緒に入りましょうよ！お…お父さん……」

ぐ…反則だろ…

「わ、私は大丈夫だよ。一兎になら…」

……あれ？俺、男として見られてない？

なんか、凹むな…

「だから…ね？」

「仕方ねぇな」

「え！？行くんですか！？」

「耐えろ。俺も耐えるから」

「……はい」

そうして俺達は湯舟に入った。

「いいお湯だね、エリオ君」

「そ、そうだね…」

エリオは今にもオーバーヒートしそうな程真っ赤だ。
これも試練だ。頑張れエリオ。

しかし俺の横にはフェイトがいるんだが…その、なんだ……
バスタオルを巻いてるとはいえ全部隠れてるわけじゃない。だから
上から見えるんだよな…
てか谷間の所に水溜まりができてる。すげぇ…

っといかんいかん。
んな下品な目で見ちゃ駄目だ。

だけど…

思わずもう一度視線がいく。

グラビアモデル並…か以上だ。

ヤバい。

ここでビーストモードにトランスフォームしたら、人として完全に
おしまいだ。
今までの全てを破壊してしまう。

煩悩退さぁぁぁん！！！

「ねえ、一兎…」

うお！？

「な、なんだ？」

まさか、今の視線に気付いた？

「ありがとう…。二人の事」

ん？あああれか。

「いや、かまわないさ。二人の事を考えればな。それに俺も嫌じゃない。むしろ本気でも良いくらいだ」

「そっか…」

フェイトが俺の肩に寄り掛かる。

ちょ！近いって！

「ありがとう。私、凄く嬉しい。一兎にはいつも助けられちゃってる。お母さんの事も、二人の事も」

「気にすんな。俺はやりたくてやってるだけだからな」

「一兎…」

横を向くとフェイトと目が合う。
冗談抜きで理性がガリガリと削られていく。
「一兎がお父さんなら、私がお母さんじゃ…駄目かな？」
「な、なんかそれ夫婦みたいじゃないか？」
てか完全に夫婦だろ。
「二人のために無理して俺に付き合わなくて良いんだぞ」
フェイトにだって自由にやる権利はあるんだ。
「無理じゃないよ。私は…」
フェイトの顔が徐々に近づいてくる。
ま…まさか！？
いや、きっとこれははやてと利文が仕組んだドッキリだ。
すぐそこらへんで覗いてるんだろう。
だが俺は無意識のうちにフェイトを抱き寄せていた。
そして顔がさらに近づいていき、そして…
「それ！」
「ちょ、キャロ、かけないでよ」
キャロのはしゃぐ音で我に帰る。

「「……」」

俺は今何をしている？

答え。フェイトを抱き寄せ、今にもキスしそうな体勢である。

フェイトも気が付いたのか、見る見る顔が赤くなっていく。

「うおぉぉ！？！？」

「ひゃぁぁぁ！？！？」

フェイトから手を離す。

「？」

「ど、どうしたんですか？」

二人が俺達の声に気付いて近づいてくる。

「す、すまん！その…本当に悪い！」

「だ、大丈夫。気にしてないから！ちょっと惜しかったかも…（ボソ）」

何やってんだ俺は！？

あと一歩でとんでもない事をしでかしてたぞ！

「そ…その…」

「私、先に上がるね！」

フェイトが立ち上がるが、その拍子きタオルが外れて落ちた。

「「「「あ…」」」」

…びゅーてぃほー

見えた！ってもんじゃない。

立ってるから全部まる見えだ。

「ふぁ…」

そしてフェイトがふらりと倒れる。

幸いぶつかる前に支える事はできたが、ある意味なおさらまずい状況だ。

向き合ってる状態で捕まえ、さらに近い。

とりあえず座らせタオルで隠す。

「よし。キャロ、誰か呼…」

「エ、エリオ君！？しっかりして！」

見ると真っ赤になった湯舟にエリオが浮かんでいた。

おい。鼻血出して気絶とか冗談じゃねえぞ！

「キャロ！シャマルを呼べ、急げ！」

「は、はい！」

ハハハ…

何故ゆえこんな事に？

第８１話　銃弾と混浴（後書き）

星光「いい湯ですね」

雷刃「だね～」

闇「…フン」

星光「どうしたのですか？」

雷刃「僕達に負けたのが悔しいんじゃない？」

星光「なるほど」

闇「違う！この程度の差など問題にならぬわ！」

星光「とか言いながら見比べてるじゃないですか」

闇「～～っ！！！何故だぁぁぁぁぁ！？！？！？」

星光「静かにしてください。迷惑です」

雷刃「フフフ…やっぱり僕が最強だね！」

星光「むっ。私も負けてませんよ」

雷刃「ならば僕のフルパワーを見せてやる！」

星光「なん…だと？まさか、まだ本気ではないと？」

闇「ちぃ！ならば我も！」

星光「くっ…私も本気にならざるをえないとは。ではまた次回お会いしましょう」

雷刃「僕のが最大なんだ！負けはしない！」

闇「背の低さから発現するこの力を見せてくれるわ！」

星光「私も全力でお相手します！」

第８２話　故郷（前書き）

出張任務最終回です

第８２話　故郷

～利文ＳＩＤＥ～

露天風呂の方でフェイトが気絶しエリオが鼻血を出して倒れたようだ。

なにがあったかはキャロから聞いているのでとりあえずシャマルに任せる事にして、丁度反応があったロストロギアの回収に向かった。

勿論二人は参加できなかったが、それでも原作以上の人数だ。

あれよあれよと大量に増殖したスライムを殲滅し、キャロが無事に封印したのだった。

そんで僕達はこのまま帰るだけなのだが、せっかくなので、なのは、フェイト、戒、一兎は実家に顔を出す事になり、ついでに僕とはやても少し寄りたい場所があったので、自由時間を設ける事にした。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～なのはＳＩＤＥ～

私は再び翠屋に帰って来た。
さっきも来たんだけど、皆実家に少し顔を出すというので私もまた来てしまいました。

「……でさ、なのはは結局なにがあってこっちに来たの？」

「まさか、十年前みたいに危ないものがここに？」

そういえばさっきはお仕事について話してなかったなぁ。
まあ、あんまり話しちゃいけないんだけど…

「そんなんじゃないよ。どっちかって言うと骨董品みたいなのかな？それを知ったのはこっちに着いてからなんだけどね」

「なら良いんだけど…」

今思うと、十年前はジュエルシードに闇の書とすっごく危ないものが溢れてたんだよね…
地球でいうと、核兵器が町中に転がってたような感じだし。

ううう……よく無事にすんだよ。

さってと。時間になったら皆にお土産でも買って行こうかな。

さっきは利文にごちそうになっちゃったし。

皆にどんなケーキが好きか聞いておけば良かった。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～フェイトＳＩＤＥ～

はあ…

結局気絶しちゃって仕事にもならなかったし、エリオまで巻き込んじゃうなんて…

……一兎に見られちゃった／／／

「なるほどね…」

そして今は家に少しだけ帰り、母さんとアルフの三人でお茶をしている。

で、さっきの露天風呂での件を誘導尋問みたいに話させられちゃったんだけど…

「でもさ、これってチャンスじゃない？【責任とれ】の一言で一兎をゲットじゃないか」

「えっと…そういうのは…」

やっぱり、責任とかそんなんじゃなくて…

でも付き合ってじゃ駄目だったし、その位じゃないとわかってくれないのかな？

「フ…フフフ…」

「か、母さん？」

なんか少し怖いよ。

「フェイトォォォ、よくやったわ～。これで一兎君は確実にフェイトを意識するはず。そうすればいくら鈍感な彼でも気がつくはずよ

おぉぉ！」

なんだか母さんのテンションがおかしい。
威圧感というか何というか…

「フハハハハ！孫を見る日は近いわぁ！ゲホ！ゴホ！」

「ちょ！落ち着きなよプレシア」

「無理しないで、ね？」

二人で母さんを宥める。

まさかここまで興奮しちゃうなんて。

「ハァハァ…。アルフ！今すぐ薬局に行って近藤さんを買ってきなさい！勿論穴を開けておくのを忘れずに！」

えええええ！？！？
そ、それって…あ、穴なんか開いてたらその…

「……よし。ひとっ走り行ってくるよ。裁縫針でちょっとつっつくだけだからね！」

「アルフぅぅぅ！？」

たしかに一兎となら嬉しいけど、今は六課が忙しいから駄目だよ！！！

「フェイト！今が勝負時なのよ！フフフ……佐々木家に勝った！こ

れで一兎君を婿にぃぃぃ！」

「プレシアＷＩＮ！！！」

「誰か二人を止めてぇぇぇ！」

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

久しぶりの実家。

話す事といえば、最近の仕事の具合やらそんなもんだ。

父さんも仕事から帰ってきてたし、家族がそろえて嬉しい。

「部下のバロン君って、バタフライ家の子よね」

「ん？母さん知ってるのか？」

「その子の父親とは会った事あるわよ」

へぇ。

でも、年もそんなに離れてないから十分ありえるね。

「あの変態一族のバリアジャケットは目の毒よ。本当、何考えてんのかしら？」

「……一緒に戦いたくない美人局員第一位のくせに」

ついでに残念な美人局員五年連続一位だったりする。

「なんか言った？」

「空耳だよ母さん」

おお怖。

触らぬ神に祟り無しって本当なんだね。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～一兎ＳＩＤＥ～

「でさ。会社の先輩と付き合う事になったんだけど、実はその人既婚者だったのよ。不倫よ不倫。冗談じゃないわ」

……何故俺は実家に帰って早々姉の愚痴を聞かなきゃいけないんだ？

父さんと母さんは俺達が社会人になったせいか、夫婦で出かける事が増えたらしく今日もいない。

残念だ。せっかく自由時間をもらったのに。

「…って一兎聞いてるの？」

「聞いてるって」

あ～酒臭ぇ。姉ちゃん酔ってるし。

最高に面倒臭え。

これだから酔っ払いは嫌いなんだ。

「ねえ、一兎の知り合いで私と釣り合う年の人いない？異世界人でもかまわないわよ。てか戒君のお母さん魔法使いなんでしょ？世界が違っても恋愛可能なんでしょ？」

そう言いながら俺の襟を引っ張る。

「ほら、二十代半ばから三十代前半でイケメンの魔法使いを紹介しなさい。すぐに！ハリー！」

どうしてこうなった？
ただでさえ今はフェイトの事でいっぱいいっぱいなのに。くそ…どうしよ…
責任とった方が良いのか？
でも、俺なんかで良いのだろうか…

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

僕とはやてはとある一軒家の前にいる。
以前僕達が住んでいた家だ。

「なんだか懐かしいわ～」

「本当。数年前はここに住んでたんだよね、僕達」

「今住んでる人も綺麗にしてくれとるみたいやし…うん。よかった」

「じゃあ、行こっか？」

「そうだね」

そして車を走らせ、本来の目的地へ向かう。

そう、僕達ははやての両親の墓参りに行く。
仕事の都合上お盆に来れるわけもなく、年に一度行けるかどうかだ。

そうして海鳴市の角にある墓地に到着した。
時間も時間なので辺りは薄暗く非常に不気味だ。

で、二人のお墓の前にいるんだけど、やっぱり手入れが行き届いてないせいか雑草が生い茂り墓石も汚れている。

「あらら…。去年は来てなかったから、凄いことになってるよ」

「お父さん、お母さん、ごめんな。なかなか来れへんで」

二人で雑草を毟り墓石を拭く。

最後に来る途中で買った花を立て、お寺で買った線香に火をつける。

そして手を合わせ静かに祈った。

おじさん、おばさん。はやてはついに自分の部隊を持ち頑張っています。

僕ははやてと一緒にいれて幸せです。

必ず彼女を幸せにします。

だから…見守っていてください。

そう。絶対に。

「……トシ君」

「何？」

「お父さんとお母さんになんて言った？」

「僕達は順調ですよって。はやては？」

「ん～。次は孫を連れて来るって」

はい？

「は、はやて？まさか…」

え？こんな時期に？

「う・そ♪私はＯＫって言うとるのに、トシ君がデキ婚嫌って言っとるやん」

「冗談に聞こえないからやめて…」

桶や雑巾を返しに行く。

「子供は嫌？」

「まさか。はやてとの子なら大歓迎さ。でも今は…」

「機動六課がある…やろ？」

「そういう事」

Ｓｔｒｉｋｅｒｓは大きな事件だ。

負けられない。

「せやな。ところで【六課の運用期間が終わったら結婚しよう】とかは？」

「それ死亡フラグ」

「あ、そっか」

「でも、いつか必ず」

「ちゃんと給料三ヶ月分やで～」

「どんな指輪を買わせる気なんだ？」

僕の給料三ヶ月分だとかなりの額だぞ。

「まあまあ。でも、結婚するならやっぱり式は地球かなぁ？」

「だね」

「六課の皆にハラオウン家にカリム達…」

「さらにレジアス中将達にグレアム元提督と石田先生…。うへぇ。すんごい人数」

かなり無理があるな。

「せやけど一生に一度の大切な日や。多少の無理は承知や」

そう言うはやての顔はとても嬉しそうだ。

「まっ、その話しはその時になってからね。さあ行こ」

「せやな」

こうして僕達のほんの少しの帰郷が終わった。

第８２話　故郷（後書き）

雷刃「番台さん。フルーツ牛乳一つ！」

闇「フ…やはり貴様はお子様だな。フルーツ牛乳など子の飲み物。コーヒー牛乳こそ正義なのだ！」

凶弾「あら、聞き捨てならないわね。コーヒー牛乳こそお子様向けよ。コーヒーの苦みを誤魔化してるだけじゃない」

雷刃「そうだそうだ！」

闇「なんだと！？」

轟雷「くだらん事で喧嘩すんなよ…」

星光「まったくです。しかし虚空は綺麗になりましたね。具体的に言うと装甲だけ」

虚空「洗浄完了」

轟雷「結局脱がなかったな、こいつ。まあ今回で出張任務は終了だ」

雷刃「そんじゃ、またね～」

第８３話　繋がる日々（前書き）

なんだか中途半端な気が…

第８３話　繋がる日々

～戒ＳＩＤＥ～

あの出張任務から数日が経過した。

一兎とフェイトは少し距離が縮まったのか、なんだか雰囲気が違う。

さっさとくっついちゃえば良いのに…

さて、今日は二手に別れて模擬戦をしてもらった。

チーム分けはくじで決め、ティアナ、エリオ、ミエリのＡチームと、

スバル、キャロ、バロンのＢチームに分かれた。

で…その結果なんだけど……

「ば…馬鹿な…」

「ハァ…ハァ……私達の、勝ちですね」

バロンの後頭部にクロスミラージュを突き付けるティアナ、ネットに捕まったスバルとキャロにデバイスを突き付けるミエリとエリオ。

模擬戦のいきさつはこうだ。

Ａチーム幻術をエリオにかけ、ミエと姿を消しながらリゲリラ戦を仕掛けた。

Bチームはブースト付きのスバルを中心にキャロはバインドでスバルに固定、さらに蝶をデコイにし徹底的にスバルを援護する戦法を仕掛けた。

結果はごらんの通り。

市街地なので障害物を利用しながら奇襲。しかも自分達の居場所を察知されないよう瞬時に移動していた。
おそらくティアナの指示の下に行動していたのだろう。
二人が自己の判断で行動していたには引き際が良過ぎたからね。

だけどスバルも凄かった。
ほぼ二対一の状況だったにもかかわらず、戦い抜いたのだから。

最終的には、エリオとミエリをいぶり出す為にバロンが周囲を爆破。
薄く砂埃を巻き上げる事で姿を消した二人を見つけようとしたが、あらかじめ用意した瓦礫をダミーに騙されスバルとキャロが捕まり、そのままバロンも抑えられた。

しかしこの結果は少し嬉しい。
近いうちに起きるホテル・アグスタ等でティアナの劣等感はピークになる。
少しでも自信をつけてくれると良いんだけど…

でも仮面ライダーライアのような転生者達の介入もあるだろう。
何人向こうにいるかわからないからね。

彼女一人だと良いんだけど…

まあ、当面はアグスタとティアナかな。

なのはの撃墜が無かった分、僕達が止めないといけないからね。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～スバルＳＩＤＥ～

夕食の時間。

今日は模擬戦のチームに分かれて反省会をしている。
そんで私達の目の前にはグッタリしているバロンさんがいる。

「あの…大丈夫ですか？」

「心配無用だキャロ君。しかしダミーを用意されていたとは…」

「ごめんなさい。囮に気付かなくって…」

まんまと引っ掻かった私は、横からネットランチャーを構えるミエリに気付かずそのままキャロと一緒に捕まってしまったのだ。

「いや。あそこで行くよう指示した俺のミスだ」

「そんな！私なんか全然役にたたなくって…」

「ううん。キャロのおかげで私は二人同時に相手できたんだし。すっごく助かったよ」

「スバルさん…」

正直、ブーストのおかげであそこまで戦えたんだ。
一人じゃきっとすぐにやられてた。

「でもさ。なんで私達で模擬戦したんだろ？」

ティア達と敵対するなんて無いはずだし…

「味方でいるより、敵の方が相手の弱点等も見やすい。お互いの戦力を知るには戦った方がやかりやすいからな」

「なるほど」

お互いの悪い所も…か。

「まあ今回はしてやられてたって事で、また頑張れば良いさ」

「はい！」

「よ～し。ご飯にしよ！」

私は山盛りのパスタに手を伸ばした。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～ミエリＳＩＤＥ～

いや～、勝った勝った。

「本当、ティアナ様々ね」

「おだてても何も無いわよ。それに、今回は運が良かっただけなん

だから」

そう言いながらも少し照れ臭そうな顔をしている。

「いや、ティアナの指示のおかげよ。私達だけじゃすぐバロンに見つかっちやっただろうし。ね？エリオ」

「え？あ、はい」

「私は自分の仕事をしただけよ。ていうかエリオどうしたの？なんか元気無いけど」

「い、いえ。別に…」

まあ思い当たる点はあるけどね。

「戦法が気に入らなかったんじゃない」

「……ああ。なるほど」

エリオは良くも悪くも真っ直ぐだ。

姿を消しながらコソコソと戦う今回のやり方が気に入らなくて当然だ。

「あの…」

「まあ卑怯に見えるのは否定できないけど」

「すみません…」

「人それぞれ好みはあるわ」

「だから気にしなくて良いのよ」

「はい…」

ん～。なんか良い説得の仕方ないかな？

「…エリオ、たしかに正々堂々とするのも大切よ。でもそれだけじゃ駄目なの」

ティアナがコップを置き口を開く。

「どういう事ですか？」

「そうね……例えばなのはさん達と同レベルの戦力の犯罪者と一人で戦わなきゃいけないとする。当然援軍も無し。正面からじゃ絶対に勝ち目は無い」

「はあ…」

「でも、エリオの思う卑怯な手段を使えば捕まえられる。さあ、エリオはどうする？」

…なるほど。

「……」

「逃げられればどんな被害が出るかわからない。それでもエリオは被害者の人達に、【僕は正々堂々と戦ったので僕の責任ではありま

せん】って言える？」

「っ！」

「ちょ、ティアナ！それは…」

流石に子供相手にそういう言い方は…

「……ごめん。ちょっと言いすぎたわ」

そう言ってコップの中の水を飲み干す。

「…でもこれだけは言っておくわ。私達は基本的に負けてはいけないの。負けてしまえば無能扱いされる…。だから、今度は絶対…！」

なんだかそう呟く彼女の顔が、酷く悲しそうだった。

お兄さんの事を思い出しているのだろう。

そしてその恋人であった彼女を…

「ま、まあ…ようは使い分けろって事。公明正大な事に執着しても駄目、かといって手段を選ばなさすぎるのも問題。私達は一応正義の味方なんだしさ。勿論エリオは間違っていないし、ティアナの考えも絶対とは言いきれない…って事でしょ？」

「…そんな所ね」

うん。これ以上話しを続けてたら危なそうだし。

こんなんで良いね。

「……少しだけ、わかった気がします」

「そう。さて、暗い話しは終わり」

「そうそう。お腹すいたしご飯にしよ」

セイギノミカタ

個人の尺度によって違うが、判断が難しい。
だからこそ加減を間違えれば【高慢】【偽善】だなんて言われる。
まあ深く考えても頭が痛くなるだけね。

さあ！食べるぞ～！

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

「む～」

夜。何やらはやてがパソコンとにらめっこしている。

「やっぱ決められへんわ。トシ君、ちょっと来て」

「何？」

はやての隣に行き、パソコンの画面を見る。
そこに映っていたのはドレスのカタログだった。

「ドレス？」

「せや。今度ホテル・アグスタの警備任務があって、そこで着るやつや」

ああ…そういえばはやてとなのは、フェイトの三人でドレス姿だったような…。どんなの着てたかはすっかり忘れてるけど。
出来事等の重要な事は覚えているが、相変わらず細かい事は忘れてるなぁ…

「私となのはちゃん、フェイトちゃんが着るんやけど、私のはどれがええかな？って」

「ああ。なるほどね。…ってこれ買うの？」

このカタログは貸し衣装ではなく購入のやつだ。

「せやで。今後着る事だってあるやろうし」

まあはやてほど階級が上ならいろいろとあるから持っておいて損は無い。

「だけどさ…まさかこれ、経費で買うの？」

「……駄目？」

「だーめ」

経費で買うつもりだったんかい。

「仕事で使うんやで。問題無いやろ」

「駄目ったら駄目。レジアス中将に怒られるって」

「ええ～」

「それに内部警備になのはとフェイトは向いてないでしょ」

「う…」

室内だとなのはは砲撃が使えず、フェイトは機動力が大きく阻害される。

「むむむ…。私はちょっと営業とかあるし…。なら陸戦魔導師の一

兎君と…あとは…」

「戒かな。一兎は避難指示とかできるし、戒も近接だから」

それにこの二人なら、侵入したルーテシアの事も知ってるから対処しやすい。

あっちにも転生者がいる可能性が高いし。

「ハァ…なのはちゃんとフェイトちゃんのドレス姿見たかったのに…」

「まあまあ。その代わりはやてのドレスは僕が買ってあげるから」

「え!?ほんま!?」

はやてが目を輝かせて擦り寄ってきた。

「本当。だから好きなの選んで良いよ」

「やった!トシ君からのプレゼントなんて久しぶりや。せやな～…トシ君はどれが脱がせやすそう?」

「う～ん、どれも難しそうだな……って何故に脱がす事前提?」

「嫌?」

「…物凄く魅力的だけど、破いたりして無駄にしそうだから遠慮しとく」

「フフフ♪さっ、全部一から見直そ。トシ君も選ぶの手伝ってや」

「喜んで」

ホテル・アグスタか…

原作じゃ結構重要な場面だったけど、転生者の存在でそんな事を言ってられない。

気合い入れなきゃね。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～スカリエッティＳＩＤＥ～

「では、アプローチは頼んだよ」

『ああ。だが期待はしない方が良い。私は無理だと思うがな』

「多少強引でも構わないさ。連れて来るだけでもね」

『やれるだけはやる。切るぞ』

「頼んだよ」

ディーとの通信が終わる。

さあ…彼らはどうするかな？

愚かな返事にならない事を祈ろう。

彼らは私達の仲間なのだから。

第８３話　繋がる日々（後書き）

雷刃「ねえ、模擬戦のシーン無いの？」

凶弾「無いわね。書いてたら量がねえ…」

星光「何はともあれ次回からホテル・アグスタですね」

闇「また複数に分ける事になりそうだな」

虚空「どうなる」

星光「それは次回のお楽しみで」

凶弾「それじゃまたねん♪」

第８４話　ホテル・アグスタ【開戦】（前書き）

敵転生者の出番はここからです

第８４話　ホテル・アグスタ【開戦】

～一兎ＳＩＤＥ～

現在ホテル・アグスタへ向かうヘリの中。前衛メンバーとはやて、シャマル、ザフィーラを含めた十四人と一匹が乗り込んでる。
あ、あとパイロットのヴァイスがいたな。

しかしこの人数だと少し狭いな…

「これまで謎やったガジェットドローン、テッカマン、ガジェット付き改め…アヴ・カムゥの製作者、およびレリックの収集者は現状ではこの男…」

俺達の目の前に、紫の髪に金色の瞳をした白衣の男が映し出された。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者…ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進めている」

「こっちの捜査は、主に私が進めるんだけど、皆も一応覚えておいてね」

「「「「はい！」」」」

「「了解です」」

「今回の僕達の仕事は、骨董美術オークションの会場警備と人員警護」

利文が操作すると映像がホテル・アグスタに変わる。

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるから、その反応をレリックと誤認したガジェットどもが群がる可能性が高いからな」

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし…色々油断も禁物だよ」

ぶっちゃけこういった密輸は、後々調べるのが面倒らしいからな。ただでさえ今回は色々あるんだ。面倒事を増やさないでほしいぜ。

「シャマル先生。その箱、何が入ってるんですか？」

「そういえばさっきから気になってたんですよ」

キャロの言葉に、新人達の視線が集まる。

「隊長達のお仕事着♪」

…そう、俺と戒、はやての衣装が入ってる。
まあ俺と戒は貸し衣装のスーツだがな。
だがはやてのドレスはわざわざ買ったらしい。しかも利文がだ。

よくもまあ…

しかし原作と違いフェイトとなのはが外とはな。

フェイトのドレス姿、見てみたかった。

何考えてんだ俺は？

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～戒ＳＩＤＥ～

「……普通男女逆やろ」

オークション会場にて、なにやらはやてがぼやいた。

「どうした？昨日はドレスを買ってもらってテンション凄かったくせに」

「それとも昨日で疲れて頭をやられちゃった？」

「ちゃうわ。女一人に男二人。私の逆ハーレムなんて誰得なん？」

「「知るか」」

まったく…

しかしまあ…うん、ドレスが凄く似合う。

「だけどさ。俺、はやてはこういったドレスより、ウェディングドレスの方が先だと思ったんだがな」

「同感」

「そっちはしばらくお預けや。せやけど、その時が来たら二人共招待するし、ちゃんとブーケはフェイトちゃんか一兎君に投げるさかい。安心したってや」

「よかった。それなら一安心だ」

「おい、今何て言った?」

「さあ?…っと」

突如はやてに通信が入る。

「…うん…わかった。こっちは任しとき」

来たな。

「はやて」

「招かれざるお客さんや。一応万が一に備えてここの責任者の方と話しをつけとくわ」

「僕達もその辺を見回りながら警戒しておくよ」

「うん、お願い」

そしてはやては他の客に悟られぬよう早歩きで立ち去った。

［一兎］

［ガリューは俺が行く。マーチに対ステルスを用意したしな］

［他に転生者がいる可能性が高いから気をつけて。何かあったらすぐに行くから］

［了解っと］

一兎も地下駐車場へと向かった。

さて、僕もやりますか。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～利文ＳＩＤＥ～

ガジェットだけでなく、テッカマン、アヴ・カムゥも現れた。

シグナム、ヴィータ、ザフィーラが前に出て迎え撃ち、僕とリィンフォースがフォアード達に付き、なのはとフェイトは別方向から来る可能性があるため裏側へ回ってる。

皆三人の暴れっぷりに呆然としている。

「すご…」

「これで…リミッター付き…」

「いやはや…毎度の事だけど凄いね」

「ですがこの数だとテッカマン達は騎士達を狙うでしょうが、ガジェットとアヴ・カムゥはこちらを優先するでしょう。抜かれるのも時間の問題です」

まあそうなんだよね。

「なのはとフェイトもこっちに来てもら…っ！誰だ！？」

近くの木々にランサーを向ける。

何人かの人の気配に……感応波？

「フフフ……感応波を発してようやく気が付いたか、ランス」

木の影から体格の良い初老の男性と十歳前後の少年、そして仮面ライダーライアが出て来た。

…来たか転生者！

「美雪さん！」

「また会ったわねティア」

ちぃ…

あの男はよくわからないが、あの少年はムスカか？

見た目じゃまだわからないか。

「敵か…」

「待て待て。ワシらは戦いに来たのではないぞランス。ワシの事を忘れたか？」

？

「利文。知り合いか？」

「いや。覚えてない」

誰だ？僕をランスと呼ぶのはシータだけだぞ。

「ならば思い出させてやろう！」

男はジャケットから赤いクリスタルを取り出した。
あれは…テッククリスタル！？
「テックセッター！」
そして赤い光りに包まれ、光りがおさまると緑の装甲をまとい、長い戦斧を持っていた。
「テッカマンアックス！」
テッカマン！？
「あれって…隊蝶と同じ？」
「テッカマンって…」
嘘だろ？まさか僕以外にもあの世界からこっちに来たテッカマンがいたなんて。
ということは、あのテッカマン達はアックスのデータから作ったのか。
「アックス…まさか」
「思い出したようだなランス」
「何が目的だ！」
「落ち着け。ワシらはお前と敵対するつもりは無い」

「そうだよ。僕達は君達を迎えに来たんだ」

少年がアックスの肩によじ登る。

「テッカマンランス。タイプゼロ・セカンドのスバル・ナカジマ。プロジェクトFの遺産、エリオ・モンディアルを仲間にね」

「っ!?」

「なっ!?」

「仲間?」

どういうつもりだ?

「なんで…私の事を…」

「タイプゼロ?プロジェクトF?」

「エリオ君とスバルさん?え?え?」

皆混乱している。

何だ?こいつらの目的は…

「あらら。だから言ったじゃない。ちゃんと説明しなって」

「黙れよ人間」

「よさぬかオーマ。ライアの言う通りだ。なに、ワシやオーマも人

間ではい。だからこそ、人間ごときの味方などせず、我々と共に来るのだ」

そういう事か。
人間ではい。だから仲間に。

…くだらない。

「隊蝶の事は薄々そんな気はしていたが…」

「あんた達…！」

「ううう…」

「……っ」

［利文］

［ああ。答えは決まっている］

そう、考えるまでもない。

「断る」

「情けないぞランス！人間なんぞにたぶらかされおって！お前の家族を奪ったのも人間なのだぞ！」

「情けなくて結構！僕は人として生きる！」

「貴様…！」

「スバル、エリオ。二人はどうしたい？」

「え…」

「あ…」

「僕は少し普通の人と変わっているだけ。君達は少し生まれ方が変わっているだけ。違うか？」

「……はい！僕は、あなた達の仲間にはなりません！機動六課が、僕の仲間です！」

「私にはお父さんがいる。ギン姉もいる。私は…私だ！」

「なんと…」

二人共アックスを拒絶する。

「まあ【それがどうした】って感じだし」

ミエリがスピアを取り出す。

「【なにを今さら】とも言えるな」

バロンの周囲に黒い蝶が浮かぶ。

「スバルの事は知ってたけど…エリオ、あんたが何者であっても、私達の仲間である事は変わらないわ」

「エリオ君、スバルさん。私も同じ気持ちです」

「皆…」

「ありがとう」

どうにかなったね。

「あらあら…ディーの言う通りになっちゃったわね」

「僕はかまわなかったけどね」

「致し方あるまい…ム、来たか」

「っ！遠隔召喚…来ます！」

キャロの声に全員が身構えると同時に、近くに幾つもの魔法陣が展開され、そこから複数のガジェットやアヴ・カムゥ、テッカマンが出現する。

「あれって、召喚魔法陣？」

「召喚って、こんな事もできるの？」

「優れた召喚師は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

「なんでもいいわ。迎撃、行くわよ！」

「この数は面倒だな…」

「やるしかないでしょ！」

混戦になるな。

やっぱり、なのはとフェイトも…

「ククク……スバル・ナカジマ。貴様の育ての親のクイント・ナカジマは両腕しか見つかってないらしいな」

「っ！？どうして母さんの事を！？」

「なに…単純な事よ。思い出すのぅ……左腕を切り落とし、右腕を引っこ抜いた後、ボルテッカで消し飛ばしてやったのだからな！」

「！！！」

こいつ、ゼスト隊壊滅にも関与していたのか！？

「お前が…母さんを……う…うあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「待て、スバル！」

僕の制止を無視し、スバルがアックスを殴り飛ばす。

いや。アックスはスバルの拳を受け止め、自分から飛ばんでいったのだ。

そしてスバルはアックスを追いかけ、林の中に駆け出した。

「スバ「私を忘れないでねティア！」っ！」

エビルウィップを持ったライアがティアナに襲い掛かる。

「お前の相手は僕だぁ！」

「ぐああ！？」

オーマと呼ばれた少年がエリオを掴み引きずっていく。

「エリオ君！」

「隊長！私とキャロが行きます！」

あんまり分散させたくないけど仕方ない。

「任せた！」

「キャロ、フリード、行くよ」

「はい！」

「キュク～」

ミエリ達は走り出した。

「リィンフォース、バロン、こっちは任せる。僕はスバルを追う」

「了解です」

「はい。気をつけて」

「うん」

スバル。無茶はするなよ。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～シグナムＳＩＤＥ～

「紫電一閃！」

「！？！？」

テッカマンの首を切り落とす。

そしてテッカマンは結晶となって砕け散った。

ふぅ…

どうやら一段落ついたな。

レヴァンティンを鞘に納め辺りを見渡す。

どうやらヴィータとザフィーラはまだやっているようだ。

持ち場を離れる訳にもいかないからな、それにこの程度にやられるとも思えん。

！！！

なんだ今の殺気は！？

身構え殺気の方向を向く。
そこから一人の男が現れた。

この男…ただ者ではないな。

「ヴォルケンリッターの将、シグナムとお見受けした。間違いござらんな？」

「その通りだ。民間人…では無いな。何者だ？」

「某の名は雷泥・ザ・ブレード。そなたの敵…それで十分では？」

ジェイル・スカリエッティの仲間か？

「では、死合いと参ろうではないか。ククク…」

どうやら…厄介な仕事が入ったようだな。

～ＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

～フェイトＳＩＤＥ～

リィンフォースからの念話で、向こうが大変だと聞かされた。

「フェイトちゃん、急ごう！」

「うん。なんか、皆分断されてるみたいだし」

まさかガジェット達だけじゃなかったなんて…
しかも相手はエリオやスバルの事を知っていた。
状況からして、確実にスカリエッティに関わっている。逮捕すれば捜査に大きな進展があるはず。

「悪いが、君達は私の相手をして貰う」

「誰！？」

そこにいたのは、白い翼を背中から生やした男性がいた。

「私はディー。フェイト・テスタロッサ、君を仲間に迎えに来た。まあ、断ると思っているがね」

仲間に…って事は！

「向こうと同じような事を…貴方は敵ですね」

なのはがレイジングハートを構える。

［なのは…］

［私が相手をするから、フェイトちゃんは向こうに］

たしかに私の方が速い。

…よし。

［お願い。気をつけてね］

［うん。任せて］

［まあ待て。少し話しをしたい］

［［っ！？］］

念話を傍受した？

「向こうが気になるのはわからなくも無い。一応私は戦いに来たのではないからね」

エリオ…キャロ…

第８４話　ホテル・アグスタ【開戦】（後書き）

闇「ようやく出番だな」

星光「ライア以外は少ししか出てませんしね」

雷刃「次回から戦闘だけど、どこからやるの？」

凶弾「まだ決まってないようよ」

轟雷「組み合わせが多いからな。また長くなるぞ…」

虚空「最低でもあと二話は必要かと」

雷刃「じゃあまたね。バイバイ！」

第８５話　ホテル・アグスタ【槍と巨神】（前書き）

第一回戦、ＶＳ巨神兵オーマ

第８５話　ホテル・アグスタ【槍と巨神】

～エリオＳＩＤＥ～

僕はオーマと呼ばれた男の子に引きずられ、どんどん皆と離れていく。

「ほらほら！擦り減って、大根おろしみたいになっちゃうよ！」

「ぐ…うぁぁぁぁ！」

く…駄目だ。力が強すぎて振りほどけない。
ストラーダを落とさないようにするだけで精一杯だ。

まずい。どうにかしなくちゃ…

「でもこれだけじゃつまんないからさぁ……離してあげるよ！」

離す…違う、投げ飛ばされた。

「がはぁ！？」

地面に叩き付けられ小さくバウンドし、危うく意識を失いかける。

「く…うう…」

身体は痛むが倒れてはいられない。
なんとか立ち上がる。

彼を見ると身の丈の何倍もある木を引っこ抜いた。

な…なんて怪力なんだ！？

「そぅら！」

そしてそのまま投擲した。

こんなもの、避けられる！

「ストラーダ！」

『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ．』

ソニックムーブで避け後ろに回り込み、ストラーダを後頭部に突き付ける。

「速っ！？」

「投降するんだ。君の力はこんな事に使うためにあるんじゃない」

「……何の為に使えって言うんだ？」

「皆を守る為にだ。こんな破壊に使っちゃいけない」

「僕は仲間の為に使ってるさ」

彼は振り向いて真っ直ぐ僕を見据える。

「そうだとしても、犯罪に使うなんて…」

「犯罪なんて人間の基準だ。僕は僕達【人ならざる者】の未来の為に動いている」

「そんな悲しい事を言わないでよ！君は…」

「【人間だ】って？」

彼は目を見開き、。

「僕は人間じゃない。自分が人間でいたいからって巻き込まないでくれないか？」

「違う！」

「だったら何だよ！」

「君に悲しい思いをしてほしくないんだ。君は人より少し生まれが変わっていて、少し力が強いだけ……君は僕達と一緒にいられる。僕達と同じ人間なんだ」

僕はストラーダを離し手を差し延べる。

そうだ。彼は自暴自棄になっているだけ。

フェイトさんが僕を助けてくれたように、僕も彼を…オーマ君を助けてみせる。

「大丈夫。絶対悪いようにはしない。僕がオーマ君を守る。君とは戦いたくない」

「……ハッ」

お腹を押さえフルフルと震え出した。

「アッハハハハハハハハハハハ！！！なんだよその綺麗事！馬鹿じゃないの！？」

き、綺麗事！？

「本当ムカつくよ！自分が人間として生きれるからってさ！僕だって生まれたばかりの時は人間として生きたいと思ったさ。だけどそれはできない。だから人間でない事を受け入れ、僕達が生きれる世界を目指し戦う決意をしたんだ！」

「君も生きられるよ！」

「無理さ！」

するとオーマ君の身体がメキメキと音をたてて、どんどん巨大化していった。

そして全身筋肉が剥き出しになったような巨人へと姿を変えた。

「見たか？これが僕の本当の姿さ！」

「…！」

フリードよりも断然大きい。

宝石のような黄色い大きな目、口からはみ出た長い牙、両肩から二本づつ伸びる骨のような突起。

圧倒的。絶対的な力。

あまりにも次元が違いすぎる。

「ねえ？こんな姿で、どうやって人間として生きられるの？さっきみたいに自分の姿を偽っていろってのかい？」

「っ！」

こっちが本当の姿なら、さっきまでのは変身魔法なのだろう。

僕は何も言えなかった。

「ほら見ろ。君は人間として生きられる。何故なら人間と同じ姿をしているからね。でも僕は違う…」

「だけど、何かしら方法はあるはずだよ！」

「…ウザイね。もう良いや。君は消えちゃえ。プロジェクトFはもう一人いるんだし」

まさか…フェイトさん？

「じゃあね、偽善者」

額の宝石のようなものが光り、そこから雨のように魔力弾が降る。

「くっ！」

全速力で走り避ける。
だけど量が多過ぎて避けきれず、身体を掠り傷ついていく。

「逃げろ逃げろ！」

まるで狩りを楽しむかのように僕を追い回し、魔力弾を降らす。

どうする？このままじゃなぶり殺しだ。
彼とは戦いたくないけど……ごめん。

オーマ君の足元目掛け突っ走る。

たしかに凄い弾膜だ。
でも広い分自分にも当たりやすい。

だからこそ、近づけばスキがあるかもしれない。
それに近づかないと攻撃もできないしね。

『Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ．』

ストラーダの槍の穂から魔力を噴射して加速。弾膜を通り抜き一気に突撃する。

「いっけぇぇぇ！！」

全速力で脛に突撃。ストラーダを突き立てる。

「っ！？」

「フン」

いや…刃は先端が少ししか刺さらなかった。

固い！

「弱い弱い……そら！」

軽く振り払うように僕を蹴り飛ばす。

そう、軽くだ。

だけどその巨体から繰り出されたため、まるで大木で殴り飛ばされたかのように吹き飛ぶ。

「ぐあ！！」

そのまま木に叩き付けられる。

「ハハハ！終わりだ！」

足を上げ、僕を踏み潰す気だ。

駄目だ…身体が動かない！

「死…痛っ！」

何かが彼の頬を切った。

「誰だ！って！？」

彼はまるで一人相撲をしているかのように暴れる。

誰かがオーマ君に攻撃しているんだ。
まさか…
「この…ぐっ！」
顔面に青緑の魔力弾が直撃した。
そして見えない誰かが僕の前に着地する。
「…ミエリさん？」
「当たり。ごめんね、遅くなっちゃって」
浮かび上がるようにミエリさんが姿を現した。
「すぐ追いかけたんだけど、途中でアヴ・カムゥと遭遇しちゃってさ。遅れちゃった」
「い、いえ…助かりました。ありがとうございます」
「どういたしまして。しっかしでかいわね」
槍を担ぎ見上げる。
「フン！見えないからなんだ！次はそうはいかないぞ！」
「じゃあこれはどうかしら？キャロ！」
「ブラストレイ…ファイア！」

「へ？」

後ろを振り向いた瞬間、次は顔面に火炎弾が直撃、爆発する。

「ぶへぇ！？」

「キャロ！フリード！」

「エリオ君、大丈夫？」

フリードにまたがったキャロが飛んで来る。

「うん。ありがとう」

「さって…四対一。卑怯なんて言わないでよ」

彼はゆらりと振り向いた。

「……上等だよ。猿が人間に追いつけるか！お前らはこの僕にとっての…猿《Ｍｏｎｋｅｙ》なんだよ！」

そして長い牙の生えた口を開くと、そこに魔力が集中する。

「……砲撃？」

「エリオ君、ミエリさん、フリードに乗ってください！離脱します！」

急いでフリードに乗る。

「最大出力だ！鉄すら蒸発するぞ！」

「フリード、避けて！！！」

「消えされ！マキシマム・プロミネンス！！！」

「「「！！！」」」

僕ら目掛け砲撃が放たれる。

フリードは避けた。当たってはいない。

だけど衝撃波で吹き飛ばされる。

「うわぁぁぁ！？」

「「キャァァァ！？」」

熱い。

まるで炎に包まれたようだ。

必死にフリードにしがみつき、なんとか堪える。

「あんなのよあれ！？」

「あ…ああ…」

「そんな…」

フリードも体制を立て直したが、僕達は目の前の光景に絶句する。

森がえぐれている。
一直線に放たれた砲撃は森を焼き、大地を消しさった。
そしてその射線上にある山に大きな穴を開けている。

「…直撃したら死ぬってレベルじゃないわね」

「ど、どうしましょ…」

「どうするって言ったって…」

そろってオーマ君を見る。
口からは煙りが立ち上り、ゆっくりと僕らを見る。

「よく避けられました。だけどこれはどうかな…？」

そしてまたも口に魔力が集中していく。
そしてホテルの方角を向いた。

「っ！？止めて！」

「ちょっと！冗談じゃないわよ！」

「さあ！守ってみせろ！」

さらに光りが強くなる。

駄目だ間に合わない！

「プロミネ…っ！？」

撃とうとした瞬間、彼の顔の肉が垂れた。
いや、違う。溶けている。

「あ…な!?」

身体中の肉がズルリと剥け、歯も抜け落ちる。

「良い時に…最大出力じゃ、身体が持たないか…」

「あいつ…自分の力に身体が耐えられないの?」

「あの…もしかして、チャンスじゃ…エリオ君!?」

「…っ!」

僕はフリードから飛び降り彼の足元に走る。

「もう止めるんだ!これ以上戦ったら君が!」

「黙れ!お前…なんかに……僕…は…」

「馬鹿!」

そして僕が引っ張られると同時にオーマ君は倒れた。

「エリオ!あんたあのままだと押し潰されてたよ!」

「す、すみません…」

しかし視線は彼から離せない。

オーマ君の言葉が耳から離れない。

【君は人間として生きられる。何故なら人間と同じ姿をしているからね。でも僕は違う…】

僕はなんて言えば良いのかわからなかった。

どうすれば彼を助けられるかわからない。

僕はただ倒れた彼を見ている事しかできなかった。

第８５話　ホテル・アグスタ【槍と巨神】（後書き）

轟雷「おい、もうやられたぞ」

闇「出番が終わりそうな勢いではないか」

星光「大丈夫ですよ。まだまだＳｔｒｉｋｅｒＳは前半ですし」

虚空「所詮まだ初戦ですから」

雷刃「寒い」

凶弾「凍る」

轟雷「つまらん」

星光「座布団全部没収」

闇「下手くそ」

虚空「ティウンティウン」

雷刃「あ…まあ良いか」

星光「また次回。さようなら」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6628s/

転生者はリリカルなかませ犬

2011年11月7日13時02分発行